

19 世紀末・20 世紀初頭の英米における『方丈
記』の受容

—夏目漱石の「英訳方丈記」を中心に—

PRADHAN GOURANGA CHARAN

博士（学術）

総合研究大学院大学

文化科学研究科

国際日本研究専攻

平成30（2018）年度

19 世紀末・20 世紀初頭の英米における
『方丈記』の受容

—夏目漱石の「英訳方丈記」を中心に—

ゴウランガ チャラン プラダン

(学籍番号 20140304)

総合研究大学院大学 文化科学研究科

国際日本研究専攻

平成 30 (2018) 年度

目次

序論	5
第1節 研究の背景.....	5
第2節 先行研究と問題の所在.....	9
第3節 研究の範囲と実施方法.....	15
第4節 本論文の構成.....	18
第1章 『方丈記』の受容について—その成立から明治期までに.....	21
はじめに	21
第1節 鴨長明の生涯と『方丈記』の成立.....	21
第2節 成立から近世までの『方丈記』受容について.....	25
第3節 近世における『方丈記』の受容をめぐって.....	29
終わりに	38
第2章 ジェームス・メイン・ディクソンをめぐって.....	41
はじめに	41
第1節 ディクソンに関する先行研究.....	41
第2節 ディクソンの経歴.....	43
第3節 日本の高等教育への貢献.....	50
3-1 ディクソンと日本の英語教育の発展.....	50
3-2 ディクソンと東京女学館の設立をめぐって.....	57
3-3 ディクソンの米国における研究活動をめぐって.....	61
第4節 ディクソンと『方丈記』の出会い.....	65
終わりに	69
第3章 夏目漱石の『方丈記』論—その特徴と形成について.....	70
はじめに	70
第1節 先行研究について.....	73
第2節 夏目漱石と『方丈記』の関係について.....	74
2.1 ディクソンによる『方丈記』英訳の依頼.....	74
2.2 漱石の『方丈記』への関心について.....	77
第3節 漱石の『方丈記』論とその周辺.....	80
3-1 新しい『方丈記』論の枠組み.....	80
3-2 ロマン主義的な自然作品としての『方丈記』.....	83
3-3 漱石の『方丈記』解釈とディクソンとの関係.....	88

第4節 漱石の翻訳思想について.....	91
4-1 言語と文化の理解不能な性格をめぐって.....	91
4-2 「英訳方丈記」から見る漱石の翻訳手法について.....	98
終わりに.....	101
第4章 漱石とディクソンの『方丈記』英訳の比較検討.....	102
はじめに.....	102
第1節 漱石のエッセイとディクソンの論文の関連性をめぐって.....	103
1-1 東西における自然観・隠遁習慣について.....	104
1-2 鴨長明の人間嫌い論について.....	107
第2節 漱石とディクソンの英訳の関連性について.....	112
第3節 ディクソンの鴨長明像について.....	116
第4節 在日西洋人が捉えた鴨長明像.....	119
終わりに.....	125
第5章 漱石・ディクソン以後における『方丈記』の受容—19世紀末・20世紀の初頭を中心 心に.....	126
はじめに.....	126
第1節 19世紀末米国における『方丈記』の受容— <i>Sunrise Stories</i> を中心に.....	127
1.1 <i>Sunrise Stories</i> の執筆背景をめぐって.....	127
1.2 長明の描写について.....	130
第2節 アストンの『方丈記』受容について.....	135
2.1 アストンの『方丈記』英訳をめぐって.....	135
2.2 アストンの『方丈記』理解について.....	138
第3節 南方熊楠とディキンズによる『方丈記』の共訳について.....	140
3.1 南方熊楠の『方丈記』英訳をめぐって.....	141
3.2 熊楠の英訳の底本とその実態について.....	143
3.3 熊楠・ディキンズ共訳「題目」について.....	147
第4節 デイヴィスの『方丈記』受容を巡って.....	151
4.1 デイヴィスと東洋趣味について.....	151
4.2 デイヴィスによる長明の解釈について.....	153
第5節 バンティング著“Chomei at Toyama”をめぐって.....	157
5.1 “Chomei at Toyama”の執筆について.....	157
5.2 東洋趣味の産物としての“Chomei at Toyama”.....	160
5.3 バンティングの『方丈記』理解について.....	163
終わりに.....	165

終章	166
第1節 本論文各章のまとめ.....	166
第2節 今後の展望.....	176
参考文献	178
日本語の参考文献.....	178
その他の言語の参考文献.....	183
付録	188

序論

第1節 研究の背景

ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin, 1892-1940) の有名なエッセイ「翻訳者の使命」は「芸術作品ないし芸術形式について考察しようとするとき、受容者を考慮することは、それらの理解にとっていかなる場合にも決して実りあるものとはならない。(中略) というのも、いかなる詩も読者に向けられてはおらず、いかなる絵画も鑑賞者に、いかなる交響曲も聴取に向けられてはいないからである。」という冒頭文から始められている¹。あらゆる芸術作品の理解において、その受容者について検討することは一切役に立たないという。ベンヤミンが芸術作品の受容についてこのような消極的な見解を唱えたにもかかわらず、皮肉なことに彼のこのエッセイこそがこの半世紀にわたって文芸の分野における受容研究を支えてきたとも言える。それはベンヤミンがこのエッセイに示した「死後の生」(Überleben) という概念のためである。テキストの死後の生に注目した翻訳研究者のヴェヌティ (Lawrence Venuti, 1953-) は次のようにと指摘している。

外国語におけるテキストは、作者が意図した本来の意味を正確に表現したためでなく、そのテキストが翻訳に値したからこそオリジナルである。つまり、ベンヤミンのいうように、外国語でのテキストが原典から引き出された翻訳などといった派生的な形で「死後の生」(Überleben) として生き残る運命にある。(中略) 翻訳は、海外のテキストの正典化をはかり、その生存を可能にすることでテキストの評判を証明するものである²。

ヴェヌティは、ロラン・バルト (Ronald Barthes, 1915-1980) などが提唱した読者論を応用して、翻訳という行為は原典を忠実に再現するのではなく、既に死んだ原典が翻訳を通じて生き延びることこそにその重要性があると述べている。本研究は、日本の古典文学作品である『方丈記』(1212) のこのような「死後の生」を考察する試みである。外国人が明治期にいかにかこの作品に注目し、いかなる形で海外に伝播されたのかを明らかにし、本作品が 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて英米でどのように享受されたのかを解き明かすものである。とりわけ、文豪夏目漱石が行った『方丈記』の最初の外国語訳に焦点を当て、漱石の『方丈

¹ ヴァルター・ベンヤミン著、浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション 2 エッセイの思想』(筑摩書房、1999、388頁)。

² 和訳は筆者による。原文は次の通りである。What makes the foreign text original is not so much that it is considered the coherent expression of authorial meaning, but that it is deemed worthy of translation, that it is destined to live what Benjamin calls an 'afterlife' (Überleben) in a derivative form like translation [...] A translation canonizes the foreign text, validating its fame by enabling its survival. Ed. Venuti, Lawrence. *Rethinking translation: discourse, subjectivity, ideology*. (Routledge, 1992, p. 7).

記』論の特徴を考究する。また、この作品を世界文学の一部として捉え直し、英米におけるその流通のありようを追求しながら、その受容過程を明確にすることを目指す。

西洋における日本関連の文献の中で最も古いものは 13 世紀にマルコ・ポーロが書いた『東方見聞録』であるが、西洋人が日本に関心を持ち始めたのは 16 世紀のことである。この時期にキリスト教の宣教師が来日し、日本に関する著書も数多く書かれた。中でもポルトガル人のロドリゲスによって著された『日本大文典』（1594）や『日葡辞書』（1603）などは有名である。とりわけ、後者の『日葡辞書』には和歌や連歌、そして『平家物語』など古典作品からの例文が散見されるため、西洋における日本文学の受容例として最も古い事例である。主にイエズス会を中心に、19 世紀初期までの西洋では日本に関する様々な著書が流通した。19 世紀の初めになると日本への関心が高まる中、1832 年にドイツ人クラプロート（Julius Heinrich Klapproth, 1783 - 1835）が『三国通覧図説』のフランス語訳を行った³。1847 年にはオーストリア人のアウグスト・フィッツマイヤー（August Pfizmaier, 1808-1887）が柳亭種彦（1783-1842）著『浮世形六枚屏風』のドイツ語訳を完成させた。これらは、西洋においてジャポニスムの風潮が到来する直前に行われた日本語文献の翻訳であるが、これまでに西洋で流通した書物における日本像とは、多くの場合、事実というよりもむしろ旅行記などをもとに作り出された虚構性の高いものであった。

西洋人が本格的に日本に注目したのは 19 世紀後半のことである。言うまでもないが、西洋人の日本への関心は主に西洋の政治経済的における利害関係から生じたものである。ヨーロッパ諸国がアジアに所有した植民地が拡大する中、1853 年の黒船来航事件を経て日欧交流が始まったのも単なる偶然ではなかった。西洋における日本文化への関心の高まりも特定の歴史的な背景の中で生じたものである。レイモンド・ウィリアムズ（Raymond Henry Williams, 1921-1988）が指摘した通り、19 世紀後半における西洋の知識人は、近代化と工業化が西洋の社会的な衰退をもたらしたという見方が強かったため、懐旧の念を抱いてヨーロッパの黄金時代を模索中であつた⁴。そのような状況のなかで西洋人が来日し、日本文化が欧米に導入され、西洋人が失った純粋な古代の文化が日本のそれに見出されたのである⁵。すなわち、西洋の近代化と工業化の悪影響から免れた日本の文化はいまだ原始状態のままされているという捉え方は、西洋における日本文化の受容の特徴的な点である。本論の第 2 章で取り上げるディクソンや第 5 章で示す F. Hadland Davis（生没年不詳）や Basil Bunting（1900-1985）らによる『方丈記』の受容はまさにこれに当てはまるものである。

³ ドナルド・キーン「特別講義・日本古典文学の翻訳について」（国際日本文学研究集會會議録、第 6 巻、1983、28-42 頁）。

⁴ レイモンド・ウィリアムズ著・山本和平[ほか]訳『田舎と都会』（晶文社、1985、27-68 頁）。

⁵ Evett, Elisa. *The critical reception of Japanese art in late nineteenth century Europe*. UMI Books on Demand, 1982, p. xiii.

日欧交流が深まるにつれて、大量の日本の美術作品が様々な経緯で西洋に導入され、ジャポニスムの風潮が高まっていった。西洋におけるジャポニスムは、日本美術の消費という美術商を中心とした運動として捉えられがちであるが、西洋における日本文学の流通と消費もそのジャポニスム運動をある一面で支えていたと言える。なぜなら、当時の西洋文学のなかでキャンノンと目される文学作品に、いわゆる日本的な美意識が散見されるためである。19世紀末から20世紀初頭のイギリス文学における日本文化の影響を研究した McAdams は、イギリスの文学的なジャポニスム (literary Japonisme) に注目し、ヴィクトリア朝時代の英文学がいかに関心された日本像によって形成されたのかを明らかにしている⁶。同様に de Gruchy は、20世紀初頭のイギリス文学は日本文学の翻訳を通じて豊かになり、英文学そのものの形成の基盤を作ったかと述べている⁷。ゆえに、西洋におけるジャポニスム運動を芸術分野だけでなく、あらゆる文芸分野の視点から再検討しなければならない。このような日欧交流においては、明治期に日本で活躍したいわゆるお雇い外国人が重要な役割を果たした。とりわけ、西洋における日本文学の導入において、お雇い外国人の役目は注目に値するものである。この頃の在日外国人は、それぞれが従事した公務を行いながら、日本の美術や文学などあらゆる分野に関心を寄せ、学問としてそれらを追求した。このような試みのなかで、外国人は日本の文学作品をヨーロッパの言語へ翻訳し、学術雑誌や書籍などを通じて西洋に伝えたのである。

この時期の西洋における日本への高い関心は、欧文で書かれた書物の数から容易に想像できる。1859年から1907年にかけて欧文で書かれた日本に関連する文献の目録を収録したドイツ人の日本学者ウェンクステルン (Friedrich von Wenckstern, 1859-1914?) の『大日本書史』全2巻 (1895, 1907) は800頁に及ぶものである⁸。また、日本学者チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) が『日本事物誌』の1905年版に「むしろ日本に関する著書を著さないことが、特別な称号に値するような時代が到来した。」とさえ述べるほど欧文で日本関連の著書が執筆されたのである⁹。チェンバレンの指摘から、20世紀初頭の西洋における文

⁶ McAdams, Elizabeth Sara. "Turning Japanese: Japonisme in Victorian Literature and Culture." Ph. D. Dissertation, University of Michigan, 2016, <https://deepblue.lib.umich.edu/handle/2027.42/120762>, accessed on Sep 3rd 2018.

⁷ De Gruchy, John Walter. *Orientalism, Japonism, and the Creation of Japanese Literature in English*. University of Hawai'i Press, 2003, 205 p..

⁸ Fr. Von Wenckstern. *A Bibliography of the Japanese Empire, Being a classified list of all Books, Essays and Maps in European languages relating to Dai Nihon*, Vol. 1-2. Leiden: E. J. Brill, 1895. また、海外における日本関連の文献目録に関しては次の研究が詳しい。また、1934年に出版された『岩波講座 世界文学』にも部分的に欧文で書かれた日本関連の著書一覧が掲載されている。さらに、藤津滋生「外国語による日本研究文献の書誌学的研究」(日本研究：国際日本文化研究センター紀要, 第10巻, 1994, 403-418頁)も参考されたい。

⁹ 原文は次の通り。Von Wenckstern's Bibliography of the Japanese Empire contains a great many thousands of entries, from which it may be inferred that not to have written a book about Japan is fast becoming a title to distinction. Chamberlain, Basil Hall. *Things Japanese*. London, John Murray, 1905, p. 64.

学的ジャポニスがいかに盛んであったのかが容易に想像できるであろう。これらの著書には、日本の文学作品の欧文訳も含まれているが、そのなかで古典文学の割合は比較的多かった。

日本文学の欧文訳の中で最も早いものの一つとしては、イギリスの日本学者ディキンズ (Frederick Victor Dickins, 1838-1915) による『百人一首』 (1866) の英訳が挙げられる¹⁰。ディキンズは、明治維新の2年前に *HYAK NIN IS'SHU: Japanese Lyrical Odes* という題目を付けてロンドンでこの英訳を刊行したが、これは日本の文学作品の本格的な欧文訳の始まりであった。日本滞在中のディキンズは、さらに 1875 年に『仮名手本忠臣蔵』の英訳も行っている。これは 1880 年にロンドンで再版され、英語圏で特に好評を受けた作品の一つである¹¹。次にアストン (William George Aston, 1841-1911) の『土佐日記』 (1875)、チェンバレンによる『古事記』や『万葉集』の英訳 (1880)、ランゲ (Rudolf Lange, 1850-1933) の『竹取物語』 (1879) や『古今和歌集』 (1884) のドイツ語訳など、主に古典文学を中心に多くの欧文訳がある。上記以外にも、多くの西洋人が複数の古典作品を欧文に翻訳し、国内外で刊行されていた学術雑誌や新聞などで発表している。西洋人のこのような古典文学への注目は戦後に至るまで継続されることになる¹²。

一方で、この時期には日本人による欧文で書かれた日本関連の著書も多くあるが、その中で文学作品の欧文訳も少なからず確認できる。後述する通り、明治中期頃既に日本文学を西洋に発信することに対して、日本人の積極的な参加を呼び掛ける新聞記事もあったが、実際には 19 世紀末までに日本人による文学作品の翻訳はそれほど多くはなかった。このような数少ない翻訳のなかで、早いものとしては末松謙澄 (1855-1920) の『源氏物語』 (1882) の部分的な英訳が挙げられる¹³。謙澄の英訳の質および英語圏におけるその評価に関して意見は分かれているものの、明治初期の日本人による日本の文学作品の英訳として意義のある訳業である。日本の文学作品を欧文に訳した数少ない日本人翻訳者のもう一人は夏目漱石である。ディクソン (James Main Dixon, 1856-1933) という東京帝国大学の英文学の教授から依頼を受けた漱石は、『方丈記』の最初の外国語訳に挑むことになった。これは『方丈記』が世界文学として歩み出す第一歩である。この翻訳を契機に、西洋人がこの作品に関心を持ち、しばしば翻訳の対象にしたため、欧米で広く読まれるようになった。本論は、以下に述

¹⁰ 河村ハツエ『F.V.ディキンズ—日本文学英訳の先駆者—』 (七月堂、1997、20-49 頁)。

¹¹ 当時のアメリカの大統領ルーズベルト (1882-1945) が親日家として知られているが、その主な理由として彼はディキンズの『忠臣蔵』の英訳を読んだからと言われている。ドナルド・キーン「特別講義・日本古典文学の翻訳について」 (国際日本文学研究集会会議録、第 6 巻、1983、37 頁)。

¹² 福田 秀一 欧米の日本文学研究管見 (外国人の日本文学研究<特集>) (文学・語学 (87)、1980、p17-27 頁)。福田秀一「米国における日本中世文学の研究と紹介」 (国文学研究資料館紀要(11)、1985、171-194 頁)。

¹³ 明治期に日本人による日本文学作品の欧文訳がいくつかあるが、いずれもそれほど欧米に流通したとは思われない。少なくとも、『方丈記』のように早い段階で欧文への翻訳は確認できない。

べる要因に基づき、19世紀末から20世紀初頭の英米で『方丈記』がどのように読まれたのか、その経緯と特色を明らかにすることを目的としている。

第2節 先行研究と問題の所在

欧米における『方丈記』の受容の問題を取り上げる前に、まずは欧米における日本の古典文学の受容研究の現状を考える必要がある。日本の古典文学が欧米に導入されたことについて、高杉一郎は「(前略)第二に、第二次世界大戦以前に紹介されたり訳されたりした比較的少数の作品の中では古典の数が多く、しかもその紹介者や訳者が日本人自身であるか、あるいはたまたま外交官や教師として日本に長期滞在することになった知日派もしくは親日派とも言うべき外国人である場合が多いということである。」と指摘している¹⁴。高杉の示したように、明治期に欧米に伝来された日本文学のなかでも古典の方がその割合は多かったが、そのような活動においては外国人のみならず、日本人も大きな役割を果たした。古典文学を海外に伝えた外国人が「知日派もしくは親日派」であったかどうかは別の問題として、日本における彼らの活動は、多くの場合西洋における日本趣味の高まりや彼ら自身の異国趣味がその背景にあった。

その一方で日本人は、日本文学を西洋に伝えることで、日本文化を世界に発信し、とりわけ西洋に対して日本文化の優位性を誇示することを目指した。このことは、1888年6月23日付の読売新聞に掲載された著者不明の記事「英文をもって著述すること」からも見て取れる。この記事の著者は、富士山や琵琶湖などといった日本のステレオタイプのイメージを超越して新たな日本像を創出するために日本の文学作品を欧文に訳さなければならないと主張している¹⁵。このような歴史的な時代状況のなかで古典文学が西欧に導入され、次第に日本の近現代文学への関心を引き起こす要因になった。そして、20世紀初頭になると、日本の現代小説が欧文に翻訳されて、西洋で読まれるようになった。ここで注意しなければならないのは、明治期に西洋に伝播した古典文学が、それ以後の欧米における日本文学の受容の素地を形作ったことである。ゆえに、西洋における日本文学および文化の受容を理解するためには、明治期の古典文学の西洋での受容の過程を理解する必要がある。また、先に示した de Gruchy や McAdams らの言う通り、このような研究は19世紀末・20世紀初頭の西洋文学の形成過程と、その過程における日本文学との関わりを明らかにするためにも不可欠である。

¹⁴ 高杉一郎「日本古典文学の外国語訳について」(文学、48、1980年11月、158頁)。

¹⁵ 「英文をもって著述すること」(読売新聞、1888年6月23日、朝刊1頁)。同じく、1883年に『源氏物語』を英訳した末松謙澄の英訳の序文から看取できる。この件に関して次の研究を参照されたい。Clements, Rebekah. "Suematsu Kenchō and the first English translation of Genji monogatari: translation, tactics, and the 'women's question.'" *Japan Forum*, 23:1, 2011, pp. 25-47.

さらに言えば、このような研究は比較文学という分野のみならず、海外における日本研究の形成そのものを理解するのにも有益である。

国内では、早くから欧米における古典文学の受容について注目されてきた。例えば、1934年に刊行された『岩波講座・世界文学』の第11巻は、日本における英語学や海外における日本研究の概略を示しながら、日本文学を外国語に訳した外国人や日本人の一覧を掲載している¹⁶。戦後においては1961年に日本ペンクラブから出版された *Japanese literature in European languages: a bibliography* に当時までに欧文に翻訳された日本文学作品のリストが掲載されている¹⁷。最近の研究としては、伊藤鉄也による『日本古典文学翻訳事典 1〈英語改訂編〉』や『日本古典文学翻訳事典 2〈平安外語編〉』に、明治期から現在にかけて外国語に訳された古典文学の詳細が記録されている¹⁸。他にも、欧米における古典文学の全体像を論じた研究として先ほど提示した高杉一郎の論文やドナルド・キーンなどによる論考がある¹⁹。さらに、個々の古典作品の海外受容を対象にした研究もあるが、このような研究はごく限られた名作のみに集中している²⁰。明治期に海外に伝播した古典文学についての国内での研究を俯瞰してみれば、その成果は非常に少ないのが現状である。

一方で、海外における研究状況は、国内の現状とさほど異なっているとは言え難い。海外の研究も国内と同じく、いくつかの名作に限られているようである。例えば、海外における『枕草子』の受容に着目した Valerie Henitiuk の *Worlding Sei Shônagon: The Pillow Book in Translation* は、明治初期から現在までに行われたこの作品の世界各国語訳を網羅的に取り上げているが、この作品がどのように読まれたのかは論じられていない²¹。しかし、『源氏物語』の欧米での受容を理解するにあたって Michael Emmerich の *The Tale of Genji: Translation, Canonization, and World Literature* は有益である。エメリックは、作品の受容という概念そのものを「受容」(reception) から「置換え」(replacement) へと捉え直した上で、欧米における『源氏物語』の受容を詳しく論じている²²。上記以外に、『百人一首』『万葉集』『古

¹⁶ 『岩波講座世界文学・第11巻』(岩波書店, 1934年)。

¹⁷ *Japanese literature in European languages: a bibliography*. Japan P.E.N. Club, Tokyo, 1961, 98 p.

¹⁸ 伊藤鉄也 編『日本古典文学翻訳事典 1(英語改訂編)』(人間文化研究機構国文学研究資料館, 2014.3)。伊藤鉄也『日本古典文学翻訳事典〈平安外語編〉2』(人間文化研究機構国文学研究資料館, 2013-2016)。

¹⁹ 高杉一郎「日本古典文学の外国語訳について」(文学, 48, 1980年11月, 158頁)。ドナルド・キーン「特別講義・日本古典文学の翻訳について」(国際日本文学研究会集會議録, 第6巻, 1983, 28-42頁)。

²⁰ 参考文献。

²¹ Venitiuk, Valerie. *Worlding Sei Shônagon: The Pillow Book in Translation*. University of Ottawa Press, 2012, 312 p.

²² Emmerich, Michael. *The Tale of Genji: Translation, Canonization, and World Literature*. Columbia University Press, 2013, 512 p. また、西洋における『源氏物語』の受容について次のような研究も詳しい。Ed. Harper, Thomas. Shinare, Haruo. *Reading the Tale of Genji: Sources from the First Millennium*. Columbia University Press, 2015, 632 p.

事記』『忠臣蔵』などの作品の欧文訳や欧米におけるその受容を中心とした研究はこの数年少
しずつ増え続けているが、十分とは言えない。国内外における古典文学の海外受容について
のこのような研究の乏しさを補う目的で、本研究は『方丈記』の欧米における受容を研究対
象にしたのである。

しかし、なぜ『方丈記』でなければならないのであろうか。その主な理由は、外国人が早
くからこの作品に注目したためである。1874年に本作品は初めて欧文の文献で言及され、
1892年にその最初の外国語訳が出版された。それ以来、外国人はこの作品を数回にわたっ
て様々な言語に訳し、『方丈記』の作者である鴨長明に関しても関心を寄せたのである。実
は『方丈記』は、1890年代から1930年代までの50年間に、日本の古典文学の中でも最も多
く欧文訳が出された作品の一つである²³。これらの外国語訳には西洋人だけでなく、日本人
も深く関わってきた。そのことがこの作品の海外受容の特徴的なところである。ゆえに、
『方丈記』の海外への伝来の仕方を追求することで、西洋人と日本人がそれぞれ日本文学を
海外に紹介するにあたっていかなる姿勢を取ったのかその特徴が見えてくる。また、『方丈
記』を選んだもう一つ理由は、先行研究の蓄積に関するものである。19世紀末までに『方
丈記』の他にも『百人一首』『枕草子』『源氏物語』など古典作品が欧文に訳されているの
だが、これらの作品の西洋での受容については少なからず研究がある。しかし、『方丈記』
に関する研究はほぼ皆無であるため、本研究は本作品を研究対象として取り上げることにし
た。

さらに、本研究が『方丈記』を研究対象にした学術的な背景には、先行研究の方向性の問
題もある。日本文学史の中では、『方丈記』は中世期を代表する一作として注目されてきた。
第一章で述べる通り、この作品の本格的な研究はやや遅れて明治後期・大正期に始まったが、
それ以後膨大な数の研究がなされてきた。築瀬一雄の調査によれば、明治から昭和46年
(1971)にかけて刊行された『方丈記』の注釈書だけでも110冊にのぼる。もちろん、これ
らの注釈書以外に数多くの現代語訳や著書、論文、評なども書かれている。この数字からも
明らかのように、『方丈記』は明治以後に高い関心を集め、その注目に呼応して数多くの研
究も行われた。これらの先行研究は、本作品の本文や成立過程に関する諸問題、そして鴨長
明の思想など多岐にわたる問題を議論の対象にした。この作品が後世の文学にどのような影

²³ 現在知られているだけで、この時期に『方丈記』の欧文訳として次のようなものがある。夏目漱石
の英訳(1892)、ディクソン英訳(1893)、土屋信民のフランス語訳(部分的,1897)、アストン英
訳(1899)、市川代治の独訳(1902)、南方熊楠・ディキンズ共訳(1905)、ディキンズ訳(1907)、
ルボン(Michel Revon, 1867-1947)のフランス語訳(1910)、サドラー(Arthur Lindsay Sadler, 1882-
1970)訳(1928)、ムチオリ(Marcello Muccioli, 1898-1976)のイタリア語訳(1930)、カノツホ
(Alexander Chanoch, 1894-1934)の独訳(1930)、バンティング(Basil Bunting, 1900-1985)英詩
(1933)。これ以外に欧文における言及も数多く見られる。

響を及ぼしたかについても少なからず考察がなされている。しかし、『方丈記』のこれまでの豊富な研究では、本作品を国文学という枠組みの内に捉え、日本文学の一部という前提で、その諸問題を論じたものがほとんどである。明治期という早い時期に外国人が注目し、その外国語訳を通じて海外で読んだ世界文学の作品としては注目されてこなかったのが事実である。

『方丈記』の外国語訳や海外におけるその受容を取り上げた研究が全くないわけではない。日本の文学者はこの問題について早くから関心を持っていた。例えば、1911年に国文学者の野々口精一が1907年にゴワンス社から刊行されたディキンズ (Frederick V. Dickins, 1838-1915) の『方丈記』英訳を取り上げ、日本の古典文学がいかに関海外で注目されているのかについて所見を述べている²⁴。野々口は、本作品の代表的な部分の本文と訳文を比較し、その誤訳などを指摘しつつ、訳者の忠実な翻訳の仕方を称賛している。同じく、1933年に鈴鹿三七 (1888-1967) は『方丈記』の外国語訳版の一覧を提示し、その翌年 (1934) に小川寿一 (1907-?) は、本作品の受容史をまとめると同時に、『方丈記』の外国語訳についての情報も記載している²⁵。しかし、戦前に行われた『方丈記』の外国語訳に関するこれらの研究は、いずれもこの作品がどの外国語に訳されたのか、その情報を提示するだけにとどまり、訳文の分析や海外での受容といった問題を検討していない。

戦後に築瀬一雄は『方丈記』の外国語訳について「『方丈記』は、わが古典としては、割合に多くの外国語訳を持つものである。(中略) これら(筆者注:『方丈記』訳)については、野々口精一・鈴鹿三七・青山白雲・小川寿一・幣原道太郎らの諸氏の紹介があるが、内容の検討は、幣原氏の「方丈記の欧訳」(昭36)が見えるだけであり、今後の研究にゆだねられている。これだけの外国語訳があるので、恐らく外国文学への影響もあろうかと思われるが、この点についての論文は現れていない。」と指摘している²⁶。築瀬の言うように、『方丈記』が実際に海外の文学に影響を与えたかどうか不明であるが、先ほど述べた通り、日本の古典文学が海外の文学に影響を与えたことは確かである。また、築瀬の示した幣原道太郎の論文に、1961年時点までに試みられた『方丈記』の欧文訳(英訳8、仏訳3、独訳5、伊訳2、エスペラント訳1、ウクライナ訳1)のリストがあり、代表的な本文と英訳の比較検討がなされているが、海外の読者がこの作品をどのように読んだかという点に関する言及はない²⁷。築瀬の指摘から50年近く経た現在でも状況はそれほど変わっていないとは言い難い。

²⁴ 野々口精一「英譯せられたる方丈記」(國學院雑誌17(11)(205)、1911年11月号、74-78頁)。

²⁵ 鈴鹿三七「外國語譯方丈記考」(鴨長明研究、2-3合併号、1933年、14-15頁)。小川寿一「方丈記書史」(吉沢、義則、『方丈記諸抄大成:諸本校異』、卷末附録、1934年、1-52頁)。幣原道太郎の「方丈記の欧訳」(駒澤大学文学部研究紀要、19、1961年、1-22頁)。

²⁶ 築瀬一雄『方丈記解釈大成』(大修館書店、1972、292頁)。

²⁷ 幣原道太郎「方丈記の欧訳」(駒澤大学文学部研究紀要19-1、1961年、1-22頁)。

確かに、この 20 年で『方丈記』の英訳を中心に、その本文と訳文の比較検討を試みた研究が少しは現れてきているものの、海外におけるその受容の詳細を追求しようとした研究は管見の限り見当たらない。それゆえに、本研究では『方丈記』の海外への伝播を含めて、その受容の様相を明らかにすることを目指した。

海外における『方丈記』の受容を直接的に論じた研究はないが、この作品の外国語訳を中心に訳者の『方丈記』理解や訳者にとっての本作品の意義などを論じた研究はわずかにみられる。そのうち、本論で取り上げる夏目漱石の英訳を対象にした研究に関しては、下西善三郎による諸論考が代表的なものである。第 3 章で詳述するが、下西は漱石の英訳に関して一連の論文を執筆し、重要な指摘をおこなっている。とりわけ、下西は漱石の「英訳方丈記」があくまでもディクソンの依頼を受けて行われたもので、漱石自らが積極的に取り組んだものではないという従来の指摘に異を唱え、『方丈記』が漱石にとっていかに身近な作品であったのかを明らかにした²⁸。それと同時に、下西は漱石が英訳に利用した原典を明確にし、漱石の英文エッセイの和訳と詳細な注釈を施すなどして、学生時代の漱石の問題関心の中にこのエッセイを位置付けたのである。漱石の『方丈記』理解において下西の論考は不可欠であるが、下西は漱石の『方丈記』論を歴史的な文脈のなかに位置付けようとはしなかった。つまり、漱石の『方丈記』論がどのように特定の歴史的な時空間のなかで形成され、英米で受け継がれてきたのかを論じる必要がある。

下西の他に、漱石の英訳を論じた研究として、今西順吉の『漱石文学の思想—自己形成の苦悩 第一部』が挙げられる。今西は、漱石のエッセイを踏まえながら、漱石が強い関心を寄せた「天才論」に注目し、学生当時の漱石の思想を検討した²⁹。増田裕美子は、『漱石のヒロインたち—古典から読む』で、漱石の作品『倫敦塔』や『草枕』などを『方丈記』の内容との関連性の視点から考察し、これらの作品における『方丈記』の痕跡を明確にした³⁰。上記以外に、漱石の英訳を検討した研究はいくつかあるが、いずれも漱石と『方丈記』の関係や『方丈記』の本文と漱石訳の比較を目指したものである。しかしながら、『方丈記』の受容の視点から漱石の英訳を論じた研究はなく、漱石の『方丈記』論そのものの特徴を解き明かそうとした研究や漱石が抱いた鴨長明像がいかに形成されたのかなどを考察した研究も少ない。また、漱石の『方丈記』英訳から彼のいかなる翻訳思想が伺えるのかについて指摘した研究も見当たらない。

²⁸ 下西善三郎「漱石と『方丈記』」（『金沢大学国語国文』21、1983、86-87 頁）。詳細は、本論の第 3 章を参照されたい。

²⁹ 今西順吉『漱石文学の思想 第一部』（筑摩書房、1888 年、231-238 頁）。

³⁰ 増田裕美子著『漱石のヒロインたち—古典から読む』（新曜社、2017 年、123-128 頁）。

一方、東京帝大で漱石の英文学の先生であったディクソンが漱石の『方丈記』理解には深く関わっているのだが、このディクソンの伝記の整理を目指した研究はいくつかある。第2章で述べるように、それらの研究のうち、ディクソンが没した1933年に『英語青年』という雑誌に掲載された一連の記事は最も早いものである。そして、1972年に小澤・土橋・鈴木・梅津が執筆した論文では、ディクソンの伝記や業績が網羅的に提示されており、ディクソンに関する研究の中で代表的な位置を占める。他にもディクソンに関する研究はいくつかあるが、ディクソンがなぜ『方丈記』に関心を抱いたのかについての論考はない。同じく、漱石の『方丈記』解釈にディクソンがどのように関わったのかを論じた研究もない。また、国内外におけるディクソンの業績についてもこれまで十分に考察されてこなかった。ディクソンに関する詳細な情報を収集することは、彼の『方丈記』への関心のみならず、明治期に日本で活動した西洋人が日本文学のいかなる面に関心を持ったのかを明確にすることにも繋がるだろう。

本論が目指す『方丈記』の海外への伝播の内容を追及したような研究は管見の限り他に存在しない。言い換えれば、漱石が行った英訳がいかに海外に伝播し、欧米の読者が本作をいかに解釈したのかに着目した研究はない。同じく、漱石の英訳が、この作品のそれ以後の英米における受容においてなぜ、どのような影響を及ぼしたのかに関する研究もない。ただし、漱石の英訳以後に行われた『方丈記』の英訳についてはいくつかの研究がある。例えば、南方熊楠・ディキンズの『方丈記』共訳に関して、少なからず先行研究がある。第5章で述べるように、この共訳についての小泉博一と松居竜吾の諸論考はその代表的なものである。小泉は、熊楠が英訳に利用した底本を明らかにし、訳文の実態を考察することで、熊楠と『方丈記』の関係を明らかにした。また、小泉グループは、南方熊楠顕彰館に所蔵されている熊楠訳の部分的な草稿を翻刻し、研究者に新資料を提供している。松居も複数の論文を通じて熊楠の英訳の諸側面を検討し、熊楠の英訳がいかに彼の那智隠遁生活と深く関わっているのかについて論じた。しかしながら、この共訳を取り上げたいくつかの研究はあるものの、やはりいずれも海外における『方丈記』の受容という視点からは論じられていない。同様に、熊楠らの英訳が漱石の『方丈記』論からいかに影響を受けたのかにも着目した研究はない。

第5章で取り上げる著書 *Sunrise Stories : A Glance at the Literature of Japan* や *Myths and Legends of Japan* に収録された『方丈記』の描写を考察した研究も確認できない。アストン著『日本文学史』にある『方丈記』英訳に主眼をおいた研究もない。最後に取り上げる、バンティングの英詩“Chomei at Toyama”については英文学や翻訳学の視点から論じた研究はいくつかあるが、『方丈記』の受容の観点からそれに触れたものはない。したがって、上述の著書や人物を研究対象にすることは、欧米における『方丈記』のみならず、日本の古典文学

の受容を理解するために有益である。本論では、このような先行研究で指摘されてこなかった点に主眼をおき、その諸側面を解き明かすことを目指す。

第3節 研究の範囲と実施方法

本研究は、明治後期から（19世紀末）から昭和初期（1930年代の始め）までの英米を中心とした『方丈記』の受容を批判的に考察することを目的している。この期間を研究対象にした理由は、漱石の『方丈記』英訳を中心に論を展開するためである。すなわち、漱石が1892年に『方丈記』を英訳し、それを契機にこの作品が海外に伝播した。そして、本論で取り上げる20世紀初頭の英米の『方丈記』関連の文献（アストンの『方丈記』英訳以外）はいずれもある程度漱石の『方丈記』論から影響を受けている。そのため、研究の対象とする期間は1930年代までに設定した。その意味で、本研究は西洋における『方丈記』の受容を考察すると同時に、漱石の『方丈記』論の受容のされ方にも迫るものである。同様に、本論の中心は漱石の『方丈記』英訳であるため、この研究は英米といった限定された英語圏に焦点を絞ることにした。むしろ、この研究対象とした期間には『方丈記』は英語の他にフランス語やドイツ語、そしてイタリア語など他のヨーロッパの言語にも翻訳されているが、本論は漱石の『方丈記』英訳に焦点を絞るため、文献の範囲を英語に限定した。

本研究が、『方丈記』という文学作品の西洋における受容を研究することを目的としている以上、まずは「受容」という概念を定義しなければならない。文学の分野における受容（reception）とは、一般的に読者がいかに作品を読み、どのように解釈するのかということの意味する。同時に、そのような解釈がいかなる要因によって形成されるのかも受容研究の対象である。ヤウス（Hans Robert Jauss, 1921- 1997）が言うように、芸術作品は単なる作品の分析やその生産過程を検証することだけでは理解しがたい³¹。作品を十分に理解するためには、その生産と受容の両方のプロセスを明確する必要があるという。なぜなら、受容者は作品を受容する過程ではじめて作品に意味を与えるからである。そして、作品に与えられる意味は、多くの場合テキストに残された描写よりも、受容者が置かれた歴史的・社会的な状況から影響を受けて、受容者の期待の地平（horizon of expectations）を通して形成される³²。本論で言う受容とは、作品を読む行為とその解釈の形成過程の全体を意味するものである。一方で、デイヴィッド・ダムロッシュ（David Damrosch, 1953-）が述べた文学作品の流通過程もこのような受容の定義に含まれるものである。つまり、文学作品がなぜどのように流通し、世界文学になるのかその検証も受容研究の対象である。このように、本論における受容

³¹ Jauss, Hans Robert, tr. T. Bahti. *Towards an Aesthetic of Reception*. Minneapolis, 1982.

³² Holub, Robert C.. *Reception Theory*. Routledge, 2013, pp. 59-63.

とは、読者が作品を読み、解釈する行為をはじめ、そのような解釈に影響を与えた要因を含めた、解釈の流通までも意味するものである。

古典文学の受容研究から期待される学問的な成果については諸説ある。個々の古典作品の受容を追いかけることで、現在から遠く離れた原典が本来どのように読まれたのかが見えてくるといふ、作者と原作を中心にした見方がある。これに対し、原典の姿や作者の本来の意図を追求するのではなく、個々の読者の読書経験に着目し、それぞれの理解した作品像を明確にすることをより重視するという見解もある。本論で筆者は、古典の受容の研究が、過去と現在の両方を理解するために重要であると考えている。『方丈記』の場合は、この作品を十分に理解するために、どうしてもその800年にわたる受容史を検証しなければならない。より重要なのは、後代における読者がこの作品を社会的・文化的な変革のツールとしてどのように積極的に活用したかどうかであろう。先行研究から分かるように、古典文学の受容に関する研究は、過去だけでなく、我々の今を理解するために不可欠である。ネルソン・マンデラ (Nelson Mandela, 1918-2013) は投獄中にギリシアの神話『アンティゴネー』を読んでアフリカの独立運動へ励み、マハトマ・ガンディー (Mahatma Gandhi, 1869-1948) は、ウォルト・ホイットマン (Walter Whitman, 1819-1892) の詩集から影響を受けて非暴力主義の道に歩んだことはよく知られている事例である³³。第一章で触れるように、『方丈記』の場合も、読者はしばしば自身が置かれた現状を踏まえて政治経済的な視点からもこの作品を解釈したのである。その意味で、古典の受容の研究は、長く生き残った原典と作者を理解するために重要であるのみならず、我々が生きている現在を知るための重要な指針にもなり得る。

ダムロッシュは文学の流通について「世界文学の作品は、世界で移動していくときに新しい生を授けられる。私たちがこの新しい生を理解するためには、作品が翻訳のなかで、そして新しい文化的コンテクストのなかでどのような新しい枠組みを与えられるかをじっくりと見る必要がある。」と述べている³⁴。ダムロッシュの指摘は、翻訳だけでなく、著書やエッセイ、演劇など様々な流通手段を含み、作品がこの過程でいかに変遷するのかを意味する。本研究は、ダムロッシュの研究から着想を得て、『方丈記』が海外に流通した過程でなぜどのように変遷したのか、その詳細を明らかにする。文学の流通を対象とした研究手法についてサイドは「注意すべきは、文体、修辭的表現法、背景設定、語り口の技巧、歴史的・社会的諸条件であって、表象の正確さでも、何らかの偉大な原典に対する忠実さでもない。」

³³ Mandela, N. *Long walk to freedom: the autobiography of Nelson Mandela*. Boston: Little, Brown, 1994. Chakrabarti, Mohit. *Fire Sans Ire: A Critical Study of Gandhian Non-violence*. Concept Publishing Company, 2005, pp. 128-132.

³⁴ デイヴィッド・ダムロッシュ著、秋草俊一郎・奥彩子・桐山 大介・小松真帆・平塚 隼介・山辺 弦訳『世界文学とは何か?』(国書刊行会、2011、46頁)。

と述べている³⁵。本論はサイドの示した研究手法を採用し、『方丈記』の訳文と原典の比較検討を通じて翻訳の忠実さや正確さを模索するよりも、この作品の解釈が特定の歴史的・文化的な状況のなかでどのように形成されたのか、その内実を明確化する。とりわけ、『方丈記』の翻訳を分析するに当たりギデオン・トゥーリ (Gideon Toury) が提唱した「翻訳規範」(Translation norms)の概念を援用する。トゥーリが指摘したように、翻訳を行う時に訳者がどうしても守らなければならない翻訳の規範に従う過程の中で、漱石の『方丈記』解釈がいかに形成されたのかを考察する。

本研究は、『方丈記』の本文とその流通過程で行われた翻訳や執筆された著書の内容を念頭におきながら、先行研究で注目されてこなかった「周辺情報」、Niranjana Tejaswini の言葉を借りれば *outworks* も分析対象にする。周辺情報とは、『方丈記』に関する著書やその翻訳が行われた歴史的・文化的な状況を記録する資料をはじめ、これらの著書や翻訳の前書き、題目、注釈、書評、読者による他の論考、新聞記事などを意味する。これらの情報源から、著者あるいは訳者の目的や想定した読者などを特定することができる。例えば、漱石の『方丈記』英訳の場合、彼が書いた短いエッセイはこのような周辺情報に当たるものであり、本論の第3章で説明するように、漱石の『方丈記』論を理解するための貴重な資料である。同じく、本論で取り上げる漱石以後の『方丈記』の受容者の一人である高柳陶造は、西洋の読者にとっては馴染みのない中世日本の文人である鴨長明を、当時の米国でよく知られていた人物との比較を通して紹介した。南方熊楠・ディキンズの『方丈記』共訳の題目は、時代背景を考慮した上で、西洋読者から注目しやすい題名にされたことが看取できる。本論で取り上げる『方丈記』の他の読者についても同じようなことが言えるのであり、その詳細は著書や翻訳の本文のみならず、このような周辺情報を分析することで明らかになる。

本論は、英米における『方丈記』の受容を検討するものだが、海外の読者がこの作品をどのように受け取ったのかを十分に理解するため、まずは国内におけるその受容史の概略を提示する必要がある。つまり、本作品が成立から明治期までにどのように日本国内で読まれたのか、様々な文学作品や注釈書を参照しながら、その特色を観察する。次に、外国人はいつごろからなぜ『方丈記』に注目したのかを考察し、本作品が英語の文献にいかに現れたのかを検討する。続いて、漱石の英訳と深く関わったディクソンの伝記を整理することで、彼の人物像を明確にする。そして、ディクソンの『方丈記』への関心を考察し、彼の『方丈記』理解を明確にする。それに加えて、国内外における彼の業績を検討し、日本の高等教育との関わりや米国における日本研究の発展への貢献などについても考察する。

³⁵ E.W. サイド著; 今沢紀子訳『オリエンタリズム (上)』 (平凡社、1993年、59頁)。

国内における『方丈記』の受容とディクソンを含めた外国人の『方丈記』に対する関心について述べた上で、漱石の「英訳方丈記」に焦点を絞り、彼の英訳とエッセイの内容分析を通して、漱石の『方丈記』論の特徴を捉える。とりわけ、漱石の『方丈記』理解が、どのような要因から影響を受けて形成されたのかを検討し、英訳の分析を通じて彼の翻訳思想を明らかにする。一方で、漱石の「英訳方丈記」をもとにして、ディクソンが『方丈記』の新たな英訳を完成させ、鴨長明をめぐって論文も執筆した点に注目し、ディクソンの論文や英訳が漱石の英訳とエッセイからどのように影響を受けたのかも検討する。このような作業を通して、漱石の『方丈記』論が、ディクソンの『方丈記』理解にいかに関与を及ぼしたのかを明らかにする。

最後に、漱石とディクソンの『方丈記』解釈が、後代にどのように受け継がれたのかに注目する。該当期間に英米で行われた『方丈記』の英訳や、英文における『方丈記』、ないし鴨長明の描写を分析し、本作品が19世紀の終わり頃から1930年代初頭までの英米でどのように解釈されたのかを考察する。この試みの一環として、19世紀末にアメリカで出版された *Sunrise Stories : A Glance at the Literature of Japan* という著書に収録された『方丈記』の描写を分析し、作者の『方丈記』の理解を検討する。*Sunrise Stories* は、英米における日本文学の受容を理解するために重要な一冊であるが、本論では主にその『方丈記』に関する描写に焦点を当て、英米におけるこの作品の受容の観点から論じることとする。次に、イギリスの日本学者アストン著『日本文学史』に収録された『方丈記』の英訳を取り上げ、アストンの『方丈記』の解釈を検討する。続いて、南方熊楠・ディキンズの『方丈記』共訳を取り上げ、熊楠の『方丈記』への関心について述べる。そして、熊楠が英訳のために利用した原典について触れた後、この共訳が漱石・ディクソンの英訳からいかに影響を受けたのかを考察する。次に、20世紀の始め頃にイギリスで刊行された *Myths and Legends of Japan* という書物における鴨長明の描写を検討し、作者の鴨長明像を明らかにする。最後に、1930年代初頭にイギリスの詩人バジル・バンティングが書いた英詩“Chomei at Toyama”の分析を通して作者の『方丈記』の受容の特色を把握する。本論は、上記のような研究を通して、研究対象期間における『方丈記』の受容を考察するとともに、英米の読者が日本の古典文学をどのように受け入れたのかを検討する。

第4節 本論文の構成

本論は、序論、第1章、第2章、第3章、第4章、第5章、終章から構成される。以下は、各章の概略である。

序論は、研究背景、先行研究と問題の所在、研究の範囲と実施方法、本論文の構成からなる。

第1章では、『方丈記』の成立から明治中期までの国内におけるその受容の概要を提示する。まずは、鴨長明の略伝及び『方丈記』の成立について述べた上で、中世期に本作品に言及し、あるいはこの作品を読んだと思われる作品や人物を紹介し、その受容方法について記述する。そして、江戸期に作成されたこの作品の諸注釈書の概要を述べ、それぞれの受容の特色について確認する。また、江戸期に『方丈記』から影響を受けたと思われる作品を紹介し、明治期におけるその受容の概観を示す。このように、本作品の成立から明治までの受容を概観することで、700年に及ぶこの作品の受容の特色を明らかにする。

第2章では、漱石による『方丈記』の最初の翻訳と深く関わったディクソンを中心に考察を行う。最初に、先行研究では示されなかったディクソンの伝記を整理し、来日以前を始め、在日中や渡米後の彼の活動について詳しく記述する。そして、ディクソンの業績を考察し、日本の英語教育や女子教育に対して彼がいかに関与したのかを明確にし、渡米後彼がいかに日本に関する研究の推進に力を注いだのかを説明する。最後に、西洋人として初めて『方丈記』に強い関心を抱いた人物として、ディクソンがどのような経緯でこの作品に出会い、いかに理解したのかを検討する。

第3章では、漱石の「英訳方丈記」の内容を分析し、彼の『方丈記』解釈を明らかにする。最初に、漱石にとって『方丈記』がいかなる作品であったのかを述べ、次にエッセイの内容を分析することで、彼が提唱した『方丈記』の新たな解釈について説明する。そして、漱石の解釈が、いかにディクソンの存在に影響を受けて形成されたのかを論じる。最後に、漱石の英訳の分析を通して、彼が翻訳という行為をどのように捉えたのかについて考える。

第4章では、漱石とディクソンが執筆したエッセイと論文に主眼をおき、それぞれの『方丈記』理解の詳細を調査する。それと同時に、ディクソンがいかに漱石の『方丈記』論を継承したのかについて、両者の論考の比較検討を通じて明らかにする。また、両者の英訳の類似性を明らかにし、ディクソンが長明について行った発表が、西洋人にどのように捉えられたのかについて説明する。

第5章では、漱石とディクソンの英訳以後、1930年代の始め頃までに英米でこの作品がいかに受容されたのかについて論じる。まずは、1896年にアメリカで刊行された *Sunrise Stories : A Glance at the Literature of Japan* という著書に収録された『方丈記』の内容を分析し、作者の『方丈記』理解を明らかにしつつ、漱石の『方丈記』論が本著書にいかに継承されたのかを述べる。次に、本書の数年後に刊行されたアストン著『日本文学史』に収録された『方丈記』英訳を取り上げ、作者の『方丈記』の捉え方について述べる。続いて、南方熊楠・ディキンズによる『方丈記』の最初の全訳を取り上げて、熊楠が英訳に利用した底本を明らかにする。そして、この共訳がいかに漱石・ディクソンの英訳から少なからず影響を受

けたのかを論じる。次に、1912年にイギリスで出版された著書 *Myths and Legends of Japan* に収録された鴨長明に関する描写を考察し、その特徴を明らかにしつつ、作者の『方丈記』理解について説明する。最後に、英詩人バンティングの“Chomei at Toyama”という英詩に注目し、当時の時代背景の流れの中でバンティングがいかに長明を解釈したのかを考察する。

終章においては、これまでの考察をまとめた上で、結論を導く。本論が研究対象としている19世紀末20世紀初頭に至るまでに、英米の読者はそれぞれが置かれた状況によってなぜ、どのように『方丈記』を読んだのかをまとめる。また、最後に本論に含めることができなかった内容や研究課題をこれからいかに展開していくのかを提示して本論を終える。

第1章 『方丈記』の受容について—その成立から明治期までに

はじめに

『方丈記』は、成立してから現在に至るまで多様な形式で受容されてきた。中世期において『方丈記』に言及した作品の多くは、鴨長明の伝記的な側面やこの作品の内容の出典などを中心に簡単な指摘に留まっていた。例えば、『文机談』のように、長明の出家説を提示する著書もあれば、仏教思想の視点から長明の出家を論じた『十訓抄』や災害の描写を継承した『平家物語』のように享受した作品もある。それと同時に、異なった目的を持った多くの読者がこの作品を複数の方法で読もうとし、その結果この作品の諸本も生まれてきた。これらの諸本の読書の仕方や書き写し方法は、それぞれの時代背景や作者によって異なる。後述するように、現代性はこの作品の受容の特徴の一つであると言える。『方丈記』を積極的な学問の対象とした動きは、だいぶ後代になって始まった。本作品が成立して凡そ400年の歳月が経てから、ようやく江戸初期頃にその注釈書が現れた。また、この作品に描かれた災害の内容を強く意識した作品も執筆されるようになった。江戸時代における『方丈記』への高い関心は、明治を経て現在に至るまで継続された。明治中期に入ると、本作品は外国人からも注目され、翻訳などを通して海外にも伝えられるようになった。本章では、『方丈記』のこのような受容史の概観を提示する。

まずは、長明の略伝及び『方丈記』の成立について紹介し、鎌倉・室町時代に、この作品に言及し、あるいは、その影響を受けたと思われる代表的な作品を紹介する。次に、『方丈記』の諸本に触れた後、江戸期に作成されたこの作品の注釈書やこの作品から影響を受けたと思われる作品の受容について説明する。最後に、明治初期におけるその受容について述べることで、成立から夏目漱石による『方丈記』の英訳が行われた直前までの受容史のあらましを提示する。『方丈記』受容史のこのような概観は、第2章以後に述べる夏目漱石とそれ以後の『方丈記』の受容を理解するために役に立つと思われる。

第1節 鴨長明の生涯と『方丈記』の成立

『方丈記』の作者である鴨長明は、1155年頃賀茂御祖神社（下鴨神社）の正禰宜であった鴨長継の次男として生まれた。長明の生年に関しては、以前意見が分かれていたが、長明自身が『方丈記』に記した内容をもとにして、1155年の生まれであるというのが現在の通説である¹。そして、名前の発音について、現在では「ちょうめい」と呼ぶのが普通であるが、

¹ 長明の生涯と『方丈記』の成立に関しては、主に次の研究を参考にしてまとめた。築瀬一雄『方丈記全注釈』（角川書店、1971）。佐竹昭広校注、久保田淳校注『新日本古典文学大系 39 方丈記・徒然草』（岩波書店、1989年）。五味文彦『鴨長明伝』（山川出版社、2013年）。

本来「ながあきら」と呼ばれたようである。長明の父長継は、17歳の若さで既に下賀茂社の正禰宜の職に就いており、早いうちに出世した有力な人物とされているため、少年期の長明は恵み豊かな家族環境で育てられたと思われる。7歳頃の長明が、従五位下に叙せられたことからこのことは明らかである。しかし、長明の幸福な環境は長く続かず、彼はまだ19歳の若さで父長継をなくし、それで彼の人生が一変することになる。長明が目指した下鴨神社の禰宜職への道も、父の没後に閉ざされることになる。

その一方で、長明は祖母の家を継ぐことになっていたため、幼いころから和歌や音楽などを学ぶ機会に恵まれ、父長継が没するまでに結婚もしたと言われている。長明は、有名な歌人であった俊恵（1113-1191）に師事し、後鳥羽天皇の楽所預であった中原有安から琵琶を習う機会にも恵まれた。俊恵は、桂大納言の孫、歌人源俊頼の子で、奈良東大寺の僧侶であったが、地下人や僧侶などを中心に定期的に歌林苑という歌会を開いた人物として有名である。有安は音楽家であったと同時に、歌人でもあり、その歌は『千載集』などに残されている。父の死没後、後押しできる人がなかった中、長明はこのような有名な歌人から指導を受けながら和歌を習い歌人として成長した。21歳頃の長明は、歌会に出席し始め、26歳で104首を自選して家集『鴨長明集』（1181）を完成させた。長明は33歳のとき選集された『千載集』に彼の歌1首が入選されるなど、この時期は長明の習作期に当たるとされている。46歳頃の長明は、既に「中央歌壇のレギュラー・メンバ」の一人として数えられており、後鳥羽院や貴族により主催された複数の歌合や歌会に出席している²。1201年に後鳥羽院により和歌所が再興されたとき、長明はその寄人にも命じられるなどして、歌人として才能を発揮できたと思われる。

和歌所の寄人であった頃に起きたある事件が長明の人生を大きく変えてしまった。これは、鎌倉時代の音楽説話集である『文机談』に記録されたいわゆる「秘曲づくし」の事件である。というのは、長明が願主で当時の有名な音楽家を集めて主催された「秘曲づくし」の会で、感激のあまり師有安の生前に教えを受けていなかった琵琶の秘曲「啄木」を弾いてしまったというエピソードである。長明によるこのような行為は、当の楽所預藤原孝道（1166-1237）らから厳しく批判され、上皇より御下問を受ける始末までになり、長明の令名に関わる大事件であった³。この頃の長明は、父長継が死没した後、下鴨神社の正禰宜の職についての親戚

² 源家長の『源家長日記』では、歌人としての鴨長明の様子について次のように記録されている。「すべてこの長明みなし子になりて、社の交じらいもせずこもりゐて侍りしが、歌の事により北面へ参り、やがて和歌所の寄人になりて後、つねの和歌の会に歌参らせなどすれば、罷り出づることもなく、夜昼奉公おこたらず」。詳細は、築瀬一雄『方丈記全注釈』（角川書店、1971年、340頁）を参照されたい。

³ 岩佐美代子著『文机談：全注釈』（笠間書院、2007年、104-110頁）。

の祐兼と神職の関係で闘っていたのである。長明の父が正禰宜をした下鴨神社の摂社であった河合神社に禰宜に欠員ができると、和歌所などで歌人として長明の活躍を身近に見た後鳥羽院が、長明をその補任にしようとした。下鴨神社の正禰宜の職に就く前に、河合神社における禰宜職の経験が必要であったようで、長明自身も以前から父の跡を継ぐことを目指しており、河合神社の欠員は長明にとって絶好な機会であった。しかし、親戚の祐兼は、長明が神職の経験が乏しく、和歌などに没頭した理由で、後鳥羽院の判断に異を唱え、結果的には祐兼の息子であった祐頼がその職に就くことになった。そこで後鳥羽院が、鴨氏の氏社を官社に昇格して長明をその禰宜職に補任しようとしたが、長明はこれを受けなかったと『源家長日記』に記されている⁴。これが、長明の出家説の一つである。

長明がなぜ出家したのか、その原因は明らかではない。しかし、望んだ神職を得ることに失敗したことは、その理由の一つであったらしい。この事件で絶望してしまった長明は、和歌所の寄人をやめ、法名を蓮胤にし、50歳の春に出家して大原山で隠遁生活を始めた。長明自身は、このことについて『方丈記』に「むなしく大原山の雲にふして、又、五かへりの春秋をなん経にける」と述べた通り、洛北大原に隠逸した⁵。後で後鳥羽院から寄人に復帰するような仰せがあったが、長明は「世をも人も、恨みけるほどならば、かくこそあらまほしけれ」という和歌を詠んで断った⁶。大原山における長明の生活について述べた情報はないが、多くの隠者が住んでいた場所であった大原山で、長明もまた普通の隠者生活を行ったようである。隠遁した後も、長明はしばらくの間歌壇との関わりをもっていたようである。隠遁後の彼の和歌10首が『新古今集』に入選されているが、それ以後歌壇との関係は確認できない。おそらく、この時期から仏道修行に心を傾けると同時に、歌人としてのこれまでの経験に基づいて『無名抄』の草稿を準備したと思われる。

大原山で5年間隠遁した後、長明は日野の外山に移り、そこで人生の最後まで住んだ。日野山における長明の生活様式について『方丈記』に詳細に記述されている。要するに、長明は和歌・管弦など芸術的な活動に従事しつつ、仏道修行にも関心を示し、自由な数奇者の生活を送ったと言える。晩年の長明は、和歌所の寄人であった飛鳥井雅経（1170-1221）に誘われて一時期鎌倉へ下向もした。長明は鎌倉で鎌倉幕府の第3代将軍の源実朝（1192-1219）に会い、故将軍の源頼朝（1147-1199）の墓前で歌を詠んだという記録が残されている。長明がいかなる目的で源実朝に会いに行ったのかは不明であるが、当時20歳であった実朝の作

⁴ これについて『源家長日記』に次のような記述がある。「長明かために氏社の官社にならせ給はん事、社頭のひかりなれば、かたゝこれもよろこひ申さんすらんと思侍しに、なおもとより申むねたかひたりとこほり申侍しにうつし心ならずさへおほえ侍し。」

⁵ 佐竹昭広校注、久保田淳校注『新日本古典文学大系 39 方丈記・徒然草』（岩波書店、1989年）。

⁶ 浅見和彦『十訓抄』（新編日本古典文学全集 51、小学館、1997年、380-382頁）。

歌の指導者になることを目指したと指摘がある⁷。しかし、希望通りにうまくいかず、長明は日野山の草庵に戻り、没するまで日野山で過ごした。日野山における長明が執筆した作品の時期に関しては、鎌倉から戻った後『無名抄』を完成し、次に『方丈記』と最後に『発心集』を完成させたと思われる。このように最晩年の長明は、執筆活動や他の芸術を楽しみながら仏道修行に従事し、1216年に60才以上の人生を終えたのである。

『方丈記』の執筆時期について、この作品の末尾に「于時、建暦のふたとせ、やよひのつごもりごろ、桑門の蓮胤、外山の菴にして、これをしるす。」と明記されているため、「建暦二年」（1212）の成立は確かである⁸。『方丈記』はその作品構成や内容の視点から、慶滋保胤（933-1002）著『池亭記』（982）に類似しているが、文体に関しては、和漢混淆文という当時として珍しい仮名と漢字交じりの表記方法を採用している。これは『方丈記』の独創性の一つである。本作品のジャンルに関して諸説はあるが、現在では「記」文学を特徴とした散文、あるいはエッセイ類であるという見方は強い。『方丈記』には数多くの伝本があるが、それらの諸本は分量によって広本と略本に分けられる。さらに、その内容の視点から、広本を古本系と流布本系統に、略本を長享本・延徳本・真名本に分類されている。現在よく読まれている大福光寺本は、上記の古本系統に属するもので、最も古い伝本とされている。

『方丈記』は、内容の観点から言えば2つの大きな部から構成されている。前半は、長明が経験した天災・人災を写實的に描写し、世の中における人間存在の辛さを示している。後半は、世の中の辛さを避ける具体的な方法として、長明が選択した隠遁生活について述べ、長明はいかに芸術や宗教を頼りにして永遠の幸福を模索したのかを記す。具体的な内容においては、この作品が五つの段階を経て展開されている。冒頭文の「ゆく川の流れ…」で、人間と住家のはかなさが提示され、その証拠として長明が体験した五大災厄が記述されている。つまり、天変地異の描写は、人間の存在の不安定さを示し、この不安定な生活から脱がれる方法として、長明自身がいかにして隠者の道を選び、山中で質素な生活を送ったのかが描写されている。最後に、作者が目指していた満足した宗教心を達成できなかったことが記載されて、作品が終わっている。要するに、この作品は長明の人生を記録した散文的な作品であると同時に、自照性や内容の多様性に富んだものでもある。

以上、長明の略伝と『方丈記』の成立について述べた。次節では『方丈記』の諸本について簡単に紹介した上、この作品に言及し、あるいはその内容を継承したと思われる作品を、その受容の観点から考えて見る。

⁷ 築瀬一雄『方丈記全注釈』（角川書店、1971年、348頁）。

⁸ 佐竹昭広校注、久保田淳校注『新日本古典文学大系 39 方丈記・徒然草』（岩波書店、1989年）。

第2節 成立から近世までの『方丈記』受容について

『方丈記』の多岐にわたる諸本は、この作品の多様な享受方法を物語っている。現在では最も古いものと思われる大福光寺所蔵本がよく読まれているが、中世から江戸期にかけて様々な種類の伝本が読まれていたことは知られている。先に触れた通り、その内容や分量から『方丈記』は広本系統と略本系統に分けられ、広本系統はさらに古本系統と流布本系統に、略本系統は長享本、最簡略本と延徳本に分けられる。同じ系統の中でも、内容的に多少異なったものもあり、多様な伝本の存在からこの作品は様々な方法で読まれていたことが分かる。大福光寺本の他に、中世末期に執筆されたと思われる延徳本のような古い伝本もあれば、比較的遅れて江戸期に作成されたものもあるが、それぞれが作成された時代や歴史的な背景によって作成の目的や内容が異なっている。例えば、略本は、分量的に広本に比べて三分一に及ぶ短い作品であり、五大災厄の描写を含まない。その代わりに、略本の作者は宗教的な視点から、『方丈記』を浄土信仰の仏典として位置付けようとした。同じく、漢字のみで書かれた真名本も、作者の狙いは他の諸本と異なり、読者に異なった経験を提供しようとしたに違いない。大正中期に大福光寺本が発見されるまでに、『方丈記』はこのように様々な形で読まれていたのである。一方で、早くから『方丈記』や長明に言及し、あるいはその内容から影響を受けた作品も少なからずある。以下では、その代表的な作品とその受容の特色について紹介する。

『方丈記』を最も早く享受したと推測される作品は、鴨長明と同時代の人物であった慶政（1189-1268）著『閑居友』である。慶政は九条家出身で天台宗寺門派の僧となり、『方丈記』が執筆された1216年に『閑居友』を起筆し1222年に完成した。慶政は、長明著『発心集』に収録された仏教説話集を強く意識して『閑居友』を書いたことは知られている。例えば、本書上巻の第1話に「さても「発心集」には、伝記の中にある人々あまたみえ侍めれど、この書には伝にのれる人をばいるゝことなし。」という記載があり、また、同書上巻第3話に「さても、この僧都の事、「発心集」にも見え侍めれど、この事は侍ざめれば、よきついでに因縁もほしく侍て書き侍ぬるなるべし。」という記述があり、『閑居友』の執筆方針はいかに『発心集』と異なっているのかが主張されている⁹。『閑居友』は他に『発心集』から影響を受けた部分もあるが、『方丈記』について直接的に言及はしていない。しかし、今村みゑこが指摘したように、『方丈記』と『閑居友』の表記方法や描写に多くの類似性が確認できるため、慶政は『方丈記』を読んだ可能性は否定できない¹⁰。

⁹ 美濃部重克『閑居友』（三弥井書店、1974年）より引用。

¹⁰ 今村みゑこ「略本・流布本『方丈記』をめぐって——一条兼良のこと、及び享受史のことなど」（飯山論叢14(2)、1997年）。岡山高博「方丈記の草庵生活における美文の意義：「心澄む」に関連して」（あいち国文9）、2015年、15-16頁）も参照されたい。

次に、『方丈記』に言及した作品として『十訓抄』が挙げられる。作者未詳のこの教訓的な説話集は、長明没後 36 年の 1252 年に執筆され、長明の出家説を提示したのものとして知られる。『十訓抄』の第九巻に収録された「懇望を停むべき事」という題のある章に「鴨社の氏人にて、菊大夫長明といふ者」は、和歌や管弦などの名人として知られているが、「社司をのぞみけるが叶はざりければ、世を怨みて出家して」大原山に住み、その後日野の外山で『方丈記』という仮名で書かれた本を書いたと描写している。また、『方丈記』の冒頭文について「行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらずとあるこそ、川闊水以成川、水滔滔而日度、世閱人而为世、人冉冉而行暮、という文をかけるよと覚えて、いと哀れなれ」と指摘し、これは『文選』の「歎逝賦」の影響であるとして中国思想の痕跡について初めて指摘した¹¹。『十訓抄』の指摘は、和歌所で長明を身近に見た源家長（?-1234）の記録した『源家長日記』でも確認できるため、長明の出家説としては間違いのないようである¹²。『十訓抄』の作者は『方丈記』を読んだだけでなく、長明に関して詳しく知っていた。長明の家柄を始め、その略伝や長明が詠んだ歌などを示し、長明はいかに現世における失敗を機にして仏への道に歩み始めたのかを記載している。『十訓抄』によるこのような鴨長明の捉え方は、主に仏者としてのイメージが強かったと言える。

長明の別の出家説を記録した『文机談』も初期ころにおいて『方丈記』を受容した作品である。この作品は『方丈記』の成立から約 60 年離れて 1272 年以後に藤原孝時の弟子であった隆円（1170-1226）により執筆されたものであり、長明がまつわった秘曲尽くしの事件について記録している。『文机談』によれば、数奇者であった長明の琵琶の師であった楽所預り中原有安が死没したため、長明は「啄木」という秘曲を伝授できなかった。それにもかかわらず、長明自身が願主で多くの貴人や楽人を集めて秘曲尽くしを開催した公の場で、昂奮のあまり秘曲「啄木」を弾いてしまったという。長明のこの行為は伝統を違反したとして、出席者の藤原孝道（1166-1237）は後鳥羽院に訴え、長明は上皇から注意されることになったという逸話である。この逸話の信憑性について疑問の声もあるが、長明の伝記に関する情報源として貴重な資料である¹³。

『文机談』は、この事件で怨みを持った長明は出家を決意したと述べた後「（前略）これにたへずして、ついに長明洛陽を辞して修行のみちにぞ思たちける。たまくしげふたみの浦といふ所に方丈の室をむすびてぞ、のこりすくなき春秋をばをくりむかへける。浄名の三万

¹¹ 浅見和彦『十訓抄』（新編日本古典文学全集 51、小学館、1997 年、380-382 頁）。

¹² 金子良子「鴨長明遁世の一考察--『文机談』と『源家長日記』を中心として」（法政大学国文学会日本文学誌要 (82)、2010 年、27-37 頁）。

¹³ 三木紀人『閑居の人 鴨長明』（新典社、2001 年、205 頁）。

二千の徳もこれにやはすぎ侍べきとおぼえけり。件の記録はいまだ世のひともてあそぶ物なれば、定て御らんじたる人もをはしますらん。」と記録している¹⁴。すなわち、『文机談』は『方丈記』に直接的に言及していないが、上記引用にある「件の記録」とは言うまでもなく『方丈記』のことである。そして、「方丈の室」や「浄名の三万二千の徳」などの描写は、言うまでもなく『方丈記』の末尾にある「栖はすなはち浄名居士の跡」のことである。要するに、『文机談』は長明の性格に主眼を置き、名利を求めることに失敗したため彼は仏の道を選んだと述べ、やや消極的な長明像を捉えたと言える。

室町時代の天台僧侶・連歌師であった心敬（1406-1475）著『ひとりごと』（1468年）も『方丈記』に言及している。この作品は連歌論書でありながら多岐にわたる内容を含み、当時の社会・文化・芸術的な状況を回顧した著書であるが、その中に『方丈記』の内容と類似したところが多く存在する。『ひとりごと』は『方丈記』の冒頭文のように、幻のようなこの世の衆生が常に生まれ変わっているという描写から書き出されている。次に心敬が「昔、鴨長明方丈記といへる双紙に、「安元年中に日照りて、都のうちに二万余人ばかりは死人侍り。大風に火さへ出て、樋口高倉の辺より始めて中御門京極まで、火飛びありきて都焼け失せ侍る」など記し置けるをこそ、浅ましくも偽りとも思ひしに、たちまちにかかる世を見ること、ひとへに壊劫末世の三災ここにきはまれり。」と述べ、自身が生きた時代の社会状況は長明が述べたものと類似していると指摘した¹⁵。実は心敬が応仁の乱（1467-1477）から免れるように離京し、関東へ下向した中で自身の人生の前半生を回顧してこの作品を執筆したが、この点においても『方丈記』に類似している。その一方で『方丈記』にある「安元の大火」を「安元年中に日照り」と記し、死んだ人の数や地名など『方丈記』の内容と異なるところも多くある。おそらく、以前読んだ『方丈記』の内容を記憶から書いたためこのような誤りが起こったかもしれない。いずれにしても、心敬は仏教における「三災」や「末法」思想に触れながら、当時の社会における天変地異を『方丈記』の描写と重ね合わせ、これが彼の『方丈記』受容の特色であると言える。

次に、『方丈記』に言及した作品として『東斎随筆』が挙げられる。作者は一条兼良（1402-1481）とされ、室町中期に成立したと思われるが、様々な分野から78件の説話を収録した作品である。兼良は『方丈記』の兼良本という流布本を書写した人物でもあり、『方丈記』と深く関係した人物である。『東斎随筆』に収録された説話の大部分は『十訓抄』から引用されたものであるため、『方丈記』に関係する内容においても『十訓抄』の内容を継

¹⁴ 岩佐美代子著『文机談：全注釈』（笠間書院、2007年、109-110頁）。

¹⁵ 奥田勲、堀切実、表章、復本一郎『連歌論集・能楽論集・俳論集』（新編日本古典文学全集 88、小学館、2001年、56頁）。

承している。しかし、『東齋随筆』の作者は『十訓抄』から内容を継承しつつ、少々変更も加えている。例えば、『十訓抄』では、「此人後には大原に住けり。方丈記とてかなにて書置ける物をみれば、始の詞に、行河のながれは…」と記されているのに対し、後者では「大原山ニ住ケリ。其後日野ノ外山ト云所ニ有テ、方丈記トテ仮名ニテ書タル物アリ。」と記述されている¹⁶。つまり、『十訓抄』では『方丈記』が書かれた場所は明記されていないのに対し、『東齋随筆』では長明が大原に住んだ後、日野の外山に移り、そこで『方丈記』を書いた明記している。『東齋随筆』の作者は『十訓抄』以外にも他の資料を参照したようだが、『方丈記』の受容のから言えば、『十訓抄』の作者と同じ姿勢であった。すなわち、長明はいつまでも下鴨神社の禰宜職に就きたいという願望を持ち続けることなく、失敗したことを契機に仏道に入り、仏者としての長明の捉え方であった。

最後に、『方丈記』を受容した作品の中で最も有名なものが『平家物語』である。『平家物語』は『方丈記』の偽作であるという説が出されるほど両作品はその内容のみならず文体なども類似している。14世紀初期頃に成立したと思われるこの作品は、諸本も多いものの、その全てに『方丈記』にある五大災厄の痕跡が認められる。とは言っても、『平家物語』は『方丈記』の内容をそのまま取り入れることなく、新たな情報を加えたり内容を変えたりした形で再利用している。この点について佐伯真一は「『平家物語』の『方丈記』依拠は、多くの場合、災厄の描写に具体性を与えようと企画しつつ、事件から年月の隔たりの故にか、あるいは長明ほどの文才の無さの故にか、独力ではその叶わない作者が、描写の材料を先行の文字テキストに求めようとして『方丈記』を得た結果である（おそらく、そのような役割を果たし得る書物は、『方丈記』以外にはほとんど皆無であったろう）。」と指摘している¹⁷。同じく、山下宏明は「同じ事変期をとりあげながら、時代を自分一人の個人の体験に収斂するところに自照文学としての『方丈記』が成り立った。しかるに、この同じ体験を「集」の立場で体験した場合に、叙事詩としての『平家物語』が生まれる。」と述べている¹⁸。つまり、『平家物語』は軍記物語にふさわしく、人々の視点を保ちながら『方丈記』の内容を受容し、再編して利用した。また、『平家物語』は社会における天変地異を示すために『方丈記』の災害描写のみに着目したのである。

上記の他に『方丈記』を受容した中世期の作品として『続歌仙落書』『本朝書籍目録』『寝覚記』『体源抄』や『西行物語』など作品もあるが、全体的に考えてみれば、諸作品に

¹⁶ 今村みよこ「略本・流布本『方丈記』をめぐって——一条兼良のこと、及び享受史のことなど」（飯山論叢 14(2)、1997年、151(19)頁）。引用は、久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾葦江校注『今物語・隆房集・東齋随筆（中世の文学）』（三弥井書店、1996年、190頁・292頁）より。

¹⁷ 佐伯真一『平家物語遡源』（中世文学研究叢書、1996年、75頁）。

¹⁸ 山下宏明著『平家物語の成立』（名古屋大学出版会、1993年、81頁）。

よる『方丈記』及び長明を捉え方は、主に次の3点に集約できると思う。まずは、『十訓抄』や『平家物語』のように仏教の観点からの捉え方である。前者は「懇望を享むべき事」ができた仏者として長明を捉え、後者は天変地異を描く中で『方丈記』の災害の描写に注目した。次に、隠者としての長明像である。『文机談』は数奇者として長明を解釈した上で、その出家説を出している。最後に、『方丈記』の災害描写を意識した作品であるが、その代表的なものは『平家物語』と『ひとりごと』である。いずれも、『方丈記』の災害の内容を継承しているが、『平家物語』は災害を仏教思想の観点から捉えているのに対し、『ひとりごと』は災害の描写と自照性の面で『方丈記』に類似している。中世期における『方丈記』のこのような受容の仕方を踏まえた上で、次節では近世におけるその享受について考えてみる。

第3節 近世における『方丈記』の受容をめぐって

上記で見た通り、鎌倉・室町時代において『方丈記』に言及した作品や、その影響を受けたものはいくつかあるものの、この作品を学問の対象にした事例はない。築瀬一雄の指摘したように、江戸時代以前に『方丈記』の写本などに本文の間に注などを挿入した簡単な注釈の例はあるにしても、本格的に学問の対象にしたことはなかった¹⁹。江戸期に入ってから初めて『方丈記』の注釈書が作成された。その主な理由の一つに、江戸初期から見られた出版事業の飛躍的な成長が挙げられている。出版技術が発達する中、これまでにあまり注目されてこなかった数多くの古典文学の注釈書が出版されたのである。『方丈記』の注釈書もその流れで生まれたと言えるが、直接的なきっかけはやはり明暦3年正月18日から20日に起きた明暦の大火（1657）であった。江戸の大半が焼け、死者は10万人も越えた大震災が『方丈記』の注釈書が現れた背景にあり、この災害から70年内に合わせて6部に及ぶ注釈者が出されることになった。また、注釈書と同時に『方丈記』の災害の描写を中心に、その内容を継承した江戸期の作品もいくつかある。これらの作品は、仮名草子と言われる江戸初期頃から流行したもので、『方丈記』を見聞記として捉え、その内容に倣って江戸初期に起きた自然災害を題材にして書かれたものである。つまり、江戸初期における『方丈記』への関心は、この作品の災害描写を中心に始まったと言える。

明暦の大火の翌年、1658年に『方丈記』の最初の注釈書である『首書方丈記』が刊行され、その間もないうちに同年『方丈記詞説』も出版されたが、両作品の執筆のきっかけは明暦の大火であったとされている。その次に、『長明方丈記抄』『方丈記諺解』『方丈記流水抄』の順に注釈書が刊行された。また、刊行に至らず写本のまま伝えられた『方丈記宜春抄』も江戸初期に書かれた注釈書である。これらの6部は、近世に作られた『方丈記』の注釈書である。さらに、『方丈記』の内容から影響を受けた近世期の作品として『むさしあぶみ』

¹⁹ 築瀬一雄『方丈記諸注集成』（豊島書房、1969年、「序」）を参照。

『かなめいし』や『犬方丈記』などが挙げられる。本節では、これらの注釈書やその他の作品を前節で述べた『方丈記』の受容の観点から考えることにする。諸注釈書に関する議論は、主に築瀬一雄著『方丈記諸注集成』に収録された翻刻版を底本にし、その解説を主な情報源として展開する。

『首書方丈記』（以下、『首書』と略称する）は、京都の医師であった山岡元隣（1631-1672）が執筆し、1658年に刊行された『方丈記』の最初の注釈書である。元隣は北村季吟に師事した俳人であり、数多くの仮名草子の作品を残した人物として知られる。『首書』の注釈形式は、頭注であるため「首書」と呼ばれる。この注釈書は、多くの伝本や写本としても伝えられたため、広く読まれたと推測されている。『首書』は、本文の注釈に入る前に、鴨氏や賀茂社の由来などを述べ、長明の略伝を『千載集』や『新古今集』などに掲載された長明の歌を引用しながら紹介している。『方丈記』の執筆時期に関して「かまくらよりかへりしまたの年の作也。」と記し、作品の題号は維摩経に由来したと記述した後、本文の注釈に入っている。島内裕子が指摘した通り、『首書』の注釈は語釈中心のものであり、辞書や歌詞などを参照しながら簡潔な注を施している²⁰。また、『首書』は漢籍を始め、和歌、歌論書、仏典、辞書類など様々な分野の書物を参考にしたが、引用の頻度から特に多いのが『論語』と『荘子』であり、ここから作者山岡元隣の儒学的な側面を伺える。全体的な注釈の態度から考えれば、特定の分野に集中せず、当時の読者にとって難しいと思われた本文に、先行研究に習って短い注釈や語釈を加えたと言える。また、『方丈記』ないし長明に対する元隣自身の考えを伺えるような記述も少ない。しかし、『首書』は最初の注釈書であったため、それ以後の注釈書に大きな影響を与え、中でも『方丈記諺解』はその多くの内容を継承している。

『首書』と同年に刊行された『方丈記詞説』（1658）（以下、『詞説』と略称する）は、江戸時代の国学者・俳人である大和田気求（?-1672）が作成した注釈書である。気求は、京都で書店を経営した人物で、多くの書物も残しているが、『詞説』の直接的な執筆きっかけは明暦の大火であったと思われる。築瀬一雄によれば、作者が急いで草稿を刊行したため、摘出語句が空欄のままの箇所が多く、数か所に字句の抜けも確認できる。書店を経営した作者は読者のことを考え、明暦の大火の記憶が新鮮である間に急いで本注釈書を出したようである。注釈の形式は『首書』と同じく頭注であるが、『首書』に比べて参考文献は大幅に広く、注釈内容も前者に比べてはるかに詳しい。最初に総論の中で「方丈記」の題号の由来を説明し、次に「鴨」と「長明」について解説を加えた後、『十訓抄』に記録された長明の出家説などを引用して長明の略伝を提示している。気求の『方丈記』受容の特色は、この注釈

²⁰ 島内裕子「『方丈記諺解』の注釈態度」（放送大学研究年報 35、2018年、115-116（2-3）頁）。

書の「作意」に最も明らかに表れていると思う。気求は、源信の『三界義』に触れ、長明は仏教思想における大小三災の説を採用し、それを自身が経験した災害と重ね合わせて「後代の人々の遁世の亀鑑」になるように残した記録は『方丈記』であると明記している。

注釈の態度において、気求は「真名本」や「異本」から頻繁に引用して対比しながら注釈をつけている。また、長明の他の作品である『無名抄』や『発心集』などからも多くの内容が確認できる。このことから、気求は長明に興味を持ち、その作品を精読していたことが分かる。また、島内裕子が言うように、『訶説』が初めて『方丈記』と慶滋保胤著『池亭記』の関係性に言及したが、このことから作者の学識の高さが伺える。注釈内容からは、『訶説』が『方丈記』の仏教的な性格に注目したことが分かる。上記した「作意」の中に、長明が仏教思想の影響下で『方丈記』を書いたと明記している。また、注釈の中に仏典からの解説や引用は多く確認できる。例えば、「行川のなかれ…」の部分について『十訓抄』の内容を引用したが、『十訓抄』ではこの部分の出典は『文選』の「歎逝賦」と記されているのに対し、『訶説』は「釈文云」と指摘している。同じく、「世中に有人とすみかと…」や「水の泡ににたり…」などの注釈においても、仏典から引用して説明されている。もちろん、多くの漢籍や歌書、そして、古典文学作品も参考にされているが、築瀬一雄が言う通り、気求は『方丈記』を主に仏教的な視点から解釈したことは確かである²¹。

『首書』と『訶説』が執筆されたから 16 年後に次の注釈書である『長明方丈記抄』(1674) (以下、『方丈記抄』と略称する) が刊行された。著者は江戸初期の学者である加藤磐斎(1625-1674)であり、国学者の北村季吟(1624-1705)や俳人の松永貞徳(1571-1654)などに師事した人物である。磐斎は『方丈記』以外にも『源氏物語』『徒然草』『枕草子』や『土佐日記』など多くの古典文学作品の注釈書を残した人物として知られている。『方丈記抄』の注釈形式は、『首書』や『訶説』の頭注と異なって、本文を適宜に分けながら、本文のすぐ後に注釈を掲載した形をとっている。築瀬一雄によれば、以前刊行された2種類の注釈書と重なる内容はあるものの、明確な承前関係をもっていない。『方丈記抄』の注釈は、これまでの諸注の中で最も詳しく、一々の語句に対して丁寧な解説が加えられた点で優れている。上記で『訶説』の作者は『方丈記』の仏教的な要素に注目したと述べたが、それに比較して『方丈記抄』は完全に仏教思想の観点から『方丈記』を解釈している。その仏教的な注釈に関して、島内裕子は「この注釈書自体が、あたかも仏書のようなものである。」と示してい

²¹ 築瀬は次のように指摘している。「仏教的立場からの注であり、牽引な説もあるが、博引を旨とし(後略)。」築瀬一雄『方丈記諸注集成』(豊島書房、1969年、19頁)

るように、仏教思想の視点から『方丈記』を解釈したことはこの注釈書の特徴的なところである²²。

磐斎は『方丈記』の内容を主に四つの部分に分けている。それらは、冒頭部の「行川…」から「又かくのごとし…」までが第1部、「玉しきのミヤこ」から「玉ゆらも心をなぐさむべき…」までが第2部、「我身父方…」から「大原山の雲…」までが第3部と、最後に「爰に六十の露きえ…」から「すゑまで」が第4部である。最初の段は「所謂の理を述べ」、次段は「法説譬説因縁説」を提示して「はかなきことハリ」を書いたという。第3段は「我身のことをのべて領解のこゝろ」を描写したものであり、最後の段は「方丈の記の趣」を述べたものである指摘している。このような分け方自体は、磐斎の『方丈記』受容の一つの特徴である。島内裕子によれば、『方丈記抄』は『方丈記』の災害描写に関して、仏教で提唱された「大小三災」説に基づいて五大災厄を解釈しているが、ここからも作者の『方丈記』の受容の特徴を伺える²³。以上から、磐斎は『方丈記』を仏教的な視点から理解したことは確かであるが、同時に数奇者としての長明にも関心を寄せていた。なぜなら、磐斎は上記の第3段について「この一段、山中の方丈の楽しみをいへり。此一段正文也。これをいはんとて。いろいろの事をのべたり。」と指摘し、長明の隠遁生活は『方丈記』の大事な部分であったと述べているからである。

次の注釈書である『方丈記諺解』（1694）（以下、『諺解』と略称する）は、『方丈記抄』が出された20年後に出版された。作者不明の『諺解』は、『首書』や『訶説』のように頭注ではなく、『方丈記抄』のように本文の直後でもない、原文を短く区切ってその両側に注を付けた形式を採用している。語釈や解説は詳しく、内容的に『首書』と重なる部分が多いが、他の注釈書も参考にしている。冒頭に「序」と「鴨御祖社系図」を提示した後、「鴨、長明、方丈、記」という順に解説を加えて本文の注釈に入っている。この「序」に、「然ハ此方丈の記を。さのみ。見下ろすへきにあらず。特に事理を明して。傍に略安心をしるせり。しかのみならず。浄名居士の室にならずへて。かりに方丈の庵をむすびしも。」と述べて『方丈記』を紹介している。『吾妻鑑』を引用して、長明の略伝と長明が詠んだ和歌を紹介しているが、内容的にこれまでの注釈書とほぼ同じである。築瀬一雄は「『諺解』の注釈書としての特徴は、方丈記を誰にも判り易く享受させようとした点にある。首書の解説を踏襲したところが多く、地理の説明を除いては、諺解の独創的な解明は殆どない。むしろ前行注釈書を十分に消化して、方丈記の文意を自由な立場から説いている点を高く評価すべきであ

²² 島内裕子「『方丈記諺解』の注釈態度」（放送大学研究年報35、2018年、113（4）頁）。

²³ 島内裕子「『方丈記諺解』の注釈態度」（放送大学研究年報35、2018年、113-114（4-5）頁）。

る。」と述べている²⁴。すなわち、以前の注釈書よりも内容的に豊富で、一般読者を対象にして分かり易く解説されたのが『諺解』の特徴的なところである。

近世に刊行された『方丈記』の最後の注釈書は、槇島昭武（生没年不詳）著『方丈記流水抄』（以下、『流水抄』と略称する）（1719）である。『流水抄』は、主に頭注形式を採用しているが、本文を適宜に区切って、その直後にも解説を記述している。著者は、この注釈書について「是より前。首書山岡元隣子 誦説貞徳高弟加藤磐斎等の抄出ありて。世の人もあそふといへども。たゞ本拠のあらまし而已にて。文意の深切を解する事なし。」と記載しているように、これまでの諸注釈書の内容を網羅的に吸収した『方丈記』の最も優れた注釈書である²⁵。冒頭に「鴨、長明、方丈、記」の順に詳細な解説を上げ、中でも特に長明に関する解説は詳しい。長明が詠んだ歌を提示しながらその略伝を示し、『方丈記』の成立時期などにも触れている。

著者は、この注釈書の作成に当たり、漢籍、仏典、歌書、辞書類など広範囲にわたる書物を参考にしている。例えば、「行川の流れハ」の部分について、従来から指摘された『論語』『十訓抄』や『維摩経』を始め、新たに中国の史書である『獲麟』や林羅山の『野槌』、そして『後撰集』を引用して「此小序は死生無常観念の骨体より。発出の分段なる故。大形の筆力にハあらず、心をつけて再三翫味すべし。」と述べ、仏教的な視点から評価している。荒木浩によれば、『流水抄』は仏教の中でも禅宗に関係する経典からの内容をしばしば引用している²⁶。確かに、『首書』や『誦説』では確認できない『楞嚴経』『景德伝灯録』や『宗鏡録』など禅籍からの引用は多く存在している。その一方で、築瀬一雄は「流水抄が刊行諸注の中で最もすぐれたものであるのは、偏頗な方丈記観をすてて、方丈記をそのままの姿に於て受け取り、これを素直に読み解こうとした著者の立場によるものである。」と示している²⁷。おそらく、『流水抄』はこれまでの諸注釈書を網羅的に参考しつつ、禅籍のような新たな資料も多く参照し、それが故に最も詳しい注釈書ができたのである。

最後に、刊行に至らず写本のまま伝えられた『方丈記宜春抄』（以下、『宜春抄』と略称する）という注釈書がある。著者は、江戸の医師であった仁木宜春であり、林羅山の孫に当たる林鳳岡（1645-1732）のことである。1681年頃完成されたと思われるこの注釈書に、少なくとも4つの伝本が存在しているが、未刊であったため読書範囲は限られていたと推測さ

²⁴ 築瀬一雄『方丈記諸注集成』（豊島書房、1969年、29頁）。

²⁵ 築瀬一雄『方丈記諸注集成』（豊島書房、1969年、236頁）。

²⁶ 荒木浩「禅の本としての『方丈記』—『流水抄』と漱石・子規往復書簡から見えること」（天野文雄監修『禅から見た日本中世の文化と社会』、ペリかん社、2016年、212-215頁）。

²⁷ 築瀬一雄『方丈記諸注集成』（豊島書房、1969年、31頁）。

れる²⁸。最初に、「序」があり、その次に「鴨長明、方丈記、題号、長明系図」の順に解説が記載されてから本文の注釈に入る。注釈形式は、本文を短く区切って、その直後に解説を加えた形にしている。築瀬一雄は、『諺解』や『流水抄』などの仏教的な視点と異なって、『宜春抄』は儒学的な立場から『方丈記』を解釈し、これがこの注釈書の大きな特徴であると指摘している。この問題をさらに調査した川平敏文は、林鳳岡が祖父である林羅山の『徒然草』の注釈書である『野槌』に記載した『論語』の解釈を継承し、儒者としての長明の新たな側面を主張したと指摘している²⁹。『宜春抄』の「序」に、世間の中で長明は神職に達し、仏徒として優れた人物であるとよく指摘されるが、儒者としてのその性格について一切の指摘はなされてこなかったと述べている。『宜春抄』は、この点において他の注釈書と異なり、儒者としての長明の捉え方は『方丈記』の受容史の中で大きな展開であったと言える。それ以後も、長明の思想は儒学の視点から解釈され、長明の思想の傾倒に関する議論は、現在に至るまで継続されてきた³⁰。

以上、江戸期に作成された『方丈記』の諸注釈書の概略である。これらの注釈書は、『方丈記』を学問の対象にし、それぞれの著者の思想的な傾斜や時代背景の影響下で解釈されてきた。最初の注釈書である『首書』や『訶説』は、主に語釈中心であったが、後で作成された『方丈記抄』『諺解』や『流水抄』は、詳しい注釈や解説を残した。そして、『諺解』や『流水抄』の注釈は、『方丈記』を仏教的な作品として捉えたのに対し、『宜春抄』は長明を儒者として解釈した。しかし、全体的に考えてみれば、仏教的な観点からの注釈書は多かったのである。

注釈書の以外に、『方丈記』から影響を受けたと思われる江戸期の作品もある。これらの作品は、主に『方丈記』の災害描写を受け継いだである。その中で、寛永の大飢饉の記録である『薬師通夜物語』（1641-1643）、明暦の大火の記録である浅井了意（1612-1651）著『むかしあぶみ』（1661）や京都大地震を記録した『かなめいし』（1662）、1675年の飢饉を記録した作者不明の『犬方丈記』（1682）や杉田玄白（1733-1817）著『後見草』（1787）などが代表的な作品である³¹。これらの作品は、いずれも『方丈記』の災害の描写

²⁸ 築瀬一雄『方丈記諸注集成』（豊島書房、1969年、31-34頁）。

²⁹ 川平敏文「鴨長明の儒風—方丈記受容史覚書」（荒木浩編『中世の随筆 成立・展開と文体』、竹林舎、2014年、501-506頁）。

³⁰ 長明による中国思想の享受に関して次の研究は詳しい。新聞水緒「『方丈記』の序章について：『文選』「歎逝賦」注文との関係から」（国文学研究資料館紀要・文学研究篇（40）、2014年、53-80頁）。新聞 一美「方丈記と白居易：隠遁と住居の表現について」（白居易研究年報（14）、2013年、133-166頁）。田 云明「『方丈記』における「閑居」と浄土」（和漢比較文学（49）、2012年、36-52頁）。

³¹ 朴 炳道「近世災害における「世なおし」の呪文と「泥の海」の終末：1662年の京都大地震と『かなめいし』」（東京大学宗教学年報（33）、2015年、49頁）。

に喩えて、それぞれの時代の状況を再現した見聞記であるが、たんなる記録というよりも、文学作品として広く読まれたものである。例えば、『かなめいし』は代々の天皇の時代に起きた地震災害を述べる中「鴨長明が方丈記に、この時の事をかきのせしは、さこそ大なるにて侍りけめ。まことに筆勢おびただしく記せり。」と記載している³²。同じく、『犬方丈記』は、「社会の底辺層の「非人」に向けられており、この「高き賤しき人」から「たかきいやしき非人」への転換は、たとえば『仁勢物語』での「むかし男」から「おかし男」へのそれとは全く異質である。」と指摘されたように、リアルな災害描写を記載するとともに、政治的な意味合いを含んだ作品もある³³。言うまでもないが、中世期に既に『平家物語』などは、五大災厄に注目し『方丈記』を災害文学作品として受容した例もあるが、その傾向は江戸期を経て現代にまで継承されてきた。第3章で示すように、明治以後も『方丈記』の災害の内容のみに主眼をおいた多くの作品や人物がいる。

明治期に入ると、『方丈記』は教科書の一部になったことで、この作品にさらに関心が高まり、多くの注釈書も作られた。昭和9年(1934)に刊行された吉澤義則撰『本文校異方丈記諸抄大成』に収録された小川寿一の「刊本方丈記書史」によれば、1892年から1933年の間に少なくとも45編の『方丈記』の注釈書が刊行されている³⁴。これらの諸注釈書は、江戸期に作成された注釈書を底本にして、現代語訳を掲載したり、評論を加えたりしたものが多く、中でも『方丈記』の異本に関する考察を行ったものは少なくない。小川寿一が記載していないが、明治維新から漱石が『方丈記』を英訳した1892年の間にも多くの注釈書が出版されている。漱石が英訳のために利用した1891年に出版された武田信賢注・関根正直関『新註方丈記』がその一つである³⁵。これ以外に『方丈記』を収録した下田歌子編『和文教科書』(1886)、『日本文学全書』(1890)、『校注 国文叢書』(1912-1916)、『新釈日本文学叢書』(1918)、『校注日本文学大系』(1925)など多くの叢書本や教科書も出版されている。1971年に出された築瀬一雄著『方丈記全注釈』によれば、明治全期において110編の注釈書が作成されたのである³⁶。また、1925年に古典保存会から大福光寺本が刊行されると、その注釈書も多く出され、研究もなされてきた。要するに、江戸初期から広く注目されてきた『方丈記』は、明治期以後もその傾向が継続され、現在に至るのである。

³² 浅井了意『かなめいし』(井上和人校注・訳『新編日本古典文学全集 64 仮名草子集』、小学館、1999年、66-67頁)。

³³ 前芝憲一「『犬方丈記』の成立」(日本文芸学(23)、1986年、57頁)。

³⁴ 小川寿一「附録:刊本方丈記書史」(吉澤義則撰『本文校異方丈記諸抄大成』、立命館出版部1933年、27-30頁)。

³⁵ 武田信賢注・関根正直関『新註方丈記』(吉川半七、1891年)。

³⁶ 築瀬一雄『方丈記全注釈』(角川書店、1971年)の「序」を参照。

『方丈記』は明治期以後においても夏目漱石など多くの文人を始め、様々な分野からの人物に受容されてきた。文人の中で言えば、芥川龍之介（1891~1927）、佐藤春夫（1892~1964）、堀田善衛（1918-1998）などがその代表的な人物であろう。他にも、医学博士・随筆家永井隆（1908-1951）、大正デモクラシーの立役者として知られる吉野作造（1878-1933）、漫画家の水木しげる（1922-2015）、建築家の隈研吾（1954-）など分野を越えて様々な領域からの人物が『方丈記』の愛読者である。時空や読者層を超えて長い期間において受容されてきたことは『方丈記』の一つの特徴でもある。荒木浩は、『方丈記』の現代性を論じる中で「『方丈記』という作品の一つの特質は、受容する読者の言及が、いささか過剰に〈当代〉と〈わたし〉に引きつけてなされがちである、ということだ。相応の伝統がある。（後略）」と述べ、室町時代の連歌作者の心敬（1406-1475）を始め、2012年に公開された映画『モンスターズクラブ』の監督豊田利晃までの『方丈記』の読者が、いかにその内容と自分を結びつけてきたのかを詳しく提示した³⁷。確かに、『方丈記』の内容は今にでも自分の身に置き換えて見られる例が意外と多い。1980年代における日本の高度成長期を契機に、都会などにおいてマンソンの需要が高騰する中、東京朝日新聞が20回にわたって「ワンルームマンション 今様方丈記」という題名を付けた記事を連載したが、その写真付きの記事は鴨長明の方丈の庵を思い起こすような都会での狭い家の普及について描写したものである。また、作曲家三善晃のように自宅の庭に「七メートル四方の‘箱’」の「方丈の小屋」を作って1964年のオリンピックの特別講演会のための作曲を作る人物もいれば、『方丈記』の解釈を巧みに利用して政治家の賄賂の問題を批判する新聞記者もいる³⁸。すなわち、各時代の人々が『方丈記』の内容を自分の身に置き換えて考えてきたことはこの作品の一つの大きな特徴であると言える。

『方丈記』が長い間読まれてきた背景に、複数の理由があると考えられるが、その受容史を辿ってみる限り、主に3つの主要な側面があることに気づく。第1に、この作品の分量が重要な点である。現在で言えば原稿用紙の30頁に及ぶこの著書は、一回で読み終える短い散文である。そして、作品の構造もシンプルで、瞭然とした内容も読者の注目を集めてきた。まずは、無常を象徴するものとして、現世における災害を提示し、都での生活の辛さを説明した後、次に隠遁を通じて得られる快樂な生活について具体的に示すという内容は、教訓的

³⁷『方丈記』の「現代性」の問題に関しては、荒木浩「『方丈記』と『徒然草』—〈わたし〉と〈心〉の中世散文史—」（『中世の随筆—成立・展開と文体—』竹林舎、2014年、261頁）を参照されたい。

³⁸「新・方丈記 三善晃さん_この夏この人」1964年8月12日の東京朝日新聞（夕刊）、9頁4段を参照。また、政治家の批判に関しては、「天声人語」1982年6月9日の東京朝日新聞（朝刊）、14頁を参照。

な効果をもたらす構造になっている。第2に、『方丈記』の人気度の理由として、その内容そのものが挙げられる。この作品は長い間仏教的な無常思想を象徴する作品として捉えられてきた。この作品の宗教性に関しては諸論があるが、中世期における『方丈記』の受容は、本作品に描かれた仏教的な要素への注目が高かったことは確かである。実は、この頃『方丈記』に言及した作品の中で『続歌仙落書』、『拾藻鈔』や『ひとりごと』などいくつかの著書を除けば、仏教の観点から触れた場合が多い³⁹。日本中世期の混乱の中で、無常思想は当時の社会・宗教かつ文学の領域において大きな影響を与えた概念であり、鴨長明もその影響下で『方丈記』を執筆したと思われる。

最後に、『方丈記』に含有された写実的な災害描写は、この作品の人気度のもう一つの主な原因である。この作品の半分以上の分量は、災害を描写するために利用された以上、災害はその主なテーマとして捉えられたことは当然である。しかし、災害文学作品として『方丈記』の捉え方は最近のことである。中世期において『平家物語』のように『方丈記』の災害の描写を受けた作品があるものの、それは無常思想を連想した捉え方で、仏教的な受容に当たるものである。宗教的な性格を考慮せず、ただの災害文学作品としての『方丈記』の捉え方が、明治期に入ってからのことであると思われる。例えば、明治期以後において、芥川龍之介、内田百閒や堀田善衛など多くの文人が自身の災害経験を『方丈記』の災害描写と照らし合わせてきたが、これらの描写は従来の仏教的な無常思想と異なって、主に災害文学としての捉え方である。芥川龍之介の『本所両国』（1927）は1923年の関東大震災を中心に執筆されたものであり、内田と堀田は東京大空襲の経験を語る中で『方丈記』に触れている。実は、近現代における『方丈記』の受容について確認してみると、災害文学作品としての捉え方は圧倒的に多い。国会図書館に公開されているデータベースを調べてみると、国内で大きな災害が起こった度に『方丈記』に関係する出版物が急に増加する傾向がある。これは、1923年の関東大震災や、2011年の東日本大震災の時に明らかに確認できる⁴⁰。東日本大震災

³⁹ 『方丈記』という作品の宗教的な性格について意見は分かれている。稲田利徳や浅見和彦などのように、『方丈記』は世と人に対する恨みの作品であり、鴨長明は仏教的な超越的、普遍的な見地から、人と住いの無常を説いていないという見方があれば、一方で、今成元昭を始め、多くの研究者は『方丈記』が仏教文学作品として捉えている。この問題は未解決であるが、筆者は、この作品の構造と内容の視点から、鴨長明はある程度仏教的な思想から影響を受けたことであるとして考えている。稲田利徳・浅見和彦などの最近の論考に関しては「《座談会》『方丈記』800年 稲田利徳・千本英史・小林一彦・浅見和彦（司会）」（文学、第13巻・第2号、2012年3-4月、4頁）を参照されたい。また、仏教文学作品としての『方丈記』の論証について、今成元昭『蓮胤方丈記の論』（文学42(2)、1974年、1-13頁）や、今成元昭著『『方丈記』と仏教思想』（笠間書院、2005年）などが詳しい。

⁴⁰ 国会図書館のデータベースに1923年の関東大震災の年に『方丈記』関連の文献は13件にあるに対して、その翌年14件、1925年に41件にまで増えている。同じく、2011年の東日本大震災に合わせて

の後に出版された『方丈記』関係の出版物の多くは災害を取り上げて論じているが、その中で新たに環境文学（エコクリティック）の視点から『方丈記』を捉えたものも存在する⁴¹。世界中が環境問題に注目する中、『方丈記』のエコクリティック的な解釈は先にふれたこの作品の現代性に他ならない。

上記に挙げた3つのテーマは、『方丈記』の長い受容史の中で特に注目されてきたものであり、この作品が人気を集めた直接的な要因であると思われる。しかし、第2章・第3章で述べるように漱石はこれらの解釈を無視し、今までになかった新たな『方丈記』の解釈を提唱したのである。

終わりに

以上、『方丈記』の成立から明治期までのその受容の概要である。『方丈記』は成立して間もないうちに他の作品に言及されるようになったが、その享受方法は決して一種類のものではなかった。まず、その諸本の視点から見れば、複数の種類のもものが存在しており、これこそが『方丈記』の受容の大きな特徴である。その諸本の成立過程や時期などに関する不明な点は多くあるものの、この作品は様々な読者層によって多岐にわたる方法で読まれていたことに相違はない。例えば、古本系統と広本系統の間に異同は少ないが、略本は現在我々が親しんでいる『方丈記』の半分以上の紙面を占めた五大災厄の描写を記載しない。その代わりに、略本は『方丈記』を仏書として位置付けたのである。同じく、仮名と漢字交じりではなく、漢字だけで書かれた真名本の作者もまた別の目的を持ち、読者に異なった体験を提供しようとしたに違いない。中世時代において『方丈記』の読書範囲は不明であるにしても、この作品の諸本の存在自体からはこの作品が多く読者に多様な方法で読まれていたことが伺える。

そして、『方丈記』や長明に言及し、あるいはこの作品を読んだと思われる中世期の作品も数多くある。その中で、長明の隠遁生活に主眼をおいた『閑居友』のような作品があれば、『十訓抄』のように長明の現世における失敗こそが、彼の仏の道に繋がる機会であったと解釈した作品もある。『文机談』は長明の性格に注目して、その出家に触れたのに対し、『平家物語』は『方丈記』の災害描写を継承した。つまり、『方丈記』に言及した中世期の作品は、様々な視点からこの作品を捉えた。しかし、これらの作品による『方丈記』の受容は、

15 件の文献に対して、その翌年に 80 件、2013 年に 43 件と増えている。但し、2012 年は『方丈記』の作成から 800 年だったので、その関連のものも多かった。

⁴¹ Kato Daniela and Bruce Allen. "Toward an Ecocritical Approach to Translation: A Conceptual Framework," *The 2014-2015 Report on the State of the Discipline of Comparative Literature*, 2014. Okito, Toyoda. "Kamo no Chōmei's Hōjōki as Nature Writing" (環境文学としての「方丈記」) (武蔵工業大学環境情報学部紀要——第5号、2004年、114-120頁)。

いずれも簡単な指摘のみに留まり、その詳しい理解を求めた事例は少ない。おそらく、江戸初期までにこの作品は主に仏者・文人らを中心に読まれ、その読書範囲は限られていたことがその理由であったかもしれない。江戸初期に入るとこの状況は一変した。

江戸期に入ると、既に「嵯峨本」「木活字本」や「正保整版本」など『方丈記』の諸本が生まれると同時に、学問的な視点からの関心も高まりつつあった。明暦の大火がきっかけに、災害を描写した見聞記としての『方丈記』への注目が高まる中、その注釈書も現れた。1658年に最初の注釈書である山岡元隣による『首書方丈記』が出版され、その数ヶ月後に『方丈記評説』も刊行された。『方丈記』が成立して約400年以上の歳月が経て、初めてこの作品が学問の対象にされた。いかなる理由で『方丈記』の注釈書は出るのが遅れたのであろうか。その原因は不明である。もちろん、その写本の流通の問題も考えられるが、さらに憶測を加えるならば、この作品の内容と作者にその原因があったかもしれない。つまり、『方丈記』は宗教や物語といったはっきりした性格はなく、自照性が色濃く表れた作者自身の記録であり、中世期に重視された作品ジャンルの範囲外にあった。長明自身も、はっきりした思想や宗教的な傾倒はなく、失敗した隠遁者というイメージは強かったが、これもその理由であるかもしれない。

しかし、江戸期に入ると出版事業が繁栄し、他の古典文学作品の注釈書が現れる中『方丈記』の注釈書も現れた。最初の注釈書である『首書』が刊行された1658年から、僅か60年間に新たに5部の注釈書が作成され、それぞれの注釈態度や形式、そして、その内容も様々である。それと同時に、『むかしあぶみ』や『かなめいし』のように、『方丈記』の災害描写を強く意識した作品も現れた。これらの作品は、『方丈記』を見聞記として捉え、長明による写実的な災害描写に倣って、江戸期の災害を収めたものである。一方で、『犬方丈記』のように、災害の描写をパロディ化しつつ、貴族階層への不満を訴えたものも書かれることになった。要するに、江戸時代に入って初めて『方丈記』は学問の対象にされると同時に、一般の人にも広く読まれるようになった。『方丈記』へ高い関心は、明治期にも継続され、新たな注釈書が出されるとともに、教科書や叢書の中でも収められ、三大随筆の一つとして知られるようになったのである。

以上から、従来から『方丈記』の読者は、この作品に含まれた主に3種類の内容に注目してきたと言える。まずは、その内容を仏教的な視点から解釈した場合が最も多い。次に、この作品に含まれた災害描写に関しても、多くの作品が言及し、その影響を受けた作品も数多くある。最後に、隠者としての長明の性格に注目しつつ、その閑居の気味に憧れを持った人物や作品も多く存在する。『方丈記』のこのような従来の受容について踏まえた上で、次章では明治中期において、この作品がいかに外国人からも注目を集め、いかなる経緯で英訳に至

ったのかについて考察を加える。とりわけ、夏目漱石に『方丈記』の英訳を依頼した、ディクソンの伝記をまとめた上で、日本や海外における彼の活動について記し、最後に、彼の『方丈記』への関心について検討する。

第2章 ジェームス・メイン・ディクソンをめぐって

はじめに

第1章において、『方丈記』が成立してから明治中期ごろまでに、国内においていかに受容されたのかについて見てきた。明治期に入ると、『方丈記』への関心が高まり、教科書などの一部になると同時に、その注釈書も多く出された。その過程の中で当時日本に活動した外国人からもこの作品が注目されるようになった。本章では、今回の研究の主旨である夏目漱石が行った『方丈記』の英訳と深く関わったジェームス・メイン・ディクソン (James Main Dixon, 1856-1933) について焦点を当てて考察を行う。漱石が東京帝国大学の学生であった時、『方丈記』の英訳を行ったことはよく知られている。その英訳は、漱石の英語・英文学の先生であったディクソン教授の依頼によってなされたものである。ディクソンは、外国人の中で『方丈記』にいち早く関心を寄せた人物であり、漱石の英訳をもとにして独自で『方丈記』の新たな英訳も完成させたとともに、鴨長明及び英詩人のワーズワースを比較した研究論文も提示した¹。

ディクソンによる『方丈記』の英訳や論文が発表されたことをきっかけに、この作品は次第に海外で知られるようになった。その後、次々と『方丈記』の翻訳が行われ、外国人が鴨長明の他の作品にも注目するようになった²。その意味で、西洋では日本の文学作品があまり流通していなかった時代に、日本の古典文学を海外へ伝来することにおいてディクソンが大事な役割を果たしたといえよう。彼に関する理解を深めることは『方丈記』の受容の研究において重要な意味を持つと考えられる。そこで本章では、ディクソンに関する先行研究を念頭に置きながら、筆者が新たに収集した資料などのもとに、ディクソンの伝記を整理し、国内外における彼の業績について確認した上で、彼はなぜ『方丈記』に関心を抱いたのかなどについて考察を加える。

第1節 ディクソンに関する先行研究

ディクソンの生涯や業績などを取り扱った研究は少ないが、彼の活動に関連するエッセイや論文はいくつか存在する。その中に“Autobiography of Professor Dixon”という短い記事があ

¹ Dixon, J. M. (1892). “A Description of My Hut,” “Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel.” *Transaction of the Asiatic Society of Japan (TASJ)*. Vol. 20. pp. 193-215.

² 例えば、在日中の Karel Jan Hora(1881-1974)というチェコ人が1906年に鴨長明の略伝と著作などについて日本アジア協会会報に論文を出しており(第34巻第一号に収録)、また、長明の歌論書である『無名抄』の部分的な英訳も(第34巻第四号に収録)も試みている。Horaは、鴨長明に関する先学として、ディクソンによる鴨長明に関する論文と『方丈記』の英訳を挙げている。Hora, Karel Jan. “Notes on Kamo Chōmei’s Life and Works (pp.45-48),” “Kamo Chōmei’s “Nameless Selection (無名抄),”” *TASJ*. Vol. 34, Part1/4, 1906, pp. 89-98.

る³。これは、ディクソンが日本での職務を終えて渡米した後、ミズーリ州セントルイスに滞在している際に執筆したものであり、ディクソンの伝記に関する情報を含むものとして最も古い資料である。それ以後のディクソンに関する研究はこの記事から多くの内容を受け継いでいる。また、ディクソン没後の1933年12月に出版された『英語青年』の特別号がある⁴。この特別号には、上記の伝記が“An Autobiography”として転載されたが、その他にもディクソンが日本滞在時に交流をもった人々からも記事が寄せられた⁵。例えば、立花政樹（1865-1937）、岡倉由三郎（1868-1936）、杉村楚人冠（1872-1945）、村田祐治（1864-1944）といった帝国大学時代の教え子や、南カリフォルニア大学で教えを受けた帆足理一郎（1881-1963）、米国でディクソンと交流した永井太三郎（1873-1946）、帝国大学の英文学の教授を務めた市河三喜（1886-1970）などが執筆している。それらの記事は、ディクソンとの直接の関わりの中で体験したことを中心に書かれたものであり、ディクソンについて知るうえで重要な資料である。

次に、1972年に出版された『近代文学研究叢書』第35巻に収録された小沢明子、鈴木憲子、梅津繁子によるディクソンに関する研究が挙げられる⁶。この中では、著者は帝国大学に所蔵されている当時の資料を用いて、彼の日本における活動、また来日以前のことや渡米後の活動について詳細な研究を行っている。ただし、この研究は主に日本国内の資料に依拠したことから、伝記に関してそれまでの研究に見られた事実誤認がそのまま受け継がれるという問題もあった。一方、上野景福は1982年の「ディクソン伝の補遺」の中で、先行研究では触れられてこなかったディクソンの日本到着時の様子や英語学者としての業績について論じている⁷。塚本利明は、1987年に出版された著書『漱石と英国—留学体験と創作との間』において、ディクソンと漱石との関係について論じている。従来の研究の中でディクソンは英文学の教師としては高い評価を受けてこなかったといえるが、これに対し塚本はディクソンの日本での業績に注目して、漱石の初期の作品や彼の大学時代の資料を分析することで、

³ 磯辺弥一郎編「Biography」（『中外英字新聞研究録』第1巻第5号、1895年、6頁）。

⁴ 『英語青年』第七十巻第五号、1933年12月1日発行に収録された「Dixon Number」。

⁵ この記事に「注」が付けられて、そこに「ディクソンのこの自伝は明治二十八年三月に発行の中外英字新聞研究録第一第五号に掲げられたのを転載したものである。」と記載されている。「An Autobiography」（『英語青年』第七十巻第五号、1933年12月1日）。

⁶ 小澤・土橋・鈴木・梅津著「ジェイムズ・メイン・ディクソン」（『近代文学研究叢書』第三十五巻、1972年、320-367頁）。

⁷ 上野景福「ディクソン伝の補遺」（『大村善吉教授退官記念論文集』、吾妻書房、1982年、35-46頁）。

ディクソンが漱石に及ぼした影響について明らかにした。ディクソンが再評価されるべきであることが主張されたのである⁸。

さらに、先行研究における不備を修正し、新事実を加えたものとして、1989年に塚本利明・久泉伸世の日本比較文学会の紀要に刊行された「研究ノート・資料 James Main Dixon 伝補遺」がある⁹。塚本らは、ディクソンが卒業したセント・アンドルーズ大学や勤務先であった南カリフォルニア大学から新資料を入手し、先行研究の中で誤って伝えられた、ディクソンの卒業年月などについて訂正を行っている。それらの資料の中で、米在中のディクソンが1897年にセント・アンドリュース大学での英文学教授の就職のために提出した求職申請書からディクソンの詳細な伝記的な情報が得られるため特に重要である。塚本らは、この資料の翻刻版を入手し、上記の研究ノートに掲載しているが、筆者はその原本の撮影版を入手し、本論の付録部に掲載した¹⁰。

以下では、これらの先行研究をふまえつつ、ディクソンの伝記を整理し、日本の高等教育における彼の貢献や米国で行った活動などを中心に、その業績を検討する。このような検討を通して、これまでに国内ではあまり評価されてこなかったディクソンに関する詳細を明確にし、明治期という転換期において彼が日本の近代化のためにいかに貢献したのを確認する。同時に、ディクソンはどのように『方丈記』に出会い、なぜこの作品に関心を抱くようになったのかも明確になる。

第2節 ディクソンの経歴

先に示した通り、来日以前のディクソンの活動に関しては、先行研究のほとんどはディクソン自身が執筆した“Autobiography of Professor Dixon”（以下「自伝」と表記する）に依拠していた。この「自伝」は、1933年の『英語青年』第70巻第5号（1933年12月1日発行）の特別号に掲載された。これには、ディクソンの略歴が示されてはいるものの、それはディクソンの来日以前の人生や、渡米後の活動などを理解するために十分なものであるとはいえない。ここでは、先行研究で示された事柄を踏まえつつ、新資料などを用いて改めて来日以前のディクソンの伝記を整理する。

ディクソンは1856年4月20日にスコットランドのペイズリー（Paisley）に生まれた。父の James Main はイギリス北西部のカンバーランド生まれであり、エディンバラ大学で学ん

⁸ 塚本利明『漱石と英国—留学体験と創作との間』（彩流社；増補版、1987年、25-52頁）。また、塚本による1999年に出された同書の増補版では、東北大学の漱石文庫に所蔵されたディクソン著の書物に残された漱石による書き込みなどを追求しながら、ディクソンがいかに漱石の作品などにも影響を及ぼしたのかを論じている。

⁹ 塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon 伝補遺」（比較文学（32）、1989年、89-123頁）。

¹⁰ 詳細は、本論の最後に掲載した〈付録1、1-22頁〉を参照されたい。

だ後、スコットランドの有名な政治経済学者及び宣教師であったトーマス・チャーマーズ (Thomas Chalmers, 1780-1847) 博士に師事し、スコットランド自由協会の牧師となった。しかし、ディクソンがまだ9歳であった1865年に父が病気で亡くなったため、彼は家族連れで母親 Jane Gray の故郷であるエアシャーに移ることを余儀なくされた。その後ディクソンは、スコットランドでも有名なエアシャー (Ayrshire) のアカデミー (Ayr Academy) に入学することになった¹¹。

ディクソンが通った小学校については、「自伝」の中に記録がなく、今までの先行研究の中でも触れられてこなかった。しかし、1913年に刊行された *Who's who on the Pacific Coast* という人名事典に記載された記述や、1916年に刊行された *Who's who in American Methodism* というメソジスト系の人名事典に記載されたディクソンの略歴をみると、彼はペイズリー滞在中に John Neilson Institution (ジョン・ニールソン学院) へ通っていたことが確認できる¹²。後者の資料によると、彼が10歳になった1866年までこの小学校に通ったと記録されている。なお、この点については、エディンバラ大学・図書館の特別資料保管所に残されたディクソンに関する資料からも確認することができる。この資料によれば、ディクソンがジョン・ニールソン学院という小学校へ通い、また在学期間が4年であったことも記されている¹³。ちなみに、このジョン・ニールソン学院は、1852年に開校し、ペイズリー (Paisley) の有名な小学校の一つであった。当時のスコットランドでは6歳ないし7歳に入学し、9年間勉強した後大学に進学するという教育制度があったが、ディクソンの場合、父が亡くなったため、最初の4年間は、ジョン・ニールソン学院で勉強し、その後エアシャー・アカデミーに転校したのである¹⁴。

エアシャーへ引っ越したディクソンは、1866年から1872年までの6年間エアシャー・アカデミーに通い、学校を卒業した後、奨学金を得てエディンバラ大学に進学したことが「自伝」に記されている¹⁵。エアシャー・アカデミーの当時のシラバスを見ると、英語・数学などの科目以外に、フランス語・ドイツ語・ラテン語やギリシア語なども教えられていたこと

¹¹ 〈付録2、23頁〉を参照。

¹² Ed. Harper, Franklin. *Who's who on the Pacific Coast*. Harper Publishing, LA, 1913, p 160. Ed. Price, Carl Fowler. *Who's who in American Methodism*. E. B. Treat, 1916, p 59.

¹³ エディンバラ大学に入学する際、ディクソン自身によって記入され、大学に提出された書類に、その時の彼の歳月や通学した学校の名称が記されている。詳細は〈付録3、24頁〉を参照。

¹⁴ スコットランドの教育制度を理解するために、当時の政府当局が出した次のレポートは有益である。*Reports from Commissioners, Vol. XVII, Ecclesiastical; Church Estates; Endowed Schools and Hospitals (Scotland) 1874*. London, George E. Eyre and William Spottiswoode, 1874, pp. 551-553.

¹⁵ 〈付録3、24頁〉に提示した資料に、ディクソンがエアシャー・アカデミーに6年間通学し、16歳でエディンバラ大学に入学したことは明記されている。彼は、ジョン・ニールソン学院で4年間と、エアシャー・アカデミーで6年間、合わせて10年間通学したが、これは当時のスコットランドの教育制度に一致している。

が分かる。そのような学問的な環境はディクソンのその後の活動において少なからぬ重要性をもっていたと考えられる。というのは、彼が大学でギリシア語を勉強し、一時的にフランスに滞在した背景には、彼の学校教育が関係していたことは推測できる¹⁶。また、当時のスコットランドの教育機関の調査レポートを確認すると、エアシャー・アカデミーはスコットランドで特に有名な高等学校で、卒業した優秀な学生は奨学金を得てエディンバラ大学やグラスゴー大学へ進学することができる特別な仕組みがあったことが分かる¹⁷。このことに関して「自伝」にも「エア・アカデミーとして知られるエアの高校は、スコットランドの中で最も有名な中等学校の一つで、エディンバラ大学と特に深い関係を持っている。私は、1872年にその大学から奨学金を得て、入学した。（The high school of Ayr, known as Ayr Academy, is one of the best secondary schools in Scotland, having a particularly close connection with Edinburgh University. In the year 1872 I gained the scholarship, and matriculated at that university.）」という記述がある¹⁸。ただし、「自伝」には具体的にどの奨学金を得たのかについて述べられていない。

エアシャー・アカデミーのことを伝える当時の資料によれば、1872年当時の卒業生が大学へ進学するとき得られる奨学金として主に4種類のものであった¹⁹。それらは、パトリック奨学金（Patrick Bursary）、コーワン奨学金（Cowan Bursary）、エアシャー・クラブ奨学金（Ayrshire Club Bursary）とスペンス奨学金（Spence Bursary）である。塚本がセント・アンドルーズ大学から入手した資料には、ディクソンが1872年に上記のうちコーワン奨学金を得て進学したことが記録されている。また、その翌年からコーワン奨学金と並行的に新しく得た奨学金についてディクソン自身は「翌年、私は比較的に高額であった大学の公開奨学金を得た。」と記しているが、これはTyndall-Bruce奨学金のことであろう²⁰。この奨学金は人文学の学生で2年生に進学した学生のために設けられ、奨学金試験に合格したものを対象に与えられていたという記録があり、ディクソン自身の言葉によればOpen university

¹⁶ エアシャー・アカデミーのシラバスなど詳細な情報について次は詳しい。*Reports from Commissioners, Vol. XVII.* London, George E. Eyre and William Spottiswoode, 1874, pp. 551-553.

¹⁷*Reports from Commissioners, Vol. XVII.* London, George E. Eyre and William Spottiswoode, 1874, pp.353-359. また、政府当局の次の調査資料もエアシャー・アカデミーについて詳しい。*School Inquiry Commission, Vol. VI. General Reports of Assistant Commissioners, Burgh Schools in Scotland and Secondary Education in Foreign Counties.* London, George E. Eyre and William Spottiswoode, 1868, pp. 83-96.

¹⁸ 和訳は筆者による。詳細は、磯辺弥一郎編「Biography」（『中外英字新聞研究録』第1巻第5号、1895年、6頁）を参照。

¹⁹ *Reports from Commissioners, Vol. XVII.* London, George E. Eyre and William Spottiswoode, 1874, pp.551-553.

²⁰ 磯辺弥一郎編「Biography」（『中外英字新聞研究録』第1巻第5号、1895年、6頁）。原文は次の通りである。Next year I gained the open University scholarship, which was of greater value.

scholarship のことである²¹。このように、ディクソンがエディンバラ大学で 2 つの奨学金を得て 2 年間勉強したことは明らかである。また、ディクソンは当大学で「人文学」(Arts/Humanities) を専攻し、ギリシア語、数学、論理学、形而上学、道徳、自然哲学、修辞学・英文学などを勉強したものと見られる。

ディクソンはエディンバラ大学で 2 年間勉強した後、2 つの奨学金を辞退し、詩人テニソンの生まれた場所として有名なアイルランドのリンカンで一冬を過ごしたと「自伝」に記載されている。ただし、それに至る詳しい経緯についてはわからない。その後、1875 年に奨学金を得てセント・アンドルーズ大学に入学し、古典学を専攻した。塚本らの提示した資料によると、彼はスペンス奨学金を得て大学に入学したことが確認できる²²。また、当時の資料から、この奨学金はセント・アンドルーズ大学及びエディンバラ大学の在生学生のみを対象としたものであったことが分かる。これは年額 50 ポンドという高額な奨学金で、優秀な学生しか得られなかったようであるが、このことからディクソンの学力の高さも分かる²³。

セント・アンドルーズ大学の 2 年生 (1876) の時ディクソンは、シェイクスピア賞や初期英語文献協会賞 (Early English Text Society prize) を受賞し、3 年生の時 (1877) 一時的にフランスへ渡って、あるイギリス人の子供の家庭教師を勤めたことが述べられている。彼は 1 年間フランスに滞在した後大学に戻り、英文学の先生であったトーマス・スペンサー・ベイネズ (Thomas Spencer Baynes, 1823-1887) の助手となって、道徳哲学や英文学のチューターとして勤めたことが確認できる²⁴。塚本らによって提示された資料によれば、ディクソンは 1878 年に Tyndall-Bruce 奨学金を受けていた。このことについて、セント・アンドルーズ大学から出された 1891-92 年の年報にも 1878 年の Tyndall-Bruce 奨学金を受け取った者の一人として、ディクソンの名前が記載されている²⁵。当時のスコットランドの大学教育制度によると、3 年間大学で勉強した後、最終試験を受け、その後 Honours コースに進学するのであ

²¹ *Reports from Commissioners, Vol. XVII*. London, George E. Eyre and William Spottiswoode, 1874, p.358, p.614. 塚本らが提示した資料の内ディクソンがセント・アンドルーズ大学に提出した就職申請書の中にもディクソンが The Tyndall-Bruce Bursary was gained by me in 1873 at Edinburgh, after a keen open competition という記述が見られる。詳細は、塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon 伝補遺」(比較文学 (32)、1989年、112頁)。

²² 塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon 伝補遺」(比較文学 (32)、1989年、109頁)。また、塚本らの提示した資料に次のように書かれている。In 1875 I gained the Spence Bursary, after an inter-University competition, being bracketed with two scholars now of established reputation, James Mackintosh, Professor of Civil Law in Edinburgh University, and J. Macdonald Mackay, Professor of Modern History in University College, Liverpool (p.112).

²³ *Reports from Commissioners, Vol. XVII*. London, George E. Eyre and William Spottiswoode, 1874, pp.157-159.

²⁴ 塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon 伝補遺」(比較文学 (32)、1989年、112頁)。

²⁵ *The St. Andrews University Calendar for the year 1891-92*. Print and Published for the Senatus Academicus, William Blackwood and Sons, Edinburgh, 1891, p.124.

る。また、上記の Tyndall-Bruce 奨学金を得る条件の一つは修士号の最終試験を合格したものであったことを考えれば、ディクソンはセント・アンドルーズ大学で3年間勉強した後、Tyndall-Bruce 奨学金を得て Honours コースに進学し、また、その奨学金を得る一つの条件として大学でチューターとして教える仕事もしていたと思われる²⁶。そもそも、スコットランドの当時の大学におけるチューター制度とは、主に夏休みの3ヶ月において学生のために設けられる特別な授業のことで、その授業は大学の高学年の生徒が担当することになっていたが、ディクソンの勤務の詳細については定かではない²⁷。

ディクソンは、セント・アンドルーズ大学で4年間勉強し、1879年4月23日に古典学(classics)を専攻して優秀な成績で卒業した²⁸。彼の卒業年月に関して先行研究では異なる意見があったが、塚本らの論文で指摘されたように、彼は1875年に同大学に入学し、1879年に修士号を取ったことは確かである。このことは、上で示したセント・アンドルーズ大学の1891-92年の年報からも看取できる。この資料の中に1879年の卒業生の一人として James Main Dixon – First-Class Honours in Classics という記載がからである。また、後で詳しく述べるが、卒業してから26年経った1905年に、ディクソンは母校のセント・アンドルーズ大学に博士号のために論文も提出しているが、その記録は現在も当大学に残されている²⁹。その論文受理の記録によれば、彼は1879年に古典学を専攻し、優秀な成績で修士号を取ったことが明記されていることから、上記の入学と卒業の年月は間違いないことが確認できる。

大学を卒業して間もないうちにディクソンは来日することになった。その直接的なきっかけは、その時帝国大学で「お雇い外国人」として英語教師を勤めていた兄のウィリアム・グレー・ディクソン (William Gray Dixon, 1854-1928) の存在が挙げられる³⁰。ウィリアム・グレーは1876年から3年間の勤務期間を終えて1880年1月に帰国したが、その代わりにディクソンが兄の職に就いたと思われる。「自伝」には、ディクソンが1879年5月にセント・

²⁶ 塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon 伝補遺」(比較文学(32)、1989年、107頁)。

²⁷ *Report of the Royal Commissioners Appointed to Inquire Into the Universities of Scotland with evidence and appendix, Vol 1.* Murray and Gibb, Edinburgh, 1878, p.75-77.

²⁸ 塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon 伝補遺」(比較文学(32)、1989年、92頁)。*The St. Andrews University Calendar for the year 1891-92.*, p.85.

²⁹ 〈付録5、27-28頁〉を参照。翻刻は筆者による。An application by Mr. James Main Dixon, M.A., Berkeley, California, who had received the M.A. Degree of this university with First class honours in Classics in 1879, for the Degree of D.Litt. was submitted along with a thesis on “The Transformation- Idealism of Condillac,” a declaration that the thesis is his own work, in the terms prescribed by the Ordinances. The meeting resolved to permit the thesis to a special committee consisting of Professors Burnet, Lawson, Bosanquet and Stout. Professor Lawson, convener for report, with power to recommend an additional examiner to the university court if they see fit.

³⁰ 上野景福「ディクソン伝の補遺」(『大村善吉教授退官記念論文集』、吾妻書房、1982年、37-38頁)。

アンドルーズ大学から卒業した後、夏休み中にロンドンを訪れていた際、日本政府関係者を通じて帝国大学からの招待を受けたと記している。上野景福によると、その関係者とは当時の日本政府の特命全権公使であった上野景範（1845～1888）のことである。また、帝国大学の初期のころ、同大学においてスコットランドから多く「お雇い外国人」が務めており、例えば、その初代学長もスコットランド人のヘンリー・ダイアー(Henry Dyer, 1848-1918)で、彼の在任期間にディクソンの兄が東京帝国大学に就職した経緯がある。ダイアーもウィリアム・グレーも同じグラスゴー大学を卒業したことを考えると、東京帝国大学におけるスコットランドの人々のネットワークを通じてディクソンは東京帝国大学での職務に就いたものと考えられる。

ディクソンは1879年9月にVolgaという船でイギリスを出港し、同年10月25日に横浜港に到着した。これについてはクララ・ホイットニー著『クララの明治日記』の中にも記されている³¹。ディクソンは、翌年1880年1月1日から東京帝国大学工部大学校の英語・英文学を教え始めた。当時虎ノ門にあった工部大学校の英語・英文学の教師として3年間の任期中で教育活動を行い、満期を迎えるとさらに3年間延長した。彼の工部大学校時代の教え子の中では斎藤秀三郎（1866-1929）や浅田栄次郎（1865-1914年）などが有名である。ディクソンは、1885年3月26日に、東京でアメリカのセントルイス生まれのクララ・リチャーズ（Clara Belle Richards, 1863-1927）と結婚したが、後述するように、その関係で東京帝国大学の任期終了後にセントルイスにあるワシントン大学に就職することになったと見られる。翌1885年5月4日に、ディクソンはエディンバラの学士院特別会員（Fellow of the Royal Society of Edinburgh）に選ばれた。その発起人はディクソンがセント・アンドルーズ大学で1年生のときに道学と政治経済学を教わった先生であったロバート・フリント（Robert Flint, 1838-1910）教授とディクソンの義兄であった東京帝国大学の教授ノット（Cargill G Knott, 1856-1922）であった³²。翌年、東京帝国大学で文科大学が新しく設立すると、ディクソンは同年4月1日より3年間の任期中で文科大学の教師に任命され、その任期が終わった後もさらに3年間継続して教育活動を続けた。文科大学時の学生の中で有名な人物としては、岡倉由三郎、立花政樹、夏目漱石や山縣五十雄（1869-1959）などがいる。1892年3月に任期満了をむかえると、さらに3年間の任期をもって引き続き仕事を継続したが、再任されて僅か3か

³¹ Whitney, Clara A. N. *Clara's Diary. An American Girl in Meiji Japan*. Tokyo, 1979, p.282. また、ディクソン兄弟とクララ家の関係について、上記注7をご参照されたい。ディクソンの日本到着について、ディクソン没後の「英語青年」の特別号に岡倉由三郎も回想してディクソンが1879年に来日したことを述べている。詳細は、「英語青年」（巻LXX第5、1933年12月1日）、150頁を参照されたい。

³² C. D. Waterston & A. Macmillan Shearer. *Biographical Index of Former Fellows of the Royal Society of Edinburgh 1783 - 2002, Part I, A-J*. The Royal Society of Edinburgh, 2006, p.255. Knott教授は、1883年から9年間にわたって帝国大学で物理学・数学などを教え、有名な地震学者でもあった。

月後の 1892 年 6 月 11 日に契約を解除して、12 年以上にわたる日本での教師生活を終え、米国へ渡って新生活を始めることになった。

ディクソンは、1892 年に渡米した後、妻の故郷であったセントルイスのワシントン大学で英文学の教師となった。これに関して、ディクソンは「ハーバード大学の教授職を辞任し、セントルイスにあるワシントン大学の学長を務める私の友人の Chaplin 博士により私は 1892 年に同大学の英文学の教授のために招待を受けた。私は、その招待を受け、1892 年の秋に新職に就くために渡米した。」と述べている³³。ディクソンをワシントン大学に招いた Chaplin 博士とは Winfield Scott Chaplin, 1847-1918) のことで、東京帝国大学の前身であった開成学校で土木工学の教授として 1877 年-1882 年まで働いた人物である。すなわち、在日中に知り合った Chaplin 博士との関係を通じてディクソンはセントルイスでの職務に就いたことが分かる。ディクソンはこの間、大学での教育活動をしながら *Illustrated Methodist Magazine* というメソジスト協会が関わる雑誌の編集にも加わっていたが、この時期における彼の学問的な活動に関しては、いくつかの新聞記事を除くと、知りうる資料はあまり残されていない。彼は 1901 年にアメリカ人として帰化したが、それについては、彼が母校のセント・アンドルーズ大学の就職に失敗したことが理由の 1 つであったと塚本は指摘している³⁴。

ディクソンは 1903 年 8 月にワシントン大学の任務を辞任し、1903 年 9 月 23 日からオレゴン州ミルトンにあったメソジスト協会により設立されたコロンビア・カレッジ (Columbia College, 1900-1925) の学長を務めることになった。ここでの彼の 1 年間の活動については、地元の新聞で度々報道されている³⁵。また、1904 年 4 月から 12 月までセントルイスで行われた万国博覧会にスコットランドの国民的な詩人として有名なロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759 - 1796) のコテージの展示作業に関わっていたことが記録に残っている³⁶。ディクソンは 1904 年の終わり頃コロンビア・カレッジの勤務を辞任して南カリフォルニア大学へ転職し、ここで定年になるまでの 27 年間という長い期間を過ごした。

³³ 和訳は筆者による。原文は次の通りである。In 1892 my friend, Dr. Chaplin, who had resigned a professorship in Harvard University to become Chancellor (Principal) of Washington University in St. Louis, wrote inviting me to fill a new chair of English Literature just established in that University. I closed with the offer, and in the autumn of 1892 crossed to the United States to undertake my new duties. 塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon 伝補遺」(比較文学 (32)、1989 年、105 頁)。

³⁴ 塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon 伝補遺」(比較文学 (32)、1989 年、94-95 頁)。

³⁵ 例えば、*The Athena press*. Athena, Umatilla County, Or., 18??-1942, August 28, 1903 にディクソンが学長に就いたことが報道されている。同じく、*Morning Oregonian*. Portland, Or., 1861-1937, August 31, 1903 にコロンビア・カレッジの新学期と担当先生の名前の中にディクソンの名前も記載されている。また、*East Oregonian - E.O. Pendleton*, Umatilla Co., Or., 1888-current, February 05, 1904, *DAILY EVENING EDITION* にディクソンによる行われた講演についての知らせがある。

³⁶ *Historical Sketch and Catalogue of the Exhibits: Burns Cottage Association*. Louisiana Purchase Exhibition, Saint Louis, 1904, p. 6.

先に触れた通り、ディクソンがセント・アンドルーズ大学に博士号(D.Litt.)を取得するために論文を提出し、その記録はセント・アンドルーズ大学の図書館に残されている³⁷。この資料によると、彼は 1905 年 2 月に義兄のノック教授を通じてセント・アンドルーズ大学に博士論文及び審査費を提出している³⁸。提出された論文のテーマは、フランスの 18 世紀の哲学者であるエティエンヌ・ボノ・ドゥ・コンディヤック (Étienne Bonnot de Condillac, 1714-1780) の観念論について論じたものであった。この論文テーマを追求するようになったのはセントルイスに就職したことが関係していたと思われる。すなわち、当時のセントルイスにドイツやフランスの観念論やヘーゲル哲学を活発に論じる有名な哲学者が活動しており、ディクソン自身もそれらの学者と個人的な関係を持っていたようで、その中で上記のような論文テーマに興味をもったと想定される³⁹。しかし、上記の記録によれば、ディクソンが提出した論文はセント・アンドルーズ大学の評価委員会から博士号の学位に値しないとして、学位授与に至らなかったのである⁴⁰。ディクソンは、1905 年から南カリフォルニア大学で英文学の教授として、後に東洋・比較文学学科の学部長として勤務した。1931 年に定年を迎えると、そのわずか 2 年後の 1933 年 9 月 27 日に 77 歳で死去した。

以上、来日以前から渡米後の生活にわたるディクソンの略伝である。これを踏まえて、次節では、国内外においてディクソンが残した学問的な痕跡や、日本の高等教育の発展への貢献、そして、在米中における活動について考察を行う。

第3節 日本の高等教育への貢献

3-1 ディクソンと日本の英語教育の発展

ディクソンは 24 歳の時に来日し、明治期の日本における高等教育の近代化プロセスと密接に関わった。しかし上述の通り、ディクソンの活動について具体的に論じた研究は少なく、十分な評価が与えられているとは言い難い。その主な理由には、東京帝国大学における英文

³⁷ 〈付録 5、27-28 頁〉を参照。

³⁸ ノットがセント・アンドリュース大学の当時の学長であったドナルドソン (Sir James Donaldson, 1831-1915) に宛てた手書きの手紙に関しては〈付録 4、25-26 頁〉を参照。

³⁹ 例えば、ディクソンがセント・アンドリュース大学に提出した求職申請書に William Torrey Harris (1835-1909)、William McKendree Bryant (1843-1919)、Thomas Davidson (1840-1900) などはいわゆるセントルイスのヘーゲル哲学者 (St. Louis Hegelians) の名前が挙げられており、ディクソンがこれらの人物から影響を受けたと推測される。

⁴⁰ 翻刻は筆者による。1905 年 3 月 9 日に行われた審査委員会の会議で次のようなことが決定されたという記録がある。Having considered the thesis submitted on 'The Transformation- Idealism of Condillac,' the committee were unanimously of the opinion that it was not in subject or treatment the kind of work which could be recommended for the degree of D.Litt. 〈付録 5、28 頁〉にある Report of Committee on Thesis of J. M. Dixon for D.Litt. Degree を参照されたい。

学の教授方法や授業内容に問題があったことが挙げられる。夏目漱石は、文科大学在籍時のことを思い出しながら『私の個人主義』（1914年）の中で次のように述べている。

私は大学で英文学という専門をやりました。其英文学というものは何んなものかとお尋ねになるかもしれませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中だったのです。其頃はデクソンという人が教師でした。私は其先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作って、冠詞が落ちていると云って叱られたり、発音が間違っていると怒られたりしました。試験にはウォーズワースは何年に生まれて何年に死んだとか、シェイクスピアのフォリオは幾通りであるとか、或はスコットの書いた作物を年代順に並べて見ろとかいふ問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にも略想像ができるでせう、果たしてこれが英文学か何うだかといふ事が⁴¹。

上記引用文の通り、本質的な文学そのものに興味を持っていた漱石にとって、当時の英文学の授業内容が、英文学よりも英語学習中心のものであったことに漱石は不満を抱いていたようである。これに関連して伊村は、明治初期の英語・英文学の教授方法には主に2種類のものがあり、その一つは文学的方法と、もう一つは語学的方法であるが、その分類から言えば、デクソンの教授方法は後者に属することになる⁴²。そうは言っても、デクソンの授業内容は専ら語学的なものであったかというところでもなかったようである。少なくとも、漱石自身がデクソンの英文学の授業の時にとったと思われるノートを見る限り、上記引用文にみるような、作家・詩人の生年月日しか教えられていなかったとは思えない⁴³。し

⁴¹ 夏目漱石『私の個人主義』（『漱石全集 第16巻』、岩波書店、1995年、591頁）より。

⁴² 伊村元道「〔漱石の青春（8）〕 J.M. Dixon と A. Wood」（英語教育（XXVII-9）、1978年、86頁）。

⁴³ 〈付録6、29-40頁〉に、デクソンが英詩人ワーズワースについて講義をした時、漱石が取った12頁に及び授業のメモを提示した。その中で、ワーズワースの生まれた場所の地理的な情報を始め、その作品の特徴や後代においてワーズワースの評価について述べられている。また、デクソンはジョン・スチュアート・ミル（J.S. Mill）が著したワーズワースに関する新しい著書を授業で取り扱っていたようである。漱石のメモに次のような描写が見られる〈付録6、34頁〉。「...」判読できていない英単語である。[...] John Stuart Mill in his autobiography a work which... .. reason as Wordsworth's Prelude, among first heavenly intellectual candour, informs us that his meeting with Wordsworth at a critical time of his life proved to be a great.... .. suffered from severe depression. He was sympathised with Wordsworth's philosophy, Wordsworth's poems on the appeal of nature, he does not represent complete pictures of natural scenery and as an objective beauty. He connects to the outward world with the mind? a lots of feeling. He is a pursuer of mind and there in was that mind sympathy [...]. このメモの内容をみる限り、デクソンの授業の内容はもっぱら語学的なものであったとは思われない。さらに、1891年1月31日にデクソンは帝大に日本全国英語教会（National English Language Association）の学会で A Comparison Between Elizabethan and Victorian Poetry というテーマで演説しており、その内容を見ても分かるように、彼は英文学・英文学史についても相当な知識のもっていたに違いない。この記事の詳細は、*The Japan Weekly Mail* の1891年2月21日号を参照されたい。

しかし、作家や詩人というより、文学そのものを根本から理解しようとしていた漱石にとってディクソンの授業の内容はつまらなかったであろう。第3章で詳述するように、とりわけ大学時代から漱石は既に「文学」という概念そのものを問題視していたことが分かる。しかし、イギリスやスコットランドの大学における英文学講座の創設や英文学コースのシラバスの具体化は、インドなど植民地より遅く、大学の制度として英文学研究の確立は、東京帝国大学の方がイギリスよりも早かった⁴⁴。すなわち、1870年代にディクソンがスコットランドの大学で習った英文学は、漱石が関心を持っていた批評的な英文学ではなく、もっぱら作品や作家を中心としたものであったに過ぎない。これを考慮すれば、漱石はディクソンの教え方に不満を抱いていたことはよく理解できるものである。

いずれにせよ、既に文人として有名になっていた漱石がディクソンについてこのように述べたことはディクソンを低く評価することにつながったものと考えられる。さらに、漱石のこの発言の後、同様のコメントが相次いで出された。ディクソンの日本滞在の最後の年の教え子であった山縣五十雄も「ディクソン先生は、英文学の方よりも、英語の先生でした。

（中略）英文学の概念を得たのはディクソン先生に教わったためと思わない。それは、後で自分で勉強して学んだのである。Spelling や Grammar には厳格であったので、今でも注意する。」と述べた⁴⁵。山縣も漱石と同じく、帝国大学で1887年に新設された英文学科で教えられた内容について不満を持っていたようである。さらに、永井太三郎も同様な意見を述べている。永井は、民友社から出版されていた『中外英字新聞研究録』の編集担当を務めており、1909年末頃から南カリフォルニア大学で1年間特別研究生として留学した。その際、同大学で留学していた帆足理一郎と一緒にディクソンの授業も受けているが、彼はディクソンについて次のように述べている⁴⁶。

博士の門下からは夏目金之助氏、斎藤秀三郎氏等の名流も出たが、教室における博士の講義は稍すれば散漫、流れて捉へ所なく、詳細に過ぎて要領を得なかったと云われている。（中略）日本の大学生間に **unpopular** であった Dixon 博士は、米国の大学生の間にも矢張 **unpopular** であった。例の散漫なる講義と詳細に過ぐる **quotation** とは、流石の白人学生をも唾然たらしめたのである⁴⁷。

上で見た漱石の発言を機に、国内におけるディクソンの評価は否定的なものとして定着してしまったと言える。しかし、ディクソンが日本の英語教育・英文学に何も貢献しなかった

⁴⁴ アルヴィ宮本なほ子「漱石の淡黄の花—『草枕』とイギリス・ロマン主義」（比較文学研究、103号、2017年、8頁）。

⁴⁵ 山縣五十雄「ジェイムス・メイン・ディクソン」（学苑169、1954年11月号）より。

⁴⁶ 大村善吉、高梨佳吉、出来成訓編『英語教育史資料 第5巻』（東京法令、1980年、158頁）。

⁴⁷ 永井太三郎「故 Dixon 博士の思出」（『英語青年』第70巻第5号、1933年12月1日、153頁）。

かというとは決してそうではない。むしろ、明治期に英語・英文学の土台すらなかった時代において、彼はその発展に大いに寄与したと考える。

それを端的に示すものは、ディクソンが執筆した多くの教材である。彼は日本滞在中に多くの書物を書いたが、その中で次のものが知られている。1. *English lessons for Japanese students* (1882)、2. “Notes on Warren Hastings for Japanese students” (1886)、3. *Dictionary of idiomatic English phrases: specially designed for the use of Japanese students* (1887)、4. *New Conversations Written for Japanese Schools* (英和日本学校用会話、Part 1 & 2、1888)、5. “Notes on Goldsmith's Vicar of Wakefield” (1888)、6. *Hakubunsha series of English textbooks* (Vol.1～5まで)、7. *Simpler English poems: compiled for the use of Japanese students* (1890)、8. “A comparison between Elizabethan and Victorian poetry” (1891)。これらの書物の中で *Dictionary of idiomatic English phrases* が特に有名で、1887年に東京で出版され、当時の日本の英語学習者にとって特に難題であった英語の熟語の学習を助けることを目的として作られたものである。この事典は、後にイギリスで T. Nelson & Sons 社からも発行され、当時の新聞記事などからはこの著書がイギリスやアメリカでも高く評価をされたことが分かる⁴⁸。

同じく、1888年に出版された *New Conversations Written for Japanese Schools* 『英和日本学校用会話』も人気を集め、その翌年『英仏和日本学校用会話新篇』として英語の日常会話が日本語とフランス語に訳された。また、ディクソンは *Oxford English Dictionary* (OED) の編集にも全面的に協力し、自分が著した *Dictionary of idiomatic English phrases* に集められた材料は、後で OED が編集された時、再利用されることになった⁴⁹。また、博文社から出版された英語の教科書シリーズも有名で、何年にもわたって改版本が刊行され続けることになった。漱石自身、松山中学で英語教師をしていたころ、生徒たちにディクソンが著した教科書を薦めたことはよく知られる⁵⁰。ディクソンの書物の多くは英文学ではなく、英語教育と直接的に関わるものであるが、上に示した “Notes on Goldsmith's Vicar of Wakefield” や “Notes on

⁴⁸ 例えば、1891年1月31日付の英紙 *The Spectator* に次のような紹介文が確認できる。The author of this work is Professor of English Literature in the Imperial University of Japan, and the materials for it were originally collated in that country to assist his students in their English studies. The book ought to be not less valuable here than in Japan [...] He has produced a book which all authors and public writers ought to keep beside them, more especially as, when he is illustrating the phrases he gives, he draws upon modern writers as much as possible. 同じく、米国の The Public Opinion Company Publishers から出された *Public Opinion* という誌(第10巻大22号、1891年3月7日、534頁)にも書評が載せられている。これ以外にも数多くの書評が確認できる。

⁴⁹ 上野景福「ディクソン伝の補遺」(『大村善吉教授退官記念論文集』、吾妻書房、1982年、42-46頁)。

⁵⁰ 小澤・土橋・鈴木・梅津著「ジェイムズ・メイン・ディクソン」(『近代文学研究叢書』第三十五巻(1972年)、341頁)。

Warren Hastings for Japanese students”などは、当時の英文学の学習者の間で特に人気であったゴールドスミスやトーマス・マコーリーのエッセイについての解説書であり、それらの理解を手助けする役割を担った。この意味で、日本の英文学の発展にもディクソンが直接的に貢献したことに疑問の余地はない。

ディクソンは、日本における英語学習者用にあまり教材が存在していなかったころ、教科書や辞書などを多く作成することで英語教育の発展に大きく貢献した。しかし、彼の最も重要な貢献として、彼から直接的な教えを受けた生徒たちが後の時代において日本の英語・英文学の発展のために大いに活躍したという事実に注目すべきであろう。例えば、工部大学校の頃の教え子の中で、斎藤秀三郎、浅田栄次郎などがその代表的な人物である。さらに、帝国大学の文科大学の教え子には、岡倉由三郎、立花政樹、夏目漱石、山縣五十雄などがある。何れも、日本の英語教育に様々な形で深く関わった人物であり、特に、斎藤秀三郎や岡倉由三郎などは明治・大正期における日本の英語・英文学教育において多大な貢献をしたことがよく知られている。神田乃武（1857-1923）、井上十吉（1862-1929）とともに明治英学の三巨人の一人とも言われる斎藤秀三郎は、ディクソンの指導のもとに、英語の辞書や文法書など多くの書物を編集し、当時日本の英語学習者に相応しい教材開発に力を入れた。斎藤は、ディクソンの影響について「私の英語の学歴かね。私の工部大学に居る時分に Dixon 氏の教を受けて大いに得る処があった。其当時はスコット杯殊に愛誦したものだ。大学の図書館にあった英書は大抵読破して了った⁵¹。」と述べている。また、斎藤秀三郎におけるディクソンの影響に関して、ディクソン没後の「英語青年」の特別号に岡倉由三郎は次のように述べている。

師が教壇の御活動の餘暇に、日本の為に筆を執つて世に示された数種の英語学習書の中に、明治 19 年に、共益商社から出た *English Lessons for Japanese Students* といふクロス表紙の一冊がある。（中略）その書からも亦その著者からも、親しく教へを受けヒントを得た斎藤秀三郎氏は、これに導きの手を得て、遂にああした日本の誇るに足る英文法の研究者となり作家となられたのである⁵²。

岡倉の言う通りに、当時の英語学習者の多くの人間にとってディクソンは大きな存在であったに間違いない。この岡倉自身も、ディクソンが没する 1 年前の 1932 年の春にアメリカ

⁵¹ 松田福松「斎藤秀三郎先生略伝」（明治41年2月5日発行『英語世界』『英語青年』『Saito Number』（昭和5年2月1日）。大村善吉著『斎藤秀三郎伝-その生涯と業績』（吾妻書房、1960年、46-49頁）も参照されたい。

⁵² 岡倉由三郎「Prof. J. M. Dixon の事ごと」（「Dixon Number」、「英語青年 第七十巻第五号」、1933年12月1日、150-151頁）。

訪問の際、恩恵を受けた先生ディクソンの自宅を訪れたことについて上記の特別号「Dixon Number」に回想を述べ、ディクソンをほめている。

同じ Dixon 号に掲載された帝国大学の英文学の教授を務めた市河三喜（1886-1970）はディクソンについて次のように述べ、英語教育者として日本におけるディクソンの貢献を高く評価している。

Dixon 氏は日本に居る間に色々英語に関する本を書かれた。今自分の手許にあるのは Elements of English Word Formation とういふので、（中略）これを見ると中々よく出来て居り、斎藤秀三郎氏以前の注目すべき英語学書として、日本に於ける英学発達史を書く人の見逃してならぬ著述である。中にも最有名で今日迄参考書として用いられているのは、English Idioms で、今日は、Nelson から出ているが、これも明治二十年東京で Dictionary of Idiomatic English phrases として出版されたのが最初である。この頃には支那人 Kwong という人の Dictionary of English phrases といふのが、日本でも随分流行って居たが、それに比べて Dixon 氏のは遙かに Scholarly である（後略）⁵³。

ディクソンから直接的に教えを受けていなくても、1931年にアメリカ訪問の際に市河はディクソンを訪問しこれは恩人への恩返しの意味があったに他ならない。また、ディクソンは渡米後も日本の雑誌への投稿を続け、日本の学者との交流を続けていた⁵⁴。それにもかかわらず、漱石や永井太三郎が指摘した通り、英文学の学者としてディクソンは日本ではあまり評価されてこなかった。

興味深いことに、日本であまり評価を受けなかったディクソンは、アメリカで英文学者として高く評価されていた。例えば、南カリフォルニア大学在籍時、彼の英文学の授業は大変な人気を博していたようであり、このことは、当時の新聞記事などから見る事ができる。例えば、1905年7月10日（月）付の *The San Francisco Call*（現 *The San Francisco Examiner*）という新聞に載せられた「Poetry of Scots Fascinating- Professor Dixon's Lecture Course Is Very Popular With the Students（素晴らしいスコットランドの詩—ディクソン教授の講義は学生の

⁵³ 市河三喜「Dixon 教授を偲びて」（「Dixon Number」、*英語青年* 第七十巻第五号、1933年12月1日、152頁）。

⁵⁴ 1912年1月の『*英語青年*、第26巻8号』に USC 大学に新しく東洋学部が設立された機会にディクソンが投稿した短い文章の中で「私の新たな責任の一つに、貴方の国で指導できる有能かつ訓練を受けた人材を育成することである。（原文：Part of my duties will consist in preparing capable well-instructed young men for teaching posts in your country.）」と述べ、日本の高等教育の発展のために今後においても関わっていきたいという強い意志を示している。同じく、1928年に岡倉由三郎の還暦の際に刊行された記念論文集にディクソンが執筆したケルト人に関する“The Poetry of the Celtic Peoples”という論文が含まれている。詳細は、市河三喜編『岡倉先生 記念論文集』（岡倉先生還暦祝賀、1928年、3-11頁）を参照。

間では大人気)」という表題の記事からもこのことが明白であろう⁵⁵。このことから、日本におけるディクソンに対する低い評価は、漱石のような国民的な作家の消極的なコメントが一因であった可能性が高いといえる。

後述するように、ディクソンは帝国大学の頃から漱石が将来的に偉大な人物になることを信じていたようである。漱石の学問的な才能を理解していたからこそ、漱石に『方丈記』の英訳を依頼したのであろう。なぜなら、漱石が『方丈記』の英訳を依頼された2年生のときには、ディクソンから3年間教えを受けた卒業生の立花正樹が英文学科に在籍していた。また、漱石と一緒にディクソンの英文学の授業を受けた他の選科生もいた。漱石がその中で選ばれたことはその語学力が優れていたことを裏付けるであろう。さらに、ディクソンは1982年に離日する際に受け取った記念品に対して「この数年において、我々の関係は一度も不快さはなく、ずっと良好でであった。あなたは、私にとって愛しい存在である。あなたからのこの記念品を、お互い変わらぬ友情—完璧な同情と信頼、そして、尊重した絆—の有形な象徴の証拠として大切にしておく（和訳は筆者による）。」と感謝状を書き、漱石への称賛を述べている⁵⁶。実は、これまであまり注目されてこなかったが、漱石が『私の個人主義』の中でディクソンを批判するのとほぼ同時期に、米在中のディクソンはアメリカの雑誌の中で漱石のことを高く評価している。

1890年代の当時、私が東京帝国大学文科大学の教授だったころ、私の最も優秀な生徒の一人は夏目金之助であった。彼は、アメリカとヨーロッパの両方を訪問しているが、私は大学以来、彼に会ったことはない。しかし、いま彼に会う価値は十分にあると思う。彼の名前を聞くだけで、日本の人々は嬉しい顔をする。なぜなら、夏目は、自国民の心の中で優しい滑稽家として親しまれているからである。彼の著した『吾輩は猫である』は彼の最も有名な文学作品であろう(和訳は筆者による)⁵⁷。(In the early nineties, when I was professor in the College of Literature of the University in Tokyo, one of my brightest students was a Mr. K Natsume. I have not since met him, although he has visited both this country and Europe; but he is a man worth meeting today. At the mention of his name

⁵⁵ *The San Francisco Call*, Vol.98, No.40, 10 July 1905, p.4. また、同じ新聞の同年9月8日(巻98第100号)からもディクソンの英文学に関する授業、特に、スコットランド文学の講義が大人気であったことが看取できる。

⁵⁶ 原文は次の通りである。Our intercourse through all these long years has been marred by no single unpleasantness, it has been uniformly happy. You have been very dear to me, and I value the gifts as tangible tokens of an abiding reality- the bond of a perfect sympathy and of mutual trust and esteem. とりわけ、上記下線部分にあるように、ディクソンは漱石を親愛な生徒としてみてきたことは明らかである。塚本利明『漱石と英国—留学体験と創作との間』(彩流社; 増補版、1987年、28-30頁)。

⁵⁷ Dixon, James Main. "Rays from the Den." in *The West Coast Magazine*. The Grafton Publishing Company, Oct. 1911, p.67.

the face of a Japanese will lighten up, for Natsume has won a place in the hearts of his countrymen as a gentle humourist. His “I am a Cat” is perhaps his best known production.)

ディクソンが指摘した「*I am a Cat*（『吾輩は猫である』）」は1905年から06年にかけて雑誌『ホトトギス』に連載された漱石の小説である。ディクソンが上記の引用文のように述べた1911年末ごろ、漱石は既に日本国内で多くの注目を集める人物となっており、その情報はアメリカにいたディクソンまでも届いていた。ディクソンは自身の教え子が小説家として有名になったことを誇りに思っていたのである。漱石はディクソンのこのような高い評価を知らなかったであろう。

3-2 ディクソンと東京女学館の設立をめぐる

上記の通り、ディクソンは長年にわたって日本の高等教育、とりわけ、英語・英文教育と深く関わってきたが、彼が日本の女子教育の発展にも直接的に貢献したことはあまり注目されてこなかった。実は、彼が東京にあった The Ladies' Institute という女子学院の創立にも関わっていた。ディクソンが1897年セントア・アンドルーズ大学の就職のために提出した申請書の中に、彼は東京にある The Ladies' Institute の創立に関わったと記載されている⁵⁸。また、1912年に米国で刊行された百科事典に掲載されたディクソンの略歴にも「（前略）彼は、英語の教授として工部大学校で務め、次に日本の帝国大学で働き、さらに、東京の女子学院の設立者でもある。（和訳は筆者による。）」という記述がある⁵⁹。同じく、1933年9月27日のディクソン没後、長期間にわたって教えていた南カリフォルニア大学の9月28日付の学内雑誌である *Southern California Daily Trojan* の第一面にディクソンの死亡告示が出されるとともに以下のような文章も書かれている。

（前略）彼は、1880年に東京の工部大学校の英語教授及び書記の職に任務され、1886年までその仕事を続けた。次の6年間にわたって、彼は日本の帝国大学で英語の教授として働いた。ディクソンは、1886年に東京の女子学院の設立に関わり、日本女子の高等教育の発展のために貢献したとして日本の天皇より旭日章が与えられた（和訳は筆者による）⁶⁰。[...] In 1886 he was made professor of English and Secretary

⁵⁸ 塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon 伝補遺」（比較文学（32）、1989年、104頁）。

⁵⁹ “Dixon, James Main.” In *Funk & Wagnalls Standard Encyclopedia of the World's Knowledge*, Vol. 9. Funk & Wagnalls Company, 1912, p.114. 原文は次の通りである。“(...) worked as professor of English at the Imperial College of Engineering, Tokyo, subsequently in the Imperial University of Japan, and the founder of the Ladies' Institute, Tokyo.”

⁶⁰ “Dr. J. M. Dixon Dies at Home After Illness” *Southern California Daily Trojan*, Vol. XXV, No.5. Los Angeles, California, Tuesday, September 28, 1933. 同じく、1935年に American Historical Society から出版された *Encyclopedia of American biography: New series*, Volume 4 や、米国 Marquis 社から出版された *Who was*

in the Imperial College of Engineering at Tokyo, Japan, where he remained until 1886. For the next six years he was a professor of English at the Imperial University of Japan. In 1886 Dixon helped to found the Ladies' Institute of Tokyo and received from the Emperor of Japan the Order of the Rising Sun for services in the promotion of higher education of Japanese Women.)

この引用文の下線部で示されているように、ディクソンは日本滞在中に東京のある女子学校の設立に関わっていた。この資料に依拠するとすれば、ディクソンの活動の別の側面についても検討を加える必要があるといえる。

ディクソンが関わった東京の女学院とは、現在も存在する「東京女学館」のことであることは先行研究から理解できるが、その詳細について言及した研究はない。東京女学館の設立に関する詳細な研究は存在しているものの、ディクソンがいかにしてその設立に貢献したのかについて知られていない。例えば、上野景福は「東京女学館の運営母体である女子教育奨励会の創立委員にディクソンが加えているのがわれわれの目をひく」と示しているが、詳しく書いていない⁶¹。塚本は「この学校の勝率に際し、ディクソンが実質的な貢献をしたことが窺える。」と述べたが、具体的にどのように貢献したのかはよくわからない⁶²。また、日本における女子教育に関連する研究の中で、東京女学館の設立の経緯に関して数多くの研究が行われているが、その中でディクソンの名前は挙がっても、彼がどのようにこの学校の設立に関わったかを明確に示すものは存在しない。例えば、これに関して、名取多嘉雄は「外山（正一）はポイントである外人教師の紹介を帝国大学の御雇教師であるジェイムス・ディクソン（James Dixon）とカーギル・ノット（Cargill G. Knott）という2人のスコットランド人を通じ、英国領事館付長老アレクサンダー・ショウ（Alexander Show）に依頼し、イギリスからの女性の教師を招くことにした。」と述べているだけである⁶³。同じく、日本における女子歩道団の歴史を研究する中で、東京女学館の設立史を詳しく追及した矢口徹也は「伊藤博文のもとに、帝国大学総長であり当時欧化政策を推進していた外山正一とイギリス人の J.ディクソン（帝国大学英語教授）の案が持ち込まれ、1887（明治 20 年）年 1 月総理大臣官邸において女子教育奨励会の発起人会が開かれた（後略）。」と触れており、ディクソンについて詳細に述べていない⁶⁴。そこで、本節では、ディクソンがいかに東京女学館の設立に関わったのかを中心に論じていくことにする。

who in America, Vol. 1（1968 年版）に掲載されたディクソンの略歴に founder of the Ladies Inst., Tokyo, 1887 という記載が確認できる。

⁶¹ 上野景福「ディクソン伝の補遺」（『大村善吉教授退官記念論文集』、吾妻書房、1982 年、46 頁）。

⁶² 塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon 伝補遺」（比較文学（32）、1989 年、102 頁）。

⁶³ 名取多嘉雄「東京女学館教頭エレン・マクレー」（英学史研究（16）、1983）64 頁）。

⁶⁴ 矢口徹也著『女子補導団：日本のガールスカウト前史』（成文堂、2008 年、88 頁）。

東京女学館の初代学長であったエレン・マクレーについて研究した名取によると、明治19年に当時帝国大学文化大学長であった外山正一（1848-1900）が『東洋学芸雑誌』および『女学雑誌』で日本の女性教育の必要性を訴え、それをきっかけに東京女学館の設立が目指された。この結果、2年後の明治21年9月11日に東京女学館が開校されることになった⁶⁵。この開校に至る過程においてディクソンは大きな役割を担っていたのである。

1986年11月に、外山正一とディクソンによって東京女学館の設立に向けた具体的な計画が策定された。このことは「女子教育奨学会設立趣意書」という書類と、この趣意書と一緒に作成された「女子教育奨学会規則」及び「女子教育奨学会東京学館定款」という文章に見ることができる。東京女学館から刊行された『東京女学館百年史』を見ると「「女子教育奨学会設立趣意書」は既に女性雑誌第四十八号の記事に見るように外山正一とディクソンの二人が中心となって起草したものであると思われる。⁶⁶」と記されている。つまり、外山正一とディクソンがその立案者であり、この二人が作成した計画は当時の指導者たちの支援のもとで実行され、その結果、東京女学館が設立されることになった。この計画を支えたのが、政治界からは総理大臣の伊藤博文や文部大臣の末松謙澄、そして、経済界から渋沢栄一や横浜正金銀行の頭取を務めた原六郎、日銀副総裁の富田鉄之助などであった。教育界からは外山正一とディクソンの外に、渡辺洪基帝国大学総長、神田乃武、カーギル・ノットなども関わっていた。また、開校された学校の資金調達と運営方法については「豪族、官使、民間有力者から1株250円を出資を求め、それを資源とした（後略）」という株式会社の経営仕組みが採用された⁶⁷。この株式会社型の学校運営方法は当時の日本では珍しいものであり、その計画にディクソンが深く関わっていたことに注目しておきたい。

外山は、女子高等教育は日本を強国するのに不可欠であるが、当時日本の経済的な状況のことを考えると、国が多くの女性生徒を西洋へ留学に送れないし、西洋から多くのお雇い教師を招くことも出来ないと考えていた。それ故に、女子高等教育を宣教師達に委ねることを推奨したのである。これに関して名取は、「外山の考えは、宣教師に布教をゆるすことを前提としていたが、それは、いわば、文明性吸収のための貢献条件であって、キリスト教そのものの吸収が目的なのではない。」と述べている⁶⁸。つまり、外山の考えとしては、当時の日本では、様々なキリスト教の宗派が宣教活動を行っていたが、その宣教師に頼めば西洋の

⁶⁵ 東京女学館の歴史に関して次の研究は詳しい。名取多嘉雄「東京女学館教頭エレン・マクレー」（英学史研究(16), 63-75, 1983年、63-65頁）。桜井錠二「東京女学館の今昔」（『思出の数々』九和会、1940年）など。

⁶⁶ 東京女学館百年史編集室編『東京女学館百年史』（学校法人 東京女学館、1991年、5頁）。

⁶⁷ 名取多嘉雄「東京女学館教頭エレン・マクレー」（英学史研究(16), 1983年、63頁）。

⁶⁸ 名取多嘉雄「東京女学館教頭エレン・マクレー」（英学史研究(16), 1983年、63頁）。

語学も文化も日本にいながら学ぶことができるという提案であった。加えて、宣教師は日本における西洋的な女子教育を担うと同時にその生徒たちをはじめとして布教活動も行うことができるため、両者の利益に繋がるという考えをもっていた。また、学校運営のための資金調達に関しては出資を募る方向で当初進められていたが、問題もあった。実は、学校設立の話は、既に 1886 年の 9 月あたりから英国の宣教師であったエドワード・ビカステス (Edward Bickersteth, 1850-1897) と行われたようで、資金の問題で具体化されていなかった⁶⁹。その問題に対し、ディクソンは株式型の学校運営方法を提案したのである。明治 21 年 4 月 7 日付の *The Japan Weekly Mail* に記載された *The Tokyo Ladies Institute* という記事にその詳細が記されている。

避暑地である軽井沢の涼しい環境の中でディクソン教授は、A.C. Shaw 師の思いやりとともに、1886 年の秋の初期ごろ今回の案に関わる諸問題が解決できる新たな計画を案じた。この新たな計画では、外山教授により提案されたチャリティー型学校経営に内在している諸欠点はない。ディクソン教授はこう言う。教育機関は、民間会社のように運営したらいかがであろう (和訳は筆者による)⁷⁰。(In the coolness of his summer retreat at Karuizawa, Professor Dixon, with the sympathetic aid of the Rev. A.C. Shaw, devised, in the early autumn of 1886, a modified scheme fitted to meet all the necessities of the case, and yet free from the Charity School character which somewhat marred Professor Toyama's original suggestion. Why not – asked Professor Dixon – why not run an Educational Institute as a private company?)

この記事は、イギリスからの 7 人の教師団が開校予定の東京女学館に来た時に書かれたものであるが、この中で学校の計画段階から開校までの道のりが言及されている。明治 19 年の秋、避暑地であった長野県軽井沢にいたディクソンがこの案を考え、外山に薦めたのである。その案に賛同した外山の動力で当時の総理大臣をはじめ、178 人から出資金 6 万円が集められ、「女子教育奨励会」の経営下で東京女学館が開校された。東京女学館の第 6 代館長であった桜井錠二が指摘しているように「明治維新に於ける全ての制度文物の進歩発達は実に目覚ましいものであったが独り女子教育に関しては遅々として」いた時代においてディクソンが提案したいわゆる株式型の学校経営制度が採用されたことは特筆するべきであろう⁷¹。ディクソンが女子教育に関わったことにはある意味では自然なことであったと思われる。宗教に強い関心をもっていたディクソンにとって、東京女学館の設立にはキリスト教の布教機会

⁶⁹ Bickersteth, Samuel. *Life and letters of Edward Bickersteth, Bishop of South Tokyo*. London: Sampson Low, Marston, 1899, p.215.

⁷⁰ “The Tokyo Ladies Institute.” *The Japan Weekly Mail*, April, 7, 1888, Reprint Series 1: 1870-1899, Part 4: 1885-1889, Vol. 42: Jan to June 1888, Edition Synapse, p.317.

⁷¹ 桜井錠二「東京女学館の今昔」(『思出の数々』、九和会、1940年)。

を得るといった目的もあったかもしれない。一方で、より大事なのは、ディクソンが進歩主義的な見方を持ち、教育こそは人間の発展のもとであると意見をもっていたようからである。このことはディクソンが初来日後の 1880 年に行った「完全教育之必要性」という演説に見ることができる。この中でディクソンは当時西洋で流行していた最新の教育思想を紹介した。例えば、スペンサーの教育論を論じながら、彼は「スペンサー言ニ己ヲシテ完全ナラシムルヲ勉ルハ則チ教育ノ本務ナリト。又タ曰ク教育ハ人ヲシテ完全ナル生活ニ選セシムルハ教育ノ主義ナリト。」と述べている⁷²。ここでは、彼が西洋の教育論を具体的に説明しながら、日本における総合的な教育制度の導入の必要性を主張している。この公演から、ディクソンは日本の教育の発展そのものについても関心を持っていたことが分かる。さらに、日本の女子に限って言えば、ディクソンは当時の日本における女性の社会的な地位が非常に低く、女性に対する社会的な態度の抜本的な改革が不可欠であると述べており、女子解放を支持していたことが理解できる⁷³。このようなことを考えると、ディクソンが東京女学館の設立に加わったことは必然的であったとも考えうる。

以上のように、ディクソンは日本の女子教育がまだ初期段階にあった時期において、その発展に大きく貢献したといえるのである。

3-3 ディクソンの米国における研究活動をめぐって

ディクソンは、日本における学問的な活動や高等教育に関わっただけでなく、日本のことを海外に発信する上でも重要な役割を果たした。まず、従来の研究ではほとんど言及されてこなかったが、西洋において日本に関する情報が少なかった時代に彼が英語圏の中でよく読まれていたチェンバーズ百科事典 (*Chambers' Encyclopaedia*) に日本に関する記事を執筆した。なお、ヨーロッパや北米に日本のことを伝えるのにも力を注いだ⁷⁴。この百科事典は、1859 年-1868 年の間に出版された 10 巻に及ぶものであるが、その初版の第 5 巻に「Japan」という記事が記載されている。この初版に掲載されたものは、6 頁に及ぶ短い記事で、その執筆者は不明である。この百科事典がドイツ語の百科事典 *Brockhaus Enzyklopädie* にもとづき書かれたことを考えれば、日本に関する記事もドイツ語で書かれたものが翻訳されたという可能性は考えうる。その後 1888 年～92 年に発行されたチェンバーズ百科事典の新版の執

⁷² 国会図書館所蔵ディクソン著「完全教育之要性」（出版社・年不明）を参照。

⁷³ “Japan” in “Chamber’s Encyclopaedia.” *The Japan Weekly Mail*, 20th June, 1891. 原文は次の通りである。
An utter lack of chivalry towards women is an unpleasing feature of the national life. Civic courage has also to be developed.

⁷⁴ 1890 年にロンドンで刊行された *Chambers's Encyclopaedia - A Dictionary of Universal Knowledge, New Edition, Vol. VI*. William and Robert Chambers Limited, London, 1890 に収録されている主要な記事の著者名の一人として Professor Dixon, Tokyo の名前が見られる。

筆にディクソンは関わった。ディクソンが担当した記事は 10 頁に及び、より詳細な記述がなされている⁷⁵。ディクソンは、当時利用可能であった資料を駆使して、日本文化を正確に伝えようとし、またそれまでに伝えられた事柄の間違いを正そうとしたのである。

さらに、ディクソンは、現在で言うところの「日本研究」や「日本学」を推進しようとした。ディクソンは 1892 年に東京帝国大学の任期を終えて渡米し、1905 年までミズーリ州・セントルイスのワシントン大学で英文学の教授を務めた。上記の通りメソジスト協会から出版された雑誌の編集者やコロンビア・カレッジの学長などを経て 1905 年から 1911 年にまで南カリフォルニア大学（以降 USC 大学と表記する）で英文学の教授を務め、1911 から 1931 年までの 12 年間においては同大学で新設された東洋学部・比較文学学科の学部長も務めた。この USC 大学で教えていたころ、ディクソンは日本研究の紹介を積極的に行ったことは確認できる。

まず、ディクソンはいかに USC 大学の仕事に就き、なぜ 26 年という長い年月にわたって同大学で学問生活を続けたのか。簡単に言うと、ディクソンの宗教的な関心の中で USC 大学での職務に就いたと思われる。というのは、USC 大学自体は設立当初から長い間メソジスト協会下に経営され、ディクソン自身も修士課程で神学を勉強し、宣教活動を行うための資格も持つ宗教に強い関心を抱いた人物であった。日本滞在中のディクソンは、東京の本郷にあるプロテスタント教会で実際に伝道活動を行った記録も残っている⁷⁶。また、上記でみた東京女学館の設立の際にディクソンは宣教師を通じてイギリスからの女性教員を手配したことからも当時のキリスト教会においてディクソンが強いネットワークをもっていたことは明らかである。そのような関心を通して、当時日本で宣教活動を行っていた人々とのつながりを持っており、後でそのような人間関係を生かして USC 大学の仕事に就いたのではないかと想定される。

さらに、推測を重ねるならば、ディクソンは宗教的なネットワークを通じて USC 大学の関係者と個人的な関係をもっていたようである。例えば、東京英和学校（現在の青山学院大学）の初代院長であったロバート・S・マクレイ（Robert Samuel Maclay, 1824-1907）という宣教師との関係が挙げられる。マクレイは 1873 年から 14 年間において東京で宣教活動を行

⁷⁵ しかし、英語圏においてディクソンのこの記事よりもより詳しいものとして、1874 年に米国で出版された *The American Cyclopaedia: A Popular Dictionary of General Knowledge* という百科事典にアーネスト・サトウによる“Japan”という記事が挙げられる。Ed. George Ripley and Charles A. Dana. *The American Cyclopaedia: A Popular Dictionary of General Knowledge*, Vol 9, Revised 2nd Ed.. D Appleton and Company, New York, 1874.

⁷⁶ 1883 年 1 月に東京の本郷にあったキリスト協会でディクソンは講義をしており、これはその他の講義を含めて著書として刊行されている。Ed. Eby, Charles S., Ewing, J.A., Dixon, J.M.. *Christianity and Humanity: A Course of Lectures delivered in Meiji Kuaido*. Tokio, Japan, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., 1883, pp. VII-X.

った人物で、宗教的なことに興味を持っていたディクソンはマクレイのことを知っていた可能性は高い。このマクレイの従兄弟であった Robert Maclay Widney (1838-929) は USC 大学の創立者で、同大学の二代目学長の Joseph Widney (1841-1938) もその従兄弟である。このような背景を考えると、ディクソンはマクレイとの関係をもつ中で、USC 大学での職務に就くに至ったことも考え得る。一方、それとは別に、USC 大学の創立者が日本を含めた東アジアに関心を持っていたことが知られている。先ほど示した USC 大学の創立者であった Windey 兄弟の叔父にあたるマクレイは、中国・日本・韓国で 40 年以上にわたって宣教活動を行っている。また、USC 大学の初代学長であった Marion M Bovard (1847-1891) も宣教師として中国へ行くことを希望したが、妻の健康上の理由でそれが叶わなかったということが記録されている。このことから、彼も東アジアに興味を示していたことが分かる⁷⁷。東アジアのことに興味を持っていたディクソンは、USC 大学創立者やその学長も同じような関心を抱くことを考慮したため、本大学で長い年月にわたって仕事し続けたと思われる。

ディクソンがこの大学に長く勤務したことには、当時日本からの留学生が多く在籍していたことが関係していたとも考えられる。米国の東海岸においては、既に日本に関心を持つ学会や学問のサークルが活動をしていたことは知られているが、日本人の留学生にとって、西海岸の方がより人気だったようである⁷⁸。その当時、西海岸にある大学の中で日本人留学生が最も多かったのはカリフォルニア大学・バークレー校で、その次が USC 大学であった⁷⁹。その一方で、ディクソンが USC 大学の教授に任命された 1905 年頃以降は、米国ではアジアからの移民受け入れに対し反対する運動が増えており、日本からの移民が多かった西海岸においてもアジア人移民に対する反発は特に強かった。例えば、1909 年頃、アメリカにおける黄色人種脅威論が広まる中、ディクソンが住んでいたカリフォルニア州は日本人が土地を所有できないようにする法案を採択し、西海岸の 10 の州が既にこのような法律を設けていた。近代国家としての、あるいは日露戦争によって発揮された軍事大国としての日本の台頭が、このような状況を生み出す直接的な要因になったと思われるが、興味深いことに、ディクソンは新聞記事などの場を借りて、日本に対する米国で流行した誤った認識を正そうと努めていたことが確認できる⁸⁰。つまり、西海岸における反日状況を気にせず、彼は日本の

⁷⁷ Klein, Ken. "The Early Development of East Asian Studies in Southern California." *Journal of East Asian Libraries*, No. 101, Article 17, 1993, p.70.

⁷⁸ Auslin, Michael R. *Japan Society: Celebrating a Century 1907-2007*. New York: Japan Society, 2007.

⁷⁹ Ed. Nakatsu Hikoichi. *The Berkeley lyceum/Bākurē gakusō*, V.4-5(1911-1913). Berkeley: Kashū Daigaku Nihonjin Gakusei Kurabu, pp. 54-57.

⁸⁰ 例えば、1909 年 11 月 8 日の *Los Angeles Herald*, Vol. 37, No.3, 84 頁に次のような文章が見られる。The Britishers have a new word, with which they are having lots of fun. It is "Teutophobe." This kind of "phobe" is a person who is continually discovering German plans for invasion of the United Kingdom. [...] Los Angeles is about to have a Japanese "Invasion" of a character which ought to end forever all silly talks about Japan's

存在を擁護し、日本のことを米国で紹介し続けた。このことは、*The West Coast* 雑誌や地元
の新聞などに彼の残した日本に関する記事などからも分かる⁸¹。

USC 大学において東洋学・比較文学学科が設立されたことは、日本を含む東洋諸国の研
究を紹介する活動において大きな出来事の一つであった。この設立にディクソンが重要な役
割を果たしたことが推測される。同大学の当時の学長であった Bovard は東アジアのことに
個人的に興味を持っていたことに加えて、ディクソンの日本研究を導入する意志が、この新
たな学部の設立の背景にあった。その一方、このころ USC 大学は日本人留学生の間で人気
であったことも無視してはいけない。1910 年に USC 大学で日本人留学生会が設立され、次
年に学会雑誌の *Japanese El Rodeo* (1912 年 6 月) が刊行された⁸²。米国の西海岸における日
本人の同窓会雑誌の中で、この雑誌より古くから刊行されていたものとしてカリフォルニア
大学バークレー校在学中の日本人留学生による *The Berkeley lyceum* が挙げられる。その時
USC 大学で 28 人の日本人留学生 (1911 年にカリフォルニア大学で凡そ 34 人の日本人留学生
が在学) が在学しており、当時の米国で日本人留学生が最も多かった大学の一つであった。
もちろん、*Japanese El Rodeo* の創刊号に学長の Bovard のはしがき及び日本と西洋の関係につ
いてディクソンが書いた記事も掲載されている。

ディクソンが USC 大学の東洋学・比較文学学科の初代学部長に登用されたことをきっか
けに、日本に関係する研究も活発になった。このことは、この大学に提出された論文の研究
対象を調べてみるとよく分かる。例えば、1911 年には「日本におけるキリスト教の影響」
をテーマにした修士論文が提出され、1913 年には「明治時代の経済」をテーマにした学位
論文も提出されている。何れも日本人留学生によるものであり、1912 年までの日本人卒業
生は 12 人であった。また、1919 年から 1922 年の間に USC 大学の東洋学部が全部で 7 つの
修士学位を授与し、そのうち 5 人が日本人留学生であった⁸³。このことは、日本研究が主に
日本人の留学生によって行われていたことを示すが、ディクソンが学部長を務めた時には日
本研究は組織的に進められていたことは理解できる。しかし、1921 年に Bovard 学長が引退

intentions, other than her honourable intentions of being one of America's best friend. One at least of the Japanese
commissioners who will visit Los Angeles has a "local tie." Baron Naibu Kanda was a colleague of Prof. James
Main Dixon at the Imperial University of Tokyo. [...] After our distinguished visitors have come and gone, and
our people understand that Japan is intent on preserving the peace of the Pacific, there will be no-more
"Japanophobes" in Los Angeles.

⁸¹ ディクソンは *The West Coast Magazine* に "Rays from the Den" という題名で連載記事を投稿し、その
中で日本の話題も定期的に挙げられている。例えば、1910 年 11 月の記事にラフカディオ・ハーンと
日本について、1911 年 4 月の記事に日本に関する執筆された文献の紹介、1912 年 11 月版に寄せた記
事では、日本の研究を行った主な人物など、数多くの記事が残されている。このことから、ディクソ
ンは日本から離れても日本の教育状況について関心を持ち続けたことが分かる。

⁸² 帆足理一郎編『南加学窓 第一巻』(南加大学日本人学生会、1912 年 6 月 15 日発行)。

⁸³ 伊東未学編『南加学窓』(南加大学日本人学生会発行、1919 年 5 月、71-74 頁) より。

すると日本研究への関心は弱くなっていった。実はその年から USC 大学は教会との関係を打ち切ったのであり、USC 大学における日本研究分野への関心は次第に薄れていったものと考えられる。このことは、1921 年以後に提出された論文や留学生数が激減したことからも理解できる。

以上のように、ディクソンは在日中に英語と英文学に関する多くの教材作成に手がけ、教科書が未だ少なかった時代において日本の英語学習者を助けとしたと言える。また、渡米後も、日本に関する正確な情報を世界へ発信するために力を注ぎ、USC 大学において十数年にわたって日本研究の発展に寄与したことは特筆すべきところである。このように、様々な側面において、日本と深く関わったディクソンは、『方丈記』についても関心を持っており、この作品の最初の翻訳に関わったのである。次節では、このことについて検討を加えることにする。

第4節 ディクソンと『方丈記』の出会い

『方丈記』の最初の外国語訳は漱石の手によるものである。しかし、漱石の英訳のきっかけが、彼の英文学の先生であったディクソンが翻訳を依頼したことであったのは看過すべきでない。というのは、漱石自身がこの作品に興味をもって自発的に英訳したのではなく、ディクソンが本作品に関心を持ち、それについてさらに知りたいと考えていたから漱石にその翻訳を依頼したわけである。そう考えると、ディクソンがこの作品について既に何らかの形である程度知っていたことは確かであろう。では、ディクソンはいかなる経緯で『方丈記』に出会い、なぜこの作品に注目し始めたのだろうか。また、漱石は『方丈記』を英訳する前に海外の文献でこの作品に言及したものはあったのだろうか。これらの問題が、『方丈記』の海外伝播を理解するために不可欠であり、西洋人はなぜこの作品に関心を持ったのかを理解するためにも重要である。それにもかかわらず、先行研究ではこれらの点についてほとんど言及されてこなかった。そこで、本節では上記の点を中心に考察を行う。

先にも示した通り、ディクソンは 1880 年 1 月から東京帝国大学工部大学の英語・史学の教員として勤め始め、12 年近く日本で英語・英文学を中心とした教員活動を行った。彼は、日本滞在中に数多くの学問的な業績を残したが、日本文学に関係するものとしては、『方丈記』の研究のみであり、いずれも漱石の「英訳方丈記」を基に書かれたものである。また、ディクソンの執筆した著書・論文などを見る限り、日本語の原典を用いて行った研究が少な

かった。このことを踏まえれば、彼が『方丈記』と出会ったきっかけは、外国語で著された書物に触れたことであると推測されよう⁸⁴。

そこで、ディクソンが漱石に『方丈記』の英訳を頼んだ 1890 年後半までに欧米諸国で刊行された英語資料の中で、本作品に関する言説について見てみたい。今回の調査の中で手に入れた英資料によると、最も古いものとしては 1874 年に米国で出版された *The American Cyclopaedia: A Popular Dictionary of General Knowledge* における第 9 巻の ‘JAPAN’ の項目の中で『方丈記』への言及が見出される⁸⁵。これは明治期の日本研究分野で活躍したアーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow, 1843-1929) によるが、『方丈記』が文学作品として高い評価を得ているわけではない。また、この百科事典以外にも『方丈記』に言及した外国語の資料はいくつか見られるが、これらの資料においても、『方丈記』は必ずしも高く評価されていない⁸⁶。これらのことをふまえると、ディクソンがそれらの研究から『方丈記』への関心を持ったとは考えにくい。

一方、ディクソンと『方丈記』との出会いを理解する上では、バジル・ホール・チェンバレン著『日本事物誌』 (*Things Japanese*) に注目すべきであると考え⁸⁷。この著書は、1890 年に出版され、外国人の読者から注目を集めたため、翌年 6 月以降、数十年にわたってその改訂版が刊行された。その中で、『方丈記』について以下のように説明がなされている。

日記文学の中では『方丈記』が、日本文学を研究する者のもっとも興味を感じずる作品であろう。『徒然草』と同じように、これもまた仏僧〔鴨長明〕の執筆したものである。著者はその時代の色々な災難を述べ、無常の世の中で送った以前の生活とくらべて、隠遁生活が勝っていることを詳しく説いたものである。これは一二〇〇

⁸⁴ 日本滞在中にディクソンが書いた、英語、英文学、キリスト教など様々な分野に関わる著書・エッセイ・論文・講演記録などが残されているが、日本文学に直接的に関係する資料は管見では存在しない。日本におけるディクソンの学問的な痕跡について本章の第 3 節を参照されたい。

⁸⁵ Ed. George Ripley and Charles A. Dana. *The American Cyclopaedia: A Popular Dictionary of General Knowledge*, Vol 9, Revised 2nd Ed.. D Appleton and Company, New York, 1874, p. 500. 日本に関する記事は 529-564 頁で、『方丈記』の言及は 560 頁を参照。

⁸⁶ 例えば、一三服部の地震研究に関する論文や上記の百科事典 *The American Cyclopaedia* から記述内容を参照したと思われるフランス語の百科事典 *Nouveau dictionnaire encyclopédique universel illustré: répertoire des connaissances humaines* にも『方丈記』への言及は見られる。しかし、ディクソンがこれらの資料をみた可能性は低い。Hattori, Ichizo. “Destructive Earthquakes in Japan.” *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol.6. Part.2, 1878, pp.249-75. Troussset, Jules. *Nouveau dictionnaire encyclopédique universel illustré: répertoire des connaissances humaines*, Vol. 3, 1885, pp. 256.

⁸⁷ Chamberlain, Bail Hall. *Things Japanese - Being Notes Various Subjects Connected with Japan for the use of travellers and others*. Kelly and Walsh Limited, Yokohama, 1890, pp. 269-70. 『日本事物誌』は読者から人気を集め、数十年にわたって改版を重ねたが、『方丈記』の描写に関しては、特に内容の変更は見られない。

年ごろの作である⁸⁸。 (Of these the Hojoki is probably the one which the student will find most interesting. Like the Tsurezuregusa, it is the work of a Buddhist monk. The author describes the calamities of his times and expatiates on the superiority of life in a hermit's cell to that which he has previously led amidst worldly vanities. It dates from about the year 1200.)

チェンバレンは、『方丈記』を日記という作品ジャンルの代表作として類別した上で、そのカテゴリの中で最も興味深い作品であると紹介し、高く評価している⁸⁹。また、この著書の出版時期は、ディクソンが漱石に英訳を頼んだ時期と重なる。加えて、ディクソンはチェンバレンと個人的な関係を持っていたことが知られており、両者のやり取りを通じて『方丈記』への関心を持ったことも考えられる。

他方、漱石に英訳を依頼しようと考えた理由は何であったのか。ディクソン自身がその詳細について述べてはいないが、ディクソンの帝国大学における教員活動が関係していたものと思われる。例えば、英国文学の授業で英国詩人と鴨長明の比較検討を行おうとしたことが想定できる。ワーズワースなど英国の自然主義詩人を紹介する際に、日本の代表的な自然主義かつ隠遁生活を送った文人である長明や兼好などにも着目し、東西の自然観・隠遁思想を比較するために、『方丈記』の英訳を頼んだということは推測しうるであろう⁹⁰。推測を重ねるならば、ワーズワースの *The Prelude* (序詩)や未完成作品 *The Recluse* など作品における主要なテーマの一つである「孤独生活」を紹介する過程の中で、ディクソンは長明や『方丈記』に関心を持ち始め、ワーズワースの自然観・孤独思想と長明のそれを比較すべく、漱石にその英訳を頼んだのではないかと思われる。ここでは、ディクソンが執筆した論文から短い文章を引用して彼の自然に対する理解について見ておきたい。

それ故、山へ退き、山岳・小川等生命・無生命的な自然と交流を求めた 12 世紀の日本の文人に関して知るや否や、直ちに我々の自然崇拜の第一人者と比較しようと思った。

私は、そのため長明をライダル・マウントの詩人と結び付けたのである。両者は隠遁

⁸⁸ チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌』平凡社〈東洋文庫 131〉全 2 巻、1969 年、第 1 巻、32 頁。Chamberlain, Bail Hall. *Things Japanese - Being Notes Various Subjects Connected with Japan for the use of travellers and others.* Kelly and Walsh Limited, Yokohama, 1890, pp. 269-70.

⁸⁹ 『方丈記』のジャンルについて従来から「随筆」と指摘され、『枕草子』と『徒然草』と一緒に三大随筆と呼ばれてきた。しかし、本作品の内容や文体は『枕草子』や『徒然草』と大きく異なる。この作品は「記」あるいは、「エッセイ」のジャンルに近いという意見は今日の学会で通説になりつつある。明治初期にチェンバレンによる「日記文学」としての『方丈記』のジャンルの分類は興味深い指摘であり、外国人が日本の作品ジャンルについてどう理解したのかを分かるために更なる研究が必要である。

⁹⁰ 漱石の『方丈記』英訳の 9 年前 (1883 年) に試みられた『徒然草』英訳の場合も、翻訳者であったカナダのメソジスト協会の宣教師 C. S. Eby は、『徒然草』の中で見られる隠遁者の描写や宗教的な様相のため興味を持ち始めたようである。Eby, C.S. "Meditations of a Recluse: A Translation of Tsuredzure Gusa." *The Chrysanthemum*, Vol.3, 1883, pp.87-90.

者であり、自然の大崇拜者で、それぞれは自然に対する感受性の強い精神を持っていた⁹¹。(When, therefore, we find a Japanese literary character of the 12th century retiring to the hills and seeking communion with the mountains, the streams, with animate and inanimate life, we at once think of contrasting him with our high-priest of nature. This is why I have linked together Chōmei and the bard of rydal Mount. Both were recluses; both were devout admirers of nature and receptive in their attitude towards nature.)

ディクソンはワーズワースのように自然を鑑賞する日本の隠遁生活を送った文人について知識を得るとすぐに、その比較を試みたと述べている。つまり、『方丈記』の内容というよりも、ワーズワースと似たような孤独な性格を持つ 12 世紀の日本の文人に注目し、『方丈記』の英訳を通じて両者の比較を試みようとしたのであろう。また、第 3 章で述べるように、漱石は『方丈記』を英訳する前から、既に本作品に関心を抱いていた。そのことをふまえると、ディクソンのもとで西洋の隠遁習慣などを学習する中で、鴨長明を含む日本の隠遁習慣へ話が及び、そこからディクソンが本作品に関心を抱き始めたということも考えうる。

また彼が『方丈記』に関心を抱いたもう一つの要因として、ディクソンの強い宗教観が考えられる。彼は大学で英文学・哲学とともに神学を勉強し、日本滞在中に本郷にあった教会で布教活動を行った記録もある。先にも述べた通り、彼は日本においてキリスト教会で講義をしたことがあり、渡米した後も、メソジスト協会から刊行された雑誌の編集長や、メソジスト監督教会によって設立されたコロンビア・カレッジの学長を務め、さらに、メソジスト教会によって設立された USC 大学で約 30 年にわたって教職活動を行った⁹²。彼が敬けんなキリスト教徒であったことは確かであり、このような宗教観によって彼は『方丈記』へ興味を強めたと思われる。以上のことを鑑みると、キリスト教において長い間続いてきた修道士習慣などに興味を持っていたディクソンが、『方丈記』の主題である「隠遁生活」について詳細な知識を得たいと考え、漱石にその英訳を頼んだということが想定できる。第 4 章で述べる通り、彼は漱石の「方丈記英訳」をもとにして書いた論では、東洋の隠遁者である長明を西洋のそれと比較する前に、まずヨーロッパにおける隠遁習慣の歴史を出発点にしている。ディクソンによれば、ヨーロッパの場合ではルソーが活動した 18 世紀の終わり頃まで、12 世紀の日本と同じく隠遁習慣は宗教心と深く関わっていたと述べている⁹³。このことから、

⁹¹ 和訳は筆者による。Dixon, J. M.. “Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel.” *TASJ*, Vol. 20, 1893, p.194.

⁹² ディクソンは 1901~1903 年まで米国ミズーリ州セントルイスから刊行されていた *The Illustrated History of Methodism* という雑誌の編集者として勤め、1903~1905 年まで米国オレゴン州ミルトン市にメソジスト監督教会により新しく設立されたコロンビア・カレッジの学長を務めたことから彼の宗教への関心は強かったことが理解できる。

⁹³ Dixon, J. M. “Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel.” *TASJ*, Vol. 20, 1893, pp. 193-194.

ディクソンは、『方丈記』の中に描かれる 12 世紀の隠者の話や、その作品に見る東洋の宗教的な要素を研究対象とし始めたことが推測される。

終わりに

ディクソンは 12 年間という長期間にわたって日本に滞在し、日本における英語・英文学教育の発展のみならず、女子学校の設立などにも関わった。英語・英文学教育に関しては、多くの教材作成に力を入れ、彼の教え子が日本における英語・英文学教育の担い手になったのである。また、渡米後のディクソンは、日本研究の組織的な推進のために、USC 大学で 30 年間にわたって教育活動に従事した。にもかかわらず、ディクソンは国内ではあまり高い評価を得てはこなかった。その主たる要因の 1 つに、弟子の漱石による消極的なコメントがあったと思われる。漱石の言説は定着し、それ以後におけるディクソンに関する意見は、漱石と同じ姿勢を取ったものは多かった。

ディクソンは、『方丈記』の海外伝来において重要な役割を果たした人物である。彼は、チェンバレンの著書を通じて『方丈記』と出会い、東京帝国大学の教員活動や自身の宗教的な傾倒の理由で、鴨長明に強い関心を持ち始めたと考えてよいであろう。本論の第 4 章で詳しく説明する通り、ディクソンは漱石の「英訳方丈記」をベースにして長明とワーズワースを比較した論文を執筆し、日本アジア協会で主に外国人を対象にその発表を行った。後に、この論文は『方丈記』の部分的な英訳とともに、この協会に会報に掲載され、初めてこの作品が世界中の読者に届けられたのである。その意味で、ディクソンは『方丈記』が世界文学に仲間入りするための基礎を築いた人物であったとも評価できる。日本の文学作品が海外に普及していなかった時代において、ディクソンの貢献は大きなものであったであろう。

一方、ディクソンの『方丈記』理解は、漱石の「英訳方丈記」をもとにして形成されたため、漱石と類似するところが多かったのである。本論の第 4 章で後述するように、ディクソンは『方丈記』を自然文学作品として捉え、長明を英詩人ワーズワースと比較検討を試みた。しかし、ディクソンのこのような捉え方は、当時の西洋に主流であったオリエンタリズム的な考え方の影響下で形成されたのである。それ故、ディクソンが長明をワーズワースと比較した際、前者を批判の対象にしたのである。

これまでの議論を踏まえて、次章では夏目漱石の「英訳方丈記」に焦点を絞り、漱石の英訳の特徴について考察すると同時に、その英訳から漱石のいかなる翻訳思想が伺えるのかについて検討を加えることにする。

第3章 夏目漱石の『方丈記』論—その特徴と形成について

はじめに

今までの考察の中で、『方丈記』の成立から明治中期頃に至るまで本作品がどのように受容されたかについて検討を行った。また、それがいかにして海外に伝播したのかについても論じてきた。特に、ディクソンの伝記を整理した上で、彼がどのようにこの作品に出会ったのかを中心に考察した。東洋の文化や社会に関心を抱いていたディクソンは長期間日本で活動する中で、『方丈記』に興味を寄せるようになった。そこでディクソンは、この作品をより深く知るために、自身の教え子であった夏目漱石にその英訳を依頼した。ディクソンの依頼を受けた漱石は『方丈記』を部分的に英訳し、同時に独自の文学的な思想を綴った短いエッセイ（以下、便宜上漱石の英訳とエッセイを「英訳方丈記」と記す）も執筆して彼に提出した。これが『方丈記』の最初の外国語訳である。海外における日本文学の進出が決して盛んではなかった時代に、漱石の「英訳方丈記」は重要な意義を持ち、『方丈記』が世界文学の仲間入りする背景にも大きな役割を果たしたと言える。

漱石の「英訳方丈記」は、日本文学作品の外国語訳としては最も早く行われたものの1つであり、この英訳は日本文学の海外伝播において先駆的なものであった¹。この英訳の綿密な考察は漱石の文学思想のみならず、『方丈記』の海外における受容を考える上で重要である。それにも関わらず、漱石の「英訳方丈記」に関して現在までに十分に検討が行われてきたとは言いがたい。後述するように、国内では「英訳方丈記」に関していくつかの先行研究があるものの、その数は未だ少なく、国内外ではこの英訳はほとんど無視されてきたと言っても過言ではない。

「英訳方丈記」はなぜ軽視されてきたのであろうか。その背景には様々な要因があると考えられる。下西善三郎は、漱石の門下生が「英訳方丈記」を軽視したことをその理由の一つとして挙げている²。漱石の優れた創作活動に対し、この英訳は単なる「訳業」として見なされてきたという。それには、翻訳作品は決して創作ではないという見方、いわゆる翻訳の

¹ 西洋人による日本文学作品の英訳の中で古いものとしては、フレデリック・ヴィクター・ディキンズの *Hyakunin Isshu*（『百人一首』1866年）、*Chushingura, or The Royal League. a Japanese romance*（『忠臣蔵』1875年）、*The Bamboo-Hewer's Story or The Tale of Taketori*（『竹取物語』1875年）、チェンバレンの *Kojiki*（『古事記』1883年）、アーネスト・サトウの *Nishonshoki*（『日本書紀』1889年）などが挙げられる。日本人による英訳の中では末松謙澄が1885年に部分的に行った『源氏物語』の英訳などが代表的である。この問題に関しては、Donald Keene「日本古典文学の翻訳について」（国際日本文学研究集會會議録6、国文学研究資料館1983年、28-42頁）が詳しい。

² 小宮豊隆の「英訳方丈記」に対する態度について、下西は「日本文学における若き漱石の秀逸を示すエピソードの一つを述べるために、この『方丈記』英訳の件を利用しているに過ぎない。」と述べ、これはそれ以後も受け継がれてきたと指摘している。詳細は、下西善三郎「漱石と『方丈記』」（日本文学、1983年、23頁）を参照。

恥 (shame of translation) という認識が関係していたかもしれない³。漱石の門下生の一人であり、漱石没後『漱石全集』の編集作業に深く関わった小宮豊隆 (1884-1966) はこの英訳について次のように述べている。

解説付きの「方丈記」英訳は、これまでの全集の別巻の中に置かれていたものである。是は明治二十四年十二月八日日付を持っている。是には当時の文科大学教師ジェームス・メイン・ディクソンが朱を入れ、激稱の評語を書いているが、ディクソンはこれを基礎として、明治二十五年二月十日の『日本アジア協会』の例会で“Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel”の題下に講演を試み、且つこの英訳に多少の田を入れたものを朗読している。さうして是は、“A Description of my Hut”と改題されて、ディクソンの名前で、明治二十六年『日本アジア協会会報』に、講演とともに掲載され、その初めにディクソンは、この翻訳の原稿解説・並びに翻訳の細部の説明に関しては、文科大学の英文学科学生夏目金之助君の、価値ある助力に俟つ所甚大であったと書いた。おそらく漱石はディクソンから頼まれて、是を翻訳し、是を解説したに違いない⁴。

上記引用文が漱石の「英訳方丈記」に対して小宮が『漱石全集』に加えた解説の全てである。『漱石全集』は、大正 6 年 (1917) に刊行が開始されてから版を重ね、漱石の没後 20 回忌を機にその決定版が出版された。これまでの『漱石全集』に収録された漱石のマイナーな業績である学生時代のエッセイや翻訳、断片などに関しては一切の解説が付されていなかった。しかし、昭和 10 年 (1935) から出版され始めたこの決定版全集の第 14 巻には「英訳方丈記」をはじめ学生時代のエッセイなどに対する初めての解説が施された。上記引用文は、その決定版に掲載された「英訳方丈記」に関する解説である。

漱石全集刊行会にとって学生時代の漱石の業績などは優先順位が低かったであろうことが推測できる。なぜなら、『漱石全集』が出版され始めてから約 20 年間経て、はじめて漱石の学生時代の業績に解説が施されたからである。ただし、ようやくこのようなマイナーな作品に対して解説が加えられたといっても、それは上記の引用文の通り短い文章にとどまるものであった。この解説文の分量からすれば、漱石全集刊行会、とりわけ『漱石全集』の編集作業に深く関わり、この解説を書いた小宮にとって「英訳方丈記」は漱石の重要な業績の一つではなかったのだろう。この英訳に対して小宮が示した姿勢は、後代において江藤淳や荒正人など漱石研究者として名高い人物にも引き継がれることとなったのである⁵。

³ Barnstone, Willis. *The poetics of Translation: History, Theory, Practice*. London: Yale Univ. Press, 1993, p.9.

⁴ 小宮豊隆「解説」『漱石全集 第十四巻』(漱石全集刊行会、昭和十一年九月十日、891-892 頁)。

⁵ 江藤淳は「金之助が特にディクソンと親しかった形跡は皆無であるから、彼が『方丈記』の英訳を依頼されたのは学力が一頭地をぬきこんでいたためと考えるのが順当である。」と述べている。荒正人は「〔明治二十四年〕十二月、ディクソンの依頼で、『方丈記』を英訳する。」と指摘するのみで

「英訳方丈記」への関心の乏しさの背景には、漱石が作家として登場する以前にこの英訳が行われたという理由もある。漱石が学生時代に執筆したエッセイなどについては、それを対象にした研究が最近まで見られなかったことから分かるように、これまで注意が払われてこなかったのである。さらに、英文者としての漱石に対する不十分な評価は、この英訳への無関心のもう一つの理由である。漱石自身は大学で英文学を専攻し、大学でしばらくの間英文学を教えていたにも関わらず、最近まで英文学者としてはあまり評価されてこなかった⁶。しかし、「英訳方丈記」の文章からも明らかなように、既に大学在学中の漱石の英語能力が非常に高かったことは容易に見て取れる。もちろん、漱石の高い英語能力は彼の文学批評を論じた著書などからも確認できる。

いずれにせよ、漱石の「英訳方丈記」についてこれまで十分な検討が行われてこなかったため、漱石および『方丈記』の両方の研究領域には多くの疑問が残されてきた。例えば、漱石はなぜ仏教ないし無常文学として長く読まれてきた日本中世期の『方丈記』を、西洋のロマン主義的な自然文学作品として解釈したのだろうか。漱石の『方丈記』論の形成において、彼の英文学の先生であったディクソンはどのように関わったのだろうか。また、漱石は翻訳という行為をどのように捉え、いかなる手法をもって『方丈記』を翻訳したのか。一方で、『方丈記』研究の視点から、漱石の『方丈記』論は、海外における本作品の受容にいかに影響を与えたのか、その詳細も未だ明らかではない。「英訳方丈記」の検討を通じてこのような点を議論することは、漱石自身についての理解を一層深め、西洋における『方丈記』の受容の過程を明らかにすることに大いに寄与するものと考えられる。また序論で示したように、このような問題を取り上げることで、あらゆる文学活動はいかに作者が置かれた個別具体的な状況および対象読者の存在との相関関係の中で形成されるのかが見えてくるのである。

以上を踏まえ、本章では先行研究について言及した上で、「英訳方丈記」の分析・考察を進める。また、英訳と原文との比較から、漱石の翻訳手法や思想を明らかにしつつ、漱石が抱いた鴨長明像についても検討することにした。

ある。江藤淳『漱石とその時代・第1部』（新潮社、1970年、209頁）。荒正人『漱石研究年表』（集英社『漱石文学全集・別巻』、1974年、80頁）。

⁶ 近年、英文学者漱石について次のような著書がある。塚本利明『漱石と英文学：「漾虚集」の比較文学的研究 改訂増補版』（彩流社、2003年）。亀井俊介『英文学者夏目漱石』（松柏社、2011年）。塚本利明『漱石と英文学2』（彩流社、2018年）。

第1節 先行研究について

「英訳方丈記」を対象とした先行研究の中で、下西善三郎の諸論文は最も詳しいものである⁷。1983年に下西が執筆した論文「漱石と『方丈記』」は、漱石が執筆したエッセイを中心に扱ったものであり、漱石による独特の「文学論・作家論」をはじめとして、漱石がいかに自身の個人的な状況を長明の中に見出そうとしたかを論じた。また、1990年に発表された「夏目金之助の英訳『方丈記』に使用せる本文—漱石と方丈記(二)」では、先行研究を踏まえて漱石が英訳のために『流水抄』及び『新注方丈記』の二著を底本にしたという重要な指摘がなされている。1994年に相次いで発表された「漱石「方丈記小論」私注(一)」、「漱石「方丈記小論」私注(三)」及び「漱石「方丈記小論」私注(四)」という一連の論文では、漱石のエッセイに対する詳しい注解と考察を提示している。「私注(一)」では、主にディクソンから漱石への翻訳依頼の諸問題が議論の対象となっている。「私注(三)」と「私注(四)」では、英文のエッセイの和訳に注解を施し、漱石が指摘した「自然と人間」の問題などについても見解を示している。とりわけ「私注(四)」では、漱石のエッセイに含まれている長明の短い伝記に関して、それは漱石の文学観そのものを示すものであり、作品を理解する上で作者の伝記は重要ではないという漱石のテキスト論的な主張が見られると指摘している。同時に、漱石のエッセイの大部分を占める独自の文学思想についても、帝国大学におけるディクソンの文学の教え方に不満を抱いていた漱石の小さな反発として読み取ることができることも指摘した⁸。

今西順吉は『漱石文学の思想—自己形成の苦悩 第一部』において、作家になる前の漱石が示した『方丈記』の独特な批評に着目した。今西は特に漱石が問題とした「天才論」を取り上げ、漱石が活躍した当時の英文学との比較を通じて考察を行った⁹。一方、増田裕美子は、学生時代の漱石の『方丈記』英訳の影響が『倫敦塔』や『草枕』等の名作にも見られ、漱石にとって長明の生き方は理想的なものであったことを指摘した。また、漱石とディクソンの関係について、漱石のエッセイの内容はディクソンが発表した長明とワーズワースの比

⁷ 下西善三郎による漱石の『英訳方丈記』に関する諸論文は次の通りである。「漱石と『方丈記』」(『金沢大学国語国文』21、1983年、86-87頁)、「夏目権之助の英訳『方丈記』に使用せる本文—漱石と方丈記(二)」(『深井一郎教授退官記念論文集』、1990年、164-174頁)、「漱石「方丈記小論」私注(一)」(『日本語と日本文学』20、1994年、1-11頁)、「漱石「方丈記小論」私注(三)」(『上越教育大学研究紀要』13(2)、1994年、243-253頁)、「漱石「方丈記小論」私注(四)」(『上越教育大学国語研究』8、1994年02月、1-14頁)、「古典文学の受容における漱石・龍之介の位置」(『上越教育大学研究紀要』23(2)、2004年、1-13頁)。

⁸ 現存する漱石の記述において、ディクソンに関する言及は『私の個人主義』の中にしか見られないが、そこで漱石はディクソンの英文学の教え方に不満を感じていたことを述べている。夏目漱石「私の個人主義」(『夏目漱石全集 第11巻』岩波書店、1996年、440-441頁)。

⁹ 今西順吉『漱石文学の思想 第一部』(筑摩書房、1888年、231-238頁)。

較検討を行った論文の内容には反映されていないと主張している¹⁰。上記以外にも、これまでに行われた『方丈記』の代表的な英訳を取り上げて、それぞれの英訳の比較検討を行い、訳者らの『方丈記』の理解について研究した先行論文がいくつか存在する¹¹。

以上が管見の限り漱石の『方丈記』英訳に関連する代表的な研究である。上記の通り、漱石の英訳に関しては少なからず研究はあるものの、英語圏における『方丈記』の受容の視点からそれを論じた研究はない。先行研究の中では、特に下西善三郎の論考が漱石の英訳の諸側面を理解するために有益であるが、第1章で見たように『方丈記』の受容のされ方を考慮した上で論じられたものではない。同じく、漱石研究の観点から、「英訳方丈記」を通じて漱石の翻訳思想の特徴を掬い取ろうとした研究も見られない。本章では、そのような課題を中心として検討を加えることにする。そこで第2節では、ディクソンから漱石に英訳の依頼が行われた経緯や背景について確認し、漱石にとって『方丈記』がいかに関与した存在であったのかを考察する。第3節では、漱石が書いたエッセイと『方丈記』英訳の内容を、漱石が置かれた同時代的状況を踏まえつつ分析し、漱石の『方丈記』論の特徴とその形成過程を解明する。第4節では、「英訳方丈記」から漱石のどのような翻訳思想が看取できるのか、それまでの考察を通して導くこととする。

第2節 夏目漱石と『方丈記』の関係について

2.1 ディクソンによる『方丈記』英訳の依頼

漱石は、1890年に東京帝国大学に新設された英文学科に唯一の学生として入学し、2年生の時『方丈記』を英訳した。このことについて小宮豊隆(1884-1966)は回想して次のように述べている。

恐らく、ディクソンから頼まれて『方丈記』を英訳し、その初めに実に要領を得た解説を書いた。それにディクソンは、“excellent performance”という賛辞を呈したのみならず、是を基礎として“Chomei and Wordsworth. A Literary Parallel”といふ題で、明治二十五年（一八九二）二月十日の『日本亜細亜協会』の例会で公演を試み、この

¹⁰ 増田裕美子「夏目漱石と『方丈記』」（磯水絵編『今日是一日、方丈記』（新典社、2013年、94-107頁）。また、増田裕美子著『漱石のヒロインたち—古典から読む』（新曜社、2017年、123-128頁）も漱石の「英訳方丈記」について詳しい。

¹¹ 『方丈記』の英訳の比較研究について、次のような研究が挙げられる。矢部義之「語発想法の比較研究：ドナルド・キーンと郡山直による方丈記の英訳に関して」（亜細亜大学教養部紀要 5、1970年、112-93）、森川隆司「英訳方丈記—漱石、ディクソン、そして熊楠」（工学院大学共通課程研究論叢（30）、1992年、125-136頁）、松岡信哉「英語訳『方丈記』比較研究：比喩表現と話法の問題について」（龍谷大学大学院研究紀要、人文科学 19、1998年、51-62）、松本寧至「夏目漱石英訳『方丈記』をめぐる：漱石と長明」（大学院紀要 13、1999-03、3-26頁）、坂本文利の「『方丈記』序段の英訳についての一考察—漱石・熊楠・キーン 比較の試み—」（大分大学、国語の研究 28、2002年、21-30頁）。

訳文にいくつかの手を入れたものを朗読し、後この訳文は“A Description of My Hut”と改題されて、ディクソンの名前で、明治二十六年（一八九三）の『日本垂細垂協会会報』に、公演とともに掲載されたが、その初めにディクソンは、この翻訳の原稿・解説並に翻訳の細部の説明に関しては、文科大学英文科学生夏目金之助君の、価値ある助力に俟つところ甚大であったと書いている¹²。

小宮の指摘から、漱石の『方丈記』英訳の直接的なきっかけが、ディクソンからの依頼であったことが分かる。漱石の「英訳方丈記」のタイトルは A Translation of Hojio=ki with a Short Essay on It である¹³。その題目の通り、漱石は『方丈記』の英訳とともに6頁程の短いエッセイも執筆して英訳と一緒にディクソンに提出した。ディクソンがいつ漱石にこの翻訳を依頼したのかを知り得る情報はない。『漱石全集』に収録された「英訳方丈記」に記載された日付によれば、漱石は1891年12月5日にエッセイを完成させ、同年12月8日に英訳を完成させた。この日付を素直に受け取れば、エッセイが完成されてから3日後に翻訳が完成されたような印象を受けるが、漱石はエッセイの中で、翻訳作業を遂行するのにいかに苦勞したかを述べていることから、エッセイが執筆された時点では既に英訳が完成していたと推測できる¹⁴。すなわち、漱石は1891年12月8日に既に完成していた『方丈記』の英訳とエッセイをディクソンに提出したのである。漱石がどれほどの時間をかけてこの英訳を完成させたのかは不明である。しかし、「英訳方丈記」の英文の質は高く、漱石がこの頃大学2年生に在学していたことを考えると、おそらくある程度の時間を割いて完成に至ったのだろう。

漱石にとって、このエッセイは重要な意味をもつと考えられる。というのは、この短いエッセイの中で、漱石は文学や翻訳などの根本的な問題に対する独自の考えを示しているからである。その内容を分析することは、青年期の漱石の文学思想を明らかにするだけでなく、その思想的な萌芽がその後どのように成熟し、発展して将来の漱石の思想に結びついていったのか、その理解を深める上でも有益である。ところで、漱石の『方丈記』の英訳は部分的

¹² 小宮豊隆『夏目漱石』（岩波書店、1938年、219頁）。

¹³ 〈付録7、41-43頁〉を参照。

¹⁴ 下西が指摘しているように、「英訳方丈記」の一部をなすエッセイの日付は1891年12月5日と記され、英訳の表紙には1891年12月8日と記されているが、英訳が3日間で完成できるはずがない。また、エッセイの描写の中に「私はこの小品の英訳を行うにあたり、日本語の構造をできるだけ原文のままに残すために苦心した。」（和訳は筆者による。原文は次の通りである。In rendering this little piece into English, I have taken some pains to preserve the Japanese constriction as far as possible.）という文章からも分かるように、エッセイの執筆時点で英訳は既に完成されており、エッセイと英訳の最終的な確認のために3日間手にとどめた後3日後の1891年12月8日にディクソンに最終版が提出されたと思われる。詳細は、下西善三郎「漱石「方丈記小論」私注(一)」(『日本語と日本文学』20、1994年、5-6頁)を参照。

なものであった。後で詳述するように、漱石は原資料として利用した『方丈記』の著書に含まれる全ての本文を英訳の対象とはしなかったのである。

漱石は『方丈記』を英訳するにあたり、少なくとも2つの異なった原資料を参考にしている¹⁵。それらは、第1章でも触れた江戸中期に出版された『方丈記流水抄』（1719）という注釈書と、漱石が英訳を行う約半年前に出版された武田信賢注・関根正直訳『新注方丈記』（1891）である。漱石はなぜこれらのテキストを利用したのだろうか。おそらく、その背景にはこれらの著書の出版時期と内容があったと思われる。すなわち、『方丈記流水抄』が出版されたのは1719年のことであり、『新注方丈記』は漱石の英訳の約半年前の1891年6月15日までは刊行されていなかった。しかし、漱石が『新注方丈記』が出版される以前から『方丈記』を精読していたことは知られており、そのため『新注方丈記』が出版される以前には彼は『方丈記流水抄』を読んでいたと思われる¹⁶。

次に考えられるのは、それぞれの原資料の内容的な差異である。『新注方丈記』は読みやすく翻訳しやすいが、解説や注釈は非常に少なく、この作品の完全な理解には不十分である¹⁷。一方で、『方丈記流水抄』は『方丈記』の諸注釈書の中でも、特に豊富な注釈や解説を含んだ書物であり、『方丈記』の内容を細かく追いかけるのに最適である。このような事情から、漱石は『方丈記』を詳しく理解しながら、完璧な英訳を完成させるために2つのテキストを底本にした。とりわけ、『方丈記流水抄』は漢籍や仏典などからの引用が多く、一般読者にとっては読みづらいが、優れた漢文能力を持ち、漢籍に詳しかった漱石にとっては、むしろ当然の選択であったかもしれない。底本を選択した理由は定かではないが、漱石が2種類のテキストを底本にして英訳を行ったことは確かである。複数のテキストを底本にした理由は、言うまでもなく、良い英訳を完成させるためであり、このことから漱石にとってこの訳業がいかに重要な作業であったのかが看取できる。また、漱石が書いたエッセイからもこのことが窺える。ディクソンは漱石に『方丈記』の英訳を依頼したが、エッセイの執筆ま

¹⁵ 下西善三郎「夏目金之助の英訳方丈記に使用せる本文—漱石と『方丈記』」（深井一郎教授退官記念論文集、1990年、165-174頁）。

¹⁶ 荒木浩は、禅の本としての『方丈記』を論じる中で、夏目漱石がいかに『新注方丈記』が出る前に禅的な特色を持つ『方丈記流水抄』を精読したのかについて述べている。詳細は、荒木浩「禅の本としての『方丈記』—『流水抄』と漱石・子規往復書簡から見えること—」（天野文雄監修『禅からみた日本中世の文化と社会』、ペリかん社、2016年、218-222頁）を参照されたい。

¹⁷ 『新注方丈記』が出版された時、本書を紹介した新聞記事に「行川の流は絶えずしてしかも本の水にあらず。今たび又方丈記の新注出たり。淀みに浮かぶうたかたの且消え且結びて是まで世にありふりしも少からぬとおるが、新しきハ新しき丈おもづから未発の言もありて初学に冪(べき)する鮮きにあらざるべし」という紹介文がある。この紹介文からすると『方丈記流水抄』の豊富な注釈は比べものにならないことが分かる。引用は、「新刊情報」（『東京朝日新聞 朝刊』、1891年（明治24年）7月3日、3頁）より。

でも指示したとは考えにくい¹⁸。加えて 6 頁に及ぶこのエッセイの大半は『方丈記』ないしは長明に直接関係するものではなく、漱石独自の文学に対する考えを示した内容である。この点を考慮すると、漱石は自らの文学的思想を提示する絶好の機会と自ら判断しこのエッセイを書いたと推測できる。漱石が学生という立場であったことからすれば、これは十分にあり得ることである。彼はこの機会を十分生かし、独自の文学思想を述べたエッセイをディクソンに提出してアピールしようとしたのである。

2.2 漱石の『方丈記』への関心について

従来、漱石は古典文学にあまり興味を持っていなかったと指摘されてきた。この点については、漱石自身による次の言説からも窺い知れる。

一体に自分は和文のような、柔らかいだらだらしたものは嫌ひで、漢文のような強い力のある、すなわち雄勁なものが好きだ。また、写生的のものも好きである。けれども、俳文のような、妙に凝った小刀細工的のものは嫌ひだ、俳文は気どらないようで、ひどく気どったものである。これを喜ぶのは、丁度楽隠居が古茶椀一つをひねくって嬉しがるのと同じことだ。いたずらにだらだらした『源氏物語』、みだりに調子のある「馬琴もの」、「近松もの」、さては『雨月物語』なども好まない。「西鶴もの」は読んでおもしろいと思うが、さて真似る気にはなれぬ。漢文も寛政の三博士以後のものはいやだ。山陽や小竹のものはだれていていやみである。自分は嫌ひだ¹⁹。

漱石の言葉をみれば、彼が日本の古典文学にさほど興味をもっていなかった印象を受けざるを得ない。彼は漢文のような力強い表現の仕方を好む一方で、和文で書かれた『源氏物語』や江戸期の作品などはあまり好まなかった。他の明治期の文人と同じく漱石も漢文学の教養を身につける環境の中で育てられ、漢文に強い関心を抱いていたことは知られている。学生時代から漱石が漢詩を作成し、漢学との関わりがその後も継続されていたことについては最近の研究でも注目されている²⁰。しかし、漱石が古典文学に全く無関心であったかということ

¹⁸ 下西はディクソンの翻訳依頼の範囲について「しかし、おそらく、「A Short Essay」は、漱石個人の意志にでるものではあるまいか。」と述べている。詳細は、下西善三郎「『方丈記小論』私注（一）」（『日本語と日本文学』20号、筑波大学、5頁）を参照。

¹⁹ 夏目漱石「余が文章裨益せし書籍」（『漱石全集 第25巻』、明治三十九年三月十五日『文章世界』1巻1号）、157頁より引用。

²⁰ 漱石と漢文学の関係については次の研究が詳しい。清水茂「漱石と漢文学」（国文学 解釈と教材の研究 24(6)、1979年、39-45頁）、加藤二郎「漱石と漢文学（田中唯教授退官記念号）」（外国文学 28）、1980、1-16頁）、高継芬「漱石作品が漢文学から受けた影響」（九州看護福祉大学紀要 14(1)、2014年、3-13頁）。

そうでもない。最近の研究によると、漱石自身が古典文学から大きな影響を受けていたことが確認できる。

島内景二によれば、漱石は学生時代に『源氏物語』や『徒然草』、そして『伊勢物語』などの古典作品を読み、その影響から彼の人生観が形成されているという²¹。大学時代に、漱石は正岡子規から『源氏物語』を連想した俳句を贈られたことを契機に、自らもそれを題材にして俳句を詠んでいたとともに、晩年の名作『門』には『源氏物語』の影響を読みとることができるという。他にも、高校時代の漱石が執筆した作文の中には『徒然草』の影響も見られ、漱石の作った俳句には『百人一首』や『伊勢物語』など古典作品の痕跡を示唆するところが数多くある²²。すなわち、漱石自身が古典文学は好きではなかったと述べたとしても、古典作品を全く読んでいなかったという訳ではない。

いずれにしても、漱石にとって古典名作『方丈記』が憧れの作品であったことは間違いない。漱石は、英訳を行う前からこの作品を精読していた。このことは、ディクソンの指示を受けて『方丈記』を英訳する約1年前の1890年8月9日に正岡子規に宛てた書簡に見ることができる。この書簡には次のような記述がある。

此頃は何となく浮世がいやになり、どう考へても考へ直してもいやでいやで立ち切れず、去りとて自殺するほどの勇氣もなきはやはり人間らしき所が幾分かあるせいならんか。ファウストが自ら毒薬を調合しながら口の辺まで持ち行きて遂に飲み得なんだといふゲーテの作を思ひ出して自ら苦笑ひ致。(中略) 知らず、生れ死ぬる人何方
(いづかた)より来りて何かたへか去る。またしらず、仮の宿誰がために心を悩まし
何によりてか目を悦ばしむる、と長明の悟りの言は記憶すれど悟りの実は迹方なし²³。

(下線は引用者による)

この書簡は漱石が眼病により読書も執筆活動もできない状態であることを述べたものであるが、下線部に示した箇所は『方丈記』からの引用文である。第1章で述べた通り、『方丈記』は明治期から高等教育の教科書に掲載されていたため、高等教育を受けた人は本作品について知っていたと言えるが、この作品に相当な興味を持たない限りその文章を引用するまでにはいかないだろう。ここから、漱石が英訳を行う前からこの作品に強い関心を持っていた

²¹ 島内景二著『文豪の古典力：漱石・鴎外は源氏を読んだか』（文春新書、2002年、20-42頁）。

²² 島内景二著『文豪の古典力：漱石・鴎外は源氏を読んだか』（文春新書、2002年、43-58頁）。漱石の日本古典文学との関係について、水川隆夫『漱石の京都』（平凡社、2001年、183-240頁）、下西善三郎「古典文学の受容における漱石・龍之介の位置」（『上越教育大学研究紀要』第23巻第2号、2004年、853-850頁（4-7頁））や、キース・ヴィンセント・北丸雄二訳「紫と白：子規と漱石にとっての「源氏物語」」（「京都漱石の會」の会報『虞美人草』第18号、2016年、8-12頁）なども詳しい。

²³ 和田茂樹編『漱石・子規往復書簡集』（岩波文庫、2002年、53頁）参照。

たことがわかる。では、なぜ漱石は『方丈記』に関心を持ったのだろうか。この背景については、これまでに様々な検討がなされてきた。

重松泰雄は、明治日本の国家的エリートとしての重圧とディレンマや、漱石の父直克によって塩原家から強引に買い戻されることによって生じた複雑な心情が強い厭世的感情を吐露した原因であったと指摘する。また、兄嫁への一方的な恋や秘められた「性の衝動」などを、彼の厭世主義の理由に挙げ、自らの姿を最終的には長明の置かれた状況の中に見出したと述べている²⁴。そしてその過程で漱石は自身の状況を長明の人生に照らし合わせたという。また、漱石が世を厭い、長明のように世捨て生活を送ることへの憧れを持っていたという指摘もある²⁵。下西によれば、学生時代の漱石が関心を寄せた英文学者が「自然と人間」というテーマに注目したため、彼自身もそれに影響を受けて自然への憧れを持つことになり、長明と自然の関係を自身の文学思想の軸としたという²⁶。漱石の個人的な状況が彼の『方丈記』への関心にどれほど影響を与えたのかは推測の域を出ないが、『方丈記』が漱石にとって重要な作品であったことに間違いはない。なぜなら、『方丈記』の痕跡は彼の諸作品に確認できるからである。

漱石は学生時代に限らず、それ以後も『方丈記』に対して特別な関心を抱き続けていた。荒木浩は、漱石が正岡子規没後に書いた追悼文に、『方丈記』を象徴する「水の泡」や「定住不懐」などの言葉を繰り返し援用したことについて指摘している²⁷。大学時代の漱石は子規に宛てた書簡で『方丈記』を引用したと述べたが、子規が没した後も、亡き親友を悼んで同じ『方丈記』の内容を思わせる文章を選んで追悼したのである。また、漱石の作品のいくつかが『方丈記』から直接的に影響を受けたことも指摘されている。増田裕美子は、『方丈記』の英訳から 13 年後、漱石がイギリス留学の際に訪れたロンドン塔に着想を得て執筆した短編小説『倫敦塔』に、『方丈記』の表現方法を再現したものがあることを指摘している²⁸。『倫敦塔』の冒頭にある「「塔」を見物したのはあたかもこの方法に依らねば外出の出来ぬ時代の事と思う。来るに來所なく去るに去所を知らずと云うと禪語めくが、余はどの路を通って「塔」に着したかまたいかなる町を横ぎって吾家わがやに帰ったかいまだに判然し

²⁴ 重松 泰雄「文科大学時代—その希求と煩悶」（国文学 解釈と教材の研究 34(5)、1989-04、44-50 頁）を参照。

²⁵ 松本憲至「夏目漱石英訳『方丈記』をめぐって—漱石と長明」、（大学院紀要第 13 集、1999 年、二松学舎大学大学院、文学研究科、18 頁）。

²⁶ 下西善三郎「漱石「方丈記小論 私注（三）」（『上越教育大学研究紀要』第 13 号、1994-03、243-253 頁）を参照。

²⁷ 荒木浩「禅の本としての『方丈記』—『流水抄』と漱石・子規往復書簡から見えること—」（天野文雄監修『禅からみた日本中世の文化と社会』、ペリかん社、2016 年、226-227 頁）。

²⁸ 増田裕美子『漱石のヒロインたち—古典から読む』（新曜社、2017 年、123-128 頁）。また、増田裕美子「夏目漱石と『方丈記』」（磯水絵編『今日是一日、方丈記』（新典社、2013 年、94-107 頁）を参照されたい。

ない。」という文章に見られる下線部の表現は、『方丈記』にある「不知、生れ死る人、いづかたより来りて、いづかたへか去る。又、不知、仮のやどり、誰が為にか心をなやまし、何によりてか目を悦ばせむる。」という記述に類似しているとされる。

さらに、1906年に漱石が発表した名作『草枕』にも『方丈記』に類似した部分がある。荒木浩は『草枕』の冒頭文が『方丈記』の内容と類似していることを示した上で、「単語レベルの類似ばかりではない。両者（筆者注：夏目漱石と鴨長明）は、ダブルバインドの状況を積み重ねて住みにくいことの世を嘆じ、詩や絵という芸術を産み出していく理論と構文そのものが酷似している。『草枕』の右引用部の後半などは、その文体と論法をたてに、パロディめいた物づくしになっている。」と述べている²⁹。荒木の論によれば、『草枕』に採用された一人称の叙述方法が『方丈記』のそれと同じであるのみならず、前者に含まれた年齢観も『方丈記』に依拠したものであるという。

したがって、漱石自身が古典文学作品に関心を持っていなかったと自ら述べたとしても、彼が様々な古典作品を読み、中でも『方丈記』に関しては強い興味を持っていたことに相違はない。

第3節 漱石の『方丈記』論とその周辺

前節の検討から、漱石にとって『方丈記』が特別な作品であったことがわかった。それを踏まえて本節では「英訳方丈記」の内容を分析し、それを通じて漱石による『方丈記』の理解を明らかにしつつ、彼が長明に対してどのような人物像を抱いていたのかについて考えてい。

3-1 新しい『方丈記』論の枠組み

『方丈記』の長い受容史を概観すると、読者はこの作品の中の特に3つのテーマに注目したことがわかることは、既に第1章で述べた。その1つは、仏教的な無常思想の視点からこの作品を解釈する立場である。すなわち、この作品に描写された五大災厄が、現世における人間と住家のはかなさを象徴したものとして捉え、このことを悟った長明は、現世の辛さを避けようとして仏の道を選んで隠遁したという解釈である。次に挙げるのが、災害文学の作品としての捉え方である。『方丈記』では半分以上を費やして五大災厄が描写されており、このテーマは中世時代から注目されて続けてきた。最後は、隠者文学としての捉え方である。

²⁹ 荒木浩は『草枕』の冒頭文である「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくい」と悟さった時、詩が生れて、画が出来る。」は『方丈記』の「すべて、世のありにくきこと、我身と、栖すまとの、はかなくあだなる様、またかくのごとし。」の描写に酷似していると指摘している。荒木浩「『方丈記』と『徒然草』—〈わたし〉と〈心〉の中世散文史—」（『中世の随筆—成立・展開と文体』、竹林舎、2014年、261-273頁）。

『方丈記』では、長明が後半部分で自身の日野山における隠逸生活を詳しく描写しており、この閑居のテーマも早くから指摘されてきた。とは言っても、これらの3つの受容のありようは、あくまでも便宜上の分類であり、内容的に重なる部分もある。例えば、仏教的な無常思想と災厄に関する考えは密接に関係しており、『平家物語』や『ひとりごと』などは震災を仏教思想の視点から捉えている。同じく、仏教思想と隠遁習慣もお互いに無関係であるとは言いがたい。しかし、『方丈記』の従来の解釈の仕方から考えれば、上記の大きく3つの解釈は主流であると言えよう。しかし、漱石はこれらの解釈を踏襲せず、これまでに存在していなかった新たな解釈を提唱したのである。

まず、漱石は『方丈記』を論じるために必要な土台を作り、その土台に沿って自身の『方丈記』論を展開している。その土台は、文学を考える時にどうしても直面しなければならない課題である作者と作品といった本質的な概念に及ぶもので、それに対する問題提起からこのエッセイを書き起こしている。全部で6頁程度に及ぶエッセイの半分以上は、漱石自身の文学的思想に関係する内容であり、『方丈記』に直接的に関連する内容は後半にわずかしか含まれていない。エッセイの前半の内容は、一見すると本題である『方丈記』を論じる前の「序文」に該当するものであるかのように思われるかもしれない。しかし、その内容をよく分析してみると、これは漱石の『方丈記』解釈のために必要な土台であったことがわかる。

というのは、その描写の中で漱石は自身の『方丈記』論の枠組みを提示し、その枠組みをベースにして『方丈記』の解釈を提唱しているからだ。漱石のエッセイは次のような書き出しから始められている。

天才の手になる文学作品はすべてを包含している。それは鏡のようなもので、自分自身のイメージが驚くほど正確に映し出されている。(中略) それに対して、才人の作品は、中身がない。そこには、巧みなことばがみごとに連ねられ、洗練された感情が巧みに散りばめられている。(中略) さらに、上の2種の間中に位置する第3の文学作品がある。これは、「熱狂的作品」と命名するともっとも明確に定義できるだろう。この種の書物は、あらゆる境遇のあらゆる読者を意図して書かれているわけでもない。また、才人の作品のように、暇つぶしの楽しみのために書かれているのでもない。これらは、何らかの強い確信が作者の心を満たしたあとで、文学作品の形をとるか、自然に雄弁となって、表出されたものである³⁰。(The literary products of a genius contain everything. They are a mirror in which every one finds his image, reflected with startling exactitude. ...The works of a talented man, on the other hand, contain nothing. There we find fine words, finely linked together... But then they are only set up for

³⁰ 和文は『漱石全集』より引用。特に指摘がない限り以下も同様。夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、373頁)。

show....Again there is a class of literary production which stands half-way between the above two and which will perhaps be most clearly defined by the name ‘ works of enthusiasm.’ Books of this class are not meant for all men in all conditions, as are those of a genius, nor they written from the egoistic object of being read, nor as a pastime of leisure hours, as those of a talent, but they are the outcome of some strong conviction which satiating the author’s mind finds his outlet either in form of a literary composition or in that of natural eloquence.)

この引用文に見られるように、漱石は作者と作品についての3つの類型を示した。すなわち、天才の作品 (works of genius)、才能の作品 (works of a talent)、そしてそれらの中間に位置する第3の作品である。このうち、天才の作品は最も優れたものであり、文学作品が直面しなければならない個々の読者の好みや時空的な制約を越え、いつの時代も誰にとっても楽しめるものであるという。才能の作品は、一時的に読者の注目を集めることに成功するものの、間もないうちに忘れられてしまうものである。第3の作品は、作者の心中に潜む理念が文学作品の形で自発的に浮かび上がったものである。これは、あらゆる読者層の好みや状況を越えて読まれることはないものの、天才の作品に決して劣るものではなく、少なくとも一定数の読者から注目を集めるものであるという。漱石は『方丈記』をこの第3の作品群に位置づけたのである。

漱石が提示したこのような文学的な枠組みと、その枠組みにおける『方丈記』の位置付けは、漱石の『方丈記』論において重要な機能を持っていたと言える。まず、漱石によるこの文学的な枠組みは、彼の『方丈記』解釈の下敷きとして機能し、意図的に設定されたものである。この問題については次節で詳しく説明するためここでは省くことにする。次に、大学時代の漱石が提起したこの文学的な枠組みは、『方丈記』解釈の中でのみならず、後の漱石の他の著書でも議論の対象とされ、漱石にとって重要な課題の一つになった。漱石による作家と作品の分類は、19世紀末の西洋で盛んに論じられていた人間の知的才能と想像力の関係に関する議論から影響を受けたと推測される³¹。実際に、当時天才論や犯罪人類学を最も詳しく取り扱ったチェーザレ・ロンブローゾ (Cesare Lombroso, 1835-1909) 著 *The Man of Genius* (1888) が東北大学の漱石文庫には所蔵されている。漱石文庫にあるロンブローゾの著書は1891年版であり、漱石が行った「英訳方丈記」の年と重なることに留意しておきたい³²。

³¹ Higgins, David. *Romantic Genius and the Literary Magazine: Biography, Celebrity, Politics*. Routledge, 2007. pp 12-20.

³² 例えば、1907年に著された『文学論』第5章において「天才と創造性」の問題などが詳細に論じられており、漱石は生涯を通じてこのテーマに関心を抱いていた。

漱石がいつ頃どのような経緯でこの書籍を入手し、『方丈記』英訳の際に実際に読んでいたかは現段階で不明であるが、この本に残された漱石の書き込みや下線から、彼がこの本で説明された天才論に注目していたことは確かである³³。漱石は「英訳方丈記」では簡単にしか触れなかった天才論の問題に関して大学時代から関心を持ってことと言えるだろう。また、ロンブローゾの著書で主な分析対象人物の一人であったトーマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) が漱石に大きな影響を与えたことも知られている。イギリス滞在時、漱石はロンドンのカーライル博物館を訪れ、それをふまえて「カーライル博物館」というエッセイも執筆している³⁴。しかし、創作と人間の知能の関係や、作者の能力による作家と作品の分類に関する考えは「英訳方丈記」の約 15 年後に出版された『文学論』(1907) に最も詳細に論じられている。この著書の第 5 編では、上記で説明した 3 種類の作者の想像力とそれぞれの作品の特徴について議論されているが、この内容は漱石のエッセイの内容と類似している³⁵。すなわち、『方丈記』のエッセイの中では簡単にしか言及されていなかった天才と創作の問題が、『文学論』ではある種の学説として全面的に議論されているのである。もちろん、漱石の天才論は、ロンブローゾだけでなく、イマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724- 1804) やショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) など 18 世紀・19 世紀のヨーロッパを代表した思想家より影響を受けて形成されたものであった³⁶。

次節では、このような文学的な枠組みを用いた背景・経緯についてより詳しく考察を加えるとともに、漱石の新たな『方丈記』解釈について説明する。

3-2 ロマン主義的な自然作品としての『方丈記』

漱石は『方丈記』を第 3 種類の作品に分類し、その作者である長明は天才的ではないものの、才能を持つ作家よりは優れていたと解釈した。このように解釈することで、漱石は『方丈記』を中流的な作品として位置付け、長明の芸術的な創造性に関しても中立的な姿勢を示すことができた。漱石は『方丈記』の宗教的な内容や隠遁・災害などの内容には傾倒せず、この作品を英詩人ワーズワースの示した自然観の視点から解釈しようとした。漱石が試みた

³³ 漱石が所有していたロンブローゾ著 *The Man of Genius* については、高橋 正雄の「漱石蔵書中の精神医学書--ロンブローゾの『The Man of Genius』」(日本病跡学雑誌(80)、2010、77-80 頁)、「夏目漱石の原・天才論：『漱石全集第 21 巻・ノート』の「Genius」」(日本病跡学雑誌-(82)、2011 年、87-90 頁)を参考されたい。

³⁴ 漱石とカーライルの関係に関しては数多くの研究がなされているが、最近のものとして次の論文が挙げられる。1. 小橋 孝子「カーライル博物館」考：漱石とカーライル (国語と国文学 92(8)、2015 年、38-54 頁)、石井 和夫「漱石とカーライル(<特集>疋田啓佑教授退職記念)」(香椎潟 49、2003 年、205-212 頁)、塚本 利明「漱石とカーライル--「カーライル博物館」を中心に」(専修人文論集 (67)、2000 年、41-75 頁)等を参照。

³⁵ 夏目漱石『文学論・下』(岩波書店、2007 年、225-246 頁)。

³⁶ 望月俊孝『漱石とカントの反転光学—行人・道草・明暗双双』(九州大学出版会、2012 年)。朴裕河「日本近代文学とナショナル・アイデンティティ」(博士論文、早稲田大学、2003 年)。

このような比較検討の手法において、先に見た文学的な枠組みは重要な役割を果たした。つまり、この枠組みを利用することで、漱石は長明とワーズワースを比較する際に、前者を階層順の低い地位に位置付けることができたのである。漱石は、『方丈記』に描写された長明の性格について次のように述べている。

おそらく、以下の作品はわれわれの多くにとって亡霊のように見えるかもしれない。悲憤慷慨、憤懣やるかたなく、人類から孤立し疎外された精神に耐えられる人は今日少なく、自分の似姿が映し出されているのを認めることができる人はさらに少なからうから。作者の偏狭いペシミズム、偏った人生観、社会と家族の絆の完全な放棄などに対して、哲学的反論がなられもしよう³⁷。(An apparition, possibly, the following piece [Hōjōki] may seem to most of us, inasmuch as only a few can nowadays resist its angry isolation and sullen estrangement from mankind, still fewer can recognise their own features reflected in it. Philosophical arguments too may be urged against the author's narrow minded pessimism, his one-sided view of life, his complete renunciation of social and family bonds.)

まずここで注意されたいのは、漱石の高い英語能力である。これは、1892年の段階で大学2年に在学していた漱石が書いた英文であり、その表現力の豊かさには驚かざるを得ない。それにも関わらず、最近まで英文学者としての漱石はあまり評価されてこなかった。ここで漱石は、『方丈記』が多くの人々にとって亡霊(apparition)のような作品であると述べているが、この「亡霊」が具体的にどのようなものを意味するかは不明である。この引用文の前後の記述から見れば、おそらく漱石はまず『方丈記』に対して批判的な姿勢を取り、次にこの作品がなぜ読む価値があるのかを述べるために亡霊という言葉を利用したと思われる。そうすると、この apparition とは、予期していなかった「亡霊」のように突然現れた作品という意味であろう。次に漱石はワーズワースを念頭に置きながら、長明の性格を評している。長明は「偏狭いペシミズム、偏った人生観」を持った人物で、社会における責任を負わず隠遁の道を選んだと漱石は主張する。長明の隠遁生活は、偏狭な悲観主義に満ちたもので、その行動は称賛に値しないと漱石は言うのである。

このように長明の性格を批判した上で、漱石はなぜ読者がこの作品を無視すべきではないのか、その理由を示している。『方丈記』に描かれた長明の自然主義的な描写こそがこの作品の読みどころであると漱石は言う。漱石は次のように記述している。

³⁷ 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、371(126)頁)。

それにもかかわらず、この作品は2つの理由で薦められる。第1に、真摯な、それでいて挑戦的な口調で、作者が正しい生き方を述べ、幸福の幻影を追い求めることの愚かさを表していること。第2に、かりそめにせよ、喜びのもたらすことのできるものとしての自然に対する素朴な賛美と、先人たちに見られる高貴なるものに対するしかるべき尊敬³⁸。(With all that the work recommends itself to some of us for two reasons: first for the grave but not defiant tone with which the author explains the proper way of living, and represents the folly of pursuing shadows of happiness, secondly for his naive admiration of nature as something capable of giving him temporary pleasure, and his due respect for what was noble in his predecessors.)

漱石は『方丈記』の賞賛すべきところとして主に2つの点を挙げている。第1点は、長明が現世における物質的な豊かさを避け、日野山で禁欲的かつ質素な隠遁生活を送ったことについてである。これは従来一般的な評価と重なるものである。これに対し、第2点として、長明の自然に対する素朴な憧れが挙げられたことは特に注目に価する。漱石はいわば長明を自然崇拜者として捉えたのであり、このような理解は『方丈記』の解釈として新しいものであった。これまでの『方丈記』の受容史の中で長明を自然崇拜者として捉えた指摘はなかったからである。とりわけ、漱石は『方丈記』に描写された自然的な風景を、イギリスのピクトリア朝風の自然観の視点から解釈し、長明の自然観をワーズワースのそれを念頭において理解しようとしたのである。また、漱石は『方丈記』における自然描写を、ワーズワースが提唱した自然観の視点から解釈したのである。

漱石は、長明を自然崇拜者として捉えた上で、彼の作品にロマン主義的な詩人であるワーズワースの包括的かつ汎神論的な自然観が欠けていたことを指摘している。従来、仏教ないし隠者文学の作品、あるいは災害文学作品として知られてきた『方丈記』は、漱石のこのような指摘によって初めてロマン主義的な自然文学作品と対等に比肩すべき作品として捉えられるようになった。ワーズワースと長明の比較検討を試みた漱石の「英訳方丈記」によって、これまで日本国内に閉じ込められてきた『方丈記』が世界文学へと仲間入りすることになった。序論で触れたが、ダムロッシュによると、文学作品は翻訳などを通じて発祥地を離れ、広い世界に流通することで初めて世界文学になる。しかし『方丈記』の場合は、この作品が世界に流通する前に既に世界文学になっていた。すなわち、漱石が長明をワーズワースと比較して検討を行った時点で、この作品はグローバルな性格を持ち、世界文学になったと言え

³⁸ 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、371(126)頁)。

る。その後、ディクソンという外国人が漱石のエッセイと英訳を読み、『方丈記』英訳が世界の読者に届けられ、実際に世界に流通したのである。

漱石によれば、『方丈記』はワーズワースの作品より劣っているという。漱石は長明の自然観が物理的なものであり、長明は自然の中で魂を見出そうとしなかったと批判している。これについて漱石は次のように述べている。

これほどまで断固として悲観主義的な傾向を持つ一人の男が、生命を持たぬ自然に、唯一共感の対象として目を向けるのは矛盾している。なぜなら、自然環境は、どれほど崇高で美しくても、人間の共感に共感を持って応えてはくれないからである。

(中略) ワーズワースのように、自然の中に霊的なものの存在を認めない限り、人間よりも自然を優先することはできない。のみならず、共感の対象として自然を人間と同列に置くことはできない³⁹。(It is an inconsistency that a man who is so decidedly pessimistic in tendency should turn to inanimate nature as the only object of his sympathy. For physical environments, however sublime and beautiful, can never meet our sympathy with sympathy. [...] After all, nature is dead. Unless we recognise in her the presence of a spirit, as Wordsworth does, we cannot prefer her to man, nay we cannot bring her on the same level as the latter, as our object of sympathy.)

このように、漱石は『方丈記』の従来解釈とは異なる視点から、長明にはワーズワースのように自然の中に魂を探し出そうとする姿勢がなく、彼の自然観が物理的なものであるとして強く批判したのである。ここで学生時代の漱石が西洋の考え方にいかに影響を受けていたのかがわかる。19世紀末のヨーロッパ文学では人道主義の思想(humanism)と、汎神論的な自然観(pantheism)が顕著であったが、漱石はそれと同様の立場から長明を評価しようとしたと考えられる⁴⁰。

さらに漱石は、長明の隠遁生活が無生物的な自然を頼りにしたものであったと指摘している。ただし、『方丈記』のどの部分にそれを読みとったかは必ずしも明らかにされていない。少なくともこの作品の後半にある自然描写を見る限り、漱石の指摘は適切とは言えない面がある。『方丈記』における自然的な描写と言え、長明が日野山における草庵の周辺について季節ごとに説明した次のような内容が代表的である。

その所のさまをいはば、南に懸樋あり。岩を立てて水をためたり。林の木ちかければ、爪木を拾うに乏しからず。名を音羽山といふ。まさきのかづら、跡埋めり。谷

³⁹ 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、371-370(126-127)頁)。

⁴⁰ ワーズワースを始め、19世紀の西洋文学における人間主義概念や汎神論的な思想の在り方については次の著書が詳しい。Ulmer, William Andrew. *The Christian Wordsworth 1798-1805*. New York: SUNY Press, 2001. pp. 178-179.

しげけれど、西晴れたり。觀念のたより、なきにしもあらず。春は、藤波を見る。紫雲のごとくして、西方に匂ふ。夏は、郭公を聞く。語らふごとに、死出の山路を契る。秋は、蝸の声耳に満り。空蟬の世をかなしむ樂と聞こゆ。冬は、雪をあはれぶ。積り消ゆるさま罪障にたとへつべし。若念仏ものうく讀經まめならぬ時は、みづから休み、身づから怠る。さまたぐる人もなく、また恥づべき人もなし⁴¹。(As to its surroundings: in the south, there is a pipe conducting water to a reservoir made of piled stones. Woods being near in the vine-clad Toyama, there is plenty of fruits and of logs. Though the valley is dark with thickets, it opens towards the west and thus offers much help to meditation. In spring, my sight is attracted by the wavy clusters of the Fuji (*Wisteria chinensis*) which sends its fragrant odour out of its purple clouds. In summer, the cuckoo with its doleful note puts me in mind of 'the mountain path of Death.' Autumn fills my ears with the shrill chirps of cicadas which I interpret as the dirge for life as empty as their cast-off shells. In winter I sympathize with snow because of its semblance to human sins, accumulating in depth and then melting away. If indisposed, I freely neglect to say prayers or to read sacred books (*Kyō*), without being admonished by any one for the omission. Nor have I any friend before whom I might feel ashamed for this negligence of duty.⁴²)

上記引用文は、長明が日野山の草庵の周辺を描写した内容の一部である。仮に漱石がこのような内容を念頭において、長明をワーズワースと比較し、長明の自然観が物理的なものであり、長明はワーズワースのように自然の中で霊的な存在を見出そうとしなかったと指摘したとするならば、その指摘は受け入れ難いと言えない。長明が活躍した 13 世紀の日本において、彼が憧れを持った無生物的な自然 (*inanimate nature*) そのものが宗教的な機能を持っていたことは周知の通りである。中世日本における仏教思想の観点から言えば、このような自然は極楽浄土を得るための方便であった。例えば、日本の中世期における重要な仏教概念の 1 つとして知られる「草木成仏」思想によると、その言葉通りに心を有しない草木などの非生物なども成仏の相を顕しており、浄土を得ることができる。簡単に言えば、現世における万物にはすべて成仏できる相が本来備わっているのである。その意味で、『方丈記』に描写された「紫雲のような藤波」「ホトトギスの声」「雪の積もっては消える有様」なども、長明の修行のための方便であったと解釈できる。実は、本作品に表れる「紫雲」「藤波」「四方」などは仏語であり、『方丈記』におけるこれらの言葉自体が長明にとって宗教的な意味合いを持っていたと解釈できる。少なくとも、長明が信じていたとされる鎌倉初期の天

⁴¹ 佐竹昭広・久保田淳校注『方丈記 徒然草』（新日本古典文学大系 39、岩波書店、1989 年）より。

⁴² 夏目漱石「A Translation of *Hojio-ki* with A Short Essay on It」（『漱石全集 第 26 巻』、岩波書店、1996 年、357-356 (140-141) 頁）。

台宗や浄土宗では、長明が『方丈記』に描写したこれらの自然的な風景が宗教心を喚起するためのシンボルであったことには間違いがない⁴³。したがって、漱石の上記の批判は『方丈記』が執筆された思想的背景において必ずしも正しかったわけではない。

また、漱石は長明の隠遁生活に焦点を当て、その性格を「人間嫌い」(misanthrope)であると指摘した。漱石のこの解釈も注目に価する点である。なぜなら、隠遁のテーマは『方丈記』の主題の1つであり、その受容史において特に注目されてきたものであるからだ。第4章で後述するように、漱石のこのような考えは、彼の英文学教育と関連しているように思われる。というのは、プロテスタント派を中心とするキリスト教の現世的な考え方は、19世紀の英文学に頻繁に表れたテーマであった。特にワーズワースの作品の多くは、人間を中心とした現世界におけるその活動に焦点を当てて創作されたものであり、漱石もその影響を受けたものと思われる⁴⁴。

要するに、漱石が抱いた長明像はワーズワースの自然観を評価の基準にして形成されたものであり、あらゆる面において長明はワーズワースに及ばない人物であったと捉えられている。漱石はワーズワースの自然観の視点から『方丈記』を捉えたからこそ、この作品の自然的な描写に主眼をおいて解釈したことがわかる。漱石によるこのような新たな解釈の背景にディクソンの存在が大きく関わっていたと推測される。そこで、ディクソンが具体的にどのように漱石の『方丈記』論に影響を及ぼしたのかについて考えることにする。

3-3 漱石の『方丈記』解釈とディクソンとの関係

凡そ半世紀前にロラン・バルトは、文学作品の物語は作者ではなく、読者の読書過程の中で作られると主張した⁴⁵。それまで作者の権威下に置かれていた読者がテキストから自由に意味を抽出し、物語を作っていくというのだ。しかし、実際に読者が作った物語は自由ではなく、様々な外的な条件の制約の中で生成されるのが普通である。つまり、読者が置かれた状況は、読者が作り出す物語に大きな影響を及ぼすのである。そのため、文学作品の受容について考察する際、新たに生み出された物語の内容そのものの観察は大事な作業であるが、物語がいかなる背景の中で生み出されたのかを明確にすることも必要である。漱石の「英訳方丈記」の場合も、彼が提示した『方丈記』の新たな解釈の理解は重要であるが、その解釈を促した諸要素を明らかにすることも大事な課題である。なぜなら、漱石の『方丈記』論は、

⁴³ 中世仏教における現世主義的な思想に関する議論については、末木文美士著『草木成仏の思想-安然と日本人の自然観』（サンガ出版、2015年）が詳しい。『方丈記』の仏教的な性格について、今成元昭『方丈記』と仏教思想』（笠間書院、2005年）は特に詳しい。

⁴⁴ David Aers, Jonathan Cook, David Punter. *Romanticism and Ideology: Studies in English Writing 1765-1830*. Routledge, 2016. pp. 70-77.

⁴⁵ Barthes, Roland. "Death of the Author," in *Image-Music-Text*, Tr. Stephen Heath. New York: Hill and Wang, 1977, pp.155-164.

この作品の受容史にある転換をもたらしたと言えるからである⁴⁶。第 5 章で詳述するように、漱石が提唱した『方丈記』の解釈は、それ以降も西洋の国々における読者によって受け継がれていったのである。

漱石の『方丈記』解釈の形成過程を理解するためには、文学理論家のギデオン・トゥーリ (Gideon Toury) が提示した翻訳規範 (Translation norms) の概念が有効である⁴⁷。トゥーリによると、翻訳の行為には少なくとも 2 種類の言語とそれに伴う社会文化的な規範といった 2 種類の規範 (norm-systems) が機能する。翻訳者は、原典が属する起点言語・文化の規範に準ずるか、あるいは目標言語・文化の規範に準ずるか、どちらか 1 つを選択しなければならない。翻訳者が前者を選択した場合、翻訳は起点言語・文化の規範には違反しないが、その場合、目標言語・文化の規範と互換性の問題が生じる可能性がある。一方で、後者を選択した場合、翻訳は起点言語・文化の規範に違反をする可能性はあるものの、目標言語・文化において翻訳の容認性を高めることができるという。トゥーリの提唱したこの翻訳論の枠組みから考えれば、漱石は目標言語・文化の規範、言い換えればディクソンの期待に応えるように『方丈記』の解釈方法を選択したのである。

翻訳の依頼者であったディクソンは、『方丈記』が執筆された日本の言語・文化的な習慣と全く異なった世界からやって来た人物である。そのため、彼には『方丈記』のような日本の古典文学作品を理解することは困難であったと推測できる。ディクソンの理解を助けるために最も良い方法は、『方丈記』の内容を英文学と比較検討することであった。漱石とディクソンの両者は英文学に詳しくあったため、英文学との比較の中で『方丈記』を論じるのが最も理解しやすい方法であった。それゆえに、漱石はエッセイ中で、シェイクスピア著 *The Tempest* やゴールドスミス著 *The Hermit* など英文学の中でも名著から引用行っている。漱石はこれらの英作品の内容を『方丈記』の内容と照らし合わせ、それを通じて自身が提供した『方丈記』の解釈の妥当性を高めようとした。その意味で、漱石の『方丈記』論は、ディクソンの理解を助けるための一つの手段であった。漱石自身は、ディクソンが「英訳方丈記」を本当に理解できるのか疑問を持っていた。このことは漱石のエッセイにある次のような文章からわかる。

⁴⁶ 漱石の「英訳方丈記」から何らかの形で影響を受けた翻訳・著書として、南方熊楠 (1867-1941) が行った『方丈記』の英訳、20 世紀初頭において活躍した英国の学者 Frederick Hadland Davis (1883-1963) が著した書物の中に見られる長明に関する描写や、英国の詩人 Basil Bunting (1900-1985) の『方丈記』に関する英詩などが挙げられる。詳細は、本論の第 5 章を参照。

⁴⁷ 翻訳の規範の概念については次の研究が詳しい。Toury, Gideon. "The Nature and Role of Norms in Translation." In idem, *Descriptive Translation Studies and Beyond*. Amsterdam-Philadelphia: John Benjamins, 1995. Chesterman Andrew. *Memes of Translation: The spread of ideas in translation theory*. Revised edition. John Benjamins Publishing Company, 2016. 79-84.

畢竟するに、翻訳が読むに足るものと判明するならば、翻訳に関する訳者の言い分は十分に弁護され得よう。翻訳の文学的完成度と優雅に関しては、他の翻訳に委ねたい⁴⁸。(After all, my claim as regards this translation is fully vindicated, if it proves itself readable. For its literary finish and elegance, I leave it to others to satisfy you.)

この引用文からもわかるように、漱石は自身が行った英訳が日本古代の文化的な要素をどれほど効率的にディクソンに伝えるのに役に立つのかについて疑問を抱いている。次節で述べるように、漱石は文化的な様相を伝達するメカニズムとしての翻訳の機能に疑問を抱いていたが、このことは彼のエッセイからも確認できる。言語と文化といった根本的な相違により外国人の読者は『方丈記』のような文学作品を身近に感じるのに苦勞すると漱石は確信していた。そのため、彼は翻訳対象である読者の期待を念頭において、『方丈記』を19世紀のイギリスに流行したロマン主義的な自然文学作品として捉えたのである。むしろ、漱石がこの英訳を行った時、大学で英文学を専攻していたため、その影響を受けて『方丈記』を英文学の視点から解釈することを試みた可能性は否定できない。しかし、彼は長明とワーズワースとの比較検討の中でなぜ長明を低い地位に位置づけたのであろうか。とりわけ、漱石は西洋に対してある種批判的な姿勢を取ったことが多かったにも関わらず、なぜワーズワースの自然観を称賛しなければならなかったのかは疑問が残る⁴⁹。

おそらく、漱石の学生としての立場と、西洋から来たディクソンの存在がその背景にあったかもしれない。というのは、漱石が執筆したエッセイの内容と、ディクソンが長明とワーズワースの比較検討を行った論文の内容を比較してみると、後者は漱石のエッセイで既に触れられたテーマのほとんど受容していたことが確認できる⁵⁰。ディクソンがいかに漱石を情報提供者 (native informant) として利用したのかについては第4章で詳述するが、漱石のエッセイの主眼は自然というテーマにあり、ディクソンの論文も自然を中心にして論じられている。ディクソンは、ヨーロッパ文明において自然というテーマがいかに昔から宗教的な意味合いで捉えられ、自然がいかにして西洋文学に大きな影響を与えたかを説明している。実はディクソンは、漱石のエッセイの内容を取り入れた上でさらに一歩進んで、日本人の自然観は英国における自然観と比べてやや劣っていると主張している。また、漱石がエッセイで簡単に触れた長明の物質的な自然観及びその人間嫌いという人格に関するテーマもディクソ

⁴⁸ 漱石の原文は英語である。和訳は『漱石全集』からの引用。夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、368(129)頁)。

⁴⁹ 漱石の非西洋な態度に関しては次の研究が詳しい。平川 祐弘『夏目漱石—非西洋の苦闘』(講談社学術文庫(995)、1991年)、森陽一『漱石を読みなおす』(ちくま新書、1995年)。

⁵⁰ プラダン・ゴウランガ・チャラン「『方丈記』の受容：夏目漱石の『英訳方丈記』をめぐる」(研大文化科学研究(13)、2017年、104-107頁)。

ンの論文には現れている。漱石がエッセイで論じた内容がディクソンの論文の内容とほぼ同じであることは単に偶然ではないだろう。日本語能力が不十分だったと思われるディクソンは、学生であった漱石をあくまでも情報提供者として利用し、日本の情報を収集するために彼の英語力を活用したと思われる。さらに憶測を加えるならば、漱石が実際に翻訳を行う前に、これらの論点について既にディクソンからの直接的な指示を受けていた可能性も完全には否定できない。上記を考慮すると、漱石の『方丈記』論はディクソンの期待に沿うよう作られたものであったに違いない。言い換えれば、漱石が置かれた状況およびディクソンの存在という外的な圧力により彼の『方丈記』の解釈は形成されたものであったのだ。

以上が漱石の試みた『方丈記』論である。これは、稲賀繁美の言葉を借りれば、当時の東洋学者のほとんどがそうであったように「東洋における文化的な共通点」を探し求めていたディクソンの期待に応じようとする過程の中で形成されたと言える⁵¹。ディクソンが、西洋の文化的な規範の視点から日本の文化を解釈しようとし、その明確なあるいは暗示的な期待に応えるようとして生徒の漱石が『方丈記』の新たな解釈を作り出したのである。

第4節 漱石の翻訳思想について

本章の冒頭で漱石を研究する学者がこれまで「英訳方丈記」を軽視してきたと述べた。むしろ、これは「英訳方丈記」だけでなく、若い漱石が試みた「催眠術」や詩伯「テニソン」など他の訳業に関しても言えることである。その結果、漱石が翻訳という行為についてどのような考えを持っていたのかという重要な点を理解する試みはなされてこなかった⁵²。しかし後述するように、漱石の残した文章や周辺の資料などから、彼が文化の流通において翻訳が重要な機能を持つと考えていたことが理解できる。本節では漱石の「英訳方丈記」と関連資料から伺える彼の翻訳に対する考えについて検討する。

4-1 言語と文化の理解不能な性格をめぐって

漱石は、言語的な壁を越えて複雑な文化を伝える場合に翻訳という手段では不十分であると認識していた。このような「翻訳不可能論」と似たような考えは数回にわたって示されている。漱石の翻訳に対する思想について論じた数少ない研究者の一人マイケル・ボーダッシュ

⁵¹ 稲賀繁美「文化の翻訳性序説: 造形藝術における」(『「美術」概念の再構築: 「分類の時代」の終わりに』ブリュッケ、2017年、298頁)。

⁵² 漱石が著した作品の外国語訳の諸側面について論じる研究は数多く存在しているが、漱石の翻訳思想そのものを論じた研究の中では、以下に述べるボーダッシュの論考の他に、河合祥一郎「シェイクスピア翻訳史の端緒と現在-漱石の逍遥批判をめぐって」(国文学-解釈と教材の研究(53)7、2008年、24-31頁)が挙げられる。

ユは、『文学論』（1907）で指摘された（F+f）の公式を世界文学の観点から論じ、翻訳に対する漱石の態度について次のように述べている。

（前略）しかし、不思議なことに、世界文学の理論を構築する『文学論』とその著者は、世界文学を生み出す主要なメカニズムである「翻訳」に対してやや否定的な立場を取る。例えば、『文学論』に現れる英文学からの引用文のほとんどは翻訳されず、英語のまま載っている。この傾向は素晴らしい英語文章を数多く残した漱石が英訳ができないためではなく、おそらく戦略的選択による結果だと思われる⁵³。

漱石は自身の著書について外国語訳を行って欲しくないと考えていたとボーダッシュは指摘し、その主な理由の1つに、当時の世界秩序を挙げている。20世紀初頭におけるヨーロッパ帝国の文人らによってタゴールなどアジアの文人が度々軽んじられた事実を知っていた漱石は自身の著書を欧米語へ翻訳することを好まなかったという。よく知られているように、当時のイギリス文壇で活躍したエズラ・パウンド、W. B. イェイツなどモダニズム運動の指導者が異国趣味の影響でタゴールの詩集を異常なほど高く評価し、それが1913年のタゴールのノーベル賞受賞の大きなきっかけであった⁵⁴。言い換えると、タゴールのノーベル賞受賞は、当時のヨーロッパを中心とした世界文学における階級・格差を物語っている。これに否定的な立場を取った漱石は、自身の作品が永遠に西欧の読者にとって「象形文字」（hieroglyphics）のごとく理解不能な形のままであってほしいと考えたという。

漱石の翻訳に対する考えに関して示唆的なエピソードは他にもある。その中でも、坪内逍遙（1859-1935）により和訳され、その監督下で演じられたシェイクスピア著『ハムレット』についての漱石の批評は特に有名である。1911年に坪内逍遙の監督のもと上演された『ハムレット』の翻訳劇が人気を集める中、朝日新聞社で勤務中の漱石もその上演を観て、『朝日新聞』にその批評を載せた。その新聞記事は、翻訳に対する漱石の考えを知るために貴重な資料である。漱石の『ハムレット』の批評を「英訳方丈記」と照らし合わせて分析してみれば、翻訳の機能に関して漱石が抱いていた疑いは晩年のみならず、大学時代にも存在していたことが読みとれる。漱石は、朝日新聞の記事で次のように述べている。

⁵³ ボーダッシュ・マイケル「夏目漱石の「世界文学」：英語圏から『文学論』を読み直す」（文学13(3)、2012年、2-7頁）。また、「世界文学空間」（world republic of letters）という概念は、2004年にPascale Casanovaが著した*The world republic of letters: Convergences: inventories of the present*で初めて提示された言葉である。世界文学空間とは、17世紀以後に西欧諸国を中心に国境を越えて現れ始め、20世紀初頭まで維持されてきた国際的な学問コミュニティであり、ヨーロッパ帝国時代において自己啓発の手段として諸植民地の文学を時には西洋化（同化、domesticating）し、時には異化（foreigning）したプロセスを意味するものである。詳細は、パスカル・カザノヴァ著・岩切正一郎訳『世界文学空間—文学資本と文学革命』（藤原書店、2002年）を参照。

⁵⁴ Rogers, Gayle. "Translation." In *A New Vocabulary for Global Modernism*. Edited Eric Hayot and Rebecca Walkowitz. Columbia UP, 2016, pp. 248-259.

坪内博士の訳は忠実の模範とも評すべき鄭重なものと見受けた。あれだけの骨折は実際翻訳で苦しんだ経験のあるものでなければ、ほとんど想像するさえ困難である。余はこの点に於て深く博士の労力に推服する。けれども、博士が沙翁に対して余りに忠実ならんと試みられたがため、遂に我ら観客に対して不忠実になられたのを深く遺憾に思うのである。（省略）沙翁劇はその劇の根本性質として、日本語の翻訳を許さぬものである。その翻訳を敢てするのは、これを敢てすると同時に、我等日本人を見棄たも同様である。翻訳は差支ないが、翻訳を演じて、我等日本人に芸術上の満足を与えようとするならば、葡萄酒を正宗と交換したから甘党でも飲めない事はなかろうと主張すると等しき不条理を犯すことになる。博士はただ忠実たる沙翁の翻訳者として任ずる代りに、公演を断念するか、又は公演を遂行するために、不忠実なる沙翁の翻案者となるか。二つのうち一つを選ぶべきであった⁵⁵。

この批評文から、漱石の翻訳に対する考えは次のように要約できる。まず、翻訳者は対象読者が芸術上の満足を十分得られるようにすべきという点である。これは坪内の上演に対して漱石が批判した直接の理由である。漱石によれば、翻訳には制限があり、芸術作品に埋め込まれた複雑な文化的な要素を、対象読者に完全に伝えることは不可能である。すなわち、翻訳者は、原典の内容をある程度、無視ないし変更しなければ対象読者の芸術的な期待に応えることができないと漱石は認識していたのである。その主な原因として、漱石は文学の歴史性を挙げている。全ての文学作品は特定の時代空間の中で成立し、特定の読者を対象に作られたものである。そのため、作品は時空を超えてあらゆる読者層の期待に沿うには無理がある。その対策方法として漱石が提示したのが、本章の第2節で示したトゥーリの言葉で言うと、原典からの転換（shift）である。漱石によれば、翻訳者はいつも2つの選択に迫られる。それらは、原文を忠実に訳すことを目的として、対象読者の芸術上の期待を満足させることを断念するか、あるいは、対象読者に芸術上の満足を与える方法として、作者の意図を無視し、原文を不忠実に訳すかである。このような考えは、作者が創出した本来の芸術的な情趣を再現することは不可能であるという思惟によって形成されたと思われる。

上記の『ハムレット』の批評は、漱石が文人として既に有名になっていた頃のものである。漱石はいつ頃からこのような考えを持つようになったのであろうか。以下に示す「エッセイ」の引用を見れば、その萌芽は既に大学時代にも見ることができる。

この小品の英訳にあたり、日本語の原文の構造をでき得る限り留める苦心した。しかしながら言語の質と表現様式の両方の根本的な違いから、時折、一存で多少の省

⁵⁵ 夏目漱石「坪内逍遙と『ハムレット』」（『朝日新聞朝刊』、1911年6月5日、3頁）を参照。

略や挿入を余儀なくされた。必要と思われた場合には注解も加えた。本文の難しさの解消にわずかなりとも益するなら、幸いである。畢竟するに、翻訳が読むに足るものと判明するならば、翻訳に関する訳者の言い分は十分に弁護され得よう。翻訳の文学的完成度と優雅に関しては、他の翻訳に委ねたい⁵⁶。(In rendering this little piece into English, I have taken some pains to preserve the Japanese construction as far as possible. But owing to the radical difference both of the nature of language and the mode of expression, I was obliged, now and then, to take liberties and to make omissions and insertions. Some annotations have also been inserted where it seemed necessary. If they be of the slightest use in the way of clearing up the difficulties of the text, my object is gained. After all, my claim as regards this translation is fully vindicated, if it proves itself readable. For its literary finish and elegance, I leave it to others to satisfy you.)

この引用文中の「苦勞」とは、先に引用した 20 年後に彼が執筆した朝日新聞の記事にある「骨折」と同じ意味であろう。実際に翻訳の経験があった漱石は、翻訳に必要な苦勞についてよく把握していた。そのため坪内が『ハムレット』を訳すにあたっていかに労力を必要としたかがよく想像できると述べている。訳業の困難さは、特に言語それぞれの特質や表現の方法の極端な違いによって生じるものであると漱石は捉えていた。そのため、翻訳者は最初から翻訳の手法をはっきりさせなければならないという。翻訳者は、原典に忠実に翻訳するか、それとも、原文にない表現を加えるなどして翻訳を読みやすい (readable) ものにするかを決める必要がある。上記の引用文から見れば、トゥーリの提示した 2 種類の翻訳手法の内、漱石は後者を重視していたと言える。

『方丈記』の英訳においても、漱石は対象読者を重んじた。対象読者であったディクソンは日本と異なった社会文化の中で生まれ育ったため、彼が日本の古典文学に含まれる文化的な要素を理解するのに苦勞することを予期していた。ディクソンの理解を助ける方法として、漱石は英訳に様々な工夫を施し、なるべく原典の意味を忠実に伝えようとした。このことは、以下に引用する漱石の訳文と、英訳のために彼が利用した二種の原文テキストを比べればよくわかる。

【漱石訳】 Walls standing side by side, tilings vying with one another in loftiness, these are from generations past the abodes of high and low in a mighty town. But none of them has resisted the

⁵⁶ 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第 26 巻』、岩波書店、1996 年、368 (129) 頁)。

destructive work of time. Some stand in ruins, others are replaced by new structures. Their possessors too share the same fate with them⁵⁷.

【方丈記流水抄】玉しきの都の中に。むねをならべいらかをあらそへる。たかきいやしき人のすまいは。代々をへてつきせぬものなれど。これをまことかとたづぬれば。むかしありし家はまれなり。或は去年やぶれてことしハつくれり。あるハ大家はほろひて小家となる。すむ人も是におなじ⁵⁸。

【方丈記：新注】玉敷の都のうちに、棟を並べ、薨をあらそへる、たかき、いやしき、人の住居ハ、代々をへて、尽きせぬものなれど、是を、まことかとたづぬれば、むかしありし家ハまれなり。あるハ、去年やぶれて今年ハ作り、あるハ、大家ほろびて小家となる。すむ人も、是におなじ⁵⁹。

上記の訳文と、それに該当する原典の原文を対比すると、原文にはない内容が訳文の中に加えられていることに気づく。例として、訳文の *But none of them has resisted the destructive work of time.* に該当する和文は 2 種の原資料には存在しない。この訳文は原文の「むかしありし家はまれなり」に相当する部分であろうが、原文は明らかに英訳と異なっている。とは言っても、『方丈記』の内容からも明らかのように、無常思想はこの作品の主なテーマであり、訳文の *destructive work of time* という表現は、英語話者にとって無常観の概念として理解できない訳でもない。漱石は、原文に存在せずとも、訳文に内容を追加することで、作品に含まれた思想を明確に表そうとしたのである。

同じく、原文にある「或は去年やぶれてことしハつくれり。あるハ大家はほろひて小家となる。」の部分は *Some stand in ruins, others are replaced by new structures* と訳されているが、この場合も原文にある時間を表す具体的な表現や、家の規模を表す言葉は訳されていない。それは、英語話者に違和感のないよう冗長な描写を省き、訳文を自然な英語に近い形式で読者に提供するために施された手法であるかもしれない。また、原文にある日本語の隠喩を英訳する際、そのような隠喩を英語読者が果たして理解できるかを漱石は疑問視していた。六十歳の長明は日野山に結んだ草庵について「ここに、六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べる事あり。」と述べている。漱石はこの「更に末葉の宿りを結べる」という比喩が英語話者に理解できるのかを疑問に思いつつ「*Now when the dew of sixty years was on the*

⁵⁷ 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」（『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、361（136）頁）。

⁵⁸ 築瀬一雄『方丈記緒注集成』（豊島書房、1969年、241頁）。

⁵⁹ 武田信賢・関根正直『方丈記：新注』（吉川半七、1891年、1頁）。

point of vanishing, once again did it condense upon a tiny leaf」と翻訳している⁶⁰。この引用文では「末葉」は「tiny leaf」になり、原典の「宿り」の意味は訳文に一切現れてこない。ここでは原文と訳文の違いを数例で確認するにとどめるが、このような例は「英訳方丈記」に他の部分にも複数存在している。このような翻訳手法から、漱石にとって訳文は原文の創作にも通じるころがあった。漱石は、訳者が芸術作品としての翻訳を実現するためには原典に忠実になりすぎてはいけなないと考えていた。このことは、前述した漱石の『ハムレット』の批評からも明らかである。

以上のような漱石の翻訳思想は、明治期における翻訳論の中でどのように位置付けられるであろうか。佐藤美希によれば、明治 20 年までに行われた英文学作品の和訳は、かなり大胆な自由訳であったが、明治後期から原文をありのままに英訳し、原文の意味をできる限り正確に伝えるという翻訳手法へ変わっていったという⁶¹。明治末期頃になると原文の一字一句の意味を理解し、忠実に訳すという方法が定着していったようだ。すなわち、西洋からの文学作品が未だ受容されていなかった明治前期には、自由訳を通じて日本読者の理解を助けようとしたが、西洋の作品がある程度読まれるようになった明治後期あたりからは、単に自由訳でなく、その作品に潜められた意味・思想までも理解して、読者に伝達できるような翻訳手法が求められたのである。しかし、このような翻訳手法の変容は主に、外国語から日本語へ翻訳された際に見られる現象であって、母語の日本語から第 2 取得言語である外国語へと翻訳された場合にも該当するかは不明である。佐藤美希の指摘が仮に当時の日本で一般に採用された翻訳手法であるとすれば、坪内の『ハムレット』訳（明治後期）はこれと合致するものであり、漱石の英訳（明治中期）手法もこれに則ったものである。ただし、両者の翻訳思想は 2 つの点で異なっていると思われる⁶²。

まず漱石は、逍遙が原典に忠実に翻訳しすぎていることを問題視している。漱石によれば、逍遙はシェイクスピアに対してあまりに忠実になりすぎ、イギリスの 16 世紀の古典的な文学風潮を日本の古典的な文学風潮に置き換えようとした。しかし、翻訳の文体として日本の前近代的な文体を採用すると、現代に生きる一般の日本人がその文体を理解できないと漱石は主張している。すなわち、作家を重視した逍遙と、対象読者を重視する漱石の隔たりはそ

⁶⁰ 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」（『漱石全集 第 26 巻』、岩波書店、1996 年、357 (141) 頁）。

⁶¹ 佐藤美希「雑誌『英語青年』に見られる明治・大正の英文学翻訳規範」（Sauvage：北海道大学大学院国際広報メディア研究科院生論集、2007、49 頁）。

⁶² 漱石は『ハムレット』の批評の後半で次のように述べている。「要するに、沙翁劇のせりふは能とか謡とかのような別格の音調によってはじめて興味を支持されべきであると決めてかからなければならぬ。ここに注意を払わないで、「晴嵐梢を吹き払って」と云ふ様な言葉を、「おい、一寸来てくれ」と云ふ日常の調子で言つては、双方共崩れに終わる丈である」。夏目漱石「坪内逍遙と『ハムレット』」（『朝日新聞朝刊』、1911 年 6 月 5 日、3 頁）より引用。

の両者の翻訳思想の1つ目の違いである。そのため、坪内は『ハムレット』の訳出の際、シェイクスピアが使った中期の英語に合わせるために日本語の古語を使ったが、現代の読者のことを考えた漱石は『方丈記』を英訳した際、古い英語ではなく、一般の学問で使用される英語の表現を用いたのである。

次は、翻訳そのものに関するもので、翻訳不可能論に関わる点である。逍遙によると、原典を有りのままに翻訳することで、一つの言語・文化体系から別のそれに物語を移し替えることができる⁶³。その一方で、文学の歴史性及び言語・文化の違いの理由から、翻訳を通じて原典を別の言語・文化大系に移し替えることは不可能であると漱石は主張する。漱石のこの考えは、上に引用した『ハムレット』批評の中にある「沙翁劇はその劇の根本性質として、日本語の翻訳を許さぬものである。」にも見てとれる。漱石の翻訳の機能に関するこのような疑問は、後の時代に彼の門下生によって翻訳不可能論として全面的に押し出されて論じられたのである⁶⁴。

漱石は、文化や言語が象形文字のように独特なものであり、そのために外国人にとって理解しづらいと認識していた。そして、文学作品は歴史的な時空の中で創出されるため、作品に込められた意味を効率的に抽出するためには、翻訳という言語的な手段は十分な機能を持っていないと考えていた。ボードッシュによれば、漱石が自分の作品の外国語訳を不要とした理由は当時の世界秩序であったが、もう1つの理由として、漱石が意識していた翻訳不可能論を指摘しておきたい。漱石は、自らの作品が日本の読者を対象に執筆されたものであり、外国語に訳されたとしても、作品に盛り込まれた日本独特の文化的な要素は海外の読者に理解できないと確信していた。また、日本語の原典から訳された文章は、海外の読者の芸術的な欲求を充足させることが難しいとも考えていた。漱石のこのような翻訳思想は大学生のころ既に現れており、それはその後晩年に至るまで変わらなかった。

本節の冒頭で、当時の世界秩序に不満を抱いた漱石は世界文学に加入しない意向を示したと述べた。しかし、皮肉なことに漱石は世界中の名作を集めようとした図書館の設立にも協力していた。漱石は、Mr. Young というアメリカ人に自著『吾輩は猫である』（1905）に英文の献辞の言葉を書いて贈っている⁶⁵。この Young について詳細は知られていない。漱石は、

⁶³ 高橋修『明治の翻訳ディスクールー坪内逍遙・森田思軒・若松賤子』（ひつじ研究叢書(文学編) 7、2015年、57-60頁）。

⁶⁴ 小宮豊隆「發句翻譯の可能性」（『文藝春秋』、1933年8月、52-6頁）。

⁶⁵ 漱石は次のような文章を書いている。「本作品においては、一匹の猫が第一人称複数（we）で語ります。第一人称複数が君主の物言いであるのか、論説主幹の物言いであるのか、作者も知る由のないところでございます。かつてはそれぞれに時めいたガルガンチュア、キホーテ、トリストラム・シャンディーのいずれも、今や色褪せております。今こそこの猫界の王者が、ヤング氏の書棚に鎮座しますことは、まことと時宜に吐っております。そして、風変わりな猫語とともに、猫足的哲学のすべてが、西洋の読者にとって、意味深長であり続けますように願っています。」原文は次の通りである。

明治 42 年 (1909) 3 月 12 日の日記に「「ヤング」なるもの手紙をよこす。「ヤング」とは何者なるや知らず。亜米利加のひま人なるべし。」と指摘している⁶⁶。ここから漱石自身はこの人について知らなかったと思われる。また、先に挙げたボーダッシュの論文では「アメリカ人であろう」とのみ指摘されている。実は、この Mr. Young はアメリカ人の James Carleton Young (1856-1918) という愛書家のことである⁶⁷。彼は生涯を通じて様々な国や言語で書かれた文学の名作を集めて、まさに世界文学の図書館を設立しようとしていた。彼は夏目漱石を含めて複数の日本の作者の著書も集めていたが、その一つが『吾輩は猫である』である。漱石が Young の計画について知っていたかは定かではない。知らなかったとしても、漱石が Young の世界文学プロジェクトの協力者の一人であったことは確かである。Young が所蔵していた著書の目録には『吾輩は猫である』についても言及がある。ただし、Young が計画していた図書館プロジェクトは失敗に終わったため、彼が集めていた著書が売り出され、その過程で『吾輩は猫である』はハーバード大学燕京図書館に所蔵されたと推測される。ちなみに、Young は野口米次郎 (1875-1947) にも日本から著書を収集するための依頼も出しており、野口の著書もこの目録に複数確認できる⁶⁸。

上に述べた漱石の翻訳思想を踏まえて、彼が『方丈記』の英訳において実際に用いた翻訳手法について考察してみたい。

4-2 「英訳方丈記」から見る漱石の翻訳手法について

漱石は『方丈記』を自然文学の作品として解釈したが、この作品の本来の構造を維持しつつ、そのような解釈を行うことには無理があった。本作品の半分以上は災害に関する内容であり、ロマン主義的な自然文学とは相容れないものであったからである。そのため漱石は、それらの災害の描写を取捨選択しつつ『方丈記』論を構築しようとした。したがって『方丈記』に見える災害描写の中には訳出されていないものも少なくない。この点に関して漱石は次のような説明を行っている。

この後続くいくつかのパラグラフにおいて、1180 年の摂津への都移り、1181 年に起こった飢饉、同年に起こった疫病、そして、元禄 2 年の大地震が描写されている。

しかし、これらの出来事は、本作品の真の目的のためには本質的ではないので、気

(Herein, a cat speaks in the first person plural, we. Whether regal or editorial, it is beyond the ken of the author to see. Gargantua, Quixote and Tristram Shandy, each has had his day. It is high time this feline King lay in place upon a shelf in Mr. Young's library. And may all his catspaw philosophy, as well as his quaint language, ever remain hieroglyphic in the eyes of the occidentals. --K. Natsume.) 夏目漱石「ヤングに贈りたる『吾輩ハ猫デアル』献辞」『漱石全集、第 26 卷』(岩波書店 1996 年、284 頁)より引用。

⁶⁶ 夏目漱石「注解、284-1」『漱石全集、第 26 卷』(岩波書店 1996 年、534 頁)。

⁶⁷ *Inscribed Books from the Library Collected by James Carleton Young, Part 2.*The Anderson Galleries, Inc., New York, Nov. 1916, p.59.

⁶⁸ Yoné Noguchi. *Yone Noguchi Collected English Letters.* Yone Noguchi Society, 1975, pp. 388-389.

兼ねなく省略することができる⁶⁹。(Several paragraphs which follow are devoted to an account of the removal of the capital to Settsu in 1180, of the famine during Yōkwa (1181), of the pestilence in the same year, the earthquake in the second year of Genreki. All these however are not essential to the true purport of the piece, so that we can dispense with them with little hesitation.)

すなわち、「英訳方丈記」の対象読者がこの英訳を違和感のない作品として読めるよう、漱石は『方丈記』の原作に含まれた五大災厄内の2つのみを翻訳の対象とし、残りを英訳しなかったのである⁷⁰。上記引用文の通り、『方丈記』を理解するためにこれらの災害の描写は必要ではないと漱石は考えた。その理由は、明らかに彼が『方丈記』をワーズワースのロマン主義的な視点から理解しようとしたからである。同時に、ディクソンがロマン主義的な自然観に興味を持っていたことも、漱石が全ての災害を訳出しなかったことと関係しているかもしれない。

ただし、漱石の『方丈記』論は、専ら西洋の文学的な基準で長明を批判するだけではなく、漱石は、『方丈記』を自然文学作品として解釈することでディクソンの理解を助けようとした一方、この作品が日本文学史の中で高く評価されてきたことを無視していたわけではない。漱石は、長明の自然観がワーズワースのそれに劣っていたと指摘すると同時に、長明が様々な長所をもつものであったとも強く主張している。

これらすべての短所にもかかわらず、長明にはいつの場合にも真摯な誠実さがあり、軽佻浮薄とでも呼べる要素はまったくない。長明は批判的分析に耐え得ないとしても、長明は少なくとも、かなりの程度、称揚に価する。それは、拝金主義的で、快樂追求的な醜い現世のおぞましい影響に汚されることのない、外山の丘での非の打ち所のない行いと禁欲的生活によるものである。(中略)物質が全能のユートピア的世界からこの貧しい世捨て人を、ベラミーのごとき作家は笑いたければ笑うがよい。自然を単に客観化し、自然界で衝動や精神が、万物のなかを動いているのを見ることのできなかつた長明を、ワーズワースのごとき詩人が哀れみなければ哀れむがよい。出撃して敵を探すことを美德と心得ているすべての人は、長明を嘲りたけ

⁶⁹ 和訳は筆者による。夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、359(138)頁)。

⁷⁰ 特定の目的を達成できるよう訳者による意識的な原文の操りは古くから行われてきた。聖書におけるこのような操作については次の著書が詳しい。Rooke, Deborah W. "The King James Bible: Messianic Meditations." In *The King James Version at 400: Assessing Its Genius as Bible Translation and Its Literary Influence*. Society of Biblical Lit, 2013, pp. 401-409.

れば嘲るがよい。それほどまでしても、長明の信念が揺らぐことはあるまい⁷¹。(In spite all its drawbacks, the author is always possessed with grave sincerity and has nothing in him which we may call sportive carelessness. If he cannot stand critical analysis, he is at least entitled to no small degree of eulogy for his spotless conduct and ascetic life which he led among the hills of Toyama, unstained from the obnoxious influence of this Mammon-worshipping, pleasure hunting ugly world. [...] Let a Bellamy laugh at this poor recluse from his Utopian region of material triumph; let a Wordsworth pity him who looked at nature merely as objective and could not find in it a motion and spirit, rolling through all things; let all those whose virtue consists of sallying out and seeking adversary, turn upon him as an object of ridicule; for all that he would never have wavered from his conviction.)

この引用文にある「拝金主義的で、快樂追求的な醜い現世のおぞましい影響」とは、おそらく、西洋から影響を受けて工業化しつつあった日本を含む近代社会に対する漱石の批判的な姿勢であろう⁷²。長明には色々な欠点があったにも関わらず、彼は隠遁生活の規範にも値する人物として、東洋において特別な存在であり、西洋の知識人はこのことを理解できないと漱石は述べている。例えエドワード・ベラミー (Edward Bellamy, 1850-1898) など西洋の思想家が西洋の空想的かつ物理的な偉業から長明の人間や社会に対する見方を軽蔑したとしても、長明はきっと自らが選んだ道を変えなかったであろうという⁷³。これらの内容をエッセイに盛り込むことで、漱石は長明が歴史的な存在であることを認め、東洋において鴨長明は理想的な人物であると主張した。漱石の著作の中に頻繁に表れた東西二分法の問題は、大学時代の『方丈記』のエッセイにも表れていたことがわかる。同時に、漱石のこのような主張は彼が提示した「自己本位」の概念とも重なる部分があると言える。

⁷¹ 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、370-369(127-128)頁)。

⁷² 原文は「obnoxious influence of mammon worshipping, pleasure seeking ugly world」に当たる。漱石はディクソンがワーズワースについて行った授業のとき取ったメモには次のような文章が見られる。

「Revolting against the tyranny of society [...] and city life Wordsworth led English poetry as a recluse. As Couper said, God made the country, man made the town, so thought Wordsworth. Indeed Wordsworth is the development of Couper. But we can also find some difference between them.」漱石のこのメモは、都市化に対するワーズワースの批判的な姿勢であり、『方丈記』との関連で考えれば「隠遁」のテーマについても記述がある。漱石の作品の中で、『こゝろ』(1914)は社会の近代化・都市化とそれによって生じる様々な問題を主題としており、『坊ちゃん』(1906)に登場する清という人物を通じてむやみな近代化を批判している。また、漱石は西洋に習って日本が一方的に近代化・工業化することについて反対な立場を取ったことはよく知られている通りである。引用文は、〈付録6、29頁〉の該当部分を参照されたい。

⁷³ ベラミーはアメリカの文人・小説家で、1888年に著したユートピア小説『顧みれば』(Looking Backward)で有名である。漱石は、ベラミーの小説に描かれた社会主義的な理念に基づく未来型のユートピアのような先進的な社会の頂上に立ったベラミーを、物質に対する食欲さなく質素な隠遁生活を送った長明と対比させ、後者の性格が優れていると指摘しているようである。

終わりに

本章では、夏目漱石による『方丈記』の英訳と「エッセイ」を対象として分析を行うことで、主に大学時代における漱石の思想の特質およびその変化を捉えようと試みた。漱石の「英訳方丈記」とその周辺の資料を分析した結果、東京帝国大学における漱石の英文学の先生であったディクソンは、日本文学作品について詳しく知るため漱石に『方丈記』の英訳を依頼したことが明らかとなった。ディクソンからの依頼を受けた漱石は、『方丈記』を部分的に英訳した上で、独自の文学的な思想を述べた短いエッセイと合わせて提出した。このエッセイを詳しく検討すると、漱石が従来とは異なる観点から『方丈記』を捉え、西洋のロマン主義的な自然文学作品としてこれを理解したことがわかる。漱石によるこのような解釈はディクソンの存在によって形成されたと考えられる。すなわち、漱石は、異なる社会文化圏から来たディクソンの日本古典文学作品に対する理解を促すため、このような『方丈記』の新たな解釈を提唱したのであろう。特に重要なのは、漱石は『方丈記』を自然文学作品として解釈する必要があったため、『方丈記』の原典にある災害描写を取捨選択して訳出したという点である。『方丈記』の受容の視点から言えば、漱石によるこの新たな解釈は一つの転換でもあった。つまり、漱石の英訳をきっかけに、特に英語圏において『方丈記』は自然文学作品として捉えられるようになり、鴨長明は自然崇拜者として解釈されたのである。

また、「英訳方丈記」には漱石の翻訳思想を読みとることができる。漱石によれば、国ごとに言語的・文化的な相違があり、文学作品の歴史も様々であることから、翻訳には文化的な要素を正確に伝達する上での制約があるという。そこで漱石は、翻訳が文学作品と同様に創作の側面をもつと考え、翻訳者は対象読者の芸術的な感性を充足できるように翻訳しなければならないと主張した。漱石自身、「英訳方丈記」の対象読者であったディクソンのことを考え、『方丈記』の災害描写の全てはあえて訳出しなかった。そうすることで、これまでに仏教文学、あるいは隠遁文学の作品として知られてきた『方丈記』を、自然文学作品として提供することに成功した。漱石の翻訳は読者を中心に考えたものであったため、原文に不忠実であっても許容されると認識していたのだろう。エッセイの中に胚胎していた漱石のこのような文学及び翻訳に対する思想は、晩年の他の作品ではより力強い学説として表れたのである。

第4章 漱石とディクソンの『方丈記』英訳の比較検討

はじめに

前章では、漱石が『方丈記』の従来解釈を軽視した上で、この作品を19世紀のイギリスに流行したロマン主義的な自然文学作品として解釈したことについて述べた。また、漱石が提唱した新たな解釈に、彼の英文学の先生であったディクソンが大きな影響を及ぼしたことを明らかにした。さらに、漱石の英訳の特徴を示し、「英訳方丈記」の分析を通じて漱石の翻訳に対する思想についても考察を加えた。漱石が執筆したエッセイから、将来の文豪漱石の文学・翻訳思想を窺い知ることができることを示した。しかし、漱石によって行われた英訳の直接的なきっかけはディクソンからの翻訳の依頼であり、西洋人としてディクソンが初めてこの作品に強い関心を示した人物である。このことを考慮すると、ディクソンの『方丈記』理解は重要な意味を持つと言える。すなわち、ディクソンの理解から明治期頃における西洋人が日本文学のどのような点に興味を抱き、日本文学をいかに捉えたのかという点を明らかにする上で有益と思われる。加えて、西洋人による日本文学の受容を知るために重要な手がかりになるであろう。

ディクソンの『方丈記』への関心の背景には、ヨーロッパにおける日本趣味の影響があったが、他にも彼の宗教的な傾向といった個人的な状況や、彼が専門とした英文学などの理由があった。ディクソンは、日本の隠者文学の代表作である『方丈記』の内容を詳しく理解するため、漱石にその英訳を依頼した。そして漱石の「英訳方丈記」の内容を利用し、独自に新しく『方丈記』の英訳を完成するとともに、鴨長明とワーズワースを比較した論文も執筆して日本アジア協会でその発表を行った。後に、この英訳と論文はこの協会の会報に出版された。

こうしたディクソンの『方丈記』への関心については、今まであまり注目されてこなかった。実はディクソンと『方丈記』の関連性について言及した研究は、先に示した下西善三郎の論考しか存在しないのが現状である。しかし、下西の主眼はディクソンの英訳や論文ではなく、漱石の「英訳方丈記」を論じる中でディクソンの論文について言及したのみである。これ以外に、ディクソンの辞書類などを対象にした研究はいくつか存在するが、ディクソンと『方丈記』の関係を解き明かそうとした研究は管見では存在しない¹。

¹ ディクソンの名著 *Dictionary of idiomatic phrases* (1888年) について論じた研究として次のようなものが挙げられる。荒このみ「ディクソンの辞書(荒正人氏追悼)」(英語青年 125(7)、1979年、299-300頁)。竹中龍範「J. M. Dixonの英熟語辞典をめぐる」(英学史研究(40)、2007年、23-36頁)等。

そこで、本章ではディクソンの『方丈記』英訳と論文に主眼をおき、彼の『方丈記』ないし鴨長明への関心について様々な側面から考えることにする。特に、ディクソンが漱石の「英訳方丈記」をいかに理解し自身の英訳をいかに完成したのか、漱石のエッセイとの関係がどのようなものかを詳しく追及する。また、ディクソンが日本アジア協会で発表を行った際、在日していた西洋人が長明をいかに解釈しようとしたのかについても新資料を用いて考察する。第1節では、ディクソンが執筆した論文と漱石のエッセイの関連性について考察する。第2節では、ディクソンと漱石の『方丈記』英訳の比較検討と行い、その翻訳の特徴と関連性を明らかにする。第3節では、ディクソンが抱いた長明に関するイメージについて検討した後、第4節では、ディクソンが日本アジア協会に長明とワーズワースを比較した論文を発表した時、在日した西洋人の聴衆は長明をいかに捉えたのかについてみる。

第1節 漱石のエッセイとディクソンの論文の関連性をめぐって

ディクソンから翻訳依頼を受けた漱石は『方丈記』を英訳し、独自の文学的な思想を描写したエッセイを執筆してディクソンに提出した。漱石が「英訳方丈記」を提出してほぼ2ヶ月後、ディクソンは日本アジア協会で長明とワーズワースの比較検討をした論文と『方丈記』の英訳を朗読した。第3章で述べた通り、その論文題目は *Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel* であり、『方丈記』の英訳の題目は *A Description of My Hut* であった²。英訳を書き終えるのにあたって、ディクソンは英訳の冒頭に「帝國大学の学生である夏目金之助の偉大な恩義に感謝と敬意の気持ちを表したい」と明記しているから、ディクソンの英訳に関しては漱石の英訳をベースにしたことは明白である。しかし、長明と英詩人ウィリアム・ワーズワース (*William Wordsworth, 1770-1850*) に関する比較検討を行った論文の執筆について、漱石の書いたエッセイを参照したことを明記していない。実際にディクソンの論文は漱石の短いエッセイから何も影響を受けていなかったのであろうか。ディクソンの漱石に対する英訳の依頼について詳しく検討した下西善三郎は、次のように述べている。

さきにもふれたように、明治26年に発表されたディクソンの *A Description of My Hut* のはじめにおかれた「Note」では、この「小論」は、「the introduction」とよばれ、「序、緒言」というあつかいしかうけていない。ディクソンにとって、漱石の提出物（「英訳」と「小論」）は、「英訳」のみがおもんじられた、ということをしめしていよう。じっさい、漱石訳の撰取・模倣によってなったかとおもわせるディクソン訳という事情に比すれば、「A Short Essay」は、ディクソンの講演内容に影響をおよぼしてはいない。ということも、ディクソンにおける「方丈記小論」の軽視（ないし無視）的態度がみてと

² Dixon, J M, "Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel," "A Description of My Hut," *Transaction of the Asiatic Society of Japan (TASJ)*, Vol. 20-2, 1893, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., pp.193-215.

れよう。(中略)むしろ、ディクソンは独自に講演準備をすすめていたとみられるから(たとえば、漱石のふれなかった「鴨長明家集」から、「ほととぎす発音聞きつるなごりにはしばしものこそ言はれざりけれ」の歌に言及する、ワーズワース詩との比較対照に人麻呂の歌を引用する、など)、漱石の仕事などは。もとより参考という程度にすぎなかったかもしれない。しかし、そうであるにせよ、この「小論」がもうすこし丁寧に読まれたならば、すくなくとも「the introduction」という一語でかたづけられることはなかったのではないか³。

下西によれば、ディクソンは漱石の英訳を模倣しているが、その一方で、漱石の書いたエッセイはディクソンの論文にほとんど影響を与えなかったという。しかし、下西のこの指摘は事実であろうか。実は、漱石のエッセイとディクソンの論文の内容をよく見比べながら分析してみると、ディクソンの論文は漱石のエッセイから多くの内容を取り込んだのみならず、それを下敷きにして自らの論点を展開したことが看取できる。長明の伝記的な内容はもちろんのこと、それ以外にも、漱石がエッセイに特に注目して長明の人間嫌いな性格(misanthrope)や長明の「霊なき自然観」などの内容を取り入れた上で、ワーズワースの自然観のテーマに沿った論述を示していたことが確認できる。以下に、これらの点について詳しく説明する。

1-1 東西における自然観・隠遁習慣について

ディクソンは、漱石の英訳とその英訳に対する「イントロダクション」であったエッセイが自身の英訳を仕上げるために非常に有益であったと述べている。ディクソンは論文の冒頭に注を付け、以下のように述べている。

この英訳の原案作成や翻訳及び前がきにおける詳細な説明については、帝国大学英文学科の学生夏目金之助の価値ある支援に対する恩恵を示さなければならない⁴。

(NOTE.- For the original draft of this translation, as well as for much valuable assistance in the explanation of details in the translation and in the introduction, I must acknowledge my great indebtedness to Mr. K. Natsume, a student of English Literature in the Imperial University.)

ディクソンは漱石のエッセイをあくまでもイントロダクションとして位置付けていた。しかし、その一方で彼はこのエッセイから自分の論文の主旨に合う内容を多く取り入れている。

³ 下西善三郎「漱石「方丈記小論」私注(一)」(『日本語と日本文学』20、1994年、5-6頁)。

⁴ 原文は英語。和訳は筆者による。Dixon, J M, "A Description of My Hut," *TASJ*, Vol. 20-2, 1893, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., p.205.

このことは、両者の『方丈記』英訳およびディクソンの論文と漱石のエッセイの比較検討から容易に見て取れる。

第3章で触れた通り、ディクソンが漱石のエッセイから取り入れたテーマのひとつは自然観と隠遁の問題である。漱石は『方丈記』を自然文学作品として解釈し、長明の自然観はワーズワースの自然観より劣っていたと批判している。例えば、漱石は「我々は、ワーズワースの如く、自然の中に魂の存在を意識しない限り、人間より自然の方を好まないのである⁵」と記述して、長明はワーズワースのように大自然の中で流れている魂 (spirit) を認識しておらず、物理的な自然景色のみを人生の頼りにしたと述べている⁶。漱石は、長明の自然観と隠遁生活の問題について簡単にしか触れていないが、ディクソンは漱石のエッセイから着想を得、孤独や自然観のテーマを基準にして長明とワーズワースの比較を試みたのである。

ディクソンの論文では、自然観と隠遁習慣が重要なテーマとして取り扱われている。自然主義文学の代表者とも言われ、都会生活から離れて文学活動を続けた詩人として有名であるワーズワースと長明の比較こそがディクソンの論文の主な目的であった。ディクソンの論文に記載された次のような書き出しからこのことが明らかである。

日本ほど美しい自然に恵まれた国は少なく、日本国民もその自然の贈与を無視してきたわけではない。美術の分野において、日本の美術家が再現してきた自然の美しさが世界中を喜ばし、西洋における美の概念において大きな革命をもたらしつつある⁷。(There are few countries upon which nature is has lavished so much beauty as Japan, and her inhabitants have not shown themselves heedless of their privileges. In the domain of art the beauty of

⁵ 和訳は『漱石全集』より。原文は次の通りである。Unless we recognise in her the presence of a spirit, as Wordsworth does, we cannot prefer her to men. 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、127頁)。

⁶ 漱石は次のように述べている。「これほどまで断固として悲観主義的な傾向を持つ一人の男が、生命を持たぬ自然に、唯一共感の対象として目を向けるのは矛盾している。なぜなら、自然環境は、どれほど崇高で美しくても、人間の共感に共感を持って応えてはくれないからである。(中略) ワーズワースのように、自然の中に霊的なものの存在を認めない限り、人間よりも自然を優先することはできない。のみならず、共感の対象として自然を人間と同列に置くことはできない。(和訳は『漱石全集』より)」原文は次の通りである。It is an inconsistency that a man who is so decidedly pessimistic in tendency should turn to inanimate nature as the only object of his sympathy. For physical environments, however sublime and beautiful, can never meet our sympathy with sympathy. [...] After all, nature is dead. Unless we recognise in her the presence of a spirit, as Wordsworth does, we cannot prefer her to man, nay we cannot bring her on the same level as the latter, as our object of sympathy. 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、371-370(126-127)頁)。

⁷ 原文は英語。和訳は筆者による。Dixon, J M, "Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel," *TASJ*, Vol. 20-2, 1893, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., p.193.

nature have been reproduced by Japanese artists in a way that has delighted the world, and affected a revolution in Western ideas of what constitutes beauty in ornament.)

この引用文のように、ディクソンの論文は自然に関する描写から始められ、日本は豊富な自然に恵まれた国で、その影響は日本のあらゆる芸術分野に見ることが出来ると指摘した。また、日本の芸術家が美術作品の中で再現してきた自然は、西洋の美術界にも大きな影響を与えたと示されているが、これはヨーロッパにおける異国趣味のことを意味しているであろう。第5章で論じるように、19世紀末から20世紀初頭のヨーロッパにおいて、日本は素朴で自然豊かな国であるというイメージは強かったが、ディクソンの上記の言及はそのことを示している。ディクソンは、長明とワーズワースの比較研究を行うきっかけは、孤独な生活や自然への憧れが2人の文人の間で共通していたからであると述べている。ディクソンは、これについて次のように述べている。

私は、12世紀の日本の文人が生物や無生物を含む大自然を自分の心の友として山中に隠遁した人物について知るや否やすぐに我々西洋の自然崇拝者を代表する人物との比較検討を考え付いた。これが理由で、私は鴨長明をライダル・マウントの詩人であるワーズワースと関連付けた。両者は隠遁生活を送り、自然を称賛するとともに、自然に対して強い感受性の姿勢を示したのである⁸。(When, therefore, we find a Japanese literary character of the 12th century retiring to the hills and seeking to find communion with the mountains, the streams with animate and inanimate life, we at once think of contrasting him with our high-priest of nature. This is why I have linked together Chomei and the bard of Rydal Mount. Both were recluses; both were devout admirers of nature, and receptive in their attitude towards her.)

ディクソンは、論文の中でウィリアム・クーパー (William Cowper, 1731-1800)、シェイクスピア (Shakespeare, 1564-1616)、ジャン・ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) などヨーロッパの有名な詩人や文人の例を挙げて、西洋における文学活動はいかに隠遁習慣と密接に関係してきたのかを述べた後、12世紀の文人・隠遁者である長明の自然観は西洋のそれとだいぶ異なるものであると主張した。すなわち、ディクソンは漱石のエッセイに簡単にしか触れられていなかった隠遁のテーマを取り上げ、その論点を独自に展開したことが看取できる。

ディクソンは、長明の自然観について「また、花と木に対する長明の態度は、大枝と花の曲線や色相のみを楽しむ現代の耽美主義者と似ている。彼は、「帰るときしばしば、美しい

⁸ 原文は英語。和訳は筆者による。Dixon, J M, "Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel," *TASJ*, Vol. 20-2(1893), Yokohama: R. Meiklejohn & Co., p.194.

桜の枝・紅葉や木の実に恵まれ、それらを佛に奉ったり、あるいは、自ら使う。と記している」と述べた上で、旧約聖書の『創世記』にある「カインとアベルの話」の主人公であるカインの行動を長明のそれと比較している⁹。この論点においてもディクソンは、漱石がエッセイに指摘した長明の物理的な自然観（漱石の言葉を借りて言えば「霊なき」自然観）に賛同し、長明が仏に捧げた桜や紅葉、わらびや木の実の行為がもたらす効果についても疑問を抱いている。漱石によると鴨長明が無生物的な自然（inanimate nature）への憧れを持っており、ワーズワースのように自然に「魂」を見出そうとしなかったことから、単に物理的な自然に関心をもっていたにすぎない。同じように、ディクソンも長明の自然に対する態度に関して、物理的な自然に興味を持っていただけであると言及している。実は、ディクソンが漱石よりさらに一歩進んで、花木に対する両者の態度を比較している。長明が遠足から帰るとき「桜をかり、もみぢをもとめて」いた行為に対して、ワーズワースは花や木にも他の生物と同じく「魂」があるとして、花や木の小枝を折らないようにしていたと述べて、長明の自然観を批判している。ここにも明らかに漱石のエッセイの影響が見られる。

ディクソンは『方丈記』の「かへるさにハ折につけつつ桜をかり、（中略）且は仏にたてまつり、かつは家づとにす。」の部分の問題にし、カインは旧約聖書の神エホバに自分が耕した農地からの収穫物を捧げたにも関わらず、心が濁っていたため、エホバはその奉納を受け取らなかったが、それと同じく、長明が途中で採った桜や紅葉を仏に奉納したとしても、仏がその奉納を本当に受け容れるのかどうかは分からないと述べた。要するに、キリスト教的な神学及び倫理学を勉強し、宗教的な関心が強かったディクソンは、漱石のエッセイにごく簡単に述べられたテーマから着想を得て旧約聖書などキリスト教の聖典から類似する事例を引用し、ピューリタンの道徳的価値観の視点から 12 世紀の東洋の隠遁者である鴨長明の解釈を提示したと考えられる。

1-2 鴨長明の人間嫌い論について

ディクソンは、漱石の取り上げた長明の自然観や隠遁習慣のテーマのみならず、漱石が示した長明の人間嫌い論をそのまま取り入れたことも確認できる。漱石は、長明の性格を語る中で、エッセイの中に「人間嫌い」（misanthrope）という言葉を使用しただけではなく、鴨長明の人間嫌い性格に関しても、短い文章ではあるが明記している。漱石はこれに関して次のように述べている。

⁹原文は次の通りである。 Again, in Chōmei's attitude to flowers and trees, we find an affinity to the ways of the modern aesthete, pleased with a hue and curve of a bough and blossom. "On my way home from the more of Amazu," he remarks, "I am frequently rewarded by finding a choice bough of cherry or maple or a cluster of fruit, which I offer to Buddha or reserve for my own use. Dixon, J M, "Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel," *TASJ*, Vol. 20-2, 1893, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., p. 197.

第 2 に、鴨長明が現世を放棄したのは、鴨長明自身のいうところでは、すべてこの世のものは不安定な状態に置かれ、本質的な偶然に左右され、それ故追い求めるに値しないからである。それならば、鴨長明はなぜ、うつろい易さという点で大同小異の自然に対して、あれほどまでに甘いのか。鴨長明はなぜ、現世と財産を放棄したのと同時に、自然も放棄しなかったのか。さらに、鴨長明ほど人間嫌いを公言したものが、特定の先人に関心を抱くこともなおのこと説明がつかない¹⁰。(In the second place, Chōmei forsook the world, because, he tells us, all earthly things are precarious in state, fortuitous in nature and therefore not worthwhile aspiring after. Why then did he look so indulgently upon nature which is not a jot less subject to change? Why did he not renounce her in the same breath with which he renounced life and property? It is still more unaccountable that such a professed misanthrope as Chōmei should find any interest in some particular individuals who had gone before him.)

上記引用文に漱石が指摘した「特定の先人に関心を抱く」というのは『方丈記』の「若はまた、粟津の原を分ケつゝ、蟬歌の翁があとをとぶらひ、田上河をわたりて、猿丸大夫ガ墓をたづぬ。」の部分に相当するものであろう¹¹。鴨長明は念仏に飽きたときに、ふもとに住んでいた山守の十歳の子供と一緒に粟津の原や、和琴の曲「蟬歌」の名手であった蟬丸の遺跡、さらに、三十六歌仙の一人として有名猿丸太夫のお墓を訪ねると記している。漱石は長明のこのような故人への憧れを批判している。漱石によると長明は人間嫌いな性格を持っていたにもかかわらず、このように故人への憧れは彼の思想に合致しないものである。漱石にとって長明の人間嫌い論は主要な論点であったと思われる。

『漱石全集』では *misanthrope* という言葉が数か所にしか確認できないが、漱石自身はこの概念についてある程度関心を抱いていたようである。最初にこの言葉が現れるのが、漱石が帝国大学に入学した直前の明治 23 年 8 月 9 日に親友正岡子規に宛てた手紙の中である。この手紙に漱石は次のように書いている。

(前略) 定業五十年の旅路をまだ半分も通りこさず既に息ツキ候段貴方の手前はづかしく吾ながら情なき奴と思へどこれも *misanthropic* 病なれば是非もなし。(中略) 知らず、生れ死ぬる人何方(いづかた)より来りて何かたへか去る。またしらず、仮の宿誰がために心を悩まし何によりてか目を悦ばしむる、と鴨長明の悟りの言は記憶すれど悟りの実は迹方なし¹²。

¹⁰ 和訳は『漱石全集』より。夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第 26 巻』、岩波書店、1996 年、133 (364) 頁)より引用。

¹¹ 西尾実校注『日本古典文学大系 30』(岩波書店、1971 年、39 頁)。

¹² 夏目漱石「正岡子規宛て〔「筆まかせ」より〕」『漱石全集 第 22 巻』(岩波書店、1996 年、21-24 頁)。

漱石は親友である子規に人生の苦悩を吐露し、いかに自身のエゴイズムが悟りを得させないことを述べる中で *misanthrope* という言葉を使用し、鴨長明が『方丈記』に記した教えについて言及している¹³。また、『漱石全集』に収録された漱石が書いた断片などにも *misanthrope* という言葉は数箇所に見られる。おそらく、漱石が英文学を勉強する中でこの人間嫌いの概念に興味を持ったと思われる。なぜなら、17世紀以後の西洋の文学作品において人間嫌いの概念は顕著であり、漱石文庫に所蔵された多くの著書にもこれについて論じられている。例えば、漱石がエッセイに指摘したフランスの批評家テーヌ (Hippolyte Taine, 1828-1893) の著書 *Histoire de la littérature anglaise* (1864)の英語版 *The History of English Literature* (1872) が漱石文庫にあるが、この著書に人間嫌いのテーマは詳しく論じられている。テーヌは、英文学においてスウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) やサッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-1863) の作品にいかに人間嫌いのテーマが描写されているのかを具体的に説明しており、漱石はそのような描写から影響を受けたかもしれない。

さらに言えば、漱石はイギリスの小説家メレディス (George Meredith, 1828-1909) から大きな影響を受けたことは広く知られているが、そのメレディスの著書にも人間嫌い論が議論されている。漱石が非常に賞賛したメレディスの『エゴイスト』 (1879) は、モリエール著 *Le Misanthrope ou l'Atrabilaire amoureux* (『人間嫌い:あるいは怒りっぽい恋人』) の喜劇論から影響を受けていた。実は、漱石が所有していたメレディス著『喜劇論』 (An Essay on Comedy, 1877) に『人間嫌い:あるいは怒りっぽい恋人』について論じられた箇所に漱石による下線も確認できる¹⁴。これらのことを考えると、漱石にとって *misanthrope* は興味深い概念であったようである。とはいえ、漱石文庫にあるメレディスの著書のほとんどは漱石の留学の時かそれ以降に購入されたものであるため、彼が『方丈記』を英訳した時に指摘した *misanthrope* は、英文学を勉強する中で関心を持ち、影響を受けたと考えるのが妥当であろう。

それでは、ディクソンが漱石の人間嫌いテーマをいかに取り入れ、展開したのであろうか。ディクソンは論文の中に次のように書いている。

ワーズワースの世間に対する態度は、測り知れないほど同情的かつ親切である。彼の一人きりの散歩や森林での黙想の背景には愛情の深い家族がおり、家族生活のあらゆる喜びもある。勿論、彼は都会生活から離れ、都会の騒音とあわただしさを嫌っていたが、彼は人類の苦しみと闘いに無関心ではなかった。彼はきっと、鴨長明

¹³ 松本寧至「夏目漱石英訳『方丈記』をめぐって：漱石と鴨長明」 (二松：大学院紀要 13、1999年、15-6頁)。

¹⁴ 飛ヶ谷 美穂子「漱石文庫のメレディス (二)」 (三田國文 (14)、1991年、51 (6) 頁)。

のこのような世間に対する無関心さを動物主義的な態度として否定していたであろう。実は、鴨長明の多くの道徳的な黙想は、エドウィンとアンジェリーナという古くいまねごとのバラッドと同じようなものである。(中略) それぞれに見られる感傷主義は浅く、不完全なものであり、その人間嫌いな姿勢は瞬間的な状況に過ぎず、心の不機嫌の結果である¹⁵。(Wordsworth's attitude towards society was infinitely more sympathetic and kindly, while in the background of his solitary walks and musings among the hills were an affectionate household and the realization of all that is most delightful in home life. No doubt he was out of touch with town life, and disliked the din and rush of the city, but he was not indifferent to the suffering and struggles of humanity and would have rejected the callous indifference of Chōmei as animalistic. Many of Chōmei's moral musings, indeed remind us strongly of the sentimentalism of a mock-antique ballad like Edwin and Angelina. (...) The sentimentalism in each case is shallow and unsatisfactory, the misanthropy is a temporary phase of mind, the result of pique.)

ディクソンは、漱石のエッセイに既に提示された人間嫌いのテーマに焦点を当て、鴨長明とワーズワースの性格に照らし合わせながら詳しく説明している。ディクソンによると、ワーズワースは都市生活から離れて森の中で孤独な生活を送ったとしても、彼は長明と違って愛情をこもった家族を持ち、快絶な家庭生活を送った。一方で、長明は官能主義者であり、彼の隠遁生活があくまでも一時的な感傷主義の結果にほかならないという。英文学から例を上げて言えば、長明の性格はゴールドスミス (Oliver Goldsmith, 1728-1774) の *The Hermit* という詩に描写されたエドウィンとアンジェリーナの感傷主義と同じようなものであるとディクソンは主張した¹⁶。長明に対するディクソンのこのような人間嫌いの性格の記述は、漱石のエッセイの内容から影響を受けたことが確認できる。ちなみに、ディクソンは長老派教会の信者であり、他のプロテスタント派のように長老派も家族生活を重視する。そのため、ディクソンの上記のような考えは、少なからず彼の宗教的な考えからも影響を受けた可能性もある。

なぜなら、『方丈記』に長明の人間嫌いの性格を示すような記述は一切なく、漱石が参考にした『方丈記流水抄』及び『新注方丈記』にもこのような注釈はない。また、『方丈記』を参照したと思われる諸作品の中でも、長明の人間嫌い性格についての指摘は見当たらない。第1章で見た通り、『文机談』(1272)や『十訓抄』(1252)のように長明が望んでいた禪

¹⁵原文は英語。和訳は筆者による。Dixon, J M, "Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel." *TASJ*, Vol. 20-2, 1893, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., pp.195-196.

¹⁶ディクソンは次のように述べている。Many of Chomei's moral musings. Indeed, remind us strongly of the sentimentalism of a mock-antique balled like Edwin and Angelina [...]. Dixon, J M, "Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel," *TASJ*, Vol. 20-2, 1893, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., p. 195-196.

宜職に就くことが出来ず、絶望して世を背けたという批判的な視点を示した作品は見られるものの、長明が人間世界を嫌いであったために出家したという指摘を行った作品も存在しない。すなわち、長明の人間嫌いの性格はそれ以前にはなかった漱石独自の新たな解釈である。一方で、ディクソンは原資料を確認できる言語的な能力はなかったため、漱石の論じた内容をそのまま取り入れるしかなかった。漱石と同様に、ディクソンも鴨長明とワーズワースとの対比を行った上で、前者の人間嫌いの性格を批判し、その自然観がワーズワースのそれよりも劣っていたと述べたのである。

先に示した引用文の中で下西善三郎は、ディクソンが独自に論文の準備をすすめていたと指摘し、漱石のエッセイに記述されていない『鴨長明家集』から「ほととぎす発音聞きつるなごりにはしばしものこそ言はれざりけれ」の歌を言及してワーズワースの詩と比較したと示している。確かに、ディクソンは論文を執筆するに当たり準備は進めていたが、恐らく彼は主に英語文献を参照して情報を追加したと思われる。特に、12頁に及ぶディクソンの論文の5頁ぐらひは「ほととぎす」について論じたものであり、東西の文学においてほととぎすはいかに捉えられてきたのかを詳細に記述されている。これらの内容は、漱石のエッセイに見当たらないものである。ただし、漱石の英訳の中に「ほととぎすは悲しみを象徴する鳥として、他界への出発点である死出の山を導く鳥であるとされている。」という記述がみられる¹⁷。これがきっかけにディクソンはこの点について詳しく調べて論文に説明したに違いない。そして、ディクソンが論文の中に提示したほととぎすに関する2首の和歌は、下西の指摘した『鴨長明家集』ではなく、チェンバレンが1880年に著した『日本人の古典詩歌』（川村ハツエ訳、1987）から引用されたものである¹⁸。

このように、ディクソンの論文は漱石のエッセイから多くの内容を、特に鴨長明の隠遁思想や自然観及び人間嫌いのテーマについての内容を取り入れたことがわかる。彼は漱石のエ

¹⁷ 漱石は次のように書いている。Cuckoo is considered as a mournful bird which crosses the mountain of Shide (the starting-point for death. 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、141(356)頁)。

¹⁸ 例えば、最初の一首は『万葉集』の「うくひすのーかひこのなかにーほととぎすーひとりうまれてーわかちちにーにてはなかすーわかちははにーにてはなかすーうのはなのーさきたるのへゆーとひかへりーきなきとよもしーたちはなのーはなをみちらしーひねもすにーなけとききよしーまひはせむーとほくなゆきそーわかやとのーはなたちはなにーすみわたれとり。(第九巻 1755 番歌)」である。同じく、二首目も『万葉集』の「たにちかくいへはをれども こだかくて さとはあれども ほととぎすいまだきなかず なくこゑを きかまくほりと あしたには かどにいでたち ゆふへには たにをみわたし こふれども ひとこゑだにも いまだきこえず。(第19巻 4209 番歌)」の英訳である。また、ディクソン自身は鳥などに深い興味をもっていたようで、D. Braunsがドイツ語で執筆したカラスに関するある論文を1884年に英訳し、それは日本アジア協会会報に掲載されている。詳細は、“On *Corvus Jaononensis* Bonaparte and its connection with the *Corvus Corax* L.” translated from German by J M Dixon. *TASJ*, Vol. XII Part 3, 1884, July) を参照されたい。

ッセイを無視ないし軽視したのではなく、自らの論文の主旨であったワーズワースと長明の自然観と隠遁生活に関する内容を漱石のエッセイから取り入れた。その一方で、第3章でみたように、漱石によって論じられた自然観や隠遁に関するテーマは、ディクソンの期待に応えるための解釈であり、その意味でディクソンが漱石のエッセイから内容を取り入れたのは当然のことであったといえよう。

第2節 漱石とディクソンの英訳の関連性について

上記において、ディクソンが漱石のエッセイから多くの内容を取り入れて自身の論文を完成させたことについて述べた。しかし、両者の完成した『方丈記』の英訳は、どのような関連性を持っていたのであろうか。上記のように、下西はディクソンの『方丈記』英訳 A *Description of My Hut* が、漱石の英訳をほぼ模倣したと言って良いほど類似していると指摘している。また、森川は漱石とディクソンの英訳を部分的に比較し、漱石の英訳における誤訳などについて指摘すると同時に、ディクソンがいかに漱石の英訳を手直したかを考察している¹⁹。確かに、両者の英訳を確認してみると、類似性が多くあることに気づく。同時に、ディクソンの英訳に漱石の英訳では言及されていない内容も確認できる。漱石とディクソンの英訳は、具体的にどのような関連性を持っていたのか、これまでの先行研究では検討されてこなかった。そこで、ディクソンが漱石の『方丈記』英訳よりどのような内容を受け入れ、独自の調査などを経てどのような内容を得たのか、両者の英訳の比較検討を通じて、その関連性を明らかにする。このような考察を通して、漱石の『方丈記』英訳はいかにディクソンに模倣され、さらに欧米の読者に流通したのかを理解するために役に立つ。

第1節で述べたように、ディクソンは自身が行った英訳の草稿は漱石によって作成されたことを明記し、漱石が英訳に提示した注釈やエッセイに示した詳細な情報のため、夏目金之助に感謝しなければならないと述べている。このことから、ディクソンは漱石の英訳を利用し、それをもとにして自身の『方丈記』英訳を完成させたことが理解できる。言い換えれば、ディクソンの英訳は漱石のそれに類似することは当然のことであった。両者の訳文を比較して見てもディクソンが漱石の訳からほとんどの内容を受け継いだことは明らかである。以下では、漱石が翻訳の際に使用した『方丈記流水抄』と『方丈記:新註』の原文及び漱石とディクソンそれぞれの英訳から該当部分を提示し、その類似点について考えてみる。まずは、『方丈記』の冒頭文である。

¹⁹ 森川隆司『漱石の学生時代の英作文三点—幕末明治英学史論集』（近代文芸社、1993年、177-191頁）。

方丈記流水抄：行川のながれは絶えずして。しかも本の水にあらず。よどみにうかぶうたかたは。かつきえかつむすびて。ひさしくとどまる事なし。世の中にある人と住家と又かくのごとし。玉しきの都の中に。むねをならべいらかをあらそへる。たかきいやしき人のすまいは。代々をへてつきせぬものなれど。これをまことかとたづぬれば。むかしありし家はまれなり。或は去年やぶれてことしハつれり。あるハ大家はほろひて小家となる。すむ人も是におなじ²⁰。

方丈記新註：行く川のながれハ絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたハ、かつきえ、かつ結びて、久しくとどまる事なし。世の中にある、人とすみかと、又かくのごとし。玉敷の都のうちに、棟を並べ、薨をあらそへる、たかき、いやしき、人の住居ハ、代々をへて、尽きせぬものなれど、是を、まことかとたづぬれば、むかしありし家ハまれなり。あるハ、去年やぶれて今年ハ作り、あるハ、大家ほろびて小家となる。すむ人も、是におなじ²¹。

漱石訳：Incessant is the change of water where the stream glides on calmly: the spray appears over a cataract, yet vanishes without a moment's delay. Such is the fate of men in the world and of the houses in which they live. Walls standing side by side, tilings vying with one another in loftiness, these are from generations past the abodes of high and low in a mighty town. But none of them has resisted the destructive work of time.

ディクソン訳：The water incessantly changes as the stream glides calmly on; the spray that hangs over a cataract appears for a moment only to vanish away. Such is the fate of mankind on this earth and of the houses in which they dwell. If we gaze at the mighty town we behold a succession of walls, surmounted by tiled roofs which vie with one another in loftiness. These have been for generation to generation the abodes of the rich and of the poor, and yet none resist the destructive influence of time.

漱石にとって訳文は創作であり、読者の芸術的な味見を考慮しながら翻訳の手法を選定しなければならぬと主張したことについて第3章で触れた。読者の芸術的な感覚を満足させるために、漱石は原文をそのまま直訳するのではなく、原文にない表現などを調整して読者の理解を助けるようにする必要があると思っていた。例えば、訳文にある「calmly」という英単語に相当する原文での表現は見当たらず、同じく原文にある「玉敷の都」に対する訳文は英訳の中に確認できない。また、漱石は「よどみに浮かぶうたかた」の部分を「the spray appears over a cataract」と英訳し、「よどみ」を「cataract」と訳している。そもそも

²⁰ 築瀬一雄『方丈記諸注集成』（豊島書房、1969年、241頁）。

²¹ 武田信賢・関根正『新注方丈記』（1891年、1頁）。

「cataract」という英単語は、滝の意味を持つラテン語の *cataracta* から由来しているが、英語では「流れの早い川」の意味もあり、漱石はこの意味で利用しているようである²²。一方で、英語を母語とし、大学で英文学を専攻したディクソンはこの部分を「the spray that hangs over a cataract appears」として訳しているが、これは漱石の訳文とほとんど変わらないものである。実は、ディクソンが漱石の英訳の中に使用されたほとんどの英単語をそのまま再利用して、文章を手直ししただけと思われる。例として、漱石の文章の中で見られる *Incessant, stream, glides, calmly, resisted, resisted* など英単語は、ディクソンの文章でも見られる。しかし、ディクソンは漱石の文章における品詞の位置を変えたりして、英語話者の自然な英語に書き換えたことは確かである。

両者の英訳からもう一例を出してみよう。

方丈記流水抄：しづかなる暁此ことハリをおもひつゞけて。みづから心にとひていはく。世をのがれて山林にまじはるハ。心をおさめて、道をおこなはんがため也。しかるを汝がすがたハ聖に似て心ハ濁にしめり。住家ハ即。浄名居士のあとをけがせりといへども。たもつ処ハ。わづかに周利槃特が行にだもおよばず。もし是貧賤の報。みづからなやますか。将亦妄心のいたりて狂はせるか。其とき心さらに答る事なし。ただかたはらに舌根をやとひて。不請の念仏両三返を申てやみぬ。時に、建暦の二とせ弥生の晦日比。桑門蓮胤外山の菴にしてこれを記す²³。

方丈記新註：しづかなる暁、此ことわりを思ひつゞけて、みづから、心にとひていはく。世をのがれて、山林にまじはるは、心をおさめて、道をおこなはむ為なり。しかるを、汝、姿はひじりに似て、心は、にごりにしめり。住家は、すなわち、浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつところ、わづかに、周利槃特が行ひにだにも及ばず。もし、これ、貧賤の報の、みづから悩ますか。はた又、妄心の至たりて、くるはせるか。そのとき、心、さら

²² この件に関して森川隆司が次のように指摘している。「どうしたわけか、S（筆者注：漱石。以下同様）は「よどみ」を「滝」と勘違いした。つれてD（筆者注：ディクソン。以下同様）もこれを *cataract* と訳した。「よどみ」は漢字では「澗」とも記す。Sが用いたテキストでは「澗」となっていたのを「瀧」と錯覚したのではあるまいか。」しかし、森川は誤解しているように思われる。なぜなら、漱石が英訳のために利用した『方丈記新注』と『方丈記流水抄』の両方に「よどみ」と仮名で書かれているため、森川の指摘したように字を間違ふことはまずない。実は、*cataract* という英単語は普段「滝」（*waterfall*）と意味するが、同時に「any furious rush or downpour of water」という流れの早い川の意味もあるため、漱石はこの意味で *cataract* を使用した可能性は高い。森川隆司『漱石の学生時代の英作文三点—幕末明治英学史論集』（近代文芸社、1993年、177-178頁）。"cataract, n.1.1". OED Online. July 2018. Oxford University Press. <http://www.oed.com/viewdictionaryentry/Entry/11125> (accessed October 16, 2018).

²³ 築瀬一雄『方丈記諸注集成』（豊島書房、1969年、287-290頁）。

に答ふる事なし。ただに、舌根をやとひて、不請の念仏、兩三遍をまうしてやみぬ。時に、建暦の二とせ、弥生の晦日比。桑門蓮胤。外山の菴にして、これをしるす²⁴。

漱石訳： One still morning after those reflections, I began to ask myself: “The object of escaping from the world and of living among woods and mountains is nothing but to tranquillize your mind and to practise your principles. But your mind is soaked in impurity, though your appearance resembles a sage. Your conduct even falls short of Shuri-bandoku’s though your hut is like that of Jiomio-Koji. Is it the effect of poverty or is it the influence of some impure thought?” No answer did I give to this question but twice or thrice repeated involuntary prayers. The last day of March, the 2nd year Of Kenreki (1211). Monk Renin at the hut of Toyama.

ディクソン訳： One quiet morning after making these reflections I propounded to myself the following question: Granted that your object in forsaking the world and retiring to these woods and mountains is to tranquillize your mind and carry your principles into practice. But, though in appearance you are a sage, yet your mind is soaked with impurity. Though your hut resembles the dwelling of Jyomo, yet your conduct falls short even of Shuri-Bandoku’s. Is this the results of poverty, or of inward impurity? This question I left unanswered, but twice or thrice repeated involuntary prayers. Written in the hut at Toyama, on the last day of March in the second year of Kenreki (1212 A.D.) by Renin, the monk.

上記訳文の場合も、ディクソンは漱石の文章をもとにして書き換えたことは明らかである。漱石の文書にある英単語は、ディクソンの文章でも確認できる。また、意味的にもディクソンの文章は、漱石の文章と大きな隔たりはない。このことから、ディクソンは漱石の英訳をもとにして自身の英訳を完成させたことは明白である。とはいえ、ディクソンは漱石の英訳のみを参照したかというところでもないようである。ディクソンの英訳の中で漱石の英訳に見当たらない内容が提示されており、漱石の英訳にあった間違いも修正された場合もある。このことから、ディクソンが漱石の英訳をもとにしつつ、他の人との相談しながら修正を加えていたことがわかる。

上の引用文中に漱石の英訳にある「Jiomio-Koji」はディクソンの英訳に「Jyomo」と表記され、漱石が建暦2年を「1211」と誤って書いているのに対し、ディクソンはそれを「1212 A.D.）」と直している。特に、ディクソンの英訳では、漱石の英訳に記載されていない解説が何箇所にも確認される。例として、漱石は鴨長明の山鳥のホロホロという鳴き声の部分について「The allusion is to a poem of Ukimoto:- Is that a father or a mother/ Who sings horo, horo on the heather. The notes of a bird evoked the sympathy of the poet who assumes that the parental affection

²⁴ 武田信賢・関根正『新注：方丈記』（1891年、29-30頁）。

which exists between parent and child, likewise exists among little birds. Such as idea is very common in Japanese poetry.」と解説を付けている。しかし、ディクソンの解説は漱石よりよりもっと詳しく、漱石が触れられていない情報も提示されている。ディクソンはこの点について次にように解説を加えている。「A Reference to the lines of Uki Moto:- “Whenever I hear a pheasant sing, *horo horo*, I wonder whether it is my father or my mother.” The title of the poem in which the lines occur is “All beings are our parents.” Bashio (16th century) also expresses the same idea:- “I long to see my father. I long to see my mother, whenever I hear a pheasant sing.” The pheasant was typical of parental affection.」上記下線部分にあるように、ディクソンは行基菩薩（668-749）が詠んだ和歌「山鳥のほろほると鳴く声きけばちちかと思ふははかと思ふ（玉葉 2627）」の題名について言及し、松尾芭蕉（1644-1694）が山鳥の鳴き声を聞いて同じような歌を詠んだこともあるとまで指摘している。ディクソンが示した芭蕉の俳句とは、おそらく「父母のしきりに恋し 雉子の声」のことであるが、芭蕉のこの俳句は先に示した行基菩薩が詠んだ和歌から影響を受けたことが知られている。これを考慮すると、ディクソンは漱石の英訳の以外に他の資料などを参照し、あるいは他の人と相談して新たな情報を入手して、英訳を完成させたことがわかる。

要するに、ディクソンの『方丈記』英訳は漱石の英訳をベースにして作成されたが、ディクソンは同時にほかの資料も参照し、あるいは他の人との相談を通じて新たな情報を入手して『方丈記』の英訳を完成した。その意味で、ディクソンは漱石の英訳を完全に模倣しただけではないものと言えるのであろう。

第3節 ディクソンの鴨長明像について

上記では、ディクソンが漱石の『方丈記』英訳をもとにしてこの作品の新たな英訳を完成し、漱石のエッセイから多くの内容を取り入れて自身の論文を執筆したことについて述べた。しかし、ディクソンが鴨長明に関して全体的にいかなるイメージを持っていたのかについては未だ判然としない。そこで以下においては、ディクソンが『方丈記』及びその作者である長明をどのように捉え、それらの捉え方から日本に対する彼のどのような考えが見取られるのかを考えてみる。

ディクソンによると、日本は芸術の分野においてあまり創造性はなく、因習的な表現をそのまま受け継いできただけである。文学において言うならば、無韻を特徴とした短い詩の以外に、日本の文人は特に創造力を発揮してこなかった。ディクソンの指摘した「無韻を特徴とする短い歌」とは俳句のことであろうが、日本文学に関するディクソンのこのような考えは、特に珍しいものではない。というのも、当時の西洋の日本研究者の中でも第一人者とさ

れるチェンバレンなども同じような考えをもっていたことが知られている²⁵。言い換えれば、ディクソンの日本文学に対するこのような考えは、西洋人などによって行われた先行研究から受け継いだものであった。一方で、日本が自然豊かな国であり、日本の文学者は自然に対して古くから極端なレベルまで誠実さを示し、それこそが日本文学の特徴的なものであるとディクソンは述べている。12世紀の文人である長明もそのような自然崇拝者の一人であり、自然の様々な側面を意識しながら文学生活を送ったという。

ディクソンによると、長明の自然観をワーズワースの自然観と照らし合わせると、前者の思想は後者と大きく異なるものである。長明の自然観は物理的なものであり、長明はワーズワースのような自然観を信じていなかったとディクソンは批判的な見解を示している。例えば、『方丈記』では長明が散歩からの帰り道で桜の枝を取って草庵へ帰ってくるという場面があるが、ディクソンはこれを問題にし、ワーズワースはいかなる場合でも木の枝を折る行動はしないと記述している。すなわち、ワーズワースは大自然の魂が流れている花や木の枝などを取ることに反対し、自分の娘にそのようなことをしないよう呼びかけた詩を作成したこともあるとディクソンは記している。ワーズワースは生物・無生物的なものからなる自然を汎神論的な側面から捉え、大自然における創造的精神を尊敬するように呼びかけているのに対し、長明は自然を構成する美しいものだけに執着しただけで、それらの中で潜められた自然の意志を読み取ろうとしなかった。また、ワーズワースによると、それぞれの生き物は独自の美を持っているが、それぞれが生きてゆくために特定の場所・地域との依存性は少ない。しかし、植物の美はそれぞれが生きる地域と密接に関係し、花や木の枝を取ることは自然の美を無視することである。『方丈記』にある長明の花や木の枝を取るという行為は、自然崇拝者たるものがすべきことではないとディクソンは批判的に思っている。

ディクソンにとって長明はやはり人間嫌いな人物であった。先にも述べた通り、ディクソンはワーズワースが都会生活から離れたにも関わらず、家族生活をしながら文学活動を行ったことを示し、ワーズワースは決して鴨長明のように人間嫌いな性格を持っていなかったという。長明が望んでいた就職を得ることに失敗したことに怨みを抱き、都から離れて隠遁生活を送ったに対して、ワーズワースは自然への愛着を持っていたため森林の中で住み、自然から直接的に刺激を受けながら文学活動を行った。ディクソンによれば、これこそが両者の大きな相違点である。長明は人間社会の苦しみと苦闘に対して無関心であったため、ワーズワースはきっと長明のこのような性格を動物的であると批判したに違いないとディクソンは述べた。また、長明の人生観について触れたディクソンによると、60歳の鴨長明は「朝顔に宿る露」のように人生が短縮し続けつつあるという消極的な姿勢をとった一方で、同じ歳

²⁵ Chamberlain, Basil Hall. "Bashō and the Japanese Poetical Epigram." *TASJ*, Volume 30-2, 1902, p.208.

月のワーズワースはこれからの人生においても積極的な熱望を示し、それぞれの人生観も異なるものであることを示した。

さらに、ディクソンは『方丈記』にある「惣て、かやうの楽しみ、富める人に對していふにはあらず。」の部分に注目し、長明の思想を批判すると同時に、これは日本人一般の性格でもあると指摘している。日野山における鴨長明の質素な生活の有様は、長明が自分自身のために述べ、他人に同じようなことを求めているわけではないが、これは長明の消極的な態度を示しているという。すなわち、『方丈記』はあくまでも鴨長明の生活を記録したもののみで、他人の教訓を目指して執筆されたものではない。ディクソンは、『方丈記』が教訓的なことに欠けていることを問題視し、長明の隠遁生活の目的はあくまでも静穏かつ心配のない自己中心的な生活に過ぎず、長明は他の人々の教訓として自身の思想を伝えようとしなかった。ディクソンによると、長明のこのような受動的な姿勢が日本人一般の性格でもあり、これが西洋と日本との考え方の大きな隔たりである²⁶。西洋人は、日本人のこのような無関心的な態度 (indifferentism) によく驚くのである。日本人のこのような態度は、害にならないため最初は良いかもしれないが、しばらくすると思いやりや道徳の欠乏に段々嫌になってしまうのである。例えば、ワーズワースのような西洋の文人の場合、このような無関心さは一切なく、彼の作品にいつも読者に行動を呼びかける明示的なメッセージが含まれている。後にディクソンは、ワーズワースの *Prelude* から詩を引用し、ワーズワースはいかに自然を鑑賞するために読者に呼びかけたのかを示したのである。長明の『方丈記』の描写の中では、このように読者に行動を呼びかける姿勢は見当たらないとディクソンは述べる。

漱石の描いた鴨長明像から強い影響を受けたディクソンは、鴨長明が数寄者に過ぎないと信じていた。漱石はエッセイの中で長明について書いた数行の中で「父の禰宜職を受け継ぎたいという強い気持ちを抱いた長明の希望が実現されなかったため、彼は絶望のあまり剃髪し大原の里へ隠退した。」を記し、長明は不機嫌な性格が特徴であったと述べている²⁷。ディクソンは、漱石のこの解釈をそのまま受け取り、長明は宗教的な志向が浅く、近代的な数寄者に過ぎなかったと示している。長明の花・木など植物界に対する態度は近代的な数寄者の態度に過ぎず、木枝や花の色合いや曲線だけを鑑賞して満足したと述べている。ワーズワ

²⁶ ディクソンは次のように指摘している。 Here comes in the national indifferentism which so often strikes the Western mind as strange, and which, though pleasing at first because of its inoffensiveness, is in the end irritating from its complete lack of moral glow and strength and warmth. Dixon, J M, "Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel," "A Description of My Hut", *TASJ*, Vol. 20-2, 1893, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., p.197.

²⁷ 和訳は筆者による。原文は次のようである。 His solicitations to succeed to his father's position being refused, he shaved his head in vexation and retired to the sequestered village of Ohara. Dixon, J M, "Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel," *TASJ*, Vol. 20-2, 1893, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., p.197.

ースのように、草木を自然の一部として、それらを通じて直接的に神様と関わりあうという思想は長明の場合見ることが出来ないことを主張した。

上記のように、ディクソンの長明像は、19世紀末に西洋人が東洋に対して見せたやや偏見的なものと同じであった。彼は、長明とワーズワースの比較検討を通じて、日本の文人がいかになんが側面において西洋の文化より衰退していたのかを示すことに留まっていたのである。また、ディクソンの論文や英訳を見る限りでは、彼には独創性は確認されず、漱石の内容をほぼそのまま再利用したものである。

第4節 在日西洋人が捉えた鴨長明像

上に述べた通り、海外の英語文献における『方丈記』についての言及は1870年代から確認できるが、西洋人としてこの作品に初めて強い関心を寄せたのがディクソンであった。彼は、漱石の英訳とエッセイをもとにして書いた“Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel”という論文と“A Description of My Hut”という『方丈記』の英訳を1892年2月10日に日本アジア協会で発表した。その発表会の後に行われた議論の記録が協会会報の議事録に残されており、そこから『方丈記』ないし鴨長明に関して、西洋人の参加者がどのような理解を示したのかを読みとることができる。

まずは、ディクソンが発表した会議の司会を務めた、日本アジア協会の副会長のジョージ・ウィリアム・ノックス (George William Knox, 1853-1912) 博士からのコメントについてである。ノックスはアメリカ人で、長老派教会の宣教師として1877年に来日し、1893年までの長期間にわたって日本で宣教活動を行った。それと同時に、彼は築地大学校、東京一致英和学校、明治学院大学などキリスト教会に関係する学校などで教師活動も続けた。1886年に帝国大学で哲学・政治学などを担当していたアーネスト・フェノロサ (1853-1908) が帰国すると、その後任として帝大で哲学・美学の教師としても活動した。日本在中にノックスは、日本の宗教や思想などに関する論文や著書を数多く執筆し、そのいくつかは日本語にも訳されている。ディクソンが試みた東西の自然観の比較研究を踏まえて、ノックスは次のようにコメントをした。

司会者は、このような興味深いテーマについて発表してくださった発表者に謝意を表し、東西における文学の比較検討はいかに難関な作業であるのかを示した。中国人にとって、我々の西洋文学はあくまでも粗末かつ未熟なものに過ぎないようである。東洋の自然観は我々のそれと多く異なり、この地域に長く住めば住むほど、その根本的な相違に直面する。彼らにとって自然は、万華鏡のように絶えず変化するものであった。鴨長明は、その教訓が正義・慈善に欠けているとして、かつての儒学派の作者たちに、ただの優美主義者として強く批判されている。自然に対する彼

の態度は確かに非常に狭いものであった。これは日本文学全般についても言えるのであろう。日本文学は、専ら繰り返して使用されてきたいくつかのテーマを中心にし、それらを除くと残るものが何一つもない²⁸。(The CHAIRMAN thanked the reader of the paper for the interesting article with which he had furnished the meeting, and went on to speak of the great difficulty of comparing Western and Eastern literature. To the Chinese much of our Western literature seemed crude and unfinished. The Eastern attitude towards nature is wholly different from ours, and the longer one resided there, the greater was one struck by the radical divergence. Nature to them was a kaleidoscope, - a series of change without rest. Chōmei had been criticized severely by late authors of Confucian schools as a mere aesthete, in whose teaching righteousness and benevolence were absent. His attitude towards nature was certainly a very contracted one. It circled round a few well threshed subjects. Take them away and nothing remained.)

ノックスの指摘の中で、まず目立つのが下線部分の「中国人にとって」という表現である。今更言うまでもないが、ディクソンの発表は中国ではなく、日本文学に関係するものであり、その論考は日本と西洋の思想や習慣の比較検討を中心したものである。しかし、ノックスのコメントでは、日本人ではなく中国人について指摘されているが、これはどのようなことを意味しているか。おそらく、当時の西洋人は、日本より古い歴史と伝統を誇る中国を重視し、東アジア全体について「中国」という言葉を利用して表現していた傾向が見られるが、ノックスのコメントもそのような意味で利用されたと思われる。実は、1904年にアメリカで出版されたノックスの著書 *Japanese Life in Town and Country* でも彼は日本よりも中国についてより好意的な意見を持っていたことが確認できる²⁹。

それでは、ノックスのコメントから、彼の『方丈記』ないし鴨長明についてどのようなイメージを見取ることができるのであろうか。日本に長い間滞在経験のあったノックスは、日本を含む東アジアの文学は西洋のそれと大きく異なるものであったと言う。東アジアの人々にとって、西洋文学は未熟で、未完成なものに過ぎない。ノックスによれば、この地域に住めば住むほど、その根本的な相違に直面することが多いものである。彼の同じような言及は、先に提示した彼の著書にも見られる³⁰。勿論、日本に対するノックスのこのような姿勢は当時のほとんどの西洋人においても当てはまるのであろう。上記引用にある彼が指摘した日本

²⁸ 原文は英語。和訳は筆者による。“Minutes of Meetings (Meeting of February 10th, 1892)”, *TASJ*, Vol.20, 1892, pp. vii – x.

²⁹ Knox, G.W. *Japanese Life in Town and Country*. G. P. Putnam’s Sons, New York and London, 1904, pp. 1-9.

³⁰ ノックスは次のように言及している。The current phrase in Japan has it that the longer one is there the less does he know of the land. Knox, G.W. *Japanese Life in Town and Country*. G. P. Putnam’s Sons, New York and London, 1904, p. 1.

における「根本的な相違」は、日本に内在した相違そのものではなく、むしろ西洋人が自分の価値観の枠組みから解釈したから起こった現象に他ならない³¹。やはり、ノックスは日本に長い間住んだにもかかわらず、日本について良いイメージを持っていなかったようである。ノックスは、長明が儒学者たちにただの数寄者として批判され、彼の自然観は西洋人のそれより狭いものであったと指摘した。実は、ノックスは 1892 年 1 月 20 日付の日本アジア協会会報に、江戸時代における日本の儒学について *A Japanese Philosopher* という長文の論文を発表しているが、その描写からなぜ彼は鴨長明についてそのようなコメントをしたのかが推測できる。

ノックスは上記論文の中で、江戸時代の儒学者の室鳩巢（1658-1734）が著した『駿台雑話』の部分的な英訳を示し、その訳文の中で吉田兼好や西行法師など中世期の仏徒を批判した記述を残している³²。室鳩巢など江戸期の儒者たちが、仏教が提唱する遁世習慣に対して批判的な見解を示し、人間としての社会的な責任を果たしながら精神的な真理に近づくのが大事であると主張していた点に、ノックスは着目していた。ノックスの論文の中で、『方丈記』や長明に関する直接的な言及はない。しかし、同じ中世期の隠遁者である兼好や西行と同様に、長明も江戸時代の儒学者たちにとってはただの数寄者であり、その教えが正義・慈善に欠けていたと考えられたため、ノックスはこのように指摘したのであろう。実際に、ノックスが帰国後、アメリカで行った講演を収録した著書 *The Development of Religion in Japan*（1907）にも同じような見解が見られる。ノックスは、中世期の日本における仏教の悪影響について次のように述べている。

（前略）他にも原因があった。例えば、「他界的な思想を持つ」宗教の有害な影響はその一つである。確かに、これより影響の大きな墮落はなかった。（中略）人々は、現世界への思いを拒絶ないし否認する一方で、貴族社会から習って、財産、権

³¹ この点に関しては、稲賀繁美の「翻訳はいかに骨折するか、あるいは骨折をどう翻訳するか-日本詩歌・藝術の非線状的説話構造の欧米言語における受容をめぐる設問」（大手前大学比較文化研究叢書 8 川本皓嗣、上垣外憲一編『比較詩学と文化の翻訳』2012 年 6 月 30 日、102-135 頁）は詳しい。また、19 世紀初期ころの西洋人はいかに理解不能な〈他者〉として日本を捉えてきたのかの問題についてマイケル・エメリック「日本文学の発見—和文英訳黎明期に関する試論」（『日本文学の翻訳と流通』勉誠出版、2018 年、9-30 頁）が詳しい。

³² 例えば、ノックスが仏者であった兼好法師について次のような批判的な見解を示している。The *Taiheiki* says that he wrote lustful letter for Ko no Moronawo; and *Entairiaku* says that when he accepted the invitation of Iga no Kami, Tachibana no Naritada, and went to Iga he committed adultery with Naritada's daughter. Some of the poems were written at that time. So we see that he flattered the world and was lustful. Knox, G.W. "A Japanese Philosopher." *TASJ*, Vol. XX, 1893, pp.119-121.

力、肉欲に充ちた贅沢な隠遁生活を送るなど、宗教と全く無関係の目的で入道し、お寺が正に世俗的なことに満ちた場所になった³³。

このように指摘したノックスは、さらに一歩進んで日本におけるこのような状況は 11 世紀・12 世紀の文学の中でも確認できると述べ、そのような文学作品の代表的な例として『源氏物語』を挙げている。『源氏物語』における道徳的な問題について明治期の西洋人が多くの場合、批判的な意見を持っていたことは当時の資料からも確認できる。例として、1882 年に末松謙澄の部分的な英訳がイギリスで発表されて間もないうちにロンドンから発行された週刊誌に『源氏物語』の書評が掲載され、その中で中世期の日本における道徳的な問題について次のように指摘されている。

日本人の生活様式を描いた作品として、『源氏物語』は好奇心をそそる興味深い作品であるが、その描写に見られるあらゆる道徳的な抑制を度外視する態度は驚くべきものである。このような不道徳な行為は、宮廷に仕える人々や源氏のような世に聞こえた放蕩者に限らず、既婚女性や少女、政治家、僧侶にも見られる。もし紫式部が当時の不道徳な行為をこれほど誇張して描かなければ（筆者注：もし紫式部の書いたことは正しければ）、現在の日本人の倫理観は大幅に改善されてきた、と考えれば慰めにもなろうか。（As a picture of Japanese life, Genji Monogatari is both curious and interesting, though the entire disregard of every moral restraint observable in its pages is startling. Not only is this complete laxity found among courtiers and chartered libertines such as Genji, but also among married ladies, young girls, statesmen, and priests. [...] It is consoling to think that, if Murashiki - Shikibu has not grossly exaggerated the impurities of the age, the morality of the people has greatly improved since her day³⁴.)

『源氏物語』に対する上記のような見解は、他の西洋人の著書に確認できるが、興味深いことに、末松謙澄も自身の英訳の前書きに、中世日本の社会では道徳的な問題があったと認めている³⁵。言うまでもないが、西洋人によるこのような批判は、『源氏物語』が執筆され

³³ 原文は次の通りである。Other motives also operated- the influence of the world corrupting “other-worldly” religion. For surely no corruption is greater than this, the admission on false pretences of that which has been formally expelled. The world had been cast out and repudiated, but wealth, power, the gratification of the senses, the longing for a luxurious life of retiracy, and the example of the aristocracy led to the adoption of a religious life from irreligious motives and the abode of monks became the home of worldliness. Knox, G.W. *The Development of Religion in Japan*. G. P. Putnam’s Sons, New York and London, 1907, p.116.

³⁴ “The Japanese Romance.” *The Saturday Review of politics, literature, science, and art*, No. 1,388, Vol. 53, June 3, 1882, London, Published at the Office, Southampton Street, Strand, 1882, p. 707.

³⁵ 末松謙澄は『源氏物語』の英訳の「前書き」に次のように述べている。Imperial Capital became a sort of center of comparative luxury and idleness. Society lost sight, to a great extent, of true morality, and effeminacy of the people constituted the chief feature of the age. Men were ever ready to carry on sentimental adventures whenever they found opportunities, and the ladies of the time were not disposed to discourage altogether. Murasaki Shikibu, tr. By Suyematz Kenchio. *Genji Monogatari: The Most Celebrated of the Classical Japanese*

た社会文化的な背景を無視し、西洋の同時代的な道德概念から本作品が解釈されたため生じたに違いない。同じように、ノックスの鴨長明に関する批判的な指摘は、プロテスタント的な視点からワーズワースなど西洋の文人たちが、世の中で世俗的な生活を送りながらも本当の意味での隠遁者であったことを主張し、それに対して人間界を背けて物理的自然へ逃げた長明の行動を批判して、「ワーズワースの自然や孤独者として人間に対する態度は長明のそれとあまりにも異なっている」とコメントしたのである³⁶。

日本アジア協会の議事録に、発表会の参加者の一人である米国人のアレキサンダ・タイソン (Alexander Tison, 1857-1938) 教授のコメントについて、以下のような記録が残されている。

タイソン教授が、発表された論文に示された（筆者注：世間に対する）無関心にびっくりした。本発表内容は、彼をエマーソンの指摘した英国詩人の教え—何事においても問題としない—ことを思い出され、ルソーの事も思い出された³⁷。(Professor Tison has been struck by the indifferentism expressed in the paper. It reminded him of the English poet mentioned by Emerson whose teaching amounted to this – that nothing really mattered very much. There appeared also much that reminded him of Rousseau.)

ノックスと同じく、タイソンもアメリカ・ミズリー州の生まれであり、ハーバード大学・法学部を卒業した後、ニューヨークで弁護士の業務を行っていたが、1889年に来日し、1894年の初め頃まで帝国大学の法学科で英語・政治学を教えた人物である³⁸。タイソンは、鴨長明が人間界に対して示した無関心に驚き、エマーソンが示した英詩人の主張した「無関心さ」のことが思いだされたと記述されている。タイソンは、具体的に長明についてどのようなイメージを持っていたのであろうか。

アメリカの有名な思想家・哲学者のラルフ・ウォルドー・エマーソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) は、よく知られているように、評論 *Nature* (1836) やその他のエッセ

Romances. London Trubner & Co. Ludgate Hill, 1882, p. xiii. 他にも、William Elliot Griffis は自著 *The Religions of Japan: From the Dawn of History to the Era of Méiji* やアストンは『日本文学史』にも『源氏物語』について同じような見解を示している。

³⁶ 和訳は筆者による。原文は次の通りである。Wordsworth's feeling towards nature, and to man as a solitary, was wonderfully different from that of Chōmei. "Minutes of Meetings (Meeting of February 10th, 1892)", *TASJ* Vol.20, 1892, p. viii.

³⁷ 原文は英語。和訳は筆者による。"Minutes of Meetings (Meeting of February 10th, 1892)", *TASJ*, Vol.20, 1892, p. viii.

³⁸ タイソンの海外における弁護活動について次の著書が詳しい。Auslin Michel R. *Japan Society, Celebrating a Century, 1907-2007* (revised and updated from the original by Edwin O. Reischauer.). Japan Society Inc, 2007, pp. 14-24. Rachel Mairs. *From Khartoum to Jerusalem: The Dragoman Solomon Negima and his Clients (1885-1933)*. Bloomsbury Publishing, 2016, pp.176-177, pp. 203-207.

イに人間と自然の関係を主題として、自然を鑑賞するために孤独が必要であると主張した³⁹。ディクソンの発表を聞いたタイソンは、「エマーソンの指摘した英国詩人」のことを思い出したと記録されているが、この「英国詩人」とはワーズワースのことであろう。エマーソンは、ワーズワースの思想から大きな影響を受けたが、その一方、ワーズワースの自然観やその詩に対する批判的な見解も示した。1833年にヨーロッパを旅行したとき、エマーソンはワーズワースと出会い、その際「一般の人々の間ではワーズワース著『ティンターン修道院上流数マイルの地で』が人気であるが、実際に『逍遙篇』(The Excursion, 1814)やソネットの方がずっと素晴らしい作品ではないか」とワーズワースに尋ねたという記録がある⁴⁰。エマーソンにとってワーズワースの最も重要な作品は『逍遙篇』である。これは、『逍遙篇』の主題である「孤独さ」が、エマーソン著 *Nature* の主なテーマでもあるということを考えれば当然である。ただ、孤独さに対するそれぞれの考えは多くの点で異なり、エマーソンの日記の記録からもわかるように、彼は『逍遙篇』の登場人物はあくまで逃避者のようなものであるとして、批判的に捉えている⁴¹。すなわち、タイソンはかつて同じハーバード大学を卒業したエマーソンがワーズワースを批判的に捉えたことを踏まえ、上述のような指摘を行ったものと考えられる。

また、タイソンは鴨長明の隠遁生活がルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) の隠遁生活にも重なるという見解を示した。ルソーは、よく知られているように、著書の『エミール』(1762)に過激思想が含まれていたために逮捕状が出され、亡命したことで、死去するまで孤独な生活を送ることになった。タイソンにとって、社会から亡命せざるを得なくなったルソーの孤独生活と、京の郊外・日野山で長明の送った隠遁生活は同じようなものであったため、そのような行動を批判的に捉えた。言い換えれば、タイソンは、西洋の隠遁思想や自然観を基準として『方丈記』に描写される長明の行動を評価したディクソンの考え方に賛同し、ワーズワースの自然観はより根本的なものであったという理解を示したことがわかる。タイソンのこのようなコメントを聞いたディクソンは、「日本人の人生観は、確実にルソーの教えと類似しているものである」と述べ、タイソンと同感であったことが示されている⁴²。

³⁹ 酒本雅之訳『エマソン論文集 上巻 自然他 6篇 略年譜』(岩波書店〈岩波文庫〉1972年)。

⁴⁰ Emerson Ralph Waldo, "First Visit to England" (1856) in *English Traits*, Cambridge, Mass.: Houghton Mifflin, The Harvard Classics (1909-14).

⁴¹ エマーソンによるワーズワースの孤独さ及び自然観の批判した記録に関しては、1828年のはじめごろの日記記録である Notes on Poetry や 1835年8月5日の The First Thought などが挙げられる。Emerson Ralph Waldo. *Journals of Ralph Waldo Emerson, 1820-1824*, Vol.1-10. Cambridge, Mass.: Houghton Mifflin, The Harvard Classics (1909-14).

⁴² 和訳は筆者による。原文は次の通りである。Mr. Dixon said that Rousseau's teaching really was in singularly close sympathy with the Japanese life. "Minutes of Meetings (Meeting of February 10th, 1892)", *TASJ*, Vol.20, 1892, pp.vii - x.

終わりに

本章において、漱石のエッセイと英訳及びディクソンの執筆した論文と英訳の関連性について考察した。先行研究では、ディクソンが鴨長明とワーズワースについて比較検討を行った論文が漱石の書いたエッセイから影響を受けていないという指摘があったが、両者の書いた内容を分析した結果、ディクソンは漱石のエッセイから多くの内容を取り入れたことが確認された。長明に関する伝記的な情報はもちろんのこと、漱石のエッセイに論じられた自然観や隠遁習慣のテーマはディクソンの論文で詳しく論じられている。漱石のエッセイで注目された長明の人間嫌いの性格は、ディクソンの論文に英詩人ワーズワースの視点から詳しく論じられている。その一方で、ディクソンは漱石のエッセイや英訳に言及されていない新たな情報も提示しており、彼は漱石の文章以外にも他の資料などを参照したことも思われる。同じように、ディクソンの『方丈記』英訳は漱石の英訳をベースにして作成されていることは確かである。ディクソンは、漱石の英文のみならず、その単語までも漱石の英訳から受け継いでいる。しかし、ディクソンが執筆した論文と同じく、彼は漱石の英訳以外にも他に資料を参照したことも確かである。

ディクソンの鴨長明とワーズワースの比較検討が行われた論文から、彼の長明に関するイメージを把握することができる。ディクソンにとって、長明は日本の中世文学を代表とする自然文学者であるが、自然に対する長明の態度は西洋の文人と大きく異なる。ディクソンは、長明を人間嫌いな人物として捉え、他の人々のことを無視して自己中心的な生活を送ったとして批判の対象とした。また、長明の宗教的な態度について、長明の宗教心は浅かったと指摘し、自身の持っていた思想を他人に伝えようとしないう消極的な性格を持っていたとして不満を感じている。

最後に、ディクソンの上記のような鴨長明像が描かれた論文の発表を聴衆したノックスやタイソン教授などは、ディクソンの長明像に賛同しながら、東洋の文化や習慣は西洋のそれとだいぶ異なり、東洋の国々に数十年にわたって滞在しても、東洋のことを理解不可能であると述べている。また、ノックスは鴨長明が日本の儒学者に数寄者として強く批判されていると指摘し、タイソン教授は長明の隠遁がルソーの亡命生活と似ていると指摘した。要するに、ディクソンの発表を聞いた西洋の聴衆者は、西洋の観点から日本の12世紀の文人を理解しようとしたことが理解される。

第5章 漱石・ディクソン以後における『方丈記』の受容—19世紀末・20世紀の初頭を中心に

はじめに

これまでに、漱石とディクソンの『方丈記』理解を中心に様々な観点から論じてきた。続いて本章では、漱石の「英訳方丈記」以降この作品がいかに受容されたのかを検討する。第3章で見たように、漱石が提唱した自然文学作品としての『方丈記』の解釈は、果たして後代に受け継がれていったのか。受け継がれたのであれば、いかなる経緯で行われたのか。これらの点に焦点を当てながら、英米を中心にその受容のありようを考察する。とりわけ、英米の読者それぞれが置かれた状況の中で、この作品をどのように理解したのかを追求すると同時に、翻訳などを通じてこの作品が〈死後の生〉をいかに生きたのか、その詳細を明らかにする。なお序論で述べた通り、本研究は漱石の「英訳方丈記」を中心に論じるものであるため、彼の『方丈記』論に類似した受容の仕方が確認できる1930年代の始めまでを研究対象期間とする。このような研究は、明治・大正期に日本の古典文学作品がいかに西洋に流通していたのかを理解するのに役に立つとともに、ダムロッシュ (David Damrosch)の言うように、文学作品が世界に流通する過程でいかに豊かになるのかを把握するためにも有益である。

そこで第1節では、漱石による英訳の数年後、1896年にアメリカで著された日本文学の著書 *Sunrise Stories : A Glance at the Literature of Japan* に描写された『方丈記』に関する内容を分析し、作者の『方丈記』、ないし鴨長明像を明らかにする。第2節では、イギリスの有名な日本学者アストン (William George Aston, 1841-1911) 著『日本文学史』に収録された『方丈記』の英訳に焦点を当て、アストンの『方丈記』理解について検討する。第3節では、南方熊楠 (1867-1941) とイギリスの日本学者ディキンズ (Victor Frederick Dickins, 1838-1915) の『方丈記』共訳を取り上げる。まず、ディキンズから熊楠に対する翻訳の依頼について考察した上で、熊楠が英訳のために利用した底本を明確にし、この英訳の題目は誰がなぜ、どのような経緯で付けたのかを論じる。第4節では、1912年に Fredrick Hadland Davis (生没年不詳) が著した *The Myths and Legends of Japan* にある長明に関する描写を中心に、作者の長明像について検討を加える。最後に第5節では、英詩人バジル・バンティング (Basil Bunting, 1900-1985) が1933年に創作した英詩 “Chomei at Toyama” を取り上げ、その作成の経緯とその内容から伺える作者の『方丈記』理解について考察する。上記の諸作品や人物による『方丈記』の受容について追及すると同時に、漱石の「英訳方丈記」との関連性について考えてみたい。

第1節 19世紀末米国における『方丈記』の受容—*Sunrise Stories*を中心に

1.1 *Sunrise Stories*の執筆背景をめぐって

開国以前に、既に日本美術はヨーロッパで注目を集めていたが、開国後多くの西洋人が日本で活躍することになり、欧米における日本への関心は一層高まっていった。欧米における日本への関心は、むしろ美術の分野だけに限られていなかった。序論で示したチェンバレン著『日本事物誌』（1905）から分かるように、19世紀末・20世紀初頭の欧米では日本に関する情報が溢れており、日本についての著書を著さないことが逆に称号に値するほど、日本への関心は強かったのである¹。このような状況の中、日本の美術と密接に関係する日本文学への理解を広めようとして執筆された本としてロジャー・リオードン・高柳陶造著 *Sunrise Stories : A Glance at the Literature of Japan*（以下便宜上『サンライズ・ストーリーズ』と表記する）がある²。以下、漱石とディクソンの『方丈記』理解を念頭におきながら、本著書に収録された『方丈記』の描写から作者らの『方丈記』理解、ないしは長明像について考える。

『サンライズ・ストーリーズ』は欧米における日本趣味の産物であった。この著書は、日本文学を知らない西洋人でもこの本に目を通すだけで、日本の文学をある程度理解できるようにすることを目的としていた。この本は、日本文学を年代順に提示し、歴史的な視点から代表的な作品や文人を取り上げている。この著書は、1899年に出版されたアストン著『日本文学史』と学術的には比較にならないにしても、欧文で書かれた日本文学の主な作品や人物を一冊にまとめた本として重要な意義をもっていると言える。にも関わらず、本書に関して、管見の限り国内では先行研究は存在しない。また、海外で少ないながらもいくつかの先行研究はあるものの、それらの研究は翻訳学の観点から論じたものであり、欧米における日本文学の受容の視点から論じたものはない³。欧米における日本文学の受容を今後の課題として、本節では、この本に描かれた『方丈記』の内容に焦点を絞り、作者らの『方丈記』理解について考察する。

『サンライズ・ストーリーズ』は、ロジャー・リオードン（Roger Riordan, 生没年不詳）と高柳陶造（Tozo Takayanagi, 1851-?）が執筆し、1896年にアメリカのニューヨークでチャールズ・スクリブナーズ・サンズ（Charles Scribner's Sons）社から刊行された。スクリブナ

¹ Chamberlain, Basil Hall. *Things Japanese*. (London, John Murray, 1905, p. 64).

² Riordan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, 281 p.

³ 『サンライズ・ストーリーズ』については次の先行研究がある。Henitiuk, Valerie. “Squeezing the Jellyfish: Early Western Attempts to Characterize Translation from the Japanese.” In St-André, James, ed. *Thinking through Translation with Metaphors*. Manchester: St Jerome, 2010. 144-60. Sato Emiko. “Metaphors and Translation Prisms.” In *Theory and Practice in Language Studies*. November 2015.

ーズ社は、1848年にニューヨークに設立され、これまでのアメリカの出版企業で主流であったヨーロッパで出版された書物を中心に出版活動を行うのではなく、現地で優秀な作者を探し出すことで、新たな市場を開拓するという営業戦略に踏み込み、大成功を成し遂げた。今では、フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald, 1896-1940) やヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) などの名作を刊行した出版社として知られているが、『サンライズ・ストーリーズ』はどのような経緯で刊行されるに至ったのだろうか。

本書の出版は、アメリカが出版ブームを迎えた時期と重なるが、当社からは既に日本関連の著書が刊行されていた。それは、1872年に出版されたベイヤード・テイラー (Bayard Taylor, 1825-1878) 著 *Japan in Our Day* である。この著書は、1852年に日本へ来航したペリー (Matthew Calbraith Perry, 1794-1858) と共に来日したテイラーが、その経験を描いた紀行文である⁴。また、『サンライズ・ストーリーズ』が出版された時、当社では東アジアに興味を持ったバーリンゲーム (Edward Livermore Burlingame, 1848-1922) という人物が編集を担当していた。バーリンゲームは、中国で長い間滞在し、日本を旅したこともあった。このような状況で『サンライズ・ストーリーズ』はスクリブナーズ社から刊行されたのである。ちなみに、このバーリンゲームは、第2章で指摘したように、欧文で初めて『方丈記』に言及し百科事典 *New American Cyclopaedia* (1874) の編集作業にも関わっていた⁵。当時のアメリカの新聞などを見ると、1896年2月ごろから『サンライズ・ストーリーズ』の刊行予告が出され、出版後の同年3月から6月にかけて新聞広告や書評も出されている。この本は、アメリカで刊行された数ヶ月後にイギリスでも刊行され、現地の新聞などにも取り上げられている。このことから、この著書はある程度好評を得、比較的広く読まれたと推測できる⁶。

⁴ Bayard Taylor. *Japan, In Our Day: Illustrated Library of Travel, Exploration, and Adventure*. New York: Charles Scribner & Co.. 1872. 280 p.

⁵ Ed. Peck, Harry Thurston, Gilman, Daniel Coit, and Colby, Frank Moore. *New International Encyclopaedia*, Volume 3, New York: Dodd, Mead and Co., 1906, p. 694.

⁶ 本書については、アメリカの以下の新聞などで出版予告や広告が確認できる。1. “Literary Notes.” *The San Francisco call*, February 23, 1896, p. 21, 2. “Literary Notes.” *Richmond dispatch*, February 16, 1896, p. 4, 3. “Sunrise Stories.” *The sun*, March 07, 1896, p. 7, 4. *New-York tribune*, March 07, 1896, p. 8, 5. “New Publications” *New-York tribune*, March 14, 1896, p. 8, 6. “Free Public Library.” *The daily morning journal and courier*, March 23, 1896, p. 2, 7. “New Publications.” *The Indianapolis journal*, April 06, 1896, p. 3, 8. “New Publication.” *Evening star*, July 25, 1896, p. 21. また、*Bradley, His Book*, Vol. 1, No. 2 (Jun., 1896), p. 58 “From Japan” という題名の書評も掲載されている。

イギリスでは、次の新聞広告や紹介が確認できる。1. “The Literature of Japan.” *St James's Gazette*, Friday 22 January 1897, Page: 12, 2. “Reviews.” *Pall Mall Gazette*, Wednesday 18 November 1896, Page: 9, 3. “Yesterday’s New Books.” *London Evening Standard*, Friday 16 October 1896, Page: 3, 4. “Advertisement.” *Morning Post*, Friday 16 October 1896, p. 2, 5. “Advertisement and Notices.” *Pall Mall Gazette*, Monday 09 November 1896, p.4.

『サンライズ・ストーリーズ』は、アメリカ人のロジャー・リオードンと日本人の高柳陶造の共著作であるが、実質的には高柳が執筆したと思われる。ロジャーに関する伝記的な情報は乏しいが、アメリカの新聞などから、彼は建築家及びガラス・デザイナーとして活動し、東洋美術に関心を持っていたことが確認できる。しかし、彼と日本文学との関係については確認できない⁷。可能性としては、高柳がこの本の執筆作業を行い、ロジャーがその校正などに関わったことが考えられる。高柳陶造は、肥前佐賀藩の久保田出身で、山水画の画家として活躍した高柳快堂（1824-1909）の息子である⁸。彼は12歳の頃、佐賀藩主鍋島直正（1815-1871）が英語学習のために宣教師グイド・フルベッキ（Guido Verbeck, 1830-1898）の協力を得て長崎で開校した学校に送られ、フルベッキが1869年に東京の開成学校に転勤すると、高柳も他の生徒と一緒に上京した⁹。高柳は一時的に外務省で働いたが、佐賀藩出身の松尾儀助（1836-1902）が日本の美術品を海外で商売するために立ち上げた起立工芸会社が1877年にニューヨーク支店を開店すると、この店で仕事をし始めた。美術作品を商売する中で、高柳は東洋美術に関心を持ったロジャーと知り合い、一緒に『サンライズ・ストーリーズ』を執筆したと思われる。

高柳らは、英文で日本文学の全体像を描写した書物が存在しない現状を意識し、それを補うためにこの本を書いた。本書の序文には次のようなことが書かれている。

我々が知っている限り、ロニー著 *Cours de Langue Japonaise* は欧文で書かれた日本文学の概要を提供しようとした唯一の書物である。ただ、本書は日本研究者のみを対象にし、フランスでも日本研究者以外の読者がめったに読まない著書である。（中略）この本は、文学の狭い領域において、過去の出来事の成り行きを追求し、日本文学を通じて日本の歴史を提示するとともに、各時代の状況の中でいかに文学が生まれたのかを記述する試みである¹⁰。（M. de Rosny's "Cours de Langue Japonaise" is,

⁷ ニューヨークから刊行されていた *The Century Magazine*（1881-1930）には1881年から1906年までにかけて建築、中国や日本を中心とした東洋美術、文学など分野において、リオードンによる複数の記事、詩、論文が確認できる。同じく、*The Art Amateur*（1879-1903）という雑誌にも1883年ごろから20世紀初頭までに、主に建築を中心とした、リオードンの複数の記事が確認できる。

⁸ 高柳陶造の略歴については、末岡暁美「ニューヨークで活躍した高柳陶造」（『本村製菓文庫 1 幕末明治肥前こぼれ話』、本村製菓、2011年）や同氏「言葉の壁を乗り越えた藤画像と高柳陶蔵」（『本村製菓文庫 2 幕末明治肥前こぼれ話』、本村製菓、2013年）を参照されたい。また、同氏による佐賀新聞の2010年10月31日掲載の「幕末維新さがんもの高柳陶造」という記事にも略伝が掲載されている。しかし、高柳陶造に関する情報は未だ不十分であり、更なる調査が必要である。

⁹ Riordan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, pp. 276-278.

¹⁰ 和訳は筆者による。Riordan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, pp. vi-vii.

so far as we are aware, the only work in any European language that aims to give a general view of Japanese literature; but it is intended for students of Japanese, and even in France, is read by few others. (...) Within our limited field we have tried to follow the course of the past events and to illustrate the history of Japan from its literature, and the literature from the circumstances of the times in which it was produced.)

ここでは、フランスの日本学者ロニー（Léon-Louis-Lucien Prunel de Rosny, 1837-1914）が書いた著書以外に欧文では日本文学を学習できる材料はないが、その状況に応えようとして『サンライズ・ストーリーズ』を執筆したと述べている。また、西洋の読者に日本文学を紹介し、日本の文学がいかに歴史的な状況の中で生まれたのかを提示することが本書の目的であるとも言う。確かに、来日した経験がなく、独学で日本語を勉強したロニーの本より『サンライズ・ストーリーズ』の内容は、より充実したものである。

作者らのもう一つの狙いは、日本美術用の市場開拓することであった。このことは、本書の序文にある「日本文学に関するいささかの知識は日本美術を十分に楽しむことにも貢献することが期待されるであろう。（But even the slightest acquaintance with the literature of Japan is likely to add much to one's enjoyment of her art.）」という記述から明らかである¹¹。つまり、この本を通して海外の読者に日本の文学を紹介し、同時に作者らが従事していた日本の美術作品の商売への反応も期待されていたことが分かる。作者は、学術的に正確な情報を提供するというよりも、一般読者が読んで楽しめるような執筆戦略を採用している。後述する通り、少なくとも『方丈記』の内容に関しては、多くの間違いが散見されるからである。

1.2 長明の描写について

高柳らがいかなる理由で『方丈記』を『サンライズ・ストーリーズ』の一部にしたのかは定かではない。既に西洋の読者が、この作品に関心を持っていたことを知っていたため、『方丈記』をこの本の一部に組み込むことで読者の注目を集めようとした狙いがあったかもしれない。もしくは、既に本作品は部分的に英訳されており、すぐに再利用可能であったということも考えられる。もちろん、作者自身もこの作品に関心を持っていたと思われる。『サンライズ・ストーリーズ』は全部で20章、281頁からなる著書であるが、そのうち約12頁にわたって「Kamo no Chōmei's "Story of my Hut"」という章名で『方丈記』に関する記述がある¹²。日本文学を通じて日本史を紹介する執筆方針を採用した作者は、日本

¹¹和訳は筆者による。Riodan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, p. v.

¹² Riodan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, pp.151-162.

中世の戦乱期を象徴する作品として『方丈記』を提示している。その描写は、京都在住の長明が戦乱から免れようとして出家し、隠遁中に『方丈記』を執筆したという記述から始められている。とりわけ、作者は長明の隠遁生活の内容に注目し、『方丈記』の内容をストーリーとして全体的に提示している。

本書の作成に当たり、作者は主に欧米で以前に刊行されていたチェンバレン、ロニー、末松謙澄、ディキンズなどによる翻訳作品を参考にしたと明記している。しかし、『方丈記』の内容についての出典は明記されていない¹³。その内容からは、高柳らが日本アジア協会の会報に掲載されたディクソンの『方丈記』英訳を題材にしたことが分かる。第3章及び第4章で述べたが、ディクソンは漱石の英訳に少し手を加えた形で、1893年に刊行された日本アジア協会の会報に自分の名前で『方丈記』の英訳を掲載した。この会報は、高柳らが活躍したアメリカ・ニューヨークを含む世界各地の読者に届けられていた。このことを考えれば、高柳らも容易にこの会報を手に入れることが出来たと推測される。なお、『古事記』の先行研究を提示する中で、高柳らはチェンバレンが日本アジア協会会報の第10巻に掲載した『古事記』の英訳を参考にしたことを明示しており、情報源としてこの会報を利用していたとがわかる。

実際に、高柳らはディクソンの英訳を底本にし、それに少し修正を加えた形で再利用したのである。両者の文章を比較すると、内容だけではなく、両者の言葉そのものも類似した部分が多いことが確認できる。以下に、長明の日野山の草庵に関する部分について、ディクソンと『サンライズ・ストーリーズ』に記された内容を提示し、比較検討を行う。

ディクソン訳：On the southern side I have hung a temporary curtain, with a bamboo mat under it; on the western wall a shelf has become the sacred receptacle for the image of Buddha, where his brow may catch the brightness of the western sun. On each of the two door leaves I have hung a picture - one of Hugen, the other of Hudō. Above the lintel of the northern door I have fastened a shelf, on which are placed several black leather boxes containing literary papers, Japanese songs, *ōjio-yoshū* and the like. Close by, leaning against the wall, are a *koto* and a *biwa*, to which I have given the names of *Origoto* and *Tsugi-biwa* respectively¹⁴.

¹³ 原文は次の通りである。Unhappily, there are few translations from which European or American readers can gain even a slight idea of this literature. The best we owe to the scholars already named. Mr. Chamberlain's "Classical Poetry of the Japanese," M. de Rosny's "Anthologie Japonaise," Mr. Suyematsu Kenchio's partial translation of the "Genji Monogatari (Romance of Genji), Lieutenant Dickens's of the "Takekuri Monogatari," and Dr. August Pfizmaier's "Ise Monogatari" are the only works worthy the attention of the general reader. Riordan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, p.vii.

¹⁴ Dixon, J. M.. "A Description of my Hut." In *TASJ*, Vol. XX," 1893, p. 209.

『サンライズ・ストーリーズ』 : A shelf attached to the inner wall held an image of Buddha, placed where the morning sun might strike upon the forehead. Pictures of the Fugen and Fudo hung upon the leaves of the door, and certain black boxes held his Buddhist books of devotion and some volumes of old Japanese poetry. Close by leaned against the wall a biwa and a koto¹⁵.

上記引用文から、高柳らの訳文はディクソンの英訳とほぼ同じものであることが分かる。特に、下線部分に関しては、その内容はもちろんのこと、英単語までも類似している。例えば、ディクソンの訳では Close by, leaning against the wall, are a koto and a biwa とある部分は、後者では Close by leaned against the wall a biwa and a koto となっており、ほとんど変わらない表現である。このような類似性は『サンライズ・ストーリーズ』の『方丈記』の全体的な内容について言える。

高柳らがディクソンの英訳を取り入れた最も明確な証拠は次の記述から確認できるであろう。

彼は（筆者注：長明）、以前ルソーやワーズワース、そして、ソローと比較されたことがある。（中略）彼には、ルソーの道徳的な弱さやワーズワースの激しくて狭い自己中心性は存在しない。彼は、ソローよりももっと優れたかつ人間性や芸術的に富んだ目で自然を楽しんだのである。ソローは、自然を観察することに集中しすぎて、自身の感覚を黙殺したに違いない¹⁶。（He has been compared with Rousseau, Wordsworth. Thoreau. (...) He is free from Rousseau's moral weakness, and from Wordsworth's harsh and narrow egotism. He enjoyed nature after a more artistic, that is, a more advanced and human fashion, than Thoreau, who must have spoiled many a fine sensation in his haste to make a note of it.)

高柳らは、長明が過去にフランスの哲学者ルソーやイギリスの詩人ワーズワース、アメリカの自然崇拝者ソローと比較されたことがあると指摘している。第4章で詳述したように、ディクソンは長明とワーズワースの比較検討を行い、ディクソンの発表を聞いたタイソン教授は、長明をルソーに譬えている。『方丈記』の受容史の中で、長明の自然観に注目した読者は、漱石とディクソン以前にはいなかったため、高柳らはディクソンの英訳を読んだとしか考えられない。しかし、ディクソンの論文では、ソローに関する直接的な言及はないが、高柳らは数回にわたってソローについて言及している。この件について、当時のアメリカで

¹⁵ Riodan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, p.157.

¹⁶ 和訳は筆者による。Riodan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, p.162.

は自然崇拜者としてソローの知名度が非常に高かったため、ディクソンが示した自然崇拜者としての長明の描写を読んだ読者が、自然にソローを連想しても不思議ではない。高柳らは、ディクソンの論文を参照したからこそ長明をソローに譬えたのである。つまり、漱石によって初めて提唱された自然文学作品としての『方丈記』のイメージは、このようにディクソンの論文を通じて、高柳らによって再利用されたのである。後述するように、このような長明像は後代にも受け継がれることになる。

ところで、上に提示した引用文から、ディクソンの英訳と『サンライズ・ストーリーズ』の内容にはいくつかの相違点があることにも気付く。例えば、ディクソンの英訳にある「the western sun」は、後者の場合「the morning sun」になっている。漱石の「英訳方丈記」の底本となった『新註：方丈記』では、この引用の部分が「阿弥陀の繪像を安置し奉り、落且を請けて眉間の光とす」と記されている。原文の通り、日が暮れる時に阿弥陀の繪像の眉間に日没の日差しが当たることでその部分が光るという意味で、漱石は「...so that his brow may be lit up by the mellow beams of the setting sun。」と正確に訳した。日本語能力が不十分であったディクソンは、漱石の訳を「may catch the brightness of the western sun」と書き換えた。ディクソンは漱石が訳した「the setting sun」と同じ意味を持つ言葉として「the western sun」に書き換えたのである。しかし、ディクソンの英訳を題材にした高柳らは、この部分を「the morning sun」という全く意味の異なる表現に変えてしまった。管見の限り『方丈記』の諸本や解説書の中で「the morning sun」（朝日）に相当する描写は存在しない¹⁷。現在最もよく読まれている大福光寺本『方丈記』では、この部分が少し異なる記述になっているため、「落日」という言葉は見当たらないが、江戸時代に出版された注釈書や明治期に刊行された書物のほとんどに「落日」という言葉が見られる。

実は、『サンライズ・ストーリーズ』の『方丈記』描写に他にも同じような誤りが数ヶ所確認できる。例えば、鴨長明が山守の子供と一緒に「笠取を過ぎて、或は、岩間にまうで」という場面があるが、『サンライズ・ストーリーズ』は「岩間」を「Iwami」と書き、注を付けて「A tramp overland to Iwami and back must have taken the entire summer」と説明している¹⁸。この「Iwami」とは、おそらく現在の島根県にある「岩見」のことであり、京都からの旅は数ヶ月にわたる夏の期間がかかると指摘されているが、原典の『方丈記』を参照してい

¹⁷大福光寺本『方丈記』では、「落日」という表記はないが、江戸期や明治期に普及した著書ではよく表れる表現である。例えば、江戸期に作成された『方丈記』の注釈書である、『首書方丈記』『方丈記訛説』『長明方丈記抄』『方丈記流水書』『方丈記宜春抄』などに「落日」という表現が確認できる。また、明治期に出版された上田胤比古注・今泉定助関『方丈記：訂正標註』や、丸岡桂・松下大三郎共編『国文大観 第9巻 日記草子部』などにもこの言葉は確認できる。

¹⁸ Riodan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, p.159.

たならば、このような間違いは考えられない。また、この本の別の箇所では鴨長明が「Owari」の村に隠遁した書かれているが、これは「大原」のことであろう¹⁹。これを考えると、『方丈記』について詳しくない執筆者が日本語の原典を参照せず、独自で解釈したためこのような間違いを起こしたと思われる。ただし、高柳らがディクソンの英訳のみを参照したかというところではない。なぜなら、その描写の中にはディクソンの英訳や論文には無い内容もみられるからである。例えば、長明が体験した乱世の時代の政治・歴史的な背景に関する説明や、長明の鎌倉下向の件などディクソンが触れていない内容も『サンライズ・ストーリーズ』にみられる。このことから、高柳らは『方丈記』の内容に関して、ディクソンの英訳を参照したが、時代背景を描写するに当たり別の情報源を参考にしたと考えるのが妥当であろう。

では『サンライズ・ストーリーズ』の作者は、『方丈記』のどのようなところに注目したのであるか。その描写から作者は主に2点に着目したと言える。まずは、中世期の京都で起こった様々な政治的動乱・自然災害を体験した長明が、辛い社会から免れようとして隠遁し、山中で自由な生活を送ったことにある。高柳らは、ディクソンと同じく『方丈記』の仏教的な描写に関心はなく、長明の隠遁生活の有様を読者に提示しようとした。次に、高柳らは、長明の自然観のテーマを詳細に取り上げている。このテーマも、ディクソンが論文で論じたものであり、高柳らもその影響を受けている。しかし、高柳らはさらに一歩進んで、ディクソンの提示したワーズワースとルソーについて指摘した後、新たにソローの山中生活を長明の隠遁生活と結び付けたのである。『サンライズ・ストーリーズ』では次のように指摘されている。

ソローは、住家が人間の外衣であるとどこかで述べているが、長明にとって住家は彼自身の一部である。彼は住家と住む人の運命もまた同じものであると信じていた²⁰。

(Thoreau speaks somewhere of the house as the man's outer garment; but to Chomei it was a second self. He dwells on the similarity of the destinies of domicile and inmate.)

高柳らは長明を自然崇拜者として提示し、その自然観はソローと類似するところが多かったと主張しているが、そのような比較の背景には、西洋の有名な人物と対比することで、日本古代の文人を英米の読者に身近に感じてもらうという戦略があったと推測される。しかし、高柳らによる長明の捉え方は、ディクソンの見方からある点で大きく異なっていた。それは、ディクソンが長明の自然観はワーズワースのそれよりかなり劣っていると論じたのに対し、高柳らは長明の自然観がルソーやソローなど西洋人より優れていたと述べたという点である。

¹⁹ Riordan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, p.151.

²⁰ 和訳は筆者による。Riordan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, p.153.

先にも触れた通り、高柳らはルソーの道徳的な弱さやワーズワースの利己主義的な考え、さらに、ソローの厳格な規律を守る隠遁生活に比べて、長明の人生観はより芸術的かつ人間性に富んだものである書いている。これは『サンライズ・ストーリーズ』にみられる長明の解釈の独自性である。本節の冒頭で述べたが、この本は高柳が書いたものであり、リオードンはいくまでも協力者に過ぎなかった。もしこの仮説が正しければ、高柳の提示した長明像から、急速に近代化の道に歩んでいた新たな日本国の人々の矜持が容易に見て取れる。この本の序文や終章の描写からもこのことは明らかである。その中で、高柳は明治維新から 19 世紀終わりまでに日本がいかに発展してきたのかを自らの経験を交えながら描写しているのだ。

以上、ロジャー・リオードンと高柳陶造著『サンライズ・ストーリー』に収録された『方丈記』の描写について論じた。次に、この著書が刊行されて数年後に出版されたアストンの有名な著書『日本文学史』に含まれた『方丈記』の描写について考察する。

第2節 アストンの『方丈記』受容について

2.1 アストンの『方丈記』英訳をめぐって

イギリスの日本学者アストン (William George Aston, 1841-1911) 著『日本文学史』 (*The History of Japanese Literature*, 1899) は、欧文における日本文学を年代順かつ網羅的に捉えた最初の著書として有名である。この本は、先に取り上げた高柳らの著書から 2 年間後の 1899 年に出版され、西洋の日本研究者及び一般読者の両方を対象にした日本文学を本格的に紹介した名著である。この著書は、出版されて間もないうちに他のヨーロッパ諸言語に翻訳され、西洋で広く読まれると同時に、日本文学を勉強する際の不可欠な一冊となった。また、日本文学に関する総合的な知識を得るためのみならず、代表的な作品や文人について具体的に紹介したという意味において、この本は重要な役割を果たした。とりわけ、『方丈記』のような短編の場合、原文の大部分の英訳が含まれているため、海外の読者にとって、日本文学作品を読める最初の機会を与えたと思われる。そのため、海外における『方丈記』の受容について考える際、アストンのこの本は重要な資料である。ディクソンの英訳が掲載された日本アジア協会の会報の流通範囲は、学問関係者に限られていた。その意味で、西洋における『方丈記』の紹介において、上記高柳らの著書とともに、アストンの英訳は見逃せない役割を果たしたと思われる。

アストンは、1889 年に日本での勤務を終えて母国のイギリスに戻り、それ以後数多くの日本関係の書物や翻訳などを出したが、それらの中で『方丈記』の英訳を収録した『日本文学史』は最も代表的な書物である。この本は、イギリス人の E.ゴス (Edmund Gosse, 1849-1928) が編者を務めた 15 巻に及ぶ世界文学史シリーズ (*Short Histories of the Literatures of the World*) の第 6 巻に当たるものである。19 世紀末のヨーロッパを中心に流行していた世界文

学への高い関心に応えようとしたこの図書シリーズでは、日本以外に、古代ギリシア、フランス、イタリア、英国、サンスクリット語など世界中の代表的な文学史が含まれていた²¹。このシリーズの編者自身の言葉によると、世界各国の文学の最新かつ学術的な進歩を網羅的に反映しつつ、一般読者が読めるような著書を作ることこそが、このシリーズの特徴的なところである²²。すなわち、これらの図書は、大学などで学術的な目的で利用できるとともに、一般の読者も楽しめるように工夫された。出版当時のイギリスの新聞などを確認すると、アストンの著書が好評を博したことが窺えるため、この書によって英語圏で初めて『方丈記』が多くの読者の手に届けられたと言える²³。それにも関わらず、アストンの『方丈記』英訳に焦点を当てた研究は少ない²⁴。そこで、本節ではアストンの英訳に主眼をおき、この訳の底本や訳文の実態、そしてアストンの『方丈記』理解について検討を加える。

アストンは、この著書の執筆に当たり、多くの原典や日本語で書かれた日本文学史の書物、また、西洋で刊行された複数の先行研究、辞書類などを参考にしたと述べている。そのなかで、日本語で書かれた日本文学史の先行研究として、三上参次・高津楯三郎著『日本文学史』（1890）を挙げている。アストンによれば、日本語で書かれた日本文学史の著書として、江戸時代に著された本居宣長（1730-1801）などの国学者以来、三上参次・高津楯三郎のこの本が、最も簡潔で方法論的に優れたものであるという。実は、アストンの『日本文学史』の章立てを見ると、三上参次・高津楯三郎の著書と重なる部分が多くみられる。むしろ、それぞれの読者層や内容の必要性は異なっていたため、その内容には大きな隔りがある。

²¹ Aston, W. G.. *A History of Japanese Literature*. in Ed. Edmund Gosse "Short Histories of the Literatures of the World," London: William Heinemann, 1898.

²² 本シリーズの編集者であった Edmund Gosse は第7巻の *A History of Ancient Greek Literature* の序文で次のような目的を述べている。In preparing these books, the first aim will be to make them exactly consistent with all the latest discoveries of fact: and the second, to ensure that they are agreeable to read. It is hoped that they will be accurate enough to be used in the class-room, and yet pleasant enough and picturesque enough to be studied by those who seek nothing from their books but enjoyment. Murray, Gilbert. *A History of Ancient Greek Literature*. New York: D. Appleton, 1897, p. vi.

²³ 例えば、ロンドンで現在でも発行される *Islington Gazette* 週刊誌の1899年3月31日（金曜日）版にアストンの著書が紹介されている。また、1899年8月29日（火曜日）付けの *The London Evening Standard* という現在も出版し続けられている新聞にもアストンの本の紹介が掲載されている。さらに、東アジア研究に特化した最も古い雑誌である *T'oung Pao* の第10巻第2号（1899 pp. 230-233）に長文の書評が掲載されている。イギリスだけでなくアメリカの多くの新聞や学会誌にアストンの本の紹介や書評が掲載されていたことを考えれば、この本を通じて、初めて英語圏で『方丈記』が多くの読者の手に届けられたと思われる。

²⁴ アストンの英訳に触れた研究として次のものが挙げられる。松本寧至「夏目漱石英訳『方丈記』をめぐって：漱石と長明」（二松：大学院紀要13, 1999, pp. A1-26）。坂本文利「『方丈記』序段の英訳についての一考察－漱石・熊楠・キーン 比較の試み－」（大分大学、国語の研究28, 2002年、21-30頁）。

『方丈記』の英訳を行うに当たり、アストンがどの書物を底本にしたのかは明記されていない。上記に示した三上参次らの著書には『方丈記』が部分的にしか収録されていないため、これは底本ではなかったことが分かる。また、現在ケンブリッジ大学の図書館に所蔵されているアストン文庫 (Aston Collection) には 1892 年に刊行された上田胤比古注・今泉定助関『方丈記:訂正標註』が所蔵されているが、これもアストンの英訳の底本ではなかったようである²⁵。というのは、『方丈記:訂正標註』の原文はアストンの訳文と異なる部分が多くあるからである。例えば、養和の飢饉について、『方丈記:訂正標註』では「仁和寺に、隆暁法印といふ人、かくしつゝ、数しらず、しぬるをとかなしみて... (後略)」とあるが、アストンの英訳は「A Priest of the Temple of Jisonin, grieved in his secret heart at the numberless persons [...]」となっている。つまり、原文では「仁和寺に、隆暁法印」とあるのに対し、アストンの英訳では「A Priest of the Temple of Jisonin」と訳されており、「仁和寺」に相当する英訳はない。同時に、アストン訳にある「Temple of Jisonin」に相当する原文も存在しない。他にも原文と訳文との相違が確認できるため、アストンは『方丈記:訂正標註』を底本としなかったと思われる。明治期に出版された『方丈記』の書物は、底本とした古本系統や流布本系統の違いにより、この部分はそれぞれ「仁和寺に、慈尊院の大蔵卿隆暁法印といふ人」と「仁和寺に、隆暁法印」という 2 種類の表記になっているが、アストンは「慈尊院の大蔵卿隆暁法印」が記載された古本系統に属する本を底本にしたということしか、現段階では確認できない²⁶。

アストンの『方丈記』英訳は、漱石やディクソンの英訳と同じく、部分的なものであった。しかし、漱石とディクソンの英訳では、五大災厄の内三つの災害描写が不要として完全に英訳の対象から外されたが、アストンの英訳では三つの災害の英訳が含まれている。アストンは安元の大火、治承の辻風及び養和の飢饉の全訳を提示し、1180 年の福原遷都及び 1185 年の京都大地震について、簡単に紹介するに留めている。おそらく、英訳全体のバランスを考慮し、この作品を全体的に理解するために不可欠のものとして三つの災害を訳したと思われる。『方丈記』の後半に含まれた長明の隠遁生活に関しても、内容を選択しながら部分的な英訳が施されている。特に、アストンは長明が示した日野山での質素な生活の内容のほとんどを訳さず、長明の隠遁生活や宗教的な傾向に関係する部分を中心に訳している。アストン

²⁵ Hayashi, Nozomu and Kornicki, Peter (Ed). *Early Japanese Books in Cambridge University Library: A Catalogue of the Aston, Satow and von Siebold Collections*. Cambridge University Press, 1991, p.182.

²⁶ 青木玲子『広本・略本 方丈記総索引』(武蔵野書院、1965年、104頁)。

によれば、『方丈記』の内容から日本の中世期の隠遁者について伺えるのみならず、仏教に内在した原理についても理解できるという²⁷。

2.2 アストンの『方丈記』理解について

アストンは、日本の中世期を代表する作品の一つとして『方丈記』を捉えていた。『日本文学史』の序文にあるように、本書の基本的な方針として、重要な作者や代表的な作品に関しては、できる範囲で詳細に記述する一方、知名度の低いものについては簡略した形で提示するとアストンは述べている。日本文学史の全体を語るために利用した約 400 頁に及ぶ本書の 12 頁を『方丈記』の描写が占めている。そのことから考えて、アストンにとって『方丈記』がいかに大事な作品であったのかが理解できる。その対比として、『源氏物語』や『枕草子』の描写はそれぞれ 12 頁と 13 頁程度であり、前者は長編作品なのでその訳文を掲載するのが不可能であったようだが、後者も部分的な英訳しか含まれていない。アストンが、『方丈記』を網羅的に記述した背景には、この作品の分量も重要な要因であったと思われる。アストンは他の論文などにも、『方丈記』は日本の中世文学を代表する作品であると明記している。例えば、『日本文学史』が刊行されてから一年後の 1900 年にイギリスの有名な雑誌である *Transactions and proceedings of the Japan Society* の第 4 号に “The classical literature of Japan” という題名のアストンの論文が掲載されているが、その中でも日本の古典文学の代表作品の一つに『方丈記』の名前を挙げている²⁸。また、アストンによれば、『方丈記』に採用された和漢混淆文の表記方法は、この作品の大きな特徴であり、これまでの漢文的な表記に偏らず、和文と漢文のバランスを取った記述方法は称賛に値するものとして従来から評価されてきたという。

アストンがいつ頃から『方丈記』に関心を持ったのかは定かではない。しかし、第 2 章で述べたが、1874 年にアーネスト・サトウ (1843-1929) によって書かれた「日本」という記事が米国の百科事典に掲載された。これは欧文における『方丈記』に言及した最初の事例である。この記事でサトウは、『方丈記』を日本の日記文学の代表作として提示しているが、アストンもこの記事について知っていた可能性がある。このことは、アストンが『日本文学史』の先行研究としてアーネスト・サトウの記事を挙げていることから窺える。また、この記事が執筆された 1874 年当時、サトウとアストンが東京の英国公使館の同僚であったことを考慮すれば、アストンは少なくともこの頃から『方丈記』を知っていたであろう。

²⁷ 原文は次の通りである。 His hut and mode of life are minutely described, with many touches which not only give indications of his own tastes and character, but reveal something of the inner spirit of the Buddhist religion. Aston, W. G.. *A History of Japanese Literature*. London: William Heinemann, 1898. p. 145.

²⁸ W. G. Aston. “The Classical Literature of Japan,” in *Transactions and Proceedings of the Japan Society London*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner, 1899, vol. 4.

アストンは、『日本文学史』の中で多くの代表的な作品の部分的な英訳を提示しているが、それぞれの作品に関する欧文で書かれた先行研究が存在した場合、必ずそれを列挙している。例として、『源氏物語』を論じる時、1882年に刊行された末松謙澄の部分的な英訳に言及し、『徒然草』についての記述の中では、カナダのメソジスト協会の宣教師であった C. S. Eby によって 1883年に試みられた『徒然草』の部分的な英訳にも言及している。同じく、『竹取物語』を論じる際には、F. V. ディキンズの英訳についても明示している²⁹。しかし興味深いことに、アストンは『方丈記』の先行研究については何も言及していない。日本アジア協会でディクソンによる『方丈記』の朗読が行われた 1892年2月10日の時点で、アストンは既に日本を去っていたため、彼が直接的に発表を聞く機会はなかった。しかし、ディクソンの『方丈記』論文と英訳は、1893年に刊行された日本アジア協会の会報に掲載された。この会報の 1893年度の購読者の名簿リストによると、アストンはこの学会の名誉会員であり、その会則によれば、アストンは無料でこの会報を受け取るようになっていた³⁰。ここから考えるに、アストンが『方丈記』の英訳が掲載されたこの会報を受け取っていたことは確かであろう。日本文学に強い興味を抱いていたアストンがディクソンの英訳を読んでいなかったとは考えにくい。つまり、アストンがディクソンの英訳を読んでいたとしても、彼はそれをあまり参考にせずに、独自で改めて『方丈記』の翻訳を行ったのである。

実は、両者の英訳を比較してみると、それぞれの訳が大きく異なっていることに気づく。英訳そのものが異なっているだけでなく、それぞれの『方丈記』の捉え方も異なっている。ディクソンは『方丈記』を自然文学作品として解釈したが、アストンは、これについて一切触れていない。むしろ、彼は『方丈記』に描写された長明の隠遁生活に主眼を置いている。アストンによれば、『方丈記』の前半にある災害の描写は、本書において序説的な位置にあり、本作品の後半と深く関係している。長明がどのように現世の辛さを避けるために隠遁の道を選んだのかを語る事が本書の主題であるという³¹。このような周辺の状況から、アストンは、ディクソンの英訳に満足しておらず、その『方丈記』や長明の解釈に納得していなかったため、この作品を新たに翻訳したことが分かる。

アストンの長明像は、ほぼ日本で同時代に捉えられていた『方丈記』の通説をもとにしてきた。禰宜職を得ることに失敗したため出家し、和歌や音楽など芸術を自由に追求しながら隠遁者として生活を送ったことが長明の主な目的であったという。また、長明の隠遁生活は

²⁹ Aston, W. G.. *A History of Japanese Literature*. London: William Heinemann, 1898. (*Genji Monogatari*, p. 92, *Tsurezuregusa*, p. 184, *Taketori monogatari*, p. 76).

³⁰ *TASJ*, Vol. XX, Yokohama: R Meiklejohn and Co., p. xxvii.

³¹ 原文は次の通りである。The story of these disasters is introductory to an account of his own life, and is brought in to explain his resolve to abandon the city and to live the life of a recluse. Aston, W. G.. *A History of Japanese Literature*. London: William Heinemann, 1898. p. 151.

彼の仏者としての性格も表しており、日本における仏教を理解するために有益であると指摘した。これらの点から、アストンの『方丈記』の捉え方は、独自の解釈を提示するよりも、日本における本作品の従来の捉え方に沿うような姿勢を取ったと言える。その要因は、アストンが多くの日本語の原典を参照にして『日本文学史』を執筆したからであろう。

アストンの部分的な『方丈記』英訳の後、1902年に出版された市川代治(1872-?)のドイツ語訳などがあるが、英文のものとしては1903年に刊行された南方熊楠とディキンズの『方丈記』共訳が有名である³²。次節では、この共訳を中心に検討を加えることにする。

第3節 南方熊楠とディキンズによる『方丈記』の共訳について

漱石の「英訳方丈記」から11年後、1903年に博覧強記で知られる民俗学者・博物学者の南方熊楠(1867-1941)が、漱石と同じくある英国人から依頼されて『方丈記』を英訳した。その依頼者とは、熊楠のイギリス滞在時期から知り合いになっていたロンドン大学の元事務局長のディキンズ(Frederick Victor Dickins, 1838-1915)である。ディキンズから依頼を受けた熊楠は英訳を完了させ、その訳文はディキンズによってさらに修正され、1905年に両者の共訳として王立アジア協会の機関誌である *Journal of the Royal Asiatic Society* に “Hōjōki – A Japanese Thoreau of the Twelfth Century” (以下、便宜上「掲載版」と表記する)として発表された³³。この共訳に関して既に多くの研究が為されている。例えば、小泉博一は、熊楠の『方丈記』英訳の直接的なきっかけになったディキンズからの書簡の内容を紹介し、熊楠の日記から伺える英訳の状況を含め、南方熊楠記念館に保存されている熊楠の英訳の草稿などについて詳しく論じている³⁴。松居竜吾は、漱石の英訳に触れながら、熊楠の『方丈記』英訳がいかに熊楠のいわば那智隠遁期と密接に関係し、この作品は熊楠にとっていかなるものであったのかなど重要な指摘をしている³⁵。他にも、熊楠の英訳の諸側面について検討を加

³²市川代治は1900年から1908年にかけてドイツのベルリン大学に留学し、帰国後満州鉄道などに勤務しているが、その留学中に『方丈記』のドイツ語訳を行っている。Itchikawa Daiji. *Eine kleine Huette (Hōjōki), Lebensanschauung von Kamo no Chōmei*. Berlin C. A. Schwetschke und Sohn, 1902. 41 p. 市川の『方丈記』訳に関しては、古山省吾編『両羽之現代人』(両羽研究社、1919年、228頁)を参照されたい。市川のドイツ留学に関しては、泉健「『Ost=Asien』研究：その3.人名注解;日本人編」(和歌山大学教育学部紀要. 人文科学 54, 43-79, 2004年、52-53頁)を参照。

³³Minakata Kumagusu and F. Victor Dickins. “Hōjōki – A Japanese Thoreau of the Twelfth Century.” *In Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland.*, Apr. 1905. pp. 237-264.

³⁴小泉博一「熊楠の英訳『方丈記』の草稿」(熊楠研究(4), p. 8-21, 2002-03)。小泉博一「翻訳・ディキンズ・『方丈記』(特集:南方熊楠--ナチュラルヒストリーの文体)」(国文学解釈と教材の研究 50(8), p. 40-46, 2005-08)。

³⁵松居竜五「第20回『熊楠をもっと知ろう!!』シリーズ F.V.ディキンズ、熊楠間の交流と英訳『方丈記』の執筆」(熊楠 works(41), p. 32-35, 2013-04-01)。松居竜五「南方熊楠と『方丈記』:ディキンズとの共訳をめぐって」(特集 方丈記 800年)文学 13(2), p. 77-93, 2012-03)等。

えた研究があるが³⁶、本節ではこれらの先行研究を念頭に置きながら、今まで注目されてこなかったこの共訳の「題目」に焦点を当て、その由来と訳者らの『方丈記』理解を考察する。とりわけ、なぜこの共訳では長明がアメリカの自然崇拝者であるソロー（Henry David Thoreau, 1817-1862）に譬えられているのか、その比較が漱石の『方丈記』論をいかに受け継いでいるのかを明らかにする。

3.1 南方熊楠の『方丈記』英訳をめぐる

熊楠は1902年12月から1905年10月までの凡そ2年間にわたって和歌山的那智でいわゆる隠栖期を過ごした。この時期における熊楠の代表的な成果の一つが、この『方丈記』の英訳である。那智滞在中の熊楠は、ロンドン時代からの友人であったディキンズから手紙を受け取り、それをきっかけに『方丈記』の英訳に踏み出した。1903年4月7日付のディキンズから熊楠宛ての手紙に次のような記述がある。

（私は）竹取と万葉集の長歌のすべてをローマ字表記し、英訳と注釈をつけて出版するつもりです。目下のところ、半分まで終えました。高砂の能、そしてあの素晴らしい小品『方丈記』も入れ、俊蔭（『宇津保物語』）も入れたいところですが、時間が足りないでしょう。俊蔭を英訳して送っていただくわけにはいきませんか。ここで編集し、あなたのものとして本に入れましょう。この著書に収録する竹取の協力者の一人として、もちろんあなたの名前も明記します³⁷。（I shall publish the texts in Roman of the Taketori and of all the 長歌 of 万葉集 with translations and commentaries. I have about half finished. I shall add the Nō of Takasago and perhaps that very pretty old story 方丈記. I should like to add the Toshikage (Utsubo m[ono]g[atari] bt I think I shall not have time. I wish you would translate the Toshikage and send it me. I would revise it and add it as yours. In my 竹取 I shall not fail to mention your help though I have since read quite through Daisho's 首 volume and shall not go beyond it much.)

このような内容を含んだ手紙を受け取った熊楠はその約2ヶ月後、同年6月13日の熊楠の日記からも明白なように、既に『方丈記』の英訳に着手している³⁸。ディキンズは、熊楠に『方丈記』の翻訳を頼んだかのように思われるが、実際に手紙の内容をよく見てみると、デ

³⁶千本 英史「鴨長明と『方丈記』」（熊楠 Works (41)、p. 24-28、2013）。千本 英史「自筆資料に見る南方熊楠 11「方丈記」英訳草稿」（熊楠 Works (40) 1、2012）等。

³⁷和訳は F.V.ディキンズ [著]、岩上はる子・ピーター・コーニッキ 編『F.V.ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集: アーネスト・サトウ、南方熊楠 (他) 宛』（エディション・シナプス、282 頁、2011 年）より。

³⁸1903 年 6 月 13 日付の日記に「午後方丈記翻訳にかかる」と記載されている。詳細は『南方熊楠日記 2』（八坂書房、351 頁、1987 年）を参照されたい。

ディキンズは『方丈記』の英訳を依頼していないことがわかる。ディキンズが、熊楠に依頼したのは「俊蔭」(Toshikage (Utsubo m.g))、つまり『宇津保物語』の英訳である。そして、ディキンズは他に複数の古典作品の英訳を行って一冊にまとめて刊行したい意向を示し、その新たな本に『方丈記』の英訳も入れたいと明記している。なお、1875年にディキンズは『竹取物語』を英訳していたが、1897年に熊楠がロンドンに滞在した時、その英訳の改訂作業を依頼していたことが熊楠の日記から分かる³⁹。そのとき熊楠から得た協力の事についても、今度出版予定の著書に必ず明記すると手紙には書かれている。言い換えれば、以前熊楠から得た協力に対して謝辞を記すことを書簡で約束しているのだ。しかし、熊楠はディキンズが依頼した「俊蔭」ではなく、他に提示された複数の作品の内『方丈記』だけを選び、早速その英訳に取り掛かったのである。熊楠はなぜ『方丈記』を英訳の対象にしたのであろうか。

まず、考えられる要因はこの作品の分量と明瞭な内容である。『方丈記』の英訳は、ディキンズが示した他の作品に比べれば比較的容易であったに違いない。次に、より大事な理由として、当時の熊楠の個人的な状況が挙げられる。すなわち、那智時代の熊楠にとって『方丈記』は特別な存在であったと言える。松居竜吾が指摘した通り、那智期の熊楠は精神的に異常を抱え、生活面において度々大酒を繰り返し乱暴なふるまいをすることがあった。他方で、精神的に高揚な時期も迎え、現在では「南方マンダラ」と言われる思想がちょうどこの時期に初めて提唱されたのである。このような普通ではない生活の中で熊楠は『方丈記』の英訳を行った。熊楠の残した当時の資料を見ると、彼は『方丈記』に個人的にも興味を持っていたことが確認できる。彼が英訳をし終えた時期と重なる1903年6月30日に、ロンドンで知り合って以降交友関係を維持した友人の土宜法龍(1854-1923)宛に書いた手紙の内容からこのことが窺える。熊楠はディキンズから英訳の依頼を受けたことに触れた後、次のように述べている。

(筆者注：ディキンズは) 来年一世一代の日本の著書のしまいとして、かの『竹取』を再板し、『にちれん大土伝』『高砂』の謡曲、『万葉集』の中の長歌、それに小生の『方丈記』の訳(これは小生只今の身に取り実際ゆえ、はなはだよし)、事により『義経記』か『曾我物語』も小生訳し、合本にして出板するなり⁴⁰。

上記引用文の下線部分を見る限り、当時の熊楠は自身の身を『方丈記』の作者長明の隠遁生活と比較していたことが明らかである。熊楠の『方丈記』の捉え方は、序論で触れた本作

³⁹ F.V.ディキンズ[著]、岩上はる子・ピーター・コーニッキ編『F.V.ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集:アーネスト・サトウ、南方熊楠(他)宛』(エディション・シナプス、2011年、276頁)。

⁴⁰ 南方熊楠(著)、土宜法龍(著)、飯倉照平(編集)、『南方熊楠・土宜法龍往復書簡』(八坂書房1990/11、278頁)。

品の同時代性の顕著な事例でもあるが、重要なのはディキンズが『方丈記』の英訳を依頼していなかったにも関わらず、自身の個人的な状況から影響を受けて熊楠はこの作品を選び、その英訳を完成させたという点である。

3.2 熊楠の英訳の底本とその実態について

熊楠が『方丈記』の英訳に使用した底本について、2002年に小泉博一・松居竜吾・中西須美グループにより行われた研究では「熊楠邸には現在、博文館日本文学全書第二編、萩野由之他編『土佐日記・枕草子・更級日記・方丈記』（1890年）（以後、「博文館版」と表記する）が残されており、これが翻訳の底本かと思われる」と指摘されている⁴¹。同じく、熊楠・ディキンズの共訳と博文館の比較検討を行った竹中嘉章によれば、熊楠は確実に博文館版を底本にした⁴²。しかし、竹中は博文館版と王立アジア協会の機関誌に載った掲載版の訳文と比較しており、掲載版がディキンズにより大幅に修正を加えられたことを考えれば、竹中の結論には未だ疑問が残る。また、2012年の松居竜吾の論文の注では「ただし、一つの問題点は原文に関して、熊楠が底本とした博文館本を用いていないことである。」と指摘されており、英訳は所々博文館版以外の本によるという⁴³。そこで、ここでは改めて博文館版の原文を熊楠の英訳の草稿の文章と比較し、底本となった書物について確認しておく⁴⁴。ただし、英訳の草稿は部分的にしか残っていないため、全体的な比較は不可能である。草稿に残された部分に該当する博文館版の原文に限定して、この比較作業を試みることにする。

熊楠の英訳の草稿に残されている『方丈記』の養和の飢饉に関する訳文と、この部分に相当する博文館版の原文は次の通りである。

〈例文1〉

博文館版：仁和寺に、慈尊院の大藏卿隆暁法印といふ人、かくしつゝ、 數知らず死ぬることを悲しみて、聖を數多語らひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に阿字を書きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける。その人數を知らむとて、四五兩月が程數へたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭、すべて四萬二千三百餘りなむありける。況んやその前後に死

⁴¹小泉 博一「熊楠の英訳『方丈記』の草稿」（熊楠研究(4), 2002-03、p. 50頁）。

⁴²竹中嘉章「読者より 南方熊楠の英訳『方丈記』について」（Kumagusu Works、第33号〈44〉2009年4月1日）。

⁴³松居 竜吾「南方熊楠と『方丈記』：ディキンズとの共訳をめぐって」（(特集 方丈記 800年) 文学13(2)、2012-03、92頁）の注32を参考。

⁴⁴草稿は小泉博一グループにより行われた翻字を底本にした。小泉博一・松居竜吾・中西須美「南方熊楠『方丈記』草稿」（熊楠研究(4), 2002-03、50-44(1-7)頁）。

ぬるもの多く、河原、白河、西の京、もろもろの邊地などを加へていはば、際限もあるべからず⁴⁵。

熊楠の草稿：In Ninnaji Cathedral was a prelate named Ookurakyō Ryūgyō, who, moved by commiseration upon those multitudinous, in a unison with many other men of religion, tried to render last service to them by inscribing the holy letter A on the forehead of every corpse they came to find. In order to ascertain how many did die, he carefully counted them for the two months, the 4th and 5th of the year and found in the part of the capital, south of Ichijo, north of Kujo, west of Kyōgoku, east of Sujaku, altogether 42300 odd heads on the roadside. Add to this many more deaths occurring before and after this time, as well as those in suburbs as much the River-side, Shirakawa, and the West Quarter, and various distant districts, and you can form an idea of the vastness of the dead man`s number. Further the idea shall be infinitely intensified when you add thereto all what took place in the provinces in all seven divisions of the empire⁴⁶.

上で提示した原文と訳文を比較してみると、熊楠の英訳はいわゆる逐語的な翻訳で、原文を忠実に訳したことが分かる。例えば、原文にある「道のほとりにある頭」をそのまま「heads on the roadside」のように、英語の表記として違和感があるものの、情報を正確に伝達する訳し方が採用されている。なお、上記引用文の下線部分の「仁和寺に、慈尊院の大藏卿隆曉法印といふ人」は「In Ninnaji Cathedral was a prelate named Ookurakyō Ryūgyō」と訳されているが、「慈尊院」に該当する英訳は見当たらない。先にアストンの『方丈記』英訳を論じる際に指摘した通り、明治期に刊行された『方丈記』の本は、古本系統と流布本系統の内どれを底本にしたかによって描写が若干異なる。この「慈尊院」の表記に関しては、流布本系統に属する諸本にその描写は存在しないため、熊楠が博文館版以外の本も英訳に利用した可能性は否定できない。特に、この慈尊院は熊楠の地元である和歌山の寺であり、弘法大師が作った寺院として昔から有名であるため、熊楠がこの寺院について知らなかったとは思えない。以下に、博文館版からもう一つの例文を提示しておく。

〈例文2〉

博文館版：こゝに、六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはゞ、狩人の一夜の宿をつくり、老いたる蚕のまゆを営むがごとし。（中略）いま、日野山の奥に、跡をかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、

⁴⁵ 落合直文その他校訂『日本文学全書 第2編（土佐日記 枕草子 更科日記 方丈記）』（博文館、1892、9（853）頁）。

⁴⁶ 小泉博一・松居竜吾・中西須美 翻字「南方熊楠『方丈記』草稿」（熊楠研究（4）、2002-3、49（2）頁）。

その西に關伽棚をつくり、中には西の垣に添えて、阿弥陀の絵像を安置しまつりて、落日を請けて眉間のひかりとす。かの帳のとびらに、普賢並に不動の像をかけたり。北の障子の上に、ちいさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置けり。すなはち和歌、管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶、おのゝ一張を立つ⁴⁷。

熊楠の草稿：When my life is in its 60th year [was approaching] drew near its termination just as a vanishing dew I once again engaged myself in forming a new last station which is, to speak figuratively, like a hunter erecting one night's camping or an aged silkworm weaving a cocoon.[...] Presently, since I retired deep in Mt. Hino, my hut is furnished thus – a conventional blind for sunshine protrudes to the south side of it, the floor is covered with a row of bamboos joined plate, west to it is formed a shrine; in which Amida's picture is hung over the fence to the west, so that his shining spot between the eyebrows is naturally represented when it reflects the setting sun's rays. On the doors of the shrine Fugen's and Fund's (sic) pictures are hung. Above paper-door to the north, a tiny shelf is formed put on with 3 or 4 cases containing [which contains] the abstract works on native poetry, music, and sutras Ōjōyōshū. Besides the room [箏]and [琵琶], each but one, stand⁴⁸.

上に引用した博文館版の原文と草稿の訳文を比較検討してみると、英訳は博文館版の描写とほぼ同じである。引用文にある「狩人の一夜の宿」は原文通りに「like a hunter erecting one night's camping」と訳されている。この「狩人」という表記は、『方丈記』の流布本系統に属する京都大学本や嵯峨本などにしか見られない表記であり、博文館版が底本としたのと同じ種類に属するものである。しかし、先に提示したアストンの英訳やディキンズによる修正後の掲載版の訳では、この部分が「traveller」（旅人）となっている。大福光寺本をはじめ、古本系統の諸本には「旅人」という表記が見られるため、アストンは古本系統の本を底本にし、ディキンズも古本系統の本を参考したか、もしくはアストンの英訳から倣って書き換えたものであると考えられる。また、熊楠は博文館版にある字そのものを英訳の中に記載している。熊楠は、上記にある「箏、琵琶」を「Besides the room [箏]and [琵琶], each but one, stand」と訳している。明治期に刊行された著書は「琴」や「こと」という表記が多く、熊楠が利用

⁴⁷ 落合直文その他校訂『日本文学全書 第2編（土佐日記 枕草子 更科日記 方丈記）』（博文館、1892、13-14（857-858）頁）。

⁴⁸ 小泉博一・松居竜吾・中西須美 翻字「南方熊楠『方丈記』草稿」（熊楠研究（4）、2002-3、47（4）頁）。

した博文館版では彼が英訳に示した「箏」という漢字になっている⁴⁹。言い換えれば、熊楠は博文館版を底本にしつつ、他の著書も参考にしたと考えた方が妥当である。

では、熊楠によって行われた英訳は、ディキンズの手でどのように修正されて、イギリスの雑誌に掲載されたのであろうか。小泉博一は、熊楠が『方丈記』英訳は自分一人のものであるかのように述べているが、実際には、英訳がディキンズによりかなりの程度修正されたと指摘している⁵⁰。確かに、熊楠の草稿と掲載版の英文を確認すると、ディキンズが対象読者のことを考えたためであろうか、大幅に修正を入れて自然な英語に直している。また、後述するように、ディキンズは先行研究を参照しながら、熊楠の英訳の内容も書き換えた場合もある。掲載版の参考文献として、アストンとディクソンの英訳について言及されているから、ディキンズはこれらの資料を参照したに違いない。ちなみに、小泉博一が指摘している通り、熊楠自身は、漱石やディクソンによる『方丈記』の英訳について無知であったため、掲載版における先行研究への言及は、ディキンズによるものである。

一方で、ディキンズは独自に他の文献を調べていた。例えば、上記の〈例文 1〉の「仁和寺に、慈尊院の大藏卿隆暁法印といふ人」の部分を見てみよう。熊楠の草稿では、この部分が「In Ninnaji Cathedral was a prelate named Ookurakyō Ryūgyō」とあるのに対し、掲載版では「In the great temple of Ninwa [Benevolence and Peace] was a chief priest of the Jison [Compassion and Respect] temple named Ōkurakyo Ryūgyō...」と訳されている。ディキンズは熊楠の書いた「Ninnaji」を「Ninwa」（仁和）と書き換え、文字通りに「Benevolence and Peace」という解釈も付けた。また、熊楠の草稿に存在しない「慈尊院」は、掲載版で「the Jison temple」と追加されているが、これは明らかにディキンズが追加したものである。さらに、上記の〈例文 1〉にある「狩人の一夜の宿」の部分も、掲載版では書き換えられている。熊楠の草稿では、「like a hunter」とあるのに対し、掲載版では全く異なる「旅人」の意味で「just as a traveller」と記述されている。このことから、ディキンズは独自で調べて英訳を書き換えたことが確認できる。ちなみに、アストンの英訳では「大藏卿隆暁法印」に該当する部分はないが、「慈尊院」に該当する訳文があり、また「狩人」ではなく「旅人」と記載されている。既に第3章で述べた通り、漱石はこの部分を翻訳していない。ディクソンも漱石の英訳を利用したため、彼の英訳にもこの部分はない。熊楠・ディキンズの共訳が行われた時点で、唯一アストンの『方丈記』英訳にこの部分が見られる。このことを考慮すれば、ディキンズはアストンの英訳から習って、熊楠が指摘しなかった「慈尊院」を追記し、「狩

⁴⁹ 例えば、1892年に刊行された上田胤比古注・今泉定助関『方丈記：訂正標註』と1903年に刊行された丸岡桂・松下大三郎共編『国文大観 第9巻 日記草子部』は「こと、琵琶」と表記している。一方で、佐佐木信綱註『校注方丈記』（東京堂書房、1892）など多くの本は「箏、琵琶」としている。

⁵⁰ 小泉博一「熊楠の英訳『方丈記』の草稿」（熊楠 Works (4), 14-20 頁, 2002-03）。

人」を「旅人」に書き換えた可能性が高い。あるいは、古本系統に類する『方丈記』の本を参照して自分で訳し直した可能性も全くは否定できない。

要するに、熊楠の英訳の部分的な草稿を見る限り、彼は博文館版を底本としつつ、他の本も参考にして英訳を完成させたことが分かる。また、この英訳はディキンズにより修正され、両者の共訳として 1905 年に王立アジア協会の機関誌に「Hōjōki – A Japanese Thoreau of the Twelfth Century」という題目で発表された。このような状況を踏まえ、次にこの英訳の題目に焦点を当てて、誰がどのような経緯でこのような題名を付けたのかについて考えることにする。

3.3 熊楠・ディキンズ共訳「題目」について

題目は僅かな言葉を利用して作品全体を物語る役割を果たすだけでなく、そこには作者の意図も含まれているため、作者の考えを理解するためにも題目の理解は重要である。同じことは、熊楠・ディキンズ共訳についても言える。しかし、熊楠・ディキンズ共訳の題目は、誰がどのように決定したのかを直接的に知り得る資料はないため、周辺資料から推測するしかない。この問題について触れた小泉博一によれば、題目はやはり熊楠によるものである。そして、この題目にソローの名前が採用された背景には、熊楠がアメリカ滞在中か、あるいはイギリス時代に英国博物館などでソローの名作『ウォールデン』 (*Walden, or Life in the Woods*, 1854) やその他の著書を読んだ可能性があり、その影響でこのような題目にしたという。さらに、小泉は那智時代における熊楠の閑寂な生活が、このような題目の背景にあったと述べている⁵¹。小泉の指摘したことは十分にありうる。19 世紀末のアメリカやイギリスにおいてソローの知名度が非常に高かったことに鑑みれば、熊楠がソローについて知らなかったとは考えられない。しかし、新たに入手した資料によれば、この題目はディキンズの手によるものであった可能性が高い。少なくとも、『方丈記』の英訳の流通のルートを追ってみると、その翻訳の題目はむしろ後者によるものであると言える。

第 3 章と第 4 章で述べたが、漱石は自身の先生であったディクソンから影響を受けて『方丈記』を自然文学作品として解釈し、長明とイギリスの詩人ワーズワースとの比較検討を試みた。漱石のエッセイと英訳をもとにしたディクソンは、長明とワーズワースを具体的に比較した論文を執筆し、『方丈記』の新たな英訳と一緒に、日本アジア協会の会報に発表した。これで初めて世界中の読者が本作品を、部分的にしる、身近に読めるようになった。この学会誌は、ヨーロッパ、アメリカ、そして、ヨーロッパ諸国の植民地であった世界各地の国々における有名な教育機関と日本研究者の手に届いていた。19 世紀後半における、西洋を中心としたこのような知的ネットワーク、もしくはパスカル・カザノヴァの言葉を借りて言え

⁵¹小泉博一「熊楠の英訳『方丈記』の草稿」(熊楠 Works (4), 14-20 頁, 2002-03)。

ば、「世界文学空間」の中で『方丈記』も読まれるようになった。本章の第1節で取り上げた『サンライズ・ストーリー』の作者ロジャー・リオードン・高柳陶造はそのような読者の一人でもあった。すなわち、漱石の『方丈記』論は、ディクソンの論文を通じて、アメリカにいた高柳陶造らにまで届けられたのである。

先にも指摘した通り、高柳陶造らはディクソンの『方丈記』英訳を模倣していたと言っても過言ではないほど再利用している。そのみならず、ディクソンの執筆した長明とワーズワースの比較検討を行った論文も精読している。例えば、『サンライズ・ストーリー』には次のような記述がある。

長明の草庵をソローの **Walden** の辺にあった小屋と比較するのも興味深い。コンコードの隠者は家具について「ベッド、テーブル、机、椅子三つ、直径三インチの鏡、火箸と薪台、ヤカン、鍋、フライパン、柄杓、洗い物用の鉢、ナイフとフォークふた組、皿三枚、カップ、スプーン、油差し、糖蜜差し、漆塗りのランプ」だけを所有していた。これらの全ては、自分自身のためであり、絶対に必要なものだけで生活するのが彼の実験の目的であった。（中略）長明はかつてルソー、ワーズワース及びソローと比較されたことがある。彼らはほぼ同じことを目指していた。すなわち、スピリチュアルな人生を育成するための機会と余暇を模索していたのである⁵²。

(It is interesting to compare it (author's note: Chōmei's description of his hut) with Thoreau's. The Concord hermit encumbered himself with "a bed, a table, a desk, three chairs, a looking-glass three inches in diameter, a pair of tongs, and a pair of andirons, a kettle, a skillet, and a frying-pan, a dipper, a wash-bowl, two knives and forks (sic), three plates, one cup, one spoon, a jug for oil, a jug for molasses, and a japanned lamp." All this for the body, which to reduce to what was absolutely necessary was the object of his experiment. [...]He (author's note: Chōmei) has been compared with Rousseau, Wordsworth, Thoreau. Their aim was indeed much the same – to secure opportunity and leisure for building up the spiritual man.)

高柳らによる長明をソローと比較する考えは、ディクソンの論文から着想を得たと思われる。というのは、高柳らは、上記の通り長明がルソーやワーズワースと比較されたことがあると指摘しているが、その時点で『方丈記』の受容史の中で、漱石とディクソンの論文以外に、長明とルソーやワーズワースとの比較を試みたものは管見では存在しないからである。ディクソンは、長明とワーズワースの比較を行いながら、ヨーロッパの隠遁習慣についても

⁵² 和訳は筆者により。Riodan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, pp. 157-158, 162. 『ウォールデン—森の生活』の引用部分は、飯田実訳『森の生活 ウォールデン』（上下）、岩波文庫、1995年、118頁より。

触れ、その説明の中でルソーにも言及している⁵³。そうすると、高柳らの上記のような指摘は、ディクソンの論文からの直接的な影響であったとみて良い。このように、ディクソンの解釈に習って、高柳らは長明をソローに譬えた。この『サンライズ・ストーリーズ』を読んだディキンズは、その影響を受けて熊楠・ディキンズ共訳の題目にソローの名前を採用したと思われる。

まずディキンズは、長明とワーズワースの比較検討が行われたディクソンの論文を読んだ可能性があり、自然崇拝者としての長明の捉え方について知っていたと思われる。しかし、共訳の題目にソローの名前を採用した直接的な要因は、おそらく高柳らの著書であった。

『サンライズ・ストーリーズ』は、1896年3月にアメリカで出版された後、同年10月にイギリスでロンドンの Kegan Paul, Trench, Trübner 社から刊行されることになった。この本が刊行された数ヶ月後に、当時のイギリス文壇における有力な雑誌であった *The Athenaeum* の1897年の1~6月号に著者不明の書評が掲載されている⁵⁴。

先行研究によれば、ディキンズとこの雑誌の関係は古く、彼はこの雑誌に日本関係の書物の書評や記事を定期的に寄せていた⁵⁵。また、『サンライズ・ストーリーズ』書評の内容を見ると、その短い文章の中に、日本に関する偉大な先行研究としてディキンズの著書2冊が挙げられている。そこで、現在 *The Athenaeum* が所蔵されているロンドン大学シティ校に確認したところ、その書評は実際にディキンズによるものであったことが確認できた⁵⁶。ディキンズによるこの書評と『方丈記』共訳の出版の間には7年間の隔りがあるが、上記の点考えると、この共訳の題目は間違いなくディキンズによるものである。ディキンズは、ディクソンとアストンの先行研究を参照し、高柳らの本で提示された長明とソローの比較から着想を得て、掲載版の題目に「Hōjōki – A Japanese Thoreau of the Twelfth Century」と付けたのである。

ディキンズは、おそらく対象読者のことを考えてソローの名前を題目に付けた。なぜなら、ソローは当時アメリカのみならず、イギリスなど西洋諸国で自然崇拝者としての知名度が非

⁵³ ディクソンはルソーについて次のように述べている。 A recluse in European countries, till Rousseau took up his abode on St. Peter's isle in the Lake of Brienne, was always a religious devotee, a man of introspective habits who retired from the world to make up his account with his Maker. Dixon, J M. "Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel." *TASJ*, Vol. 20-2(1893), Yokohama: R. Meiklejohn & Co., No. 49., pp.193-215.

⁵⁴ *The Athenaeum- Journal of the Literature, Science, The Fine Arts, Music, and the Drama*, No. 3610, Jan. 2. 1897. London, January-June, p.13, 1897.

⁵⁵ ディキンズとアジニアムの関係に関して、ピーター・コーニッキは「遅くとも1909年までに、彼は（筆者注：ディキンズ）文芸評論誌『アジニアム（*Atheneum*）のために日本関係書籍の書評を定期的に寄せるようになっていっている。』と述べている。Peter Kornicki. *Collected Works of F. V. Dickins*, Vol.1. Ganesha Publishing, Edition Synapse, 1999, p. xxv.

⁵⁶ イギリスの City, University of London に所蔵されている雑誌 *The Athenaeum* に書評を書いたディキンズの名称が明記されている。〈付録8、44頁〉を参照。

常に高い人物だったからだ。著名なソローの名前を題目として使用することで、西洋では知られていない日本古代の文人を紹介することがディキンズの考えであった。そうすることで、英語圏の読者も東洋の文人を身近に感じることができるからである。実は、この共訳において、ソローの名前はその題目に一度記されたのみであり、英訳の本文と長明の略伝の中でソローに関しての言及は一切ない。

熊楠・ディキンズの共訳は、1907年にエディンバラのゴワンズ社から国際名著図書シリーズ(Gowan's International Library)の一部として、今度は熊楠の名前を外してディキンズ単独の訳として「Ho-jo-ki: Notes from a Ten Feet Square Hut」という新しい題名で刊行されている。また、1933年に日本で著作権を取得した San Kaku Sha から「THE HO-JO-KI (Notes from a Ten Feet Square Hut)」という題目で、ディキンズ単独の訳として刊行されているが、これらの諸版は、内容的に1905年の掲載版と変わらないものである。ちなみに、熊楠の名前がゴワンズ社英訳から外されたことについて、熊楠は「履歴書」に「しかるに、英人の根性太き、後年グラスゴウのゴワンズ会社の万国名著文庫にこの『方丈記』を収め出版するに及び、誰がしたものか、ジキンスの名のみを存し小生の名を削れり。(中略)小生かねて万一に備うるため、本文中ちょっと目につかぬ所に小生がこの訳の主要なる作者たることを明記しおきたるを果たしてちょっとちょっと気づかずそのまま出したゆえ、小生の原訳たるものが少しも損ぜられずにおる。」と書いている⁵⁷。実際に、1907年のゴワンズ社版や1933年の San Kaku Sha 版の英訳をみると、確かに両版に注のところに「M.K.」という表記が数ヶ所において確認できる。この「M.K.」とは「南方熊楠」の略名であると考えられる⁵⁸。

海外における『方丈記』の受容の視点から見れば、上記のゴワンズ社版は特に重要である。この国際名著図書シリーズは、低価格かつ文庫本の形で国内外の有名な文学作品及びその翻訳を多くの一般読者に届けることを目的としていたため、広く読まれていたと思われる。その意味で、英語圏における『方丈記』の受容についても、ゴワンズ社版は重要な役割を果たしたと推測できる。このことは、次節で挙げる20世紀初頭のイギリスにおける『方丈記』を読んだ人物たちの残した文献から把握できるのである。

⁵⁷ 佐伯彰一・鹿野政直監修『日本人の自伝13、南方熊楠・柳田国男』（平凡社、1981年、17頁）。

⁵⁸ ゴワンズ社版では、第13章(20-22頁)及び第25章(28頁)の注の部分に「M.K.」という表記がある。Dickins, F. Victor. *HŌ-JŌ- KI* [Notes from a Ten Feet Square Hut]. London: Gowans and Gray, 1907. 同じく、Sankakusha 版では、章立てが外されているが、15-16頁、22頁などに「M.K.」という記述が確認できる。Dickins, F. Victor. *HŌ-JŌ- KI* [Notes from a Ten Feet Square Hut]. Tokyo: San Kaku Sha, 1933.

第4節 デイヴィスの『方丈記』受容を巡って

4.1 デイヴィスと東洋趣味について

これまでの議論の中で、漱石とディクソンは互いに影響を与えながら『方丈記』を自然文学作品として解釈したと述べた。そして、ディクソンの『方丈記』解釈に倣って、高柳らは長明をアメリカの自然崇拝者のソローに譬えた。高柳らの著書が出版されて約7年後に、熊楠・ディキンズの『方丈記』共訳が発表され、ディキンズが高柳らの本から着想を得て、その題目にソローの名前を付け加えた。その数年後に、この共訳はディキンズ単独の英訳として文庫本の形で刊行され、研究者や一般読者問わずに広く読まれることになった。その読者の一人が、本節で取り上げるイギリス人のフレデリック・ハドランド・デイヴィス (Frederick Hadland Davis, 生没年不詳) である。

現段階では、デイヴィスの来歴に関する情報は乏しく、その生没や生い立ちは不明である。しかし、彼の著した数多くの本や物語、新聞や雑誌などに掲載された記事などから、彼が20世紀初頭イギリスにおける東洋主義者の中で、ある程度知られていた人物であったことが分かる⁵⁹。例えば、デイヴィス著 *The Persian Mystics Jalaluddin Rumi* (1907) は、13~14世紀のペルシアで活動した神秘主義詩人ルーミー (Jalāl ad-Dīn Muhammad Rūmī, 1207-1273) の詩集の英訳を集めたもので、広く読まれていた。欧米におけるスーフィズムなどイスラム教の神秘主義への関心は、1859年にエドワード・フィッツジェラルド (Edward FitzGerald, 1809-1883) による『ルバイヤート』の英訳で一気に高まったが、デイヴィスの著書もその産物の一つである。この本は、ロンドンのマレー社 (John Murray) の有名な「東洋の叡智」 (Wisdom of the East) 図書シリーズの一部として出版された。「東洋の叡智」は、1905年から1960年代にかけて全部で122冊に及ぶ膨大なシリーズで、後年、野口米次郎著 *The Spirit of Japanese Art* (1916) や Kurata Ryuichi の『徒然草』の訳 *The Harvest of Leisure, Vol. 17* (1931) などもその仲間入りをする。当時の新聞や雑誌からは、デイヴィスのこの著書が好評を得て、長きにわたって再版され続けたことが分かる⁶⁰。

次にデイヴィスは、1910年に *The land of the yellow spring, and other Japanese stories* という日本の昔話や神話に関する書物も著した。この本に収録された内容のほとんどは、彼が以前イギリスの雑誌や新聞などで出版したものであるが、そこから彼がかなり前から日本に関心

⁵⁹ デイヴィスがニューヨークの文学雑誌 *The Bookman* に投稿した読者からのメッセージによると、1922年当時のデイヴィスは、Springfield, Churchill, North Bristol, England という所に住んでいたようである。 *The Bookman - A Review of Books and Life, Vol. LIV, Sep, 1921 - Feb 1922, George H Doran, 1922, p. 604.*

⁶⁰ ざっと確認するだけでも、デイヴィスの本は次の新聞などで紹介されたことが確認できる。 *The Scotsman* (Monday, 06 May 1907, p. 2), *Sheffield Daily Telegraph* (Thursday, 16 May 1907, p. 5), *The Scotsman* (Thursday, 28 May 1908, p. 2), *Aberdeen Press and Journal* (Wednesday, 05 June 1907, p.3), *Morning Post* (Saturday 01 August 1908, p. 9).

を持っていたことが確認できる⁶¹。しかし、デイヴィスの最も有名な著書は1912年に George G. Harrap 社から出版された *Myths and Legends of Japan*（以後、便宜上『日本の神話と伝説』と表記する）である⁶²。32枚の写真入りの432頁に及ぶ日本の神話・伝説を収録したこの本は、すぐにオランダ語やスペイン語などにも翻訳され、現在でも読み続けられている。『日本の神話と伝説』が刊行されたとき、この本は多くの新聞などに取り上げられており、いくつかの書評も確認できる。デイヴィスの他の著書と同じく、この著書は、欧米で既に出版された日本関係の書物から材料を収集して執筆されているが、その中には『方丈記』及び長明についても記述がある。その描写から、当時のイギリスにおける本作品の受容について伺うことができる。

デイヴィスがどのように日本に関心を持ち始めたのかは不明である。しかし、彼の本などからは、彼が中国や日本、そして、インド、ペルシアなど東洋の国々に関心を示し、イギリスの東洋学者の一人であったことが分かる。例えば、デイヴィスは1891年に慶応義塾大学で一時期教授を務め、*The Light Of Asia* や *Seas and Lands* の著者として知られるエドウィン・アーノルド (Sir Edwin Arnold, 1832-1904) の息子の Charring Arnold (1869-1937) と個人的な関係を持っていた⁶³。また、彼は日本人とも個人的な関係を持っていたようである。イギリスの雑誌 *T.P.'s Weekly* に、デイヴィスが「野口米次郎のイギリス再来」 (The Return of Yone Noguchi, 1914) という記事を書いているが、その中で野口を高く評価すると同時に、1903年頃ロンドン在中の野口がいかに友人 Yoshio Markino (牧野 義雄、1870-1956) と一緒に貧乏暮らししながら、自費で詩集 *From the Eastern Sea* (1903) を出版したのかについて言及している。

⁶¹ この本の献辞にも野口米次郎の英詩が引用されており、デイヴィスは、野口がイギリスに滞在した1903年の頃から交流があったようで、日本への関心も早くからもっていたと思われる。デイヴィスは、この著書に野口の次の英詩を引用している。My gentle soul, tarry, and sing the song, while the flowers bloom! (Do you not hear the calling cry from the path to the unseen?) The flowers and spring will soon be dead: the road for their spirits shall be your road beyond. Will you not journey with them, soul of my beloved? But, tarry a while. Davis, F Hadland. *The Yellow Spring and other Japanese stories*. London: Herbert & Daniel, 1910.

⁶² Davis, F. Hadland. *Myths and Legends of Japan*. George G. Harrap & Company, London, 1912. また、次の新聞などでこの著書について紹介されている。“Books on Japan.” *Dundee Courier* (Saturday, 19 October 1912, p.6), “Gift Book Supplement.” *Pall Mall Gazette* (Friday, 29 November 1912, p. 20-21), “In Old Japan: Mythology of the Orient.” *Sheffield Daily Telegraph* (Thursday, 12 December 1912, p.11), *The Scotsman* (Thursday, 26 December 1912, p.2), *Hartlepool Northern Daily Mail* (Wednesday, 19 February 1913, p.5).

⁶³ Davis, F. Hadland. “Lafcadio Hearn.” In *The Theosophist*, Vol. Xxxviii Part I, Oct, 1916- March, 1917. Theosophical Publishing House, Madras, 1917, p. 34.

この記事の内容を見る限り、1903年頃からデイヴィスは野口について知っていたように思われる⁶⁴。デイヴィスは小泉八雲 (Lafcadio Hearn, 1850-1904) の熱心な称賛者の一人で、『日本の神話と伝説』の参考文献としてハーンの複数の著書を記載している。さらに、1915年にはインド・マドラス (現チェンナイ) 南郊のアディヤール (Adyar) 市に本部を置く神智学協会 (the Theosophical Society) の会報にもハーンの著書の書評を掲載し、その中でハーンを高く評価するとともに、いかに野口米次郎が初めてハーンを西洋の読者に紹介したのかについて述べている⁶⁵。デイヴィスのこのような執筆活動から考えてみると、彼は20世紀初頭のイギリスにおける東洋主義者の一人であり、日本に対して強い関心を抱いた人物であったことが分かる。

4.2 デイヴィスによる長明の解釈について

デイヴィス著 *Myths and Legends of Japan* は、主に日本の神話や伝説などを中心に書かれているが、その中で『方丈記』及び長明についても記述されている。デイヴィスがいつ頃から『方丈記』に関心を持っていたかは定かではないが、少なくともこの著書を執筆する以前から『方丈記』について講演を行った記録が確認できる。本書が刊行される2年前、1910年10月23日付けのイギリス西南部にあるブリストルの地元の新聞記事によると、デイヴィスは日本庭園に関する講演を行い、最後に『方丈記』英訳を朗読している。この記事には次のような一節がある。

その後デイヴィス氏は、庭園における花の美しさに対する精神や愛情を描いた「Father of Flowers」という日本の物語を朗読した。そして、長明著『方丈記』も部分的に朗読した⁶⁶。(Mr, Davis then read one of his Japanese stories, “Father of Flowers,” a very beautiful explication of the spirit and love exhibited towards the beauties of the flower garden. Extracts were also read from Chomei’s “Ho-Jo-Ki.” (Notes from a ten feet square hut).)

⁶⁴ 野口のロンドン滞在についてデイヴィスは次のように述べている。Ten Years ago, he knew, as his friend Yoshio Markino knew, what poverty meant. Today he is on a lecturing tour in England. Davis, F. Hadland. “The Return of Yone Noguchi.” In *T. P. ’s Weekly*, January 2, 1914, p.7.

⁶⁵ 1915年に次の2点が確認できる。Davis, F. Hadland. “Ancient China and the Elixir of Life,” p. 155-165), “The Street of the Geisha,” p. 633-645.’ In *The Theosophist*, Vol. Xxxvi No. 7, 1915. Theosophical Publishing House, Madras, 1915. また、1922年11月号 *The Theosophist*, Vol XLIII の書評欄にハーンの “Karma, and other Stories and Essays,” George G. Harrap & Co., Ltd., London. 1922 の書評者として F. H. D. という記載があるが、これは明らかにデイヴィスのことであろう。デイヴィスのこのようなネットワークから、当時の東洋趣味者の広い知的ネットワークの仕組みについても伺うことができる。

⁶⁶ 和訳は筆者による。 “The “Charles Lamb” Fellowship of book lovers, Clifton.” In *The Western Daily Press*, Bristol, Saturday, Oct 23, 1909, p. 8.

つまり、既にペルシアや日本についての著書を執筆していたデイヴィスは、日本庭園についてブリストル郊外にある Clifton という所で講演を行った後『方丈記』を朗読したという。これが、デイヴィスを『方丈記』と直接的に結び付ける最も古い記録である。その後、デイヴィスはこの作品に関して『日本の神話と伝説』の中でやや詳しく扱っている。

『日本の神話と伝説』に収録されたデイヴィスの『方丈記』への言及は、長明を描写する中で行われているため、デイヴィスは『方丈記』という作品というよりも、長明という人物に注目していたことが分かる。全部で 432 頁に及ぶこの本の 2 箇所、約 2 頁強の部分に長明に関する説明が掲載されている。最初は、「花と庭園」(Flowers and Gardens) という題目のある第 12 章の一部として「偉大な自然崇拝者」(A Great Nature Lover) という副題のもとで長明に関する描写がある。長明と『方丈記』の簡単な説明の後、60 歳になった長明がいかに関野山で質素な草庵を作り、美しい自然を楽しみながら満足した人生を送ったのかが記されている。デイヴィス自身の言葉によれば、長明の人生観は、現世における生活を送ることではなく、山谷や花木の大自然の働き of 諸様相を頼りにして人生を送ることにあり、そのため、デイヴィスはこの偉大な自然崇拝者を西洋の読者に紹介しようと考えた⁶⁷。その次の、『方丈記』関連の描写は、第 23 章「自然を歌った詩」(Nature Poems) の一部に含まれている。ここで、デイヴィスは長明について次のように述べている。

私は、度々かの 12 世紀の日本の隠遁者のことを思い出す。彼は都から遠く離れた山小屋に住んでいた。そこで彼は本を読み、琵琶を弾き、散歩へ行くついでに花や木の実を採集して、釈迦に捧げていた。長明はまことの自然崇拝者であった。なぜなら、彼は自然のあらゆる意向を理解していたからである。(中略) こんなに自然の偉大な愛好者であった彼は、きっと花の色や香など大自然の諸要素を死後の世界にまでももっていったに違いない⁶⁸。(I often think about that twelfth-century Japanese recluse Chōmei. He lived in a little mountain hut far away from City Royal, and there he read and played upon the biwa, went for walks in the vicinity, picking flowers and fruit and branches of maple-leaves, which he set before the Lord Buddha as thank offerings. Chōmei was a true lover of Nature, for he understood all her many moods. [...] He loved Nature so well that he

⁶⁷ デイヴィスは次のように述べる。But Chōmei was a happy soul, and we mention him here to show that the mainstay of his life were not the things of the world, but the workings of the Nature on the hills and in the valleys, in the flowers and in the trees, in the running water and in the rising moon. Davis, F. Hadland. *Myths and Legends of Japan*. George G. Harrap & Company, London, 1912, p. 160.

⁶⁸ 和訳は筆者による。Davis, F. Hadland. *Myths and Legends of Japan*. George G. Harrap & Company, London, 1912, p. 385.

would fain have taken all the colour and perfume of her flowers through death into the life beyond.)

デイヴィスは、京都から離れた山中の粗末な草庵に住んだ長明を自然の熱心な愛好者であったと主張したわけである。デイヴィスのこの主張の背景には複数の理由があったと考えられる。

まずは、長明についてデイヴィスが参考にした先行研究が挙げられる。デイヴィスの著書は、いずれも欧文で書かれた二次資料をもとにして書かれている。『日本の神話と伝説』に関しても、この本に提示された参考文献の全ては英語で書かれた著書のみである。また、長明については、ディキンズ英訳を参照したと明記しているが、1905年に王立アジア協会の機関誌に発表された熊楠・ディキンズの共訳か、それとも1907年に刊行されたゴワズ社版を参照したかは述べていない⁶⁹。これらの両版は、内容的にはほぼ同じであるが、時期的に考えれば、後者の1907年のゴワズ社版が入手しやすいと思われる。デイヴィスの本に記載された『方丈記』に関する引用文は、ディキンズの英訳と全く同じものである。このことから、デイヴィスはディキンズの英訳の題目に注目し、長明とソローの比較検討から着想を得て、長明を自然崇拝者として解釈したことがわかる。

先にも触れたが、ディキンズの英訳では、その題目にソローの名前が一回あるだけで、自然崇拝者としての長明に関する説明はない。むしろ、ディキンズの英訳は自然崇拝者というよりも、仏徒及び隠遁者としての長明に注目しており、この点でディクソンや高柳らの解釈と異なっている。そうすると、デイヴィスがディキンズの英訳と一緒に、先に示した高柳らの著書や日本アジア協会の会報に掲載されたディクソンの論文も参照した可能性は十分にある。ここで重要な点は、漱石とディクソンにより初めて提唱された自然崇拝者としての長明のイメージが20年の歳月を経て日本からアメリカに渡り、そしてイギリスの読者であったデイヴィスにまで享受されたことである。これは、19世紀末・20世紀初頭における、海外での日本の文化の受容のあり方を示す一つの例である。

デイヴィスのこのような長明の解釈の背景には20世紀初頭のイギリスにおける日本文学・文化の受容の特色があったと考えられる。既に、野口米次郎は1903年に自費で英文の詩集を出版した時、ロンドンの文壇で高く評価されていた⁷⁰。野口が1913年に講演旅行のためイギリスを訪れた時も注目を集めたが、特に彼の俳句のような短い英詩における自然的な描写が高く評価された。デイヴィス自身、野口のイギリス再来を機に、1914年に書いた記事では、野口の写実的な詩に見られる自然とスピリチュアルに富んだ内容を高く評価してい

⁶⁹ Davis, F. Hadland. *Myths and Legends of Japan*. George G. Harrap & Company, London, 1912, pp. 154/276.

⁷⁰堀まどか著『「二重国籍」詩人野口米次郎』（名古屋大学出版会, 2012年、80-81頁）。

る。デイヴィスによれば、野口の詩には古代日本の魅力があり、日本独特の美もあって、日本を越えて世界中の読者を満足させる力がある。次の一節は、デイヴィスの記事からの引用である。

野口氏は、我々の都会の繁華街の最たる部分にも美を探し出す。ロンドン再来後の最初の夜、彼はトラファルガー広場を歩き回ることにした。自分自身を見つめながら、彼は大声で言った。「この空気の色やかすみを見ろ！紫、灰色？それとも、黒？これは何であろう？これは、なぜこんなにルビー色なのか？」野口氏は、長い間経てもその魅力のある素朴さを少しも失っていない。美しいものに対して、子供のような素朴な性格を少しも失ってはいない。彼は大自然の魂そのものを心に留めておいたようである。ほとんどの人は、ロンドンは煙霧を連想させる都市であるとみる現在、野口はその中に美的な魅力を見つけ出す⁷¹。(Mr. Noguchi seems to find beauty in the busiest centers of our great city. On the first night of his return he wanders into the Trafalgar Square. As he looks about him, he exclaims: “Oh, what a colour in the air or mist! Is it purple or is it grey? Or is it dark? What is it? Why it is the very colour of rubies?” Mr. Noguchi has lost none of his engaging naiveté, none of that simple, child-like joy for beautiful things. He seems to carry the spirit of the Nature in his heart, and he finds a real charm in London at a time when most people associate it with fog.)

デイヴィスによれば、日本の詩人である野口は、西洋の人々と異なって、子供の純真さや素朴な本性を失わずに大切に保っており、それこそが彼の称賛するところである。別の所でデイヴィスは、日本がまるで妖精の国であり、明治期以後の近代化のせいでだいぶ変わってきたにもかかわらず、日本人は純粋な心の持ち主であり、いまだ大自然の一部として暮らしていると説明している⁷²。実は、上記引用文にもあるように、デイヴィス自身は、ロンドンのような西洋の大都市が近代化・工業化のせいで煙霧を象徴する都市になってしまったと述べている。環境汚染で汚れたロンドンのような大都会を訪問した野口は、その汚れの中でも美を見つけ出すことができたという。東洋人であった野口に対するデイヴィスのこのような描写を聞くや否や、直ぐにイギリスの詩人イエイツ (W. B. Yeats, 1865-1939) によるラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore, 1861-1941) の評価について想起されるだろう⁷³。

⁷¹ 和訳は筆者による。Davis, F. Hadland. “The Return of Yone Noguchi.” In *T. P.’s Weekly*, January 2, 1914, p.7.

⁷² Davis, F. Hadland. *Myths and Legends of Japan*. George G. Harrap & Company, London, 1912, pp. xi-xx.

⁷³ 20世紀イギリスにおけるタゴールの評価について数多く研究があるが、特にこの問題をめぐる最近の記事としては、タゴールの150誕生日周年を記念に執筆された次の新聞記事が興味深い。Ian Jack, “Rabindranath Tagore was a global phenomenon, so why is he neglected?,” In *The Guardian, Poetry Opinion Sat*, 7 May 2011.

実は、デイヴィス自身も上に取り上げた記事でタゴールに関するエピソードについて触れている。ヨーロッパにおけるタゴールの高い評価に触れながら、イエイツはタゴールの詩集『ギタンジャリ』（*Gitanjali*, 1910）を読んでいるうちに度々涙を流し、読書を中断せざるを得なかったと記している。そして、野口の詩はタゴールのように、深いスピリチュアルな意味を持たなくても、その詩に有頂天になれる力がある。加えて、素晴らしい美的かつ強い感激のあまり、涙が出るほどの力があるという⁷⁴。野口の詩に対するデイヴィスの評価は、イエイツのタゴールに対する評価と全く同じものである。第3章で述べた通り、タゴールの詩集がノーベル賞に選定された背景には、パウンドやイエイツなどイギリスの文壇において、東洋の文化がスピリチュアルかつ神秘的に富んだ純粋なものであると解釈されたことが大きな要因であった。野口の1913年のイギリス講演旅行は、時期的にちょうどタゴールのノーベル賞受賞と重なるが、その翌年の初めに書かれたデイヴィスの野口についての評価もその流れの中で行われている。要するに、フェアリーランドのような東洋像を抱いていたデイヴィスにとって、長明を自然崇拜者として解釈することは当然のことであった。

以上のような長明の解釈は、漱石の英訳以来英語圏に伝えられてきたイメージによって形成された。また、当時のイギリス文壇における東洋志向の風潮も大きな要因になったと思われる。デイヴィスによる長明の解釈は、さらに後代に伝えられた。特に、野口米次郎などによって東洋文明の素晴らしさが西洋に投影されたことに影響を受けたエズラ・パウンド（*Ezra Pound*, 1885-1972）のようないわゆるモダン主義作家らは、従来のオリエンタリズムと違って、新たな形で東洋趣味を推進した。次節では、エズラ・パウンドの友人の一人バジル・バンティングの『方丈記』の受容について考察を加える。

第5節 バンティング著“Chomei at Toyama”をめぐって

5.1 “Chomei at Toyama”の執筆について

バジル・バンティング（*Basil Bunting*, 1900-1985）は、1900年3月1日にイギリスのノーサンバーランドにあるニューカッスル・アポン・タイン（*Newcastle upon Tyne*）のクエーカー教徒の家に生まれ、子供の頃はクエーカー学校に通った。18歳頃のバンティングは、第一次世界大戦で良心的徴兵拒否者として逮捕され、1年以上投獄されたが、その解放後ロン

⁷⁴ 原文は次の通りである。When Mr. W. B. Yeats read through the manuscript of the “Gitanjali” of Mr. Rabindranath Tagore in a public place, he was frequently so deeply moved as to be compelled to discontinue his reading for a time lest others should see his emotion. I am not for a moment suggesting that the poetry of Mr. Noguchi is so deeply spiritual as the wonderful “Songs Offerings” of Mr. Tagore, I do maintain however that Mr. Noguchi’s verse has the power of awakening almost ecstatic emotion, for at times he gives us a sudden and splendid vision of Beauty and draws so near to the place of tears, to our most secret desires, that we cannot be otherwise than deeply moved. As we read through his work he seems to bid us dream too; to gaze upon smiling sea; to tread a mossy path, through a red *torii*, to an old temple; to listen to a dainty lullaby; to caress a silken sleeve, and to mark the words of “O Yen San sweet”

ドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) に入学した。彼はこの頃からロンドンの文壇と関わり始めたと思われる。大学を卒業せず、1924年にフランス経由で当時イタリアのラパッロ (Rapallo) に住んでいたエズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) に会いに行った。バンティングは、ロンドン滞在中に既にパウンドについて知っていたようであるが、実際にはフランスで初めて会ったのである。翌年の1925年に父の訃報を受け一時期イギリスに戻り、しばらく新聞記者として活動したが、1929年に再びラパッロに移りパウンドの協力を得ながら文学活動を始めた。このラパッロ滞在時、パウンドらのモダニズム運動の影響下でバンティングは“Chomei at Toyama” (以下、便宜上 Chomei と表記する) という詩を完成させたのである。バンティングの Chomei に関しては、英文学の視点から少し研究がなされているが、『方丈記』の受容の観点からの研究は管見の限り存在しない⁷⁵。そこで、本節では先行研究を踏まえながら、Chomei の執筆動機とバンティングの『方丈記』理解について検討を加える。

Chomei は、現在も出版し続けられているアメリカの有力な雑誌 *Poetry* の1933年9月号に初めて発表された。また、同年エズラ・パウンドが編集した *Active Anthology* にも収録され、それ以降も他の雑誌などに掲載された。バンティングは、Chomei の底本となった著書について次のように述べている。

この本は、ある日本人により書かれた短い散文のイタリア語訳である。これはムッチョーリ (Marcello Muccioli, 1898-1976) によって1930年に出版された『方丈記』の訳であった⁷⁶。(A little volume which included an Italian prose translation of a prose book of essays written by a Japanese. This little volume was Marcello Muccioli's translation of *Hojoki*, published in 1930.)

上記引用から、バンティングはムッチョーリ (Marcello Muccioli, 1898-1976) が行った『方丈記』のイタリア語訳を底本にしたことが明らかである。バンティングは、これ以外に他の関連資料を利用したかについて明記していない。ただし、Chomei の内容とバンティン

⁷⁵ バンティングの Chomei について次の代表的な研究が挙げられる。Houwen, Andrew. “Thinking by Images: Kamo no Chōmei’s *Hōjōki* and Basil Bunting’s *Chomei at Toyama*.” In *Translation and Literature*, 25, (2016, pp. 363-79. Ascuitto, Nicoleta. “A Japan of the Mind: Basil Bunting’s Modernist Adaptation of Chomei’s “*Hōjōki*.”” In *Postgraduate English*, Issue 25. Durham University, Sep, 2012, pp. 1-15. Haynes, Annabel, Stella. “Making Beauty: Basil Bunting and the Work of Poetry,” (Durham theses, Durham University. (2015) Available at Durham E-Theses Online: <http://etheses.dur.ac.uk/11179/>). Share, Don (Ed.). *The Poems of Basil Bunting*. Faber and Faber, 2016. Makin, Peter. *Bunting-The Shaping of his Verse*. Oxford: Clarendon Press, 1992.

⁷⁶ 和訳は筆者による。Cited from Houwen, Andrew. “Thinking by Images: Kamo no Chōmei’s *Hōjōki* and Basil Bunting’s *Chomei at Toyama*.” In *Translation and Literature*, 25, 2016, p. 363.

グの書簡などを見る限り、彼は他の資料を参照していないと思われる⁷⁷。つまり、バンティングは、本論でこれまでに取り上げた漱石やディクソンの英訳を始め、高柳らや熊楠・ディキンスの共訳、そして、デイヴィスの『方丈記』に関する描写について知らなかった。一方で、前節で述べた通り、西洋における『方丈記』の受容が東洋志向の影響によって形成されたように、バンティングの『方丈記』受容もその点において類似していたと言える。パウンドらの東洋趣味とそれに関連したイマジズム運動から影響を受けて、バンティングの『方丈記』理解は形成されたのである。

パウンドは、他国の昔の文学や文化を題材とした物語を再利用し、とりわけ翻訳という手法を通して、現代の視点から新たな文学を創出する (make it new) ように呼び掛けていた。バンティングの Chomei は、正にその呼びかけによって創出された一作である⁷⁸。バンティング自身は、Chomei の執筆の経緯について次のように述べている。

『方丈記』は散文であるものの、この作品の各部分の丁寧な構成とその緻密なバランス、そしてその描写に表れた「住家」の思想やそれ以外のいくつかの暗示から、本作品の作者は本来エレジーのような詩を作成しようとしたことが分かる。しかし、時間的な制約、あるいは、老体のゆえそのような詩を作ることが出来なかった。もし、作者がこの作品の内容を十分に圧縮してエレジーの詩形で詩を書いていたならば、それは日本文学史で全く新しい創作であったに違いない。私が、その作者の代わりにそのような詩を作ってみただけである⁷⁹。(The Hojoki is a prose, but the careful proportion and balance of its parts, the leitmotif of the House running through it, and some other indications, suggest that he intended a poem, more or less elegiac; but had not time, nor possibly energy, at his then age, to work out what would have been for Japan an entirely new form, nor to condense his material sufficiently. This I have attempted for him.)

長明は本来、散文ではなくイギリスのエレジー(elegy)という詩形で『方丈記』を執筆したかったが、時間や体力の制約で実現できなかったという。この詩は、長明が実現できなかったことを、代わりにバンティングが完成させるという試みである。エレジーという詩形は、主に故人を偲んで書かれるものが多いが、その意味で Chomei は、バンティングの言う通り、故人である長明が成し遂げることができなかった文学活動を完成させたものである。また、

⁷⁷ 晩年のバンティングは、ドナルド・キーン著 “Anthology of Japanese Literature from the Earliest Era to the Mid-Nineteenth Century” を持っていたが、執筆当時『方丈記』関連のものを参照していないようである。Makin, Peter. *Bunting-The Shaping of his Verse*. Oxford: Clarendon Press, 1992, p.367.

⁷⁸ Pound, Ezra. *Make it New – Essays*. London: Faber and Faber, 1934. 407 p. また、この問題については次の新聞記事が詳しい。Mishra, Pankaj and Moser, Benjamin. ‘Can Writers Still ‘Make It New’?’ in *New York Times*, Bookends, Dec. 30, 2014, accessed on May 16 2018.

⁷⁹ 和訳は筆者による。Share, Don (Ed.). *The Poems of Basil Bunting*. Faber and Faber, 2016, p.363.

バンティングはパウンドの呼びかけの影響を受けて、日本古代の散文を英詩に書き換えたのである。バンティングは、パウンドの指示通りに、Chomei の他にもペルシア語を独自で学習し、ペルシアの古代文学の作品を翻訳したこともある。同時に、Chomei は 20 世紀初頭のイギリスにおける東洋趣味の産物でもあったと言える。

5.2 東洋趣味の産物としての“Chomei at Toyama”

前節で取り上げたデイヴィスは、イギリスの文壇における東洋趣味の影響を受け、当時の西洋の東洋への高い関心に応えようとして、ペルシアや日本など東洋の国々の文化や文学などを扱った複数の著書を執筆した。彼の著書では、日本はまるで妖精の国の如く提示されているが、同時代の文人である詩人のイエイツ (W. B. Yeats) やエリオット (T. S. Eliot, 1888-1965) も、日本について同じような意見をもっていたことは知られている⁸⁰。とりわけイエイツは、1928 年にパウンドが滞在していたイタリアのラパッコに移住し、バンティングの Chomei が執筆された時パウンドと親しい関係を築いていたのみならず、Chomei を高く評価している。また、晩年のイエイツは、能楽など日本の伝統芸能に強い関心を持ち、彼の作品にもその影響がみられる⁸¹。バンティングが元々 Chomei をイエイツに献上したことを考えれば、当時のバンティングが有名な東洋趣味者サークルの一人であったことは容易に理解できるだろう。

しかし、バンティングらの東洋趣味は、イエイツの捉えた未開でナイーブな果ての地という東洋のイメージと少し異なっていた。というのは、バンティングが強い影響を受けたパウンドは、東洋のロマン主義的なイメージを追求するのではなく、フェノロサ (Ernest Fenollosa, 1853-1908) や野口米次郎などを通して俳句や能楽など日本の伝統芸能に倣って、従来の英詩の形式の改善を求め、イマジズムというアバンギャルド的な英詩の作法を提唱したからである。よく知られているように、正岡子規 (1867-1902) によって俳句の美的感覚の再認識が主張され、その流れで野口米次郎が俳句のような短い自由形式の英詩を作成して英語圏で高い評価を得たが、パウンドのイマジズム技法はその影響を受けている⁸²。パウンド自身は、少なくとも 1911 年頃から野口と手紙を通じてやり取りをしており、それ以後も関係を継続している。また 1913 年に帝国大学で教えたフェノロサの未発表の草稿を入手したことをきっかけに、パウンドは日本の文学・伝統芸能への興味を強めていった⁸³。パウン

⁸⁰ Albright, Daniel. "Pound, Yeats and the Noh Theatre." In *The Iowa Review*, vol. 15, no.2, 1985, pp. 34-50.

⁸¹ Gurchy, John de. "An Ireland of the East: W. B. Yeats's Japan" (東洋のアイルランド: W. B. イエイツのジャパン), (鹿児島純心女子短期大学研究紀要 第 37 号, 2007, pp. 189-199)。

⁸² Houwen, Andrew. "Thinking by Images: Kamo no Chōmei's *Hōjōki* and Basil Bunting's *Chomei at Toyama*." In *Translation and Literature*, 25, 2016, pp. 363-79.

⁸³ Sanehide, Kodama(Ed.). *Ezra Pound and Japan: Letters and Essays*. Redding Ridge, Conn., 1987, p.6.

ドと一緒に文学活動を行い、イマジズム運動の影響を受けたバンティングは、散文である『方丈記』を英詩に書き換えたのである。

バンティングはイマジズムの手法を利用していかに **Chomei** を完成させたのか。イマジズムの手法の特徴の一つは、最小限の言葉で物事をありのままに表現するということであるが、これは俳句から影響を受けたものである。正岡子規は『古今集』などにおける和歌は「写生」に乏しく、文学的な修辞技法のあまり目の前の世界を題材にしていないとして批判した。その代わりに、彼は『万葉集』などの古代詩集や松尾芭蕉（1644-1694）や与謝蕪村（1716-1784）など俳諧者の作品のような写生的な詩形を称賛している。そこから着想を得た野口米次郎は、1913年の「What is a Hokku Poem?」という論考で「私はいつも、最も美しい花は地面の近くに咲くとよく思う。それらの花は、美しさを表すために百枚の花弁を必要としない。僅かな言葉で表せないのだとしたら、それは本当に詩であると言えるのだろうか。それ故に、この17字こそが、少なくとも我々日本人にとって十分である。」と述べている⁸⁴。つまり、英詩における従来の修辭的な言葉遣いは読者から美そのものを遠ざけてしまうのに対し、俳句は目の前の風景を最小限の言葉で描写するため、ありのままの美をよく表すことができるという主張である。同じく、従来のロマンス主義的な技法に不満を抱いていたパウンドは、1911年にパリの La Concorde 駅で人々の美しい顔を題材にして30行に及ぶ詩を作成したが、この詩には迫力がないとして放棄した。その6ヶ月後には同じ詩を半分に減らし、その一年後にはたった2行に書き換えた。それが、イマジズムを代表する「The apparition of these faces in the crowd:/ Petals, on a wet, black bough.」という詩である。パウンドのこのようなイマジズム手法を採用してバンティングは **Chomei** を作成したのである。

バンティングは、1932年1月21日に雑誌 *Poetry* の編集担当者 Harriet Monroe (1860-1936) に宛てた書簡に「私は、この散文（筆者注：『方丈記』）を凡そ半分の量になる詩形に短縮したが、機会があれば書き終わるつもりである。」と書いて、**Chomei** の4つの断片的な詩を送っている。そして、同年2月26日に Monroe に送った書簡では、**Chomei** をほとんど書き終えたことを伝えると同時に、「だいぶ短縮した。おそらく、原典の6割ぐらいに相当すると思う。」述べている⁸⁵。バンティングによる、このように最小限の言葉で **Chomei** を作

⁸⁴ 和訳は筆者による。原文は次の通りである。I always thought that that most beautiful flowers grow close to the ground and they need no hundred petals for expressing their own beauty; how can you call it real poetry if you cannot tell it by a few words? Therefore these seventeen syllables are just enough at least to our Japanese mind. Noguchi, Yonejiro. "What Is a Hokku Poem?," *Rhythm*, 11, 1913, p. 355.

⁸⁵ 和訳は筆者による。原文は次の通りである。I have condensed about half of it into verse, and purpose to finish it as opportunity arises. [...] cut out so much, may be sixty percent, of the literal version. Makin, Peter. *Bunting-The Shaping of his Verse*. Oxford: Clarendon Press, 1992, p.65.

成する手法は、パウンドや野口などが提唱したものであり、あえて言えば、正岡子規まで遡るものである。

イマジズム技法のもう一つの特徴は、目の前の風景を一つ一つのイメージとして利用し、詩を作成することである。Chomei の場合も、『方丈記』の中で特に鮮明なイメージとして描写されている部分を、俳句のような短い詩に書き換えている⁸⁶。例えば、バンティングは『方丈記』の冒頭文を「Swirl sleeping in the waterfall! / On motionless pools scum appearing – disappearing!」と書き換えているが、これは『方丈記』本来の描写と大きく異なっている。仏徒としての長明の誠実さは別の問題として、長明が『方丈記』の冒頭で無常観を示していることに異を唱える者はいないであろう。しかし、Chomei の書き出しはそのような無常を感じさせることはない。むしろ、これはパウンドらが提示した、音とそれに伴う一つのイメージのフレームという印象が強い。Chomei では、少数の言葉を利用する条件に従いながら、sleeping、appearing、disappearing など動作を通して読者の注目を集めるための工夫がなされ、視覚的なイメージの再現に力が注がれている。Chomei の全文においてこのような手法が施されている。また、バンティングは『方丈記』に含まれた仏教的な描写をほとんど取り上げておらず、これも Chomei のもう一つの特徴である。

その一方で、読者が Chomei を身近に感じられるよう、原典の地名などは、欧米のそれに置き換えるという傾向が見られる。長明が示した都における住家のはかなさを描くために、バンティングは「不動産に投資することは人間の愚かな行為に他ならぬ。」と述べたが、これは当時の西洋社会における現状を批判的な視点から捉えた記述とみられる⁸⁷。同じく、『方丈記』は治承四年におきた辻風の範囲を示すとき、地名を「六条」と記しているが、Chomei ではそれが「Sixth Avenue」となっている。先行研究によれば、この「Sixth Avenue」は 1929 年に起きた世界恐慌の時のアメリカ・ロサンゼルス Sixth Avenue のことであり、バンティング自身が見た凄まじい状況の譬えである⁸⁸。養和の飢饉の描写にある「河原などには、馬・車の行き交ふ道だになし」は「Riverside Drive a car couldn't pass」と書き換えられているが、この「Riverside Drive」は、ニューヨークのマンハッタンにある有名な大通りであると指摘されている。他にもこのような日本地名や人物が当時の欧米で知られていたものに置き換えられるという傾向が確認できる。このような書き換えは、バンティングの自己認識であり、中世日本を 20 世紀の西洋で再現する試みであったという見解も出されている。

⁸⁶ Haynes, Annabel, Stella. "Making Beauty: Basil Bunting and the Work of Poetry." Durham theses, Durham University. (2015), p.187. Available at Durham E-Theses Online: <http://etheses.dur.ac.uk/11179/>.

⁸⁷ 和訳は筆者による。原文は次の通りである。Men are fools to invest in real estate. Share, Don (Ed.). *The Poems of Basil Bunting*. Faber and Faber, 2016, p. 66.

⁸⁸ Asciutto, Nicoleta. "A Japan of the Mind: Basil Bunting's Modernist Adaptation of Chomei's "Hōjōki."" In *Postgraduate English*, Issue 25, Durham University, Sep, 2012, pp. 13.

Chomei を執筆するに当たり、バンティングはもう一つのイマジズムの手法を採用したことが分かる。それは物事を暗示的に提示するという技法である。既に 19 世紀末頃からヨーロッパでは象徴主義が注目を集め、イギリスではイエイツなどがそれに賛同している。20 世紀になると、野口米次郎は、俳句の一つの特徴的な様式として暗示的な技法 (suggestion) を主張している⁸⁹。そのような影響を受けたバンティングは、*Poetry* の編集者に「読者自身に感じてもらうように、私はできるだけ詳細を強調しないことにした。」と述べている⁹⁰。バンティングによるこのような手法は、イエイツや野口の提唱した暗示的な描写方法と同じものである。バンティングは、イマジズムの手法を採用して Chomei を作成したため、イエイツやパウンド、エリオットらに高く評価されたのである⁹¹。

5.3 バンティングの『方丈記』理解について

バンティングは、『方丈記』と長明についていかなる考えをもっていたのであろうか。このことは、彼が Chomei を投稿した時 *Poetry* の編集者に宛てた書簡から少なからず把握できる。まず、この雑誌の編集担当者が Chomei の全文を掲載するのが困難であると指摘し、4 つの断片的な詩のみが掲載可能であるとバンティングに伝えると、これに対してバンティングは反対の声を唱えた。その理由としてバンティングは『方丈記』内容と構造を挙げている。バンティングによれば、この作品は災害の描写と長明の隠遁生活という 2 つテーマが合わさって 1 つの物語を構成しているため、その一部だけを掲載することは望ましくない。これについてバンティングは、「Chomei を部分的に掲載するのは嫌だ。この作品は全体のバランスが非常に大事で、そのうち最も詩的と思われる 4 つの部分のみを掲載することは、この老翁（筆者注：長明）を不正確に描写する行為に当たるのである。（I hate Chomei cut up, because I think it depends mainly on the balance of parts throughout and the picking out of four somewhat “poetical” bits rather misrepresents the very simpatico ole Jap’ (sic)）」と明記している⁹²。言い換えれば、バンティングは長明の隠遁生活に重きを置きながらも、この作品に描か

⁸⁹ 野口は俳句の暗示的な特徴について次のように述べている。Hokku (seventeen-syllable poem) is like a tiny star, mind you, carrying the whole sky at its back. It is like a slightly-open door, where you may steal into the realm of poesy. It is simply a guiding lamp. Its value depends on how much it suggests. Noguchi, Yonejiro. “A Proposal to American Poets,” *Reader*, 3-3, 1904, p. 248. また、*The Spirit of Japanese Poetry* ((1914, p. 34) にも同じような記述がある。

⁹⁰ 和訳は筆者による。原文は次の通りである。I have tried not to underline so that it might be felt rather than pedantically counted up. Share, Don (Ed.). *The Poems of Basil Bunting*. Faber and Faber, 2016, p. 363.

⁹¹ バンティングは *Poetry* の編集者に宛てた書簡に次のように書いている。Re Chomei: Ezra likes it and so does Yeats, but Elliot speaks ill of it because I haven’t been to Japan, which seems irrelevant, and because he says it echoes Pound, which, if true, would be a count on it. Share, Don (Ed.). *The Poems of Basil Bunting*. Faber and Faber, 2016, p. 364.

⁹² Share, Don (Ed.). *The Poems of Basil Bunting*. Faber and Faber, 2016, p. 363.

れた災害が長明の隠遁の直接的な理由であったため、その隠者生活までを一つの物語として捉えたのである。

先行研究では、バンティングの Chomei が不平等な社会から離れて自然の中で質素な生活を送った人物をイメージして執筆されたものであると指摘されている⁹³。とりわけバンティングは、中心的な空間であった京都から離れた周辺地域の外山 (Toyama) に注目している。「外山」という言葉が、Chomei の題目としても使用されたことから分かるように、作者は人間社会から離れた長明の山中生活に注目したのである。イメージズの必要条件に従って、バンティングはこの詩を圧縮しなければならなかったが、そのとき彼は災害の内容を圧縮した一方、日野山における長明の草庵とその周辺の描写の多くを詩の中に盛り込むようにしている。そのため、日野山における長明の草庵周辺の風景は、詩の中で最も鮮やかに表れている。

バンティングは、長明の人物像について「彼 (筆者注: 長明) は、カミングと同等レベルの近代的な人物であった。興味深いことに、彼の京都に関する描写は、現代ニューヨークやシカゴとの類似点が多い。(He was as modern as, say, Cummings. His Kyoto had a number of curiously detailed parallels with modern New York and Chicago.)」と指摘している⁹⁴。このカミングスとは、アメリカの詩人 E・E・カミングス (E. E. Cummings, 1894-1962) のことであり、彼の詩はソネットなど伝統的な英詩の形式で書かれたものが多い。また、彼の詩の内容は多くの場合、自然や人間関係と言った保守的なものであったと知られている。つまり、バンティングによれば、長明は保守的な性格をもっていたが、『方丈記』にある京都の風景は古い町並みでなく、ニューヨークやシカゴのような近代的な都市に似ていた。バンティングの長明像は、このような矛盾したところにあった。バンティングは、長明に関して特に積極的なイメージを抱いていたとは思えない。パウンドらの呼びかけによって昔の題材を探しているとき、ムッチョーリの『方丈記』訳を見つけ、それを底本にして Chomei を書いたと思われる。

以上から、バンティングの『方丈記』の受容は、本論で扱ってきた他の人物と少し異なっていると言える。ディクソンから漱石への英訳の依頼をはじめ、ディキンズから熊楠へ英訳の依頼や高柳らによる『方丈記』の描写、そして、デイヴィスによる自然崇拜者としての長明の捉え方の全てはある種の東洋趣味の流れの中で行われていた。これに対し、バンティン

⁹³ Haynes, Annabel, Stella. "Making Beauty: Basil Bunting and the Work of Poetry," (Durham theses, Durham University. (2015) Available at Durham E-Theses Online: <http://etheses.dur.ac.uk/11179/>).

⁹⁴ 和訳は筆者による。Share, Don (Ed.). *The Poems of Basil Bunting*. Faber and Faber, 2016, p. 364. また、カミングスについては次の研究が詳しい。Rosenblitt, J. Alison. *E. E. Cummings' Modernism and the Classics: Each Imperishable Stanza*. Oxford University Press, 2016, 352 p..

グは日本や日本文学に特に憧れを持つことはなかった。彼の Chomei は、パウンドなどモダニズム運動の指導者らの影響下で形成されたものであったと言える。

終わりに

夏目漱石とディクソンによる『方丈記』の英訳とそれぞれが書いたエッセイ・論文は、英語圏におけるこの作品の受容に大きく影響を及ぼしたものであった。ディクソンの存在から影響を受けた漱石は初めて『方丈記』を自然文学作品として解釈した。漱石の解釈を取り入れたディクソンは、この理解をさらに深め、東西における隠遁習慣を論じる中で長明をルソーやワーズワースなど西洋の人物と比較した。その数年後に『サンライズ・ストーリーズ』を執筆したロジャー・リオードンと高柳陶造は、ディクソンの『方丈記』解釈から着想を得て、長明をアメリカの自然崇拝者であるソローに譬えたのである。高柳らの著書はイギリスで刊行されると、『方丈記』のこの解釈はさらに後代にも伝えられた。

上記で述べた『方丈記』の解釈の影響は、20世紀初頭に行われた南方熊楠・ディキンズによる『方丈記』共訳の題目から看取できる。この共訳では全文を通じて自然作品としての『方丈記』を思わせる描写はないものの、その題目に限って長明が12世紀の日本のソローであることが強調されている。この共訳を読んだ東洋主義者の一人であるデイヴィスは、自身の著書の中で鴨長明が偉大な自然崇拝者であったと主張した。世界文学作品として『方丈記』の旅が始まった1892年の夏目漱石の「英訳方丈記」から、1912年に出版されたデイヴィスの著書までの20年の間、少なくとも英語圏においてこの作品は日本とは全く違った形で読まれていたのである。

もちろん、アストンのように、上記の『方丈記』解釈に明確に賛同していない見方もある。アストンは、『方丈記』や鴨長明に関して特に自分の考えを示すことなく、その執筆の経緯や部分的な英訳を提示し、作品の解釈を読者に委ねた。また1930年代の始めに、散文であった『方丈記』のイタリア語訳を題材にして英詩を作成したバンティングも、『方丈記』を自然文学作品としては解釈していない。彼の狙いはあくまでも『方丈記』のような古代の文献を利用して新たな文学を創出することであった。

終章

第1節 本論文各章のまとめ

本論文冒頭で、ヴァルター・ベンヤミンが提唱した芸術作品の〈死後の生〉の概念を導きに研究の着想と問題意識について述べた。ベンヤミンは、芸術作品の受容を検討することは、原典を理解するための何の役にも立たないと主張したが、同時に遠い昔に成立した偉大な作品が翻訳という形式を通じて生き延びてゆくことも指摘した。本研究は『方丈記』のこのような〈死後の生〉を中心に論じたものであるが、これまでの議論から文学作品の〈死後の生〉が歴史的な時代背景との影響関係のなかで進んでゆくことが解明できたと思う。本章では、この点について改めて文学批評家の漱石が提唱した文学批評（literary criticism）の観点から考察することで本論のまとめにかえたい。

本論の第3章で触れた通り、漱石は『方丈記』について書いたエッセイや朝日新聞に掲載した記事の中で、芸術作品は特定の歴史的・社会的な状況から影響を受けながら理解され、海外における作品の理解においては言語と文化が重要なカギとなると主張している。漱石のこの考えは現在で言う「受容理論」（reception theory）と類似する部分が多いが、漱石はこれに関して『文学論』や『文学評論』で具体的に説明している。これらの著書は漱石が東京帝国大学で行った講義内容を記録したものであるが、ここでは後者の『文学評論』を中心に、彼の理解した文学の歴史性についてそのあらましを抽出してみたい。『文学評論』は、漱石が明治38年（1905）9月から大学を辞職した明治40年（1907）3月までの約2年間に行った講義「18世紀英文学」の記録であり、これは彼の文学批評を理解するために有益である。漱石によれば、あらゆる芸術作品は特定の社会的・歴史的な環境の中で成立し、作品の受容もまた特定の時空間に左右される。作品の歴史性を説明するにあたり、漱石は〈趣味〉というキーワードを利用して、時代によって形成された〈趣味〉で作品の受容が決定されると述べている。例えば、『文学評論』では次のような叙述がある。

文学史を講ずるは無論此意味の小説を作るのとは違ふ。然しながら或方面から解釈を下すと下の様な事が云はれると思ふ。文学は社会的現象の一つであつて十八世紀の社会は文学丈けで成立した者ではない。美術なり、哲学なり、社会の風俗なり、一般に云ふ大いなる人間の歴史中的一部分として文学が出現したのであるからして、今文学史を講ずるに当つて此錯雑なる現象中から文学丈けを引抜いて見せるのは文学の歴史の筋道を知るには便宜であるが、かうすると文学と他の社会的要素と關聯して、活動して世の中に出た景色が目に浮んで采ない。云はゞ単に魚の骨丈けを見て居ると一般で何だか興味が無い。是は単に文学中のみではなく、哲学の歴史でも

科学の歴史でも同様であるが、文学に至ると、殊に此点に注意せねばならん、と云ふのは文学は当時の一般の気風が反射される者で当時の趣味の結晶したものであるから一般の社会とは密接の関係があつて外の学問とは其関係の度が大きい深い¹。

18世紀の英文学について論じる前に、漱石はまずその時代の一般的な社会状況から説明を始めている。上記の引用のように、漱石は当時のイギリスの哲学をはじめ、芸術、倶楽部、社会における文学者の地位、都市と地方の状況などあらゆる社会的・歴史的な文脈を踏まえ、18世紀イギリスを代表する文人や作品の具体例を挙げながら、その批評に入っている。文学が特定の時代空間と無縁で独立したものとして成立するのではなく、その時代から影響を受けながら形成されると漱石はいう。その具体例として漱石は、ホープ（Alexander Pope, 1688-1744）の『ダンシアツド』（*The Dunciad*, 1728-43）を挙げて「斯かる個人諷刺を産出する世の中は知的に狭くなければならぬ、道徳的に低くなければならぬ、詩の上から云つて勿論下等で無ければならぬ（中略）。」と説いている。すなわち、ポープのこの詩は知的に狭く、道徳的に欠けたものであるが、それはポープが生きた時代から影響を受けたためであると漱石は主張している²。漱石の言う時代の影響とは、彼が『文学論』でも指摘した時代の「勢」あるいは〈時代思潮〉（*Zeitgeist*）のことである³。

漱石が示した〈時代思潮〉の思想は、彼が愛読したスペンサー（Herbert Spencer, 1820 - 1903）やゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）など西洋思想家からの影響の結果であるが、現在ではこの概念を批判する声も現れてきた⁴。例えば、モレッティ（Franco Moretti, 1950-）によると、ある時代の精神は必ずしもその時代に成立したすべての文学に影響を与えると限らないし、文学を概括的に論じることは危険であるという⁵。しかし、漱石の文学思想は、彼が活躍した時代精神から影響を受けたものであり、現在の立場から批判する訳にはいかない。むしろ、漱石の思想が現在の文学思想といかに類似している（あるいは、類似していない）のかを探ることが重要である。なぜなら、そうすることで漱石の文学思想をよりよく理解でき、現在の文学思想がいかに成立したのかが見えてくるからである。

¹ 夏目漱石「文学評論」（『漱石全集 第15巻』、岩波書店、1995年、57頁）。

² 夏目漱石「文学評論」（『漱石全集 第15巻』、岩波書店、1995年、420頁）。

³ 夏目漱石「文学論」（『漱石全集 第14巻』、岩波書店、1995年、32-34頁）。

⁴ 漱石の文学思想がどのような西洋の思想家から影響を受けたのかに関しては多くの議論があり、ここで簡単にまとめることはできない。ここで筆者が示したいことは、漱石の〈時代思潮〉の考えは西洋から影響を受けたということだけである。詳細は、島田厚「漱石の思想」（『日本文学研究叢書・夏目漱石』、有精堂出版、1970年、113-115頁）を参照されたい。

⁵ 例えば、フランコ・モレッティは、時代思潮と文学との関わりについて批判的な立場をとり、全ての文学作品は時代空間のなかで生まれぬ（*zeitgeist fallacy*）と主張している。Moretti, Franco. *Signs Taken for Wonders: On the Sociology of Literary Forms*. Verso, 1988, p. 25.

確かに、漱石の指摘した〈時代思潮〉の概念には批判すべき面があるとしても、彼が主張した読書行為の歴史性について考え方は現在の学問でも広く認められている。例えば、ヤウスは、文学作品が読者の状況によって異なる方法で解釈されると説明する過程で、次のように示している。

文学作品は、それ自体で成り立っている客体などではなく、どの時代のどの観客者にも同様の姿を示すことはない。文学作品は記念碑ではなく、独自のその時代を超えた本性などを開示するものではない。それはむしろ、総譜のようなもので、読むたびにいつも新たな共鳴をおこすように作られていて、その共鳴音がテキストを言葉の素材から解き放ち、アクチュアルな存在、「語りかけると同時に、それを聞く能力をもつ対話者を創造しなければならない言葉」にするのである⁶。

ヤウスの考えは読者中心のものであって、読者が置かれた状況によってテキストの意味が変わることを示している。同様に、新歴史主義の観点からスティーヴン・グリーンブラット (Stephen Jay Greenblatt, 1943-)も次の通り述べている。

しかし、これから始まるいくつかのエッセイの中で、私はそれ（筆者注：文学の形式や描写に対して細心の注意を向ける態度）とは違ったことを提唱する。つまり文学世界の中心と見なされる領域よりはその周縁領域を注視すること、いわばテキストの周縁部で垣間見ることしかできぬものを追跡しようとするものである⁷。

グリーンブラットは、文学と歴史の関係性に注目しており、偉大な芸術作品はどのように特定の生活世界 (life-world) と密接に結びつきながら生まれるのか、その追求こそが文学研究であるという⁸。上記に述べた諸氏の示した観点は、100年以上前に漱石が示した文学批評と類似するところが多い。

要するに、翻訳を含めてあらゆる形式の文学は、それが成立した状況から影響を受けて成り立つものである。それ故に、文学作品を理解するためには、文章そのものの細密な検討が必要なことは言うまでもないが、同時に社会的・歴史的な時代背景も考慮しなければならない。本論で取り上げた人物たちが捉えた『方丈記』像やこの作品に関する描写は、漱石が指摘した文学の歴史性を物語っている。第1章で述べた通り、『方丈記』の成立自体が日本の中世期の社会的・宗教的な背景から影響を受けたものであることについては改めて言うまで

⁶ H.R.ヤウス著、響田収訳『挑発としての文学史』（岩波書店、1999年、33頁）。

⁷ Greenblatt, S. "The Touch of the Real." *Representation*, Vol. 59, Special Issue, *The Fate of the Culture*, ed. by Greertz and Beyod (Summer 1997, 14-29).

⁸ S. J.グリーンブラット著、酒井正志訳『シェイクスピアにおける交渉』（法政大学出版局、1995年、11頁）。

もない。この時期に日本が直面した様々な自然災害に加えて、当時の主流であった仏教的思想の影響下で鴨長明はこの作品を執筆した。同じく、本作品の受容史もまた明らかに特定の歴史的な背景から影響を受けている。『閑居友』をはじめ、『平家物語』など『方丈記』に言及した中世期の作品は数多くあり、本作品の内容を強く意識した作品も少なくない。しかし、『方丈記』に言及した中世期の作品は、多くの場合、鴨長明に関する逸話を記録したもので、長明の人生を知るための貴重な情報源ではあるが、『方丈記』の内容そのものを考察した作品は少なかった。一方で、『方丈記』の様々な種類の伝本が早くから存在していたことを考えると、この作品は様々な方法で読まれたことも想定できる。例えば、『方丈記』の略本や真名本のように特定の読者層を意識して執筆された諸本の存在は、この作品の受容の多様性を物語っている。

『方丈記』は江戸初期に入って初めて学問の対象になり、明暦の大火という歴史的な出来事を契機にその注釈書が現れるようになった。この時期に作成された6部に及ぶ注釈書から、それぞれの注釈者の『方丈記』理解が確認できる。加藤磐斎著『方丈記抄』のように『方丈記』を仏教的な視点から解釈したものもあれば、長明を儒者として捉えた仁木宜春著『方丈記宜春抄』のような事例もある。また、『方丈記』の災害描写に着目した浅井了意の『むかしあぶみ』や作者不明の『犬方丈記』のような作品もこの時期に現れた。この作品に対する高い関心は明治期以降も継続された。その主な理由は、明治期からこの作品が高等教育の教科書の一部になり、読者層を超えて広く読まれる契機となったことに拠る。明治期にも『方丈記』の多くの注釈書や現代語訳、研究書が出され、古典文学の中では特に注目された作品の一つであった。本作品のこのような長い受容史を考察してみると、各時代の読者が本作品の3つのテーマに注目したことが分かる。それらは、第1に仏教的な立場からその内容や作者の行動を解釈する傾向、第2にこの作品の前半に含まれる害の描写に注目する傾向、第3に鴨長明の閑居生活に対して関心を寄せる傾向という3点である。しかし、漱石はこれらの従来の解釈を無視して新たな解釈を提唱したのである。

第2章では、西洋人として『方丈記』に最初に強く関心を持ち、漱石にその英訳を依頼した東京帝大の英文学の教授であったディクソンを中心に検討を行った。ディクソンの日本への関心はジャポニズムの風潮の影響であると思われるが、『方丈記』への興味は自らが専門とした英文学でよく直面してきた自然観と隠遁といったテーマを背景に成立した「期待の地平」の結果であった。というのは、ディクソンは自身が英文学で見えてきた自然観や隠遁のテーマを追求する一環として漱石にその英訳を頼んだのである。ディクソンに関しては国内にいくつかの先行研究があるものの、彼の来日以前の人生や国内外における彼の活動に関して指摘されてこなかった内容が多く、十分に評価されてきたとは言い難い。そこで、本章では

ディクソンが通った学校を始め、エディンバラ大学及びセント・アンドリュース大学における彼の学問的なバックグラウンドを整理した上で、来日までの人生を明らかにした。そして、12年間以上にわたる在日期间の中で、ディクソンが明治期という日本にとって重要な転換期においていかに日本の高等教育の発展のために貢献したのかを考察した。ディクソンから教育を受けた生徒が日本の英語教育の担い手になったのみならず、彼は日本の英語教育の発展のために多くの教材作成にも力を注いだ。斎藤秀三郎のようにディクソンの教育方法の影響を受けて多くの辞書や文法書を作成し、日本の英語教育に大いに貢献した人物もいる。英語教育用の教材が乏しい時期に、ディクソンが執筆した *Dictionary of idiomatic English phrases* などの辞書類が好評を得たのみならず、日本の英語教育の発展にも貢献したのである。

ディクソンは日本の女子教育の発展にも深く関わっていた。現在も続く東京女学館の設立に際して、ディクソンは、帝国大学文化大学長の外山正一とともにその立案者であり、学校設立計画段階から関わっていたことが本論で明らかとなった。また、学校設立時に問題になっていた資金調達方法としてディクソンが提案した近代的な株式方の投資方法が採用されたり、イギリス人の女教師の手配などにも関わったりした。さらに、日本の勤務を終えて渡米した後、ディクソンはアメリカで日本に関する研究の発展のために活発に働いたことも明らかにした。とりわけ、彼が南カリフォルニア大学で勤務していた頃、彼の主導で東洋学部が新設されるなど、日本語教育や日本研究の普及に20年以上にわたって関わり続けた。このように24歳の若さで来日し、それ以降長きにわたって日本との関係が続けたディクソンは、先行研究では十分に評価されなかったが、本章ではその再評価を試みた。

さらに、『方丈記』の海外における受容の視点から、本作品がいつ頃から英語文献の中で言及され、ディクソンがどのようにこの作品に関心を持ったのかについても考察した。それによって本作品が、日本研究の先駆者の一人であるアーネスト・サトウがアメリカの百科事典に掲載した日本に関する記事の中に初めて現れたことを明らかにした。その後フランス語の百科事典などにもこの作品についての言及が確認できる。ディクソン自身が『方丈記』に出会ったのは、おそらくチェンバレン著『日本事物誌』からであるが、先ほど述べた通り、彼はこの作品に含まれた隠者のテーマや自然に関する描写に着目し、その内容を詳細に知るために、漱石にその英訳を依頼したのである。

ディクソンから依頼を受けた漱石は『方丈記』を英訳し、この訳文の序文に当たる短いエッセイも同時に執筆したのだが、それについては第3章で詳しく考察を行った。とりわけ、漱石の『方丈記』論の特質を明らかにしつつ、この英訳から伺える彼の翻訳思想について検討を加えた。漱石の「英訳方丈記」を対象にしたこれまでの研究は、漱石と『方丈記』の関係や本文と訳文の比較を中心に行われてきたが、『方丈記』の受容の観点からの考察は少な

かった。また、ディクソンが漱石の『方丈記』理解にいかに関与したのかに関する先行研究も乏しく、「英訳方丈記」から漱石の翻訳という行為に対する考えを論じた研究もなかった。

最初に、ディクソンによる漱石への英訳依頼について検討し、学生時代の漱石が残した書簡などから彼にとってこの作品がいかに関与したのかを述べた。次に、漱石の「英訳方丈記」の本文を分析することで、彼の『方丈記』論の特徴を明らかにした。漱石は、『方丈記』における仏教的な要素や災害描写、あるいは閑居の気味など従来から注目されたテーマから距離をおき、この作品をイギリスのロマン主義的な自然文学作品として理解しようとした。漱石は『方丈記』の自然的な描写に着目して、鴨長明を英詩人ワーズワースと比較したが、漱石のこのような解釈は本作品の受容史において一つの転換点であったと言える。なぜなら、『方丈記』のこの解釈は後代にも継承されることになったからである。

漱石の『方丈記』理解が、彼が大学で専攻した英文学から少なからず影響を受けているとは否定できない。しかし、より重要な理由として、本論では漱石に翻訳を依頼したディクソンからの期待により漱石の『方丈記』理解が形成されたことを主張した。というのは、Toury の言うように、漱石が翻訳の際に対象と想定していた読者であったディクソンの期待に応えようとして漱石は『方丈記』の新たな解釈を提唱したのである。しかし、漱石の「英訳方丈記」は単にディクソンの要求に従うだけのものではない。漱石は、西洋の不快な工業化とそれに伴う生活環境の複雑化に対して、質素な生活を象徴した鴨長明は東洋を代表する隠遁者であるとも主張している。漱石は、エッセイの最後のあたりで「物質が全能のユートピア的世界からこの乏しい世捨て人を、ベラミーのごとき作家は笑いたければ笑うがよい。

(中略) ワーズワースのごとき詩人が哀れみなければ哀れむがよい。(中略) それほどまでも、長明の信念が揺らぐことはあるまい。」と述べている⁹。これは漱石が主張した「自己本位」の概念と類似していると言える。つまり、西洋はワーズワースなど優れた文人を誇るとしても、日本の文人である鴨長明には独自の視点があり、例え西洋人がいくら批判をしたとしても長明は自身の考えをきつと変えなかったのであろうと言うのである。同じく、漱石のこのような指摘は、彼の作品でよく見られる西洋に対するある種の批判的な立場と似通っており、学生時代に書いた「英訳方丈記」の内容からもこのような考えが看取できる。

さらに、「英訳方丈記」の分析を通じて学生時代の漱石の翻訳思想について考察を加え、晩年の漱石が翻訳に対して示した考えが帝大時代に既に形成されていたことを明らかにした。

⁹ 和訳は『漱石全集』より。原文は次の通りである。Let a Bellamy laugh at this poor recluse for his utopian region of material triumph; let a Wordsworth pity him... for all that he would never have wavered from his conviction. 夏目漱石「The Translation of Hojio-ki with a Short essay on it」『漱石全集 第26巻』（岩波書店、1996年、363-364頁）。

本章の冒頭でも触れたが、漱石は翻訳を含めて全ての文学活動が特定の歴史的な文脈の中で行われ、翻訳は複雑な言語的・文化的な要素を正確に伝えるのには不十分であると考えていた。ゆえに、訳者は原文を忠実に訳すより、必要に応じて訳文を変えたり内容を追加したりする必要があると確信していた。すなわち、原典ではなく、対象となる読者のことを配慮して訳さなければならないと考えていたのである。漱石は『方丈記』の英訳を行う時、このような翻訳手法を採用している。晩年の漱石は坪内逍遙の日本語版の『ハムレット』の上演について同じような見解を示している。このように漱石の翻訳思想は彼が帝大生であった頃に形成したと言える。

第4章では、漱石とディクソンが執筆したエッセイと論文及びそれぞれの『方丈記』の英訳に主眼をおき、両者の理解を検討するとともに、ディクソンがいかに漱石の『方丈記』解釈を取り入れたのかを論じた。漱石が書いたエッセイとディクソンの発表した論文を比較してみると、ディクソンが自身の論点に適した内容を漱石のエッセイから取り出し、議論を展開したことが分かる。ディクソンは漱石が簡単にしか触れなかった長明とワーズワースとの比較に着目し、自身が興味を持っていた宗教や隠遁習慣について東西それぞれの視点からの比較を試みた。また、当時の西洋中心主義を背景に、ディクソンは長明とワーズワースの比較検討を行った際、12世紀の日本の隠遁者である長明はあらゆる面においてワーズワースよりはるかに劣っていたと主張した。さらに、ディクソンは漱石の英訳を模倣するほどそれをそのまま受け継いでいた。それぞれの訳文の比較からこのことは明らかである。しかし、英語話者であるディクソンは、漱石の英訳に少し手を加えてより自然な英語表現に直したことも確かである。

ディクソンは、長明とワーズワースの比較検討を行った論文を日本アジア協会に発表した。その発表を聞いた西洋人のコメントが記載された記録をみると、やはり聴衆は西洋の文化的な枠組みを通じて『方丈記』を理解する道筋を求めていたことが分かる。例えば、ノックスは日本文学が西洋人にとって理解不能なものであると指摘し、長明は正義・慈善に欠けていた人物として批判の対象にした。同じく、聴衆の一人であった帝大法学部の教授タイソンは、長明がルソーのような亡命者であったと指摘した。西洋人によるこのようなコメントは、既にディクソンが発表の中で提唱した長明の消極的なイメージの繰り返しであったに過ぎない。このような態度は、19世紀の西洋人が東洋に対して抱いた偏見の結果であり、ディクソンもまた漱石をあくまでも情報提供者として利用していたに過ぎない。

第5章では、19世紀末・20世紀初頭の英米における『方丈記』の受容について考察を行い、漱石の『方丈記』論が後代にどのように継承されたのかを論じた。まず、1896年にアメリカで刊行されたロジャー・リオードンと高柳陶造の共著 *Sunrise Stories : A Glance at the*

Literature of Japan に収録された『方丈記』の描写を分析し、作者らの『方丈記』理解を検討した。この著書は、日本文学全般を英文で描いた初期の文献の一冊であるが、その『方丈記』の捉え方は漱石やディクソンと類似している。高柳らは『方丈記』の描写に関してどの資料を参考にしたかを明記していないが、その内容を分析することでディクソンの論文と英訳をもとにして書いたことが分かる。むしろ、高柳らも漱石とディクソンのごとく、鴨長明を偉大な自然崇拝者として捉えた。漱石とディクソンは、長明を英詩人ワーズワースと比較したが、高柳らはさらに一步進んで長明をアメリカの自然崇拝者であるソローに譬えたのである。しかし、ディクソンと高柳が西洋の読者に投影しようとした長明像には根本的な違いがあった。ディクソンは西洋中心的な視点から『方丈記』を解釈し、長明がワーズワースなど西洋の自然主義文人と比べて劣っていたことを提起しようとした。これに対し、高柳は西洋の哲学者や文人よりも長明の思想がより根本的なものであったと主張しており、19世紀末期という時代の中で日本人と西洋人が文化的な優位性を主張する両者の意見の衝突が確認できる。

次に、日本学の先駆者であるアストン著『日本文学史』にある『方丈記』英訳を取り上げ、アストンの『方丈記』の捉え方を考察した。アストンは、漱石とディクソンの英訳について知っていたようだが、改めてこの作品を部分的に英訳した。おそらく、アストンが漱石とディクソンの英訳に満足していなかったからである。アストンは、英訳に利用した日本語の原典に記載された解説を簡略して『方丈記』英訳の序文を書き、原文を忠実に英訳しているが、この作品やその作者に関して特に意見は述べていない。

英語圏で広く読まれた『方丈記』英訳の一つは、南方熊楠・ディキンズの共訳である。これは、最初の完全な英訳でもある。熊楠は、漱石と同じくイギリス人のディキンズから依頼を受けてこの英訳に踏み出した。しかし、ディキンズの書簡の内容を見る限り、彼は熊楠に『方丈記』の英訳を依頼していなかったことが分かる。熊楠はディキンズが示した複数の古典作品のうち『方丈記』だけを選んでその英訳を行った。このことから那智時代の熊楠にとってこの作品が特別な存在であったと理解できる。熊楠が英訳を行うに当たり使用した底本について先行研究では異論があったが、英訳の草稿と原文の比較検討を行った結果、彼は博文館から刊行された『日本文学全書』に収録された『方丈記』版を利用すると同時に、他の本も参考にしたことが見て取れる。そして、この共訳の題目には「長明は12世紀の日本のソローである」という副題が付けられているが、従来の研究では熊楠がこの題目を付けたとする指摘があった。しかし、英米における『方丈記』の実際の流通ルートを追ってみると、この題目はディキンズによって付けられた可能性が高いということが判明した。すなわち、ディクソンの論文内容を取り入れた上記の『サンライズ・ストーリー』が初めて長明をソローと譬えたのだが、ディキンズがこの著書の書評を書いているため、『サンライズ・ストー

リー』から着想を得てこのような題目にしたのである。少なくとも、ディキンズは間違いなく長明が以前ソーと比較されたことを知っており、そのため数年後に『方丈記』を英訳するとき、その題目に長明を「12世紀の日本のソー」に喩える副題を付けたと推測できる。もしこの仮説が正しいならば、漱石の提唱した自然崇拜者として長明の解釈は、ディクソンから高柳らを経て、熊楠・ディキンズの共訳まで、日本からアメリカ、さらにイギリスの読者に継承されたのである。

20世紀初頭のイギリスにおける『方丈記』の読者の一人であったデイヴィスはその著書 *Myths and Legends of Japan* の中で鴨長明について描写したが、その中でデイヴィスは長明を自然崇拜者として解釈した。『方丈記』の描写に関してデイヴィスは熊楠・ディキンズの共訳を参照したため、これまでに英米で捉えられた長明のイメージがそのまま受け継がれたのである。それと同時に、デイヴィスが東洋に強い関心を持ち、日本やペルシアなどについての著書も執筆したことを考慮すると、彼の長明像は当時のイギリスにおける東洋趣味から影響を受けたことが分かる。とりわけ、デイヴィスがラフカディオ・ハーンなど東洋主義者を称賛した人物であったことを考えれば、鴨長明を自然崇拜者として解釈したのも当然のことであろう。

一方で、イギリスの詩人バジル・バンティングが1933年に発表した“Chomei at Toyama”は、文学作品の受容の多様性を物語っている。日記あるいはエッセイの形で長明が書いた『方丈記』は、世界文学になるとジャンルを超えて英詩に変貌したのである。これは、ダムロシュが指摘した、世界文学になることで個々の作品が豊かになることの証拠であろう。この英詩に関して、海外ではいくつかの先行研究があるが、いずれも英文学や翻訳学の視点から論じたものであり、『方丈記』の受容の観点から捉えたものはない。そのため、本論ではバンティングがいかに散文であった『方丈記』を自由形式の英詩に書き換えたのかを論じ、彼の長明像を解明した。バンティングは、これまでに見てきたように、『方丈記』を自然文学作品としては解釈しなかった。むしろ、モダニズム運動の中心的な存在であったエズラ・パウンドなど東洋趣味者の直接的な影響下で彼の『方丈記』の捉え方は形成された。彼が、パウンドらの呼びかけで古典作品を再利用して新たな文学の創作に挑んだ結果がこの英詩である。このように、西洋における『方丈記』の受容は、パスカル カザノヴァ(Pascale Casanova)が『世界文学空間—文学資本と文学革命』で主張した19世紀末・20世紀初頭の西洋における東洋文学の流通の様相を示す一つの事例であると同時に、日本文学がいかに世界文学に加入したのかを如実に物語っている¹⁰。

¹⁰ パスカル・カザノヴァ著、岩切正一郎訳『世界文学空間—文学資本と文学革命』（藤原書店、2002年）。

上記で取り上げた人物による『方丈記』の捉え方は、明らかにそれぞれが置かれた状況に作用されていたことが分かる。例えば、高柳はディクソンの『方丈記』解釈をそのまま取り入れつつも、ディクソンと違って鴨長明が西洋の思想家よりも優れていたと主張している。『サンライズ・ストーリー』の序文や終章などを見ると、近代化の道に歩み始めていた新たな日本国民としての高柳の矜持が容易に見て取れる。熊楠・ディキンズの共訳の場合、ディキンズがその題目にソロの名前を付け加えた背景には、既に西洋で大きな存在であったソロの名前を採用することで、英語圏の読者からの注目を引きつける狙いがあった。デイヴィスが、ディキンズに倣って鴨長明を自然崇拜者として解釈したことは間違いないが、同時に当時のイギリス文壇における日本への異国趣味もその背景に働いていたことは事実である。同じく、モダニズム運動の指導者が促した異国の古典作品を再利用して新たなモダン文学を創作する (make it new) ことに従ったバンティングは散文である『方丈記』をためらわずに英詩に書き換えた¹¹。これらの人物は、同じ作品を様々な時空間の中で、異なった目的をもって違う方法を用いて解釈したのである。

このような受容研究を行うことで、後代において原典にどのような新たな解釈が付け加えられたのかが明らかになり、原典のよりよい理解につながる。むしろ、原典をよく理解することは、過去に成立した原典を本来の姿のまま再現することと同義ではない。例え再現できたとしても、過去の読者の読書経験は再現不可能である。より大事なものは、過去に執筆された作品が、我々の今を理解するためのカギとなることである。先ほど示したバンティングの“Chomei at Toyama”は、モダニズムを理解するために不可欠であるが、同時にモダニズム文学への反動として生まれたポストモダン文学を理解するためにも必要である。本研究でみた通り、古典作品が世界文学に加わる時に、異文化との交流過程で生じる新たな現象を理解するためにもこのような研究は必要である。数年前にドイツのコンピューター会社が、様々なクラウド・サービスを一括で利用し、作業効率を上向させるために Hojoki という開発支援ツールを作った。このツールの「Hojoki」という名称が、異文化交流の過程で生じた新たな現象であるかは定かではない¹²。しかし、作曲家の千原英喜が『方丈記』の内容をもとにして合唱作品を作ったことは事実である¹³。『方丈記』の読者のもう一人である建築家の隈研

¹¹ パウンドによる「Make it New」の呼びかけは中国思想から着想を得たものであり、特定の国や文化を模倣するのではなく、様々な文化や時代から発想を得て創作に取り組むべきであるということを示している。彼が書いたエッセイ集「Make it New」の名前から有名になった。Pound, Ezra. *Make it New*. Faber and Faber, London, 1935. また、この問題については次の研究も詳しい。Damrosch, Davis. “Antiquity.” In *A New Vocabulary for Global Modernism*. Columbia University Press, 2016, pp. 43-58.

¹² 筆者はこのツールの開発者と連絡しようと試みたが、未だ連絡は取れていない。ゆえに、この名称が他の言語や文化からのものである可能性は否定できない。

¹³ 千原英喜 『混声合唱とピアノのための 方丈記/小倉百人一首より 歌垣』 (全音楽譜出版社、2009年)。

吾が、ETFE という先端のプラスチック材料を利用して、鴨長明が日野山で住んでいた方丈の庵を再現したことも確かである¹⁴。このような新たな現象を理解するためにも『方丈記』のような古典作品の受容の様相を研究しなければならない。

第2節 今後の展望

本研究は、19世紀末から20世紀初頭といった短い期間において英米という限られた地域で『方丈記』がどのように読まれたのかを考察したものである。とりわけ、漱石の「英訳方丈記」を中心に検討し、彼の英訳の後から1930年代初頭にかけて英語圏でこの作品がどのように享受されたのかを明らかにした。しかし、本論に含み込むことのできなかつた課題、あるいは本研究と直接的に関係するものの未解決の問題は多く残されている。

まず、本研究と直接的に関係しているものの、本論では取り上げることが出来なかつた課題について述べておきたい。漱石とほぼ同時代に日本人が行った『方丈記』の欧文訳は複数ある。土屋信民が1897年に行った『方丈記』の部分的なフランス語訳や市川代治が1902年に行ったドイツ語の全訳などがその事例であるが、これらの翻訳や人物の『方丈記』理解に注目した研究は管見の限り国内外ともに存在しない。これらの訳者が、明治という時空間においてなぜこの作品を翻訳の対象にし、本作品を海外にどのように投企しようとしたのかは重要な問題である。その解明は、『方丈記』だけではなく、明治という時代そのものをよりよく理解するのに役に立つと思われる。一方で、本研究は英語圏という限られた地域を対象に研究を実施したが、該当時期には他のヨーロッパ言語にも『方丈記』が訳されている。例えば、ルボン (Michel Revon, 1867-1947) によるフランス語訳 (1910)、ムチオリ (Marcello Muccioli, 1898-1976) のイタリア語訳 (1930) やカノツホ (Alexander Chanoch, 1894-1934) のドイツ語訳 (1930) などはそのいくつかの例である。本論で考察した英語圏における『方丈記』の理解に加えて、これらの非英語圏での『方丈記』の捉え方を解明することで、はじめて19世紀・20世紀初頭の西洋における本作品の総合的な受容の様態が見えてくる。また、このような研究は、日本人と西洋人による『方丈記』の捉え方の比較検討を可能にし、それぞれが日本文学をいかにまなざしたのかを明らかにすることにも繋がる。

本研究では明治中期頃から1930年代までの英米で『方丈記』がどのように受容されたかを考察したが、明治期以降に国内で本作品がどのように読まれたのかを論じた研究は必ずしも多くない。明治後期から現在に至るまで、無数の一般読者がこの作品を読んだが、それらの読者の『方丈記』の捉え方を知り得る方法はおそらくないだろう。しかし、少なくとも本作品から明らかに影響を受けたと思われる有名な文人や他分野の知識人らの『方丈記』の受容に関する不明な点を解明する必要がある。このような研究は、国内におけるこの作品の総

¹⁴ 養老孟司・隈研吾共著『日本人はどう住まうべきか?』（日経BP社、2012年）。

合的な受容を理解するために役に立つ。例えば、上記に述べた千原英喜や隈研吾の『方丈記』理解は、従来の文学的な理解から遠く離れているようだが、その内実に注目した例はない。同様に、海外における『方丈記』の受容を総合的に捉えるためには、1930年代以後に本作品がどのように享受され、また英語圏のみならず他の国や言語でどのように読まれたのかをも追いかける必要がある。

漱石研究の視点からもいくつかの課題を追求しなければならない。本研究は、漱石の「英訳方丈記」の視点から彼の翻訳思想を考察したが、漱石の翻訳に対する考えを論じた研究も非常に少ない。明治期という転換期に翻訳が果たした重要な役割に関して従来から多くの論考がなされてきた。しかし、明治の文壇を代表した人物の一人である漱石の翻訳思想を論じた研究は少ないのが現状であり、更なる研究が求められる。次に、本研究は漱石と『方丈記』の関係を考察したが、漱石にとって古典文学がいかなる存在であったのかについてはいまだ不明な部分がある。漱石が個々の古典作品をどのように読んだのかを論じた研究はわずかにあるものの、漱石にとって古典文学がいかなる対象として捉えられていたのか、その全体像を明らかにした研究は少ない。この問題の解決を目指して、今後漱石の名作のみならず、学生時代に書いたものの断片をはじめ、帝大時代の講義記録や新聞記事などの綿密な分析を行うことが必要である。また、漱石が『方丈記』に関心を持っていたことに伴って、漱石の門下生の多くもこの作品に関心を抱くようになったのだが、漱石とその門下生の『方丈記』の捉え方に関する諸側面も明確にしなければならない。

最後に、本研究は『方丈記』の受容を論じたものであるが、明治期に『方丈記』以外にも多くの古典作品が外国語に翻訳され、海外で読まれていたことは広く知られている。これらの作品の海外受容について考察した論考も少ない。『源氏物語』などいくつかの名作を除けば、19世紀末から20世紀初頭の欧米で古典文学がいかに読まれ、どのように解釈されたのかの全体像は未だ明らかではない。20世紀初頭には、欧米社会において日本の現代文学が読まれるようになる以前に、既に日本の古典文学が伝播し、日本の現代文学が読まれるための必要な土台が整っていたと思われる。この初期段階に日本の古典文学が西洋社会でどのように読まれ、いかにしてそれが現代文学への受容に移行したのか、その詳細は知られていない。このような研究は、西洋における日本のイメージ形成といった大きな問題の解明に貢献し、それ以後の日本文学作品の受容がいかに影響を与えたのかを理解するためにも役に立つ。上記を今後の研究課題としてここで本論を終えることにする。

参考文献

日本語の参考文献

1. (《座談会》『方丈記』800年 稲田利徳・千本英史・小林一彦・浅見和彦(司会)(文学、第13巻・第2号、2012年3-4月)。
2. 「天声人語」(東京朝日新聞(朝刊)、1982年6月9日)。
3. 「新・方丈記 三善晃さん__この夏この人」(東京朝日新聞(夕刊)、1964年8月12日)。
4. 『岩波講座世界文学・第11巻』(岩波書店、1934年)。
5. 『英語青年 巻70第5』(研究社、1933年12月1日号)。
6. E.W. サイド著; 今沢紀子訳『オリエンタリズム(上)』(平凡社、1993年)。
7. F.V.ディキンズ[著]、岩上はる子・ピーター・コーニッキ編『F.V.ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集:アーネスト・サトウ、南方熊楠(他)宛』(エディション・シナプス、2011年)。
8. Gurchy, John de, 'An Ireland of the East: W. B. Yeats's Japan (東洋のアイランド: W. B. イェイツのジャパン)', (鹿兒島純心女子短期大学研究紀要 第37号, 2007年)。
9. H.R.ヤウス著、響田収訳『挑発としての文学史』(岩波書店、1999年)。
10. S. J.グリーンブラット著、酒井正志訳『シェイクスピアにおける交渉』(法政大学出版局、1995年)。
11. アルヴィ宮本なほ子「漱石の淡黄の花—『草枕』とイギリス・ロマン主義」(比較文学研究、103号、2017年、8頁)。
12. ヴァルター・ベンヤミン著、浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション 2 エッセイの思想』(筑摩書房、1999、388頁)。
13. キース・ヴィンセント・北丸雄二訳「紫と白: 子規と漱石にとっての「源氏物語」」(「京都漱石の會」の会報『虞美人草』第18号、2016年)。
14. チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌』(平凡社〈東洋文庫131〉全2巻、1969年、第1巻)。
15. デイヴィッド・ダムロッシュ著、秋草俊一郎・奥彩子・桐山 大介・小松真帆・平塚 隼介・山辺 弦訳『世界文学とは何か?』(国書刊行会、2011、46頁)。
16. ディクソン著『完全教育之要性』(出版社・年不明、国会図書館所蔵)。
17. ドナルド・キーン「日本古典文学の翻訳について」(『国際日本文学研究集会会議録6』、国文学研究資料館、1983年)。
18. パスカル・カザノヴァ著・岩切正一郎訳『世界文学空間—文学資本と文学革命』(藤原書店、2002年)。
19. プラダン・ゴウランガ・チャラン「『方丈記』の受容: 夏目漱石の『英訳方丈記』をめぐって」(研大文化科学研究(13)、2017年)。
20. ボーダッシュ・マイケル「夏目漱石の「世界文学」: 英語圏から『文学論』を読み直す」(文学13(3)、2012年、2-16頁)。
21. マイケル・エメリック「日本文学の発見—和文英訳黎明期に関する試論」(『日本文学の翻訳と流通』勉誠出版、2018年、9-30頁)。
22. レイモンド・ウィリアムズ著・山本和平[ほか]訳『田舎と都会』(晶文社、1985、27-68頁)。
23. 三木紀人『閑居の人 鴨長明』(新典社、2001年)。
24. 上田胤比古注・今泉定助関『方丈記: 訂正標註』(誠之堂、1892年)。
25. 上野景福「ディクソン伝の補遺」(『大村善吉教授退官記念論文集』、吾妻書房、1982年)。

26. 下西善三郎「『方丈記』ノート：或は鴨長明における背理の構造について」（金沢大学語学・文学研究 6、1975年、24-33頁）。
27. 下西善三郎「古典文学の受容における漱石・龍之介の位置」（『上越教育大学研究紀要』第23巻第2号、2004年、856-843頁）。
28. 下西善三郎「夏目権之助の英訳『方丈記』に使用せる本文—漱石と方丈記（二）」（『深井一郎教授退官記念論文集』、1990年）。
29. 下西善三郎「漱石「方丈記小論」私注（一）」（『日本語と日本文学 20』、1994年、1-11頁）。
30. 下西善三郎「漱石「方丈記小論」私注（三）」（『上越教育大学研究紀要 13（2）』、1994年、243-253頁）。
31. 下西善三郎「漱石「方丈記小論」私注（四）」（『上越教育大学国語研究 8』、1994年、1-14頁）。
32. 下西善三郎「漱石と『方丈記』」（『金沢大学国語国文』21、1983年、80-92頁）。
33. 丸岡桂・松下大三郎 共編『国文大観 第9巻 日記草子部』（明文社、1909年）。
34. 久保田淳・大島貴子、藤原澄子・松尾葦江校注『今物語・隆房集・東斎随筆（中世の文学）』（三弥井書店、1996年）。
35. 亀井俊介『英文学者夏目漱石』（松柏社、2011年）。
36. 五味文彦『鴨長明伝』（山川出版社、2013年）。
37. 今成元昭「蓮胤方丈記の論」（『文学 42(2)』、1974年、1-13頁）。
38. 今成元昭『方丈記』と仏教思想（笠間書院、2005年）。
39. 今村みよこ「略本・流布本『方丈記』をめぐって—一条兼良のこと、及び享受史のことなど」（『飯山論叢 14(2)』、1997年、169-146頁）。
40. 今西順吉『漱石文学の思想 第一部』（筑摩書房、1888年）。
41. 伊村元道「〔漱石の青春（8）〕 J.M. Dixon と A. Wood」（『英語教育（XXVII-9）』、1978年）。
42. 伊東未学編『南加学窓』（南加大学日本人学生会発行、1919年5月）。
43. 伊波美の里「英訳 方丈記の比較「心情語」を中心に」（『語文論叢(30)』、2015年、1-17頁）。
44. 伊藤鉄也『日本古典文学翻訳事典〈平安外語編〉2』（人間文化研究機構国文学研究資料館、2013-2016）。
45. 伊藤鉄也 編『日本古典文学翻訳事典 1（英語改訂編）』（人間文化研究機構国文学研究資料館、2014.3.）。
46. 佐伯 真一『平家物語遡源』（中世文学研究叢書、1996年）。
47. 佐伯彰一・鹿野政直監修『日本人の自伝 13(南方熊楠・柳田国男)』（平凡社、1981年）。
48. 佐佐木信綱註『校注方丈記』（東京堂書房、1892年）。
49. 佐竹昭広・久保田淳校注『方丈記 徒然草』（新日本古典文学大系 39、岩波書店、1989年）。
50. 佐藤美希「雑誌『英語青年』に見られる明治・大正の英文学翻訳規範」（『Savage : 北海道大学大学院国際広報メディア研究科院生論集』、2007年、48-59頁）。
51. 前芝憲一「『犬方丈記』の成立」（『日本文芸学（23）』、1986年）。
52. 加茂章「決定論を超える漱石：スペンサー・ジェームス受容の背後にあるもの」（『日本文学 33(3)』、1984年、1-12頁）。
53. 加藤二郎「漱石と漢文学(田中唯教授退官記念号)」（『外国文学(28)』、1980年、1-16頁）。
54. 千原英喜『混声合唱とピアノのための 方丈記/小倉百人一首より 歌垣』（全音楽譜出版社、2009年）。
55. 千本英史「鴨長明と『方丈記』」（『熊楠 Works（41）』、2013年）。
56. 千本英史「自筆資料に見る南方熊楠 11「方丈記」英訳草稿」（『熊楠 Works（40）1』、2012年）。

57. 南方熊楠(著), 土宜 法竜(著), 飯倉 照平(編集), 『南方熊楠・土宜法竜往復書簡』(八坂書房 1990年)。
58. 南方熊楠(著)『南方熊楠日記2』(八坂書房、1987年)。
59. 古山省吾編『両羽之現代人』(両羽研究社、1919年)。
60. 名取多嘉雄「東京女学館教頭エレン・マクレー」(『英学史研究(16)』、1983年、63-75頁)。
61. 和田茂樹編『漱石・子規往復書簡集』(岩波文庫、2002年)。
62. 坂本文利「『方丈記』序段の英訳についての一考察—漱石・熊楠・キーン 比較の試み—」(『大分大学 国語の研究28』、2002年、21-30頁)。
63. 塚本利明「漱石とカーライル--「カーライル博物館」を中心に」(『専修人文論集(67)』、2000年、41-75頁)。
64. 塚本利明・久泉 伸世著「James Main Dixon 伝補遺」(『比較文学(32)』、1989年、89-123頁)。
65. 塚本利明『漱石と英国—留学体験と創作との間』(彩流社; 増補版、1987年)。
66. 塚本利明『漱石と英文学2』(彩流社、2018年)。
67. 増田裕美子「夏目漱石と『方丈記』」(磯水絵編『今日是一日、方丈記』(新典社、2013年)。
68. 増田裕美子『漱石のヒロインたち—古典から読む』(新曜社、2017年)。
69. 夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」(『漱石全集 第26巻』、岩波書店、1996年、124-146頁)。
70. 夏目漱石「文学評論」(『漱石全集 第15巻』、岩波書店、1995年、420頁)。
71. 夏目漱石「文学評論」(『漱石全集 第15巻』、岩波書店、1995年、57頁)。
72. 夏目漱石「文学論」(『漱石全集 第14巻』、岩波書店、1995年、32-34頁)。
73. 夏目漱石「余が文章裨益せし書籍」(『漱石全集 第25巻』、明治三十九年三月十五日『文章世界、1巻1号』、157頁)。
74. 夏目漱石「ヤングに贈りたる『吾輩ハ猫デアル』献辞」(『漱石全集、第26巻』、岩波書店 1996年、284頁)。
75. 夏目漱石「正岡子規宛て〔「筆まかせ」より〕」(『漱石全集 第22巻』、岩波書店、1996年、21-24頁)。
76. 夏目漱石『私の個人主義』(『夏目漱石全集』岩波書店、第11巻、1996年)。
77. 夏目漱石「坪内逍遙と『ハムレット』」(朝日新聞朝刊、1911年6月5日)。
78. 大村善吉、高梨佳吉、出来成訓編『英語教育史資料 第5巻』(東京法令、1980年)。
79. 大村善吉著『斎藤秀三郎伝-その生涯と業績』(吾妻書房、1960年)。
80. 奥田勲・堀切実・表章・復本一郎『連歌論集・能楽論集・俳論集』(新編日本古典文学全集 88、小学館、2001年)。
81. 小宮豊隆「解説」(『漱石全集 第十四巻』、漱石全集刊行会、昭和十一年九月十日、891-892頁)。
82. 小宮豊隆「發句翻譯の可能性」(『文藝春秋』、1933年)。
83. 小宮豊隆『夏目漱石』(岩波書店、1938年)。
84. 小川寿一「方丈記書史」(吉沢、義則、『方丈記諸抄大成: 諸本校異』、巻末附録、1934年、1-52頁)。
85. 小川寿一「附録: 刊本方丈記書史」(吉沢義則撰『本文校異方丈記諸抄大成』、立命館出版部 1933年)。
86. 小森陽一「文学と科学の間で: 『文学論』における言語観(特集 漱石『文学論』をひらく)」(文学13(3)、2012年)。
87. 小橋 孝子「カーライル博物館」考: 漱石とカーライル(『国語と国文学 92(8)』、2015年、38-54頁)。
88. 小泉 博一「熊楠の英訳『方丈記』の草稿」(『熊楠研究(4)』、2002年、8-21頁)。

89. 小泉 博一「翻訳・ディキンズ・『方丈記』(特集:南方熊楠--ナチュラルヒストリーの文体)」(『国文学 解釈と教材の研究 50(8)』、2005年、40-46頁)。
90. 小澤・土橋・鈴木・梅津著「ジェイムズ・メイン・ディクソン」(『近代文学研究叢書』第三十五巻、1972年)。
91. 山下宏明著『平家物語の成立』(名古屋大学出版会、1993年)。
92. 山縣五十雄「ジェイムズ・メイン・ディクソン」(『学苑 169』、1954年11月号)。
93. 岡倉由三郎「Prof. J. M. Dixonの事ごと」(『語青年 第70巻第5号』、1933年12月1日)。
94. 岡山高博「方丈記の草庵生活における美文の意義:「心澄む」に関連して」(『あいち国文(9)』、2015年)。
95. 岩佐美代子著『文机談:全注釈』(笠間書院、2007年)。
96. 島内景二著『文豪の古典力:漱石・鷗外は源氏を読んだか』(文春新書、2002年)。
97. 島内裕子「『方丈記諺解』の注釈態度」(『放送大学研究年報 35』、2018年)。
98. 島田厚「漱石の思想」(『日本文学研究叢書・夏目漱石』、有精堂出版、1970年、113-115頁)。
99. 川平敏文「鴨長明の儒風一方丈記受容史覚書」(荒木浩編『中世の随筆 成立・展開と文体』、竹林舎、2014年、499-516頁)。
100. 市河三喜「Dixon教授を偲びて」(『英語青年 第70巻第5号』、1933年12月1日)。
101. 市河三喜編『岡倉先生 記念論文集』(岡倉先生還暦祝賀、1928年)。
102. 帆足理一郎編『南加学窓 第1巻』(『南加大学日本人学生会』、1912年)。
103. 幣原道太郎の「方丈記の欧訳」(駒澤大学文学部研究紀要、19、1961年、1-22頁)。
104. 平川 祐弘『夏目漱石—非西洋の苦闘』(講談社学術文庫(995)、1991年)。
105. 新聞 一美「方丈記と白居易:隠遁と住居の表現について」(『白居易研究年報(14)』、2013年、133-166頁)。
106. 新聞水緒「『方丈記』の序章について:『文選』「歎逝賦」注文との関係から」(『国文学研究資料館紀要・文学研究篇(40)』、2014年、53-80頁)。
107. 末岡暁美「ニューヨークで活躍した高柳陶造」(『本村製菓文庫 1 幕末明治肥前こぼれ話』、本村製菓、2011年)。
108. 末岡暁美「幕末維新さがんもの高柳陶造」(『佐賀新聞』、2010年10月31日号)。
109. 末岡暁美「言葉の壁を乗り越えた藤画像と高柳陶蔵」(『本村製菓文庫 2 幕末明治肥前こぼれ話』、本村製菓、2013年)。
110. 末木文美士著『草木成仏の思想-安然と日本人の自然観』(サンガー出版、2015年)。
111. 朴 炳道「近世災害における「世なおし」の呪文と「泥の海」の終末:1662年の京都大地震と『かなめいし』」(『東京大学宗教学年報(33)』、2015年)。
112. 東京女学館百年史編集室編『東京女学館百年史』(学校法人 東京女学館、1991年)。
113. 松居竜五「第20回『熊楠をもっと知ろう!!』シリーズ F・V・ディキンズ、熊楠間の交流と英訳『方丈記』の執筆」(『熊楠 works(41)』、2013年)。
114. 松居竜五「南方熊楠と『方丈記』:ディキンズとの共訳をめぐる」(特集 方丈記 800年『文学 13(2)』、2012年、77-93頁)。
115. 松岡信哉「英語訳『方丈記』比較研究:比喩表現と話法の問題について」(『龍谷大学大学院研究紀要、人文科学 19』、1998年、51-62頁)。
116. 松本憲至「夏目漱石英訳『方丈記』をめぐる-漱石と長明」(『二松学舎大学大学院 文学研究科 大学院紀要第13集』、1999年、A1-26頁)。
117. 松田福松「斎藤秀三郎先生略伝」(『英語青年 Saito Number』、1930年)。
118. 桜井錠二「東京女学館の今昔」(『思出の数々』九和会、1940年)。
119. 森川隆司「英訳方丈記—漱石、ディクソン、そして熊楠」(『工学院大学共通課程研究論叢(30)』、1992年、125-136頁)。

120. 森川隆司『漱石の学生時代の英作文三点—幕末明治英学史論集』（近代文芸社、1993年）。
121. 森陽一『漱石を読みなおす』（ちくま新書、1995年）。
122. 武田信賢・関根正直『方丈記：新注』（吉川半七、1891年）。
123. 水川隆夫『漱石の京都』（平凡社、2001年）。
124. 永井太三郎「故 Dixon 博士の思出」（『英語青年 第70巻第5号、1933年12月1日）。
125. 江藤淳『漱石とその時代・第1部』（新潮社、1970年、209頁）。
126. 河合祥一朗「シェイクスピア翻訳史の端緒と現在-漱石の逍遥批判をめぐって」（『国文学-解釈と教材の研究(53)7』、2008年、24-32頁）。
127. 河村ハツエ『F.V.ディキンズ—日本文学英訳の先駆者—』（七月堂、1997年）。
128. 泉健「『Ost=Asien』研究：その3.人名注解;日本人編」（『和歌山大学教育学部紀要.人文科学54』、2004年、43-79頁）。
129. 浅井了意『かなめいし』（井上和人校注・訳『新編日本古典文学全集 64 仮名草子集』、小学館、1999年）。
130. 浅見和彦『十訓抄』（新編日本古典文学全集 51、小学館、1997）。
131. 清水茂「漱石と漢文学」（『国文学 解釈と教材の研究 24(6)』、1979年、39-45頁）。
132. 田云明「『方丈記』における「閑居」と浄土」（『和漢比較文学 (49)』、2012年、36-52頁）。
133. 矢口徹也著『女子補導団：日本のガールスカウト前史』（成文堂、2008年）。
134. 矢部義之「語発想法の比較研究：ドナルド・キーンと郡山直による方丈記の英訳に関して」（『亜細亜大学教養部紀要 5』、1970年、112-93頁）。
135. 石井 和夫「漱石とカーライル(<特集>疋田啓佑教授退職記念)」（『香椎潟 49』、2003年、205-212頁）。
136. 磯辺弥一郎編「Biography」（『中外英字新聞研究録』 第1巻 第5号、1895年）。
137. 福田秀一「欧米の日本文学研究管見」（外国人の日本文学研究<特集>）（文学・語学 (87)、1980年、17-27頁）。
138. 福田秀一「米国における日本中世文学の研究と紹介」（国文学研究資料館紀要(11)、1985年、171-194頁）。
139. 稲賀繁美「いま〈政界文学〉は可能か?—「全球化」のなかで二十一世紀の比較文学の現在を問う—」（『比較文学研究』92号、2008年、104-121頁）。
140. 稲賀繁美「文化の翻訳性序説：造形藝術における」（『「美術」概念の再構築：「分類の時代」の終わりに』ブリュッケ、2017年）。
141. 稲賀繁美「翻訳はいかに骨折するか、あるいは骨折をどう翻訳するか-日本詩歌・藝術の非線状的説話構造の欧米言語における受容をめぐる設問」（大手前大学比較文化研究叢書 8 川本皓嗣、上垣外憲一編『比較詩学と文化の翻訳』2012年6月30日）。
142. 竹中 龍範「J. M. Dixon の英熟語辞典をめぐって」（英学史研究 (40)、2007）。
143. 竹中嘉章「読者より 南方熊楠の英訳『方丈記』について」（熊楠 Works 、33〈44〉2009年）。
144. 築瀬一雄『方丈記全注釈』（角川書店、1971年）。
145. 築瀬一雄『方丈記解釈大成』（大修館書店、1972年）。
146. 築瀬一雄『方丈記諸注集成』（豊島書房、1969年）。
147. 継芬「漱石作品が漢文学から受けた影響」（『九州看護福祉大学紀要 14(1)』、2014年、3-13頁）。
148. 美濃部重克『閑居友』（三弥井書店、1974年）。
149. 荒このみ「ディクソンの辞書(荒正人氏追悼)」（『英語青年 125(7)』、1979年、299-300頁）。
150. 荒木浩「『方丈記』と『徒然草』—〈わたし〉と〈心〉の中世散文史—」（『中世の随筆—成立・展開と文体—』竹林舎、2014年）。

151. 荒木浩「禅の本としての『方丈記』—『流水抄』と漱石・子規往復書簡から見えること—」
（天野文雄監修『禅からみた日本中世の文化と社会』、ペリかん社、2016年）。
152. 荒正人『漱石研究年表』（集英社版『漱石文学全集・別巻』、1974年）。
153. 落合直文・その他校訂『日本文学全書 第2編（土佐日記 枕草子 更科日記 方丈記）』
（博文館、1892年）。
154. 藤津滋生「外国語による日本研究文献の書誌学的研究」（日本研究：国際日本文化研究センター紀要、第10巻、1994、403-418頁）。
155. 西尾実校注『日本古典文学大系 30』（岩波書店、1971年）。
156. 酒本雅之訳『エマソン論文集 上巻 自然他 6篇 略年譜』（岩波書店〈岩波文庫〉1972年）。
157. 重松 泰雄「文科大学時代--その希求と煩悶と（夏目漱石伝--作品への通路<特集>）」（『国文学解釈と教材の研究 34(5)』、1989年、44-50頁）。
158. 野々口精一「英譯せられたる方丈記」（國學院雑誌 17(11)(205)、1911年11月号、74-78頁）。
159. 野網摩利子「「情緒」による文学生成：「彼岸過迄」の彼岸と此岸（特集 漱石『文学論』をひらく）」（文学 13(3)、2012年、56-70頁）。
160. 野網摩利子「本を楽しむ思想との交信:漱石文学のありか(上)」（書物学 12、2018年）。
161. 金子直一「日本古典文学の外国語訳について—具体例として『方丈記』の場合」（金沢大学文学部文学科、1982年3月）。
162. 金子良子「鴨長明遁世の一考察--『文机談』と『源家長日記』を中心として」（『法政大学国文学会 日本文学誌要 (82)』、2010年、27-37頁）。
163. 鈴木貞美『鴨長明 一自由のこころ』（筑摩書房、1187、2016年）。
164. 鈴鹿三七「外国語譯方丈記考」（鴨長明研究、2-3合併号、1933年、14-15頁）。
165. 青木玲子『広本・略本 方丈記総索引』（武蔵野書院、1965年）。
166. 飛ヶ谷 美穂子「漱石文庫のメレディス（二）」（『三田國文 (14)』、1991年、50-56頁）。
167. 飯田実訳『森の生活 ウォールデン』（上・下）、（岩波文庫、1995年）
168. 養老孟司・隈研吾共著『日本人はどう住まうべきか?』（日経 BP 社、2012年）。
169. 高杉一郎「日本古典文学の外国語訳について」（文学 48(11)、1980年、158-167頁）
170. 高橋修『明治の翻訳ディスクール—坪内逍遙・森田思軒・若松賤子』（ひつじ研究叢書（文学編）7、2015年）。
171. 高橋正雄「夏目漱石の原・天才論：『漱石全集第21巻・ノート』の「Genius」」（『日本病跡学雑誌 -(82)』、2011年、87-90頁）。
172. 高橋正雄「漱石蔵書中の精神医学書--ロンブローゾの『The Man of Genius』」（『日本病跡学雑誌(80)』、2010年、77-80頁）。
173. 高橋正雄『漱石文学が物語るもの—神経衰弱者への畏敬と癒し』（みすず書房、2009年）。

その他の言語の参考文献

1. "Advertisement and Notices." *Pall Mall Gazette*, Monday 09 November 1896, p.4.
2. "Advertisement." *Morning Post*, Friday 16 October 1896, p. 2.
3. "Books of the Day." *The Standard*, August 29, 1899.
4. "Books on Japan." *Dundee Courier*, October 19, 1912, p.6.
5. "Dixon, James Main" *Who was who in America*, Vol. 1. Marquis, 1968.
6. "Free Public Library." *The daily morning journal and courier*, March 23, 1896, p. 2.
7. "From Japan." *Bradley, His Book*, Vol. 1, No. 2, Jun., 1896.
8. "Gift Book Suppliment." *Pall Mall Gazette*, November 29, 1912.
9. "Historical Sketch and Catalogue of the Exhibits: Burns Cottage Association." Louisiana Purchase Exhibition, Saint Louis, 1904.
10. "In Old Japan: Mythology of the Orient." *Sheffield Daily Telegraph*, December 12, 1912.
11. "Literary Notes." *Richmond dispatch*, February 16, 1896, p. 4.
12. "Literary Notes." *Richmond dispatch*, February 16, 1896.

13. "Literary Notes." *The San Francisco call*, February 23, 1896, p. 21,
14. "Minutes of Meetings (Meeting of February 10th, 1892)." *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol.20, Yokohama, R. Meiklejohn, 1892.
15. "New Publication." *Evening star*, July 25, 1896, p. 21.
16. "New Publications." *The Indianapolis journal*, April 06, 1896, p. 3.
17. "New Publications" *New-York tribune*, March 07, 1896, p. 8.
18. "New Publications" *New-York tribune*, March 14, 1896, p. 8.
19. "Poetry of Scot Fascinating." *The San Francisco call*, July 10, 1905.
20. "Poetry." *Aberdeen Press and Journal*, June 05, 1907.
21. "Prof. Dixon Leaves Washington University" *Morning Oregonian*. (Portland, Or.) September 8, 1903.
22. "Report of the Royal Commissioners Appointed to Inquire into the Universities of Scotland with evidence and appendix, Vol 1." Murray and Gibb, Edinburgh, 1878.
23. "Reports from Commissioners, Vol. XVII, Ecclesiastical; Church Estates; Endowed Schools and Hospitals (Scotland) 1874." London, George E. Eyre and William Spottiswoode, 1874.
24. "Reviews." *Pall Mall Gazette*, Wednesday 18 November 1896, p.9.
25. "School Inquiry Commission, Vol. VI. General Reports of Assistant Commissioners, Burgh Schools in Scotland and Secondary Education in Foreign Counties." London, George E. Eyre and William Spottiswoode, 1868.
26. "Sunrise Stories." *The sun*, March 07, 1896, p.7.
27. "Sunrise Stories: A Glance at the Literature of Japan." *Pall Mall Gazette*, November 18, 1896.
28. "Sunrise Stories: A Glance at the Literature of Japan." *Pall Mall Gazette*, November 09, 1896.
29. "The "Charles Lamb" Fellowship of book lovers, Clifton." *The Western Daily Press*, Bristol, Oct 23, 1909.
30. "*The Athenaeum- Journal of the Literature, Science, The Fine Arts, Music, and the Drama*, No. 3610, Jan. 2. 1897." London, January-June, 1897.
31. "*The Bookman - A Review of Books and Life*, Vol. LIV, Sep, 1921 - Feb 1922." George H Doran, 1922.
32. "The Japanese Romance." *The Saturday Review of politics, literature, science, and art*, No. 1,388, Vol. 53, June 3, 1882, London, Published at the Office, Southampton Street, Strand, 1882.
33. "The Literature of Japan." *St James's Gazette*, Friday 22 January 1897, p.12.
34. "*The St. Andrews University Calendar for the year 1891-92*." Print and Published for the Senatus Academicus, William Blackwood and Sons, Edinburgh, 1891.
35. "The Tokyo Ladies Institute." *The Japan Weekly Mail*, April, 7, 1888.
36. "U.S.C. Opening." *Los Angeles Herald*, August 31, 1905.
37. "University of London." *The Standard*, Mayr 15, 1862.
38. "Yesterday's New Books." *London Evening Standard*, Friday 16 October 1896, p.3.
39. Albright, Daniel, "Pound, Yeats and the Noh Theatre." *The Iowa Review*, vol. 15, no.2, 1985.
40. Ascitutto, Nicoleta. "A Japan of the Mind: Basil Bunting's Modernist Adaptation of Chomei's "Hōjōki." *Postgraduate English*, Issue 25, Durham University, Sep, 2012, pp. 1-15.
41. Aston, W. G.. *A History of Japanese Literature*. London: William Heinemann, 1898.
42. Auslin Michel R. *Japan Society, Celebrating a Century, 1907-2007* (revised and updated from the original by Edwin O. Reischauer.). Japan Society Inc, 2007.
43. Barnstone, Willis. *The poetics of Translation: History, Theory, Practice*. London: Yale Univ. Press, 1993.
44. Barthes, Roland. "Death of the Author." *Image-Music-Text*, Tr. Stephen Heath, New York: Hill and Wang, 1977.
45. Bayard Taylor. *Japan, In Our Day: Illustrated Library of Travel, Exploration, and Adventure*. New York: Charles Scribner & Co.. 1872. 280 p.
46. Bickersteth, Samuel. *Life and letters of Edward Bickersteth, Bishop of South Tokyo*. London: Sampson Low, Marston, 1899.
47. C. D. Waterston & A. Macmillan Shearer. "Biographical Index of Former Fellows of the Royal Society of Edinburgh 1783 - 2002, Part 1, A-J." The Royal Society of Edinburgh, 2006.
48. Chakrabarti, Mohit. *Fire Sans Ire: A Critical Study of Gandhian Non-violence*. Concept Publishing Company, 2005, pp. 128-132.

49. Chamberlain, Bail Hall. "Bashō and the Japanese Poetical Epigram, Vol.30, Part. 2." *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, 1902.
50. Chamberlain, Bail Hall. *Things Japanese - Being Notes Various Subjects Connected with Japan for the use of travellers and others*. Kelly and Walsh Limited, Yokohama, 1890.
51. *Chambers's Encyclopaedia - A Dictionary of Universal Knowledge*, New Edition, Vol.6. London: William and Robert Chambers Limited, 1890.
52. Chesterman Andrew. *Memes of Translation: The spread of ideas in translation theory*. Revised edition. John Benjamins Publishing Company, 2016.
53. Clements, Rebekah. "Suematsu Kenchō and the first English translation of Genji monogatari: translation, tactics, and the 'women's question.'" *Japan Forum*, 23:1, 2011, pp. 25-47.
54. Damrosch, David. "Antiquity." In *A New Vocabulary for Global Modernism*. Columbia University Press, 2016, pp. 43-58.
55. David Aers, Jonathan Cook, David Punter. *Romanticism and Ideology: Studies in English Writing 1765-1830*. Routledge, 2016.
56. Davis, F Hadland. "Ancient China and the Elixir of Life". *The Theosophist*, Vol. Xxxvi, No. 7, Theosophical Publishing House, Madras, 1915.
57. Davis, F Hadland. "Lafcadio Hearn." *The Theosophist*, Vol. Xxxviii Part I, Oct, 1916- March, Theosophical Publishing House, Madras, 1917.
58. Davis, F Hadland. "The Return of Yone Noguchi." *T. P. 's Weekly*, January 2, 1914.
59. Davis, F Hadland. "The Street of the Geisha, p. 633-645)." *The Theosophist*, Vol. Xxxvi No. 7, Theosophical Publishing House, Madras, 1915.
60. Davis, F Hadland. *The Yellow Spring and other Japanese stories*. London: Herbert & Daniel, 1910.
61. Davis, F. Hadland. *Myths and Legends of Japan*. George G. Harrap & Company, London, 1912.
62. De Gruchy, John Walter. *Orienting Arthur Waley: Japonism, Orientalism, and the Creation of Japanese Literature in English*. University of Hawai'i Press, 2003, 205 p..
63. Dickins, F. Victor. *HŌ-JŌ- KI (Notes from a Ten Feet Square Hut)*. Tokyo: San Kaku Sha, 1933.
64. Dickins, F. Victor. *HŌ-JŌ- KI (Notes from a Ten Feet Square Hut)*. London: Gowans and Gray, 1907.
65. Dixon, James, Main Tr. "On Corvus Jaononensis Bonaparte and its connection with the Corvus Corax L." *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol.12, Part. 3, Yokohama, R. Meiklejohn, 1884.
66. Dixon, James, Main. "Rays from the Den." *The West Coast Magazine*, The Grafton Publishing Company, Oct.1911.
67. Dixon, James. Main. "Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel," "A Description of My Hut," *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol. 20-2, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., 1893.
68. Downs, Winfield Scott (Ed.). *Encyclopedia of American biography: New series*. New York, American Historical Society Volume.4, 1934.
69. Eby, Charles S. "Meditations of a Recluse: A Translation of Tsuredzure Gusa". *The Chrysanthemum*, Vol.3, 1883.
70. Eby, Charles S., Ewing, J.A., Dixon, J.M. (Ed.). *Christianity and Humanity: A Course of Lectures delivered in Meiji Kuaido Tokio, Japan*. Yokohama: R. Meiklejohn & Co., 1883.
71. Ed. Harper, Thomas. Shinare, Haruo. *Reading the Tale of Genji: Sources from the First Millennium*. Columbia University Press, 2015, 632 p.
72. Ed. Venuti, Lawrence. *Rethinking translation: discourse, subjectivity, ideology*. (Routledge, 1992, p. 7).
73. Emerson Ralph Waldo. *Journals of Ralph Waldo Emerson, 1820-1824, Vol.1-10*. Cambridge, Mass.: Houghton Mifflin, The Harvard Classics, 1909-14.
74. Emerson Ralph Waldo. "First Visit to England (1856)." *English Traits*, Cambridge, Mass.: Houghton Mifflin, The Harvard Classics, 1909-14.
75. Emmerich, Michael. *The Tale of Genji: Translation, Canonization, and World Literature*. Columbia University Press, 2013, 512 p.
76. Evett, Elisa. *The critical reception of Japanese art in late nineteenth century Europe*. UMI Books on Demand, 1982, p. xiii.
77. Fr. Von Wenckstern. *A Bibliography of the Japanese Empire, Being a classified list of all Books, Essays and Maps in European languages relating to Dai Nihon*, Vol. 1-2. Leiden: E. J. Brill, 1895.
78. George Ripley and Charles A. Dana (Ed.). *The American Cyclopaedia: A Popular Dictionary of General Knowledge*, Vol 9, Revised 2nd Ed., D Appleton and Company, New York, 1874.

79. Greenblatt, S. "The Touch of the Real." *Representation*, Vol. 59, Special Issue, *The Fate of the Culture*, ed. by Greertz and Beyod (Summer 1997, 14-29).
80. Harper, Franklin (Ed.). *Who's who on the Pacific Coast*. Harper Publishing, LA, 1913.
81. *Hartlepool Northern Daily Mail*, February 19, 1913.
82. Hattori, Ichizo, "Destructive Earthquakes in Japan." *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol.6. Part.2, 1878.
83. Hayashi, Nozomu and Kornicki, Peter (Ed.). *Early Japanese Books in Cambridge University Library: A Catalogue of the Aston, Satow and von Siebold Collections*. Cambridge University Press, 1991.
84. Haynes, Annabel Stella. "Making Beauty: Basil Bunting and the Work of Poetry." Durham theses, Durham University. (2015) Available at Durham E-Theses Online: <http://etheses.dur.ac.uk/11179/>.
85. Hearn, Lafcadio, "My First Day in the Orient." *Glimpses of Unfamiliar Japan*, Volume 1, Houghton, Mifflin, 1895.
86. Henitiuk, Valerie. "Squeezing the Jellyfish: Early Western Attempts to Characterize Translation from the Japanese." St-André, James, ed. *Thinking through Translation with Metaphors*, Manchester: St Jerome, 2010.
87. Higgins, David. *Romantic Genius and the Literary Magazine: Biography, Celebrity, Politics*. Routledge, 2007.
88. Holub, Robert C.. *Reception Theory*. Routledge, 2013.
89. Hora, Karel Jan. "Notes on Kamo Chōmei's Life and Works." "Kamo Chōmei's "Nameless Selection (無名抄)." *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol. 34, Part1/4, 1906.
90. Houwen, Andrew. "Thinking by Images: Kamo no Chōmei's Hōjōki and Basil Bunting's *Chomei at Toyama*." *Translation and Literature*, 25, 2016.
91. Ian Jack, "Rabindranath Tagore was a global phenomenon, so why is he neglected?." *The Guardian*, Poetry Opinion Sat, 7 May 2011.
92. *Inscribed Books from the Library Collected by James Carleton Young*, Part 2. The Anderson Galleries, Inc., New York, Nov. 1916.
93. Itchikawa Daiji. *Eine kleine Huette (Hōjōki), Lebensanschauung von Kamo no Chōmei*. Berlin C. A. Schwetschke und Sohn, 1902.
94. *Japanese literature in European languages: a bibliography*. Japan P.E.N. Club, Tokyo, 1961, 98 p.
95. Jauss, Hans Robert, tr. T. Bahti. *Towards an Aesthetic of Reception*. Minneapolis, 1982.
96. Kato Daniela and Bruce Allen. "Toward an Ecocritical Approach to Translation: A Conceptual Framework." *The 2014-2015 Report on the State of the Discipline of Comparative Literature*, 2014.
97. Klein, Ken. "The Early Development of East Asian Studies in Southern California." *Journal of East Asian Libraries*, No. 101, Article 17, 1993.
98. Knox, G.W. "A Japanese Philosopher." *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol. XX, Yokohama: R. Meiklejohn & Co, 1893.
99. Knox, G.W. *Japanese Life in Town and Country*. G. P. Putnam's Sons, New York and London, 1904.
100. Knox, G.W. *The Development of Religion in Japan*. G. P. Putnam's Sons, New York and London, 1907.
101. Makin, Peter. *Bunting-The Shaping of his Verse*. Oxford: Clarendon Press, 1992.
102. Mandela, N. *Long walk to freedom: the autobiography of Nelson Mandela*. Boston: Little, Brown, 1994.
103. McAdams, Elizabeth Sara. "Turning Japanese: Japonisme in Victorian Literature and Culture." Ph. D. Dissertation, University of Michigan, 2016, <https://deepblue.lib.umich.edu/handle/2027.42/120762>, accessed on Sep 3rd 2018.
104. Minakata Kumagusu and F. Victor Dickins. "Hōjōki – A Japanese Thoreau of the Twelfth Century." *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. Apr. 1905.
105. Mishra, Pankaj and Moser, Benjamin. "Can Writers Still 'Make It New?.'" *New York Times*, Bookends, Dec. 30, 2014. accessed on May 16 2018.
106. Moretti, Franco. *Signs Taken for Wonders: On the Sociology of Literary Forms*. Verso, 1988, p. 25.
107. Murasaki Shikibu, tr. By Suyematz Kenchio. *Genji Monogatari: The Most Celebrated of the Classical Japanese Romances*. London Trubner & Co. Ludgate Hill, 1882.
108. Murray, Gilbert. *A History of Ancient Greek Literature*. New York: D. Appleton, 1897.
109. Nakatsu Hikoichi (Ed.). *The Berkeley lyceum/Bākūrē gakusō*, V.4-5(1911-1913). Berkeley: Kashū Daigaku Nihonjin Gakusei Kurabu.

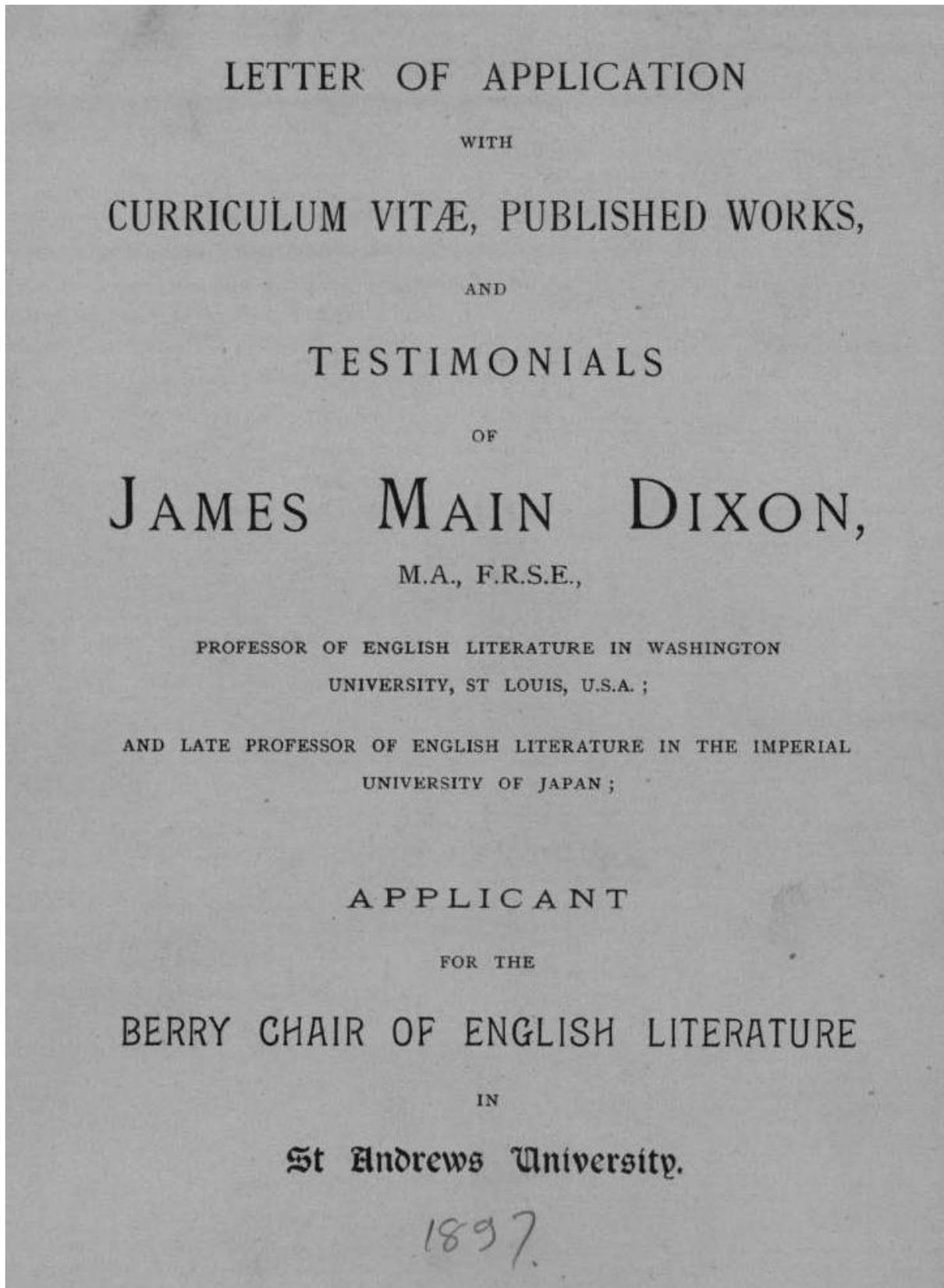
110. *New International Encyclopaedia*, Volume 3. New York: Dodd, Mead and Co., 1906.
111. Noguchi, Yonejiro. "A Proposal to American Poets." *Reader* 3:3, Feb. 1904.
112. Noguchi, Yonejiro. "What Is a Hokku Poem?." *Rhythm*, 11, 1913.
113. Noguchi, Yonejiro. *The Spirit of Japanese Poetry*. London, J Murray, 1914.
114. Noguchi, Yonejiro. *Yone Noguchi Collected English Letters*. Yone Noguchi Society, 1975, pp. 388-389.
115. OED Online. July 2018. Oxford University Press.
<http://www.oed.com/viewdictionaryentry/Entry/11125> (accessed October 16, 2018).
116. Okito, Toyoda. "Kamo no Chōmei's Hōjōki as Nature Writing' (環境文学としての「方丈記」)." *The Journal of Environmental and Information Studies Musashi Institute of Technology*, Vol.5, 2004.
117. Peter Kornicki. *Collected Works of F. V. Dickins*, Vol.1. Ganesha Publishing, Edition Synapse, 1999.
118. Pound, Ezra. *Make it New – Essays*. London: Faber and Faber, 1934.
119. Price, Carl Fowler (Ed.). *Who's who in American Methodism*. E. B. Treat, 1916.
120. Rachel Mairs. *From Khartoum to Jerusalem: The Dragoman Solomon Negima and his Clients (1885–1933)*. Bloomsbury Publishing, 2016.
121. Reviewed by Schlegel. G. "A History of Japanese Literature by W.G. Aston, C.M.G. D.Litt. Late Japanese Secretary to H.M. Legation, Tokio, London, William Heinemann, 1899." *T'oung Pao, International Journal of Chinese Studies*, Vol. 10, Part. 2, Leiden, Brill, 1899, PP. 230-233.
122. Riordan, Roger, Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896.
123. Rogers, Gayle. "Translation." In *A New Vocabulary for Global Modernism*. Edited Eric Hayot and Rebecca Walkowitz. Columbia UP, 2016, pp. 248-259.
124. Rooke, Deborah W. "The King James Bible: Messianic Meditations." *The King James Version at 400: Assessing Its Genius as Bible Translation and Its Literary Influence*, Society of Biblical Lit, 2013.
125. Rosenblitt, J. Alison. E. E. *Cummings' Modernism and the Classics: Each Imperishable Stanza*. Oxford University Press, 2016.
126. Sanehide, Kodama(Ed.). *Ezra Pound and Japan: Letters and Essays*. Redding Ridge, Conn., 1987.
127. Sato Emiko. "Metaphors and Translation Prisms." *Theory and Practice in Language Studies*, November 2015.
128. Share, Don (Ed.). *The Poems of Basil Bunting*. Faber and Faber, 2016.
129. *Southern California Daily Trojan*, Vol. XXV, No.5." Los Angeles, California, Tuesday, September 28, 1933.
130. Toury, Gideon. "The Nature and Role of Norms in Translation." In idem, *Descriptive Translation Studies and Beyond*. Amsterdam-Philadelphia: John Benjamins, 1995.
131. Troussset, Jules. *Nouveau dictionnaire encyclopédique universel illustré: répertoire des connaissances humaines*, Vol. 3. Paris, A La Librairie Illustree, 1885.
132. Ulmer, William Andrew. *The Christian Wordsworth 1798-1805*. New York: SUNY Press, 2001.
133. Venitiuk, Valerie. *Worlding Sei Shōnagon: The Pillow Book in Translation*. University of Ottawa Press, 2012, 312 p.
134. W. G. Aston. "The Classical Literature of Japan." *Transactions and Proceedings of the Japan Society London*, vol. 4. London: Kegan Paul, Trench, Trübner, 1899,
135. Whitney, Clara A. N.. *Clara's Diary. An American Girl in Meiji Japan*. Tokyo, 1979.
136. William Elliot Griffis. *The Religions of Japan: From the Dawn of History to the Era of Méiji*. New York, Charles Scribner's, 1895.

付録

- 付録 1. ディクソンがセント・アンドリュース大学に提出した求職申請書〔1-22 頁〕。
- 付録 2. ディクソンがアメリカ・カリフォルニア在中にカリフォルニア州立図書館で作成した図書館カード〔23 頁〕。
- 付録 3. エディンバラ大学に入学した際にディクソンが記入した個人情報〔24 頁〕。
- 付録 4. ディクソンの義理の兄・東京帝国大学の元教授 **Cargill G Knott** がセント・アンドリュース大学の学長にディクソンの博士論文について書いて書簡〔25-26 頁〕。
- 付録 5. ディクソンがセント・アンドリュース大学に提出した博士論文に関する情報〔27-28 頁〕。
- 付録 6. 夏目漱石が東京帝国大学でディクソンの授業を受けた際にとったメモ〔29-40 頁〕。
- 付録 7. 夏目漱石の「英訳方丈記」に収録されたエッセイ〔41-43 頁〕。
- 付録 8. ディキンズによる *The Athenaeum* に掲載された *Sunrise Stories - A Glance at the Literature of Japan* の書評〔44 頁〕。

付録 1.

ディクソンがセント・アンドリュース大学に提出した求職申請書。この中にディクソンの履歴書や業績、推薦状などが掲載されている。この資料は現在セント・アンドリュース大学の図書館に所蔵されている。



TO THE
University Court, University of St Andrews.

WASHINGTON UNIVERSITY,
ST LOUIS, MO., U.S.A., *February 1897.*

MY LORD AND GENTLEMEN,

I beg to offer myself as a candidate for the Chair of English Literature lately founded in St Andrews University. I am an *alumnus* of the University, and have always been devoted to her interests, and proud of my connection with her. The duties of the former combined Chair of Logic and English Literature I have already discharged, so that I ought to know the conditions necessary for success if called upon to fill the new position. With the community I have never lost touch, and can count many personal friends in the old cathedral city.

The Curriculum Vitæ which I subjoin shows a continuous and successful scholastic career. The Tyndall-Bruce Bursary was gained by me in 1873 at Edinburgh, after a keen open competition. In 1875 I gained the Spence Bursary, after an inter-University competition, being bracketed with two scholars now of established reputation, James Mackintosh, Professor of Civil Law in Edinburgh University, and J. Macdonald Mackay, Professor of Modern History in University College, Liverpool.

Next year I began my special English Literature studies, and gained the Early English Text Society and New Shakspeare Society prizes at St Andrews University. After a year on the Continent, I returned to St Andrews, and became Assistant to Professor Baynes, besides conducting a tutorial class in Greek for Professor Campbell. I had meanwhile taken First Class Honours in Classics, and was elected to a Tyndall-Bruce Scholarship, with teaching duties in the University.

In 1879 I was appointed Professor of English and Secretary in the Imperial College of Engineering, Japan, and continued to serve the Japanese Government for the unusually long period of thirteen years. I was promoted in 1886 to the Chair of English Literature in the Literature College of the reconstructed Imperial University of Japan, and for six years discharged the duties of this, the chief post of the kind in the Empire. My colleagues were men with a world-wide reputation, Dr Edward Divers, F.R.S., probably the ablest man who ever served the Japanese Government, Professor John Milne, F.R.S., the distinguished Seismologist, Professor Basil Hall Chamberlain, Philologist and Sinologue, and others now filling important posts in Europe and America.

In 1892 my friend, Dr Chaplin, who had resigned a professorship in Harvard University to become Chancellor (Principal) of Washington University in St Louis, wrote inviting me to fill a new Chair of English Literature just established in that University. I closed with the offer, and in the autumn of 1892 crossed to the United States to undertake my new duties. The nature of my work will appear from the following syllabus:—

Washington University.

ENGLISH LITERATURE.

Professor DIXON.

1. Modern English prose, especially in the departments of narrative and exposition. Framing of synopses and abstracts. Studies in Macaulay and Emerson. Two hours a week.
 2. English prose, from Sidney and Dryden to Arnold, Newman, and Lowell. Lectures on the development of English prose. Two hours a week.
- Fortnightly compositions, with criticism, on modern everyday topics. One hour a week.

3. Modern poetry : Wordsworth, Keats, Tennyson, Browning.
Sonnet Literature. Two hours a week.
The laws of versification, with exercises. One hour a week.
4. Oratory as a branch of literature. The composition of an oration. Two hours a week.
Rise and growth of the English novel. Exercises in story-writing. History of journalism and the essay. One hour a week.
5. Shakespeare ; his life and literary career ; the quartos and folios. English and German editors and commentators ; textual criticism ; critical reading of one play (1896, *Midsummer Night's Dream*). Exercises in analysing the structure of the play, and the development and interaction of the characters. Three hours a week.
6. Spenser, Milton (1896, *Paradise Lost*, Bk. X., and *Comus*), Pope. Two hours a week.
Philology. One hour a week.
7. Early English and dialect literature. Ballad literature. Chaucer and Burns. Three hours a week.

The High School of St Louis, where many of our best students are prepared, had recently or has now on its staff such well-known men as Dr W. C. Harris, Mr Thomas Davidson, the exponent of Rosmini and author of one of the volumes in Professor Knight's Philosophical Series, and my esteemed friend, Mr W. M. Bryant, also known as a philosophical writer. My present work calls forth all my energies, and has proved to be of the most stimulating kind.

The list of works appended will show that I have not been idle in the matter of authorship. My "Dictionary of Idiomatic Phrases" has received full acknowledgment in the Preface to Vol. II. of the great Oxford Dictionary, and is to be found in every general library. The London *Spectator* in a review stated that it "should be on every author's table."

In May of last year I contributed a paper to the Royal Society of Edinburgh on "Graphical Representation of

Emotion in Rhythm," and I have been connected with various journals and cyclopædias. My work in Literature and Ethnology has received recognition in a biographical paragraph in Johnstone's Cyclopædia, which holds in the United States the same position which Chambers's Encyclopædia does here.

If elected to the Chair now being founded, I would devote my whole energies to bring its work into immediate and sympathetic connection with the best work of the kind done in similar schools in the British Empire and the United States.

I am,

MY LORD AND GENTLEMEN,

Your obedient Servant,

J. M. DIXON.

CURRICULUM VITÆ.

Son of Rev. JAMES MAIN DIXON, Free Martyrs' Church,
Paisley.

1866-72.

Attended Ayr Academy.

1872.

Gained Cowan Bursary at Edinburgh University.

1873.

Gained Tyndall-Bruce Bursary at Edinburgh University.

1875.

Gained Spence Bursary at St Andrews University.

1876.

Gained New Shakspeare Society Prize, and Early English
Text Society Prize at St Andrews University.

1877.

Passed with First Class Honours in Classics for the degree
of M.A. at St Andrews University.

1879.

Tyndall-Bruce Scholar and Tutor in Philosophy at St
Andrews University.

Appointed Professor of the English Language and Litera-
ture in the Imperial College of Engineering, Japan.

1885.

Elected Fellow of the Royal Society of Edinburgh.

1886.

Appointed Professor of English Literature in the Literature
College of the Imperial University of Japan.

1888.

Received the decoration (4th class) of the Rising Sun from
H.M. the Emperor of Japan.

1892.

Appointed Professor of English Literature in Washington
University, St Louis, United States of America.

1894.

Appointed Lecturer on English Literature at Lindenwood
College (for Ladies), St Charles, Mo.

PUBLISHED WORKS.

1. DICTIONARY OF IDIOMATIC ENGLISH PHRASES. T. Nelson & Sons, Edinburgh, London, and New York, 1891.

“If evidence was desired as to whether the Japanese have progressed in the study of European languages, it will be found in the volume which has just appeared.”—*St James's Gazette*, London, November 1890.

“The author of this work is Professor of English Literature in the Imperial University of Japan, and the materials for it were originally collated in that country to assist his students in their English studies. The book ought to be no less valuable here than in Japan. . . . Mr DIXON has done his work very thoroughly. . . . Occasionally he seems to stand too much upon literary dignity. . . . But if we must err in a matter of this kind, it is well we should err on the safe side; and this, at all events, Mr DIXON has done. He has produced a book which all authors and public writers ought to keep beside them, more especially as, when he is illustrating the phrases he gives, he draws upon modern writers as much as possible.”—*Spectator*, London, 31st January 1891.

“Mr DIXON has shown *savoir faire* and judgment in his classification, and though the classes shade off into one another, and a phrase which in one age is slang is often raised in the next to the rank of standard English, he may generally be accepted as a safe guide.”—*Journal of Education*, London, January 1891.

2. NOTES TO GOLDSMITH'S “VICAR OF WAKEFIELD.” Kyoyekishosha, Tokyo, 1888.

“The notes are very full, and may be divided into three classes, the lexical or mere explanatory, the historical and the critical. Professor DIXON has brought large knowledge and industry to bear upon his task, and has made a valuable addition to the many useful aids that Japanese students owe him. His long experience of teaching in this country enables him to appreciate the difficulties of Japanese students.”—*Japan Mail*.

3. ENGLISH COMPOSITION. Hakubunsha, Tokyo, 1889.

“It reflects equal credit on the author and on the printers, and we are glad to notice, from an inscription on the cover, that this useful little volume does but herald a series. . . . A remarkably useful book.”—*Japan Mail*.

4. TEACHER'S COMPANION TO ENGLISH COMPOSITION. Hakubunsha, Tokyo, 1889.

5. ENGLISH LETTER-WRITING. Hakubunsha, Tokyo, 1889.

6. ELEMENTS OF ENGLISH WORD FORMATION. Hakubunsha, Tokyo, 1891.

7. NEW CONVERSATIONS WRITTEN FOR JAPANESE SCHOOLS. Part I.
Translated by Y. TAKENOBU, Kyoyekishosha, Tokyo, 1888.

“‘Conversations written for Japanese Schools,’ the English by Mr J. M. DIXON and the Japanese by Mr Y. Takenobu, is an oasis in the desert. . . . All Mr DIXON’s compilations for Japanese students have been of a most helpful character.”—*Japan Mail*, March 1888.

“It is an unpretentious little book, but is none the less excellent of its kind, and should prove of great use and value to those for whom it is intended.”—*Japan Gazette*, 19th April 1888.

8. NOTES ON MACAULAY’S “WARREN HASTINGS.” Kyoyekishosha,
Tokyo, 1886.

“A good piece of work, well edited, carefully annotated, and likely to be most useful to all students of English.”—The late Dr T. S. BAYNES, Editor of the “*Encyclopædia Britannica*.”

9. ENGLISH LESSONS FOR JAPANESE STUDENTS. Kyoyekishosha,
Tokyo, 1886.

“I have looked through your ‘Handbook of English,’ and am very much pleased with it. You seem to have considered all the chief difficulties in ordinary English composition, and your book is likely to be of great use not only to Japanese but to English students. I think, therefore, you ought to consider the advisability of extending it somewhat, and publishing it in England.”—HENRY DYER, M.A., C.E., late Principal of the Imperial College of Engineering, Tokyo.

10. “JAPAN” IN “CHAMBERS’S ENCYCLOPÆDIA,” 1890.

“The new edition of ‘Chambers’s Encyclopædia’ has a crisp and exact article on Japan which brings the information and figures up to date.”—*North China Mail*, June 1891.

“The ninth volume of ‘Chambers’s Encyclopædia’ contains an excellent article from the pen of Professor J. M. DIXON, of the Imperial University. Filling ten of the closely printed pages of this widely known work, the article supplies a mine of well-digested and carefully marshalled information. That Professor DIXON should write accurately and exhaustively was to be expected, but he deserves to be specially complimented for the judicial spirit displayed by him in treating the vexed branches of his subject.”—*Japan Mail*, 18th June 1891.

*From the Rev. ROBERT FLINT, D.D., Professor of Divinity,
University of Edinburgh.*

BALLIEMORE, NETHY BRIDGE, N.B.,
15th July 1896.

PROFESSOR DIXON of Washington University, St Louis, U.S.A., at present an applicant for the Chair of English Literature in the University of St Andrews, was one of the three or four very ablest of the students who came under my charge during the dozen years of my professorship in St Andrews.

I see that I certified on the 22nd of April 1876, that he "attended the class of Moral Philosophy and Political Economy during the session 1875-76, with perfect regularity; performed all the work of the class in the most exemplary manner and with remarkable ability; gave evidence of wide and varied culture; showed a rare aptitude for philosophy; was the most distinguished student of the year in the class; and left on me the most favourable impression not only of his talents but of his disposition and character."

It is only due to Professor DIXON now to add that he was very early appointed to a Chair of English Literature in Japan, and that it consists with my knowledge that he was at once a great success in his strictly professional sphere, and an active promoter of scientific and literary study and moral and religious progress in the Japanese empire.

In his present charge he has necessarily increased his educational experience, and has continued actively to prosecute in various directions his literary studies. His investigations into English versification show an originality combined with circumspection characteristic of his mind.

Professor DIXON would bring to the new chair an exceptionally thorough and comprehensive preparation for the work of it, great power to create enthusiasm for the study of its subject, a vigorous and finely cultured intellect, an amiable and attractive personality, and a character entitled to high respect.

Among those who studied under my charge in St Andrews between 1864 and 1876, I know of no one who has now equal claims to a Chair of English Literature.

R. FLINT.

From the late THOMAS SPENCER BAYNES, LL.B., LL.D.,
*Professor of Logic, Rhetoric, and Metaphysics, University
of St Andrews.*

19 QUEEN STREET,
ST ANDREWS, N.B., 8th March 1879.

I AM glad to hear that Mr J. M. DIXON is a candidate for the chair of English in the Imperial College of Engineering, Tokyo. From his abilities, attainments, and experience, Mr DIXON is well qualified for the duties of such a post. As a student in this University he gained the highest distinctions in the departments of study more directly connected with the higher functions of the chair, those of Philology, Philosophy, and English Literature. Having been distinguished in Classics throughout his college course, Mr DIXON gained first-class honours in this department at the examination for the degree, and he has continued to pursue his philological studies with unabated zeal and success. In Philosophy his clearness, vigour, and flexibility of mind secured for him the first place in the distribution of class honours.

Of his attainments as a student of English I can speak with the greatest confidence. In my own class his work showed not only genuine interest in the subject and a considerable range of the best reading, but marked critical insight and literary power. At the close of the session, in addition to the class honours, he gained extra prizes for critical studies in Early English and in Shakespeare. I may add, in relation to his fitness for the business of instruction, that Mr DIXON possesses a remarkable power of clear and interesting exposition, as well as an inborn faculty for the work of teaching. Both powers have been diligently cultivated and developed by exercise, Mr DIXON having had during the last three years considerable experience, first as a private tutor, and more recently in strictly academic work.

During the present session Mr DIXON assisted me in the classes of English Literature and Logic, and I have had ample reason to be satisfied with the tact, temper, and ability he has displayed both in the management of the classes and the conduct of the examinations.

Mr DIXON is, moreover, a man of high moral character and elevated educational aims, who would not only discharge with conscientious zeal any duties he undertook, but whose personal influence on the students would be of the most salutary kind.

THOS. S. BAYNES.

*From W. S. CHAPLIN, LL.D. (Harvard), Chancellor of
Washington University, St Louis, Mo., United States
of America.*

WASHINGTON UNIVERSITY,
ST LOUIS, MO., 31st July 1896.

I TAKE pleasure in certifying that Professor J. M. DIXON has been very successful in organising and conducting our Department of English. Since he has been with us, there has been a decided improvement in the language used and the literature read by our students. His influence has been highly beneficial.

As to his character I speak only because the omission might be construed unfavourably to him—it is beyond reproach.

We have found Professor DIXON an enthusiastic and effective teacher, and, in all matters not immediately connected with his department, a ready helper.

I cordially recommend him for a professorship in the Department of English wherever his services may be required.

W. S. CHAPLIN.

*From Professor O. F. EMERSON, late of Cornell University;
Author of "A History of the English Language,"
(Macmillan).*

WESTERN RESERVE UNIVERSITY,
CLEVELAND, OHIO, 22nd July 1896.

PROFESSOR J. M. DIXON informs me that he is an applicant for the Chair of English Literature at St Andrews University. As I can speak directly of his work at Washington University, St Louis, it gives me pleasure to say that it has been highly successful, and the influence which he has exerted over students excellent. His teaching has been especially stimulating, so that his students have been willing and anxious to continue their reading and study in this important field. It would be a great loss to Washington University if Professor DIXON should leave, and a great gain to any institution which secures his services.

O. F. EMERSON.

*From JOHN M. D. MEIKLEJOHN, M.A., Professor of the
Theory, History, and Practice of Education in the
University of St Andrews.*

10th March 1879.

MR J. M. DIXON is one of the most distinguished alumni of this University.

He possesses in the highest degree two qualities which mark him as specially fitted for the post he is seeking in Japan. In the first place, he possesses a knowledge of the English language—both in its old and modern phases—very much above that usually found in professors and teachers of English and English Literature. In the second place, he is a very able and skilful teacher, and has given much time and serious study to the problems of instruction and education. He was the most distinguished and hard-working student of my class in the session 1878-79.

He possesses, in addition, a quick wit, a ready, versatile mind, a great power of subtle analysis, a wonderful aptness in asking questions, and the right questions; and I am quite convinced that he would show himself an admirable and highly successful teacher of English to the Japanese nation.

J. M. D. MEIKLEJOHN,

*From the Very Rev. G. M. GRANT, D.D., Principal of
Queen's University, Kingston, Ontario, Canada.*

QUEEN'S UNIVERSITY,
KINGSTON, CANADA, *June 1896.*

I REGARD Professor J. M. DIXON as one of the most competent instructors in English Literature that we have on this side of the Atlantic. His record in Japan and the United States sufficiently attests this, and he is now entering on his prime.

G. M. GRANT.

From EDWARD DIVERS, M.D., F.R.S., Professor of Chemistry in the Imperial University, Japan; late Principal, Imperial College of Engineering, Japan.

TOKYO, JAPAN, 7th October 1891.

MR JAMES MAIN DIXON has stayed twelve years in Tokyo, filling the post of Professor of the English Language and Literature in the Imperial College of Engineering for about seven years, and for the rest of the time in the Imperial University since its foundation by the amalgamation of the College of Engineering and the Tokyo University. From the first he has been my colleague in these institutions, and in the College of Engineering was in daily association with me in the administration of College affairs, for he then acted as Secretary to the College and took a material part in improving its organisation.

I have the utmost respect for his ability and for his attainments as a scholar, and believe him to be a judicious and elevating teacher of literature, liberal in ideas, and active in thought. The results of his teaching have been eminently successful, while the enduring attachment of his best pupils to English authors, and their rational knowledge and appreciation of them, are quite surprising under the circumstances.

Several educational works by Mr DIXON have had a wide circulation here, and editions of those on sale have been rapidly taken up by the school public. His *Dictionary of English Idioms*, published in London for English readers, makes a valuable work of reference, and has been remarkably well received as such by the literary press of England.

Mr DIXON has gained many friends in Japan both Japanese and foreign, and has stood without reproach from any one. He is married to a lady most worthy of him in every way. He has maintained a lively personal interest in the careers of former pupils, and has been a leader in social reforms by the Japanese.

EDWARD DIVERS.

From Professor J. A. EWING, M.A., F.R.S., Cambridge University.

I KNEW Professor J. M. DIXON in Japan, where I was engaged in the service of the Japanese Government when Professor DIXON was appointed to the Chair of English Literature at the Engineering College. His social qualities and the variety of his interests quickly secured for him a good place in the foreign community of Tōkyō. In meeting him I had frequent evidence of the range of his acquirements. For the last four years he has been Professor of English Literature in Washington University, St Louis, where my old friend and colleague, Dr W. S. Chaplin, is Principal. In writing to me Dr Chaplin has mentioned Professor DIXON'S work with much appreciation, and has spoken of his success in interesting students in the subject of his teaching. As Dr Chaplin is pre-eminently a man who means what he says, and is also well qualified to judge, this incidental testimony in Professor DIXON'S favour may fairly claim to carry weight.

J. A. EWING.

From JOHN MILNE, F.R.S., F.G.S., formerly Professor of Mining and Geology in the Imperial University, Japan.

NEWPORT, I. W., 23rd June 1896.

DURING the time that Professor DIXON was in Japan we were associated as colleagues. In addition to filling the chair of English Literature at the Imperial University of Japan, for some years he controlled the work of the secretarium, edited the official publications of the college to which he was attached, and supervised the routine of subordinate officers. Outside the University he was a councillor of the Asiatic and other societies. His work was at no time light, and it was accomplished to the satisfaction of all concerned. His contributions to the literary world find testimony in the books he has published, and the numerous articles which he has contributed to encyclopædias, learned societies, and journals.

Professor DIXON is a man who has always had his heart in his work, and letters which I have received from the Chancellor of the Washington University tend to confirm the high opinion of his qualifications formed by his friends and colleagues in the far East.

JOHN MILNE.

From JAMES MACDONALD, LL.D., *formerly Headmaster of
Ayr Academy.*

49 FOUNTAINHALL ROAD,
EDINBURGH, 11th July 1896.

PROFESSOR J. M. DIXON of Washington University, St Louis, U.S.A., informs me that he intends becoming a candidate for the new Chair of English Literature in the University of St Andrews.

As I am fully acquainted with the facts of his early training and studies, I take the opportunity thus offered of bearing testimony to his abilities and merits as well as his special fitness for the appointment he now seeks to fill.

Mr DIXON was a pupil of Ayr Academy from 1866 to 1872, when I was Rector of that school. In all his classes he held a foremost place. This was specially the case in English and Classics. On entering the University of Edinburgh he took a position among the best students of his first year by gaining the Cowan Bursary. In his second year he won the Tyndall-Bruce, open to all his class-fellows. At the commencement of his third year, having obtained, again by competition, the Spence Bursary to be held at St Andrews, he there finished his University course, passing for the degree of M.A. with First Class Honours in Classics and carrying off the Tyndall-Bruce Scholarship.

Particulars regarding Mr DIXON's subsequent connection with the teaching staff of St Andrews, the Imperial University of Japan, and his present Chair in St Louis, I leave to those who can speak with a more intimate knowledge than I have. But I may be permitted to say that I have watched from a distance with much interest his fulfilling, by successful professorial work and by his writings, the early promise he gave of marked distinction in the field of English Literature.

JAMES MACDONALD.

*From the Rev. J. H. GEORGE, D.D., Pastor, First
Congregational Church, St Louis.*

ST LOUIS, 27th May 1896.

IT has been my privilege and pleasure for four years to enjoy the friendship of Professor J. M. DIXON, and to watch with interest his work as a lecturer in Washington University. Although a stranger in the country, he has succeeded in creating such an interest in his department, that now the chair of English Literature occupies a first place in the estimation of the students and friends of the University.

The lectures by the Professor, given after the order of University extension, have been highly appreciated. Two such courses have been delivered in the First Congregational Church to large classes, and have done much good. Professor DIXON is a master in his own department, and has the rare faculty of making difficult subjects interesting not only to earnest students, but also to the ordinary hearer.

J. H. GEORGE.

*From Rev. THOMAS MARSHALL, D.D., Field Secretary,
Presbyterian Church of America.*

CHICAGO, ILLINOIS, 23rd June 1896.

PROFESSOR JAMES M. DIXON, M.A., F.R.S.E., is the present incumbent of the Chair of English Literature in Washington University, St Louis, Mo., a position he has ably filled during the past four years. During the last two years he has also given a course of instruction, combining text books and lectures, in Lindenwood College, a college for young ladies which is under the care of the Synod of Missouri. Of this college I am trustee. Most gladly do I certify to the high commendation given to Professor DIXON by the Faculty and by the Board of Trustees for the excellence of the instruction he gave. His knowledge of English Literature takes the widest range. In method and style he combines the skilful teacher with the popular lecturer, and hence he awakens an unusual degree of enthusiasm among his pupils.

It is also with great pleasure that I am permitted to say, that with the qualities of an accomplished instructor, Professor DIXON in his own life blends in no small degree the richer qualities of a Christian gentleman.

THOMAS MARSHALL.

*From Professor M. TOYAMA, M.A., Director of the College
of Literature, Imperial University, Japan.*

22nd October 1891.

PROFESSOR JAMES MAIN DIXON has during the past twelve years devoted all his energies to the promotion of English education in Japan. This he has done, not only by personal instruction, but also by the publication of books fitted to the needs of Japanese students. He was one of the founders of the Tōkyō Ladies' Institute. His work at the University has been highly appreciated both by the authorities and by the students, who will always remember him with the kindest feelings. There is no doubt that his zeal and abilities will make him successful wherever he may be placed.

M. TOYAMA.

付録 2.

ディクソンがアメリカ・カリフォルニア在中にカリフォルニア州立図書館を利用するために作成した図書館カード。Ancestry.com. California, *Biographical Index Cards*, 1781-1990 [database on-line]. Provo, UT, USA: Ancestry.com Operations, Inc., 2011. <https://www.ancestry.co.uk/sharing/14777920?h=5037be>, accessed on June 13th 2018.

Dixon, James M
CALIFORNIA STATE LIBRARY 1906^T
Name in full, James Main Dixon
Born at Paisley, Scotland on April 20, 1856
Father, James Main Dixon : Mother (maiden name in full),
Jane Gray : is married, to whom? Clara Richards
Place, Tokyo, Japan : Date, March 26, 1885
Where educated, City Academy & Edinburgh & St. Andrews University
Years spent in California, 2 1/2 : Residences in State, Berkeley and
Los Angeles : Pseudonyms
Present address, Cervera St. Hollywood
[OVER]

付録 3.

ディクソンがエディンバラ大学に入学した際に記入した個人情報。年齢と彼が通った学校の名称が明記されている。エディンバラ大学図書館所蔵。

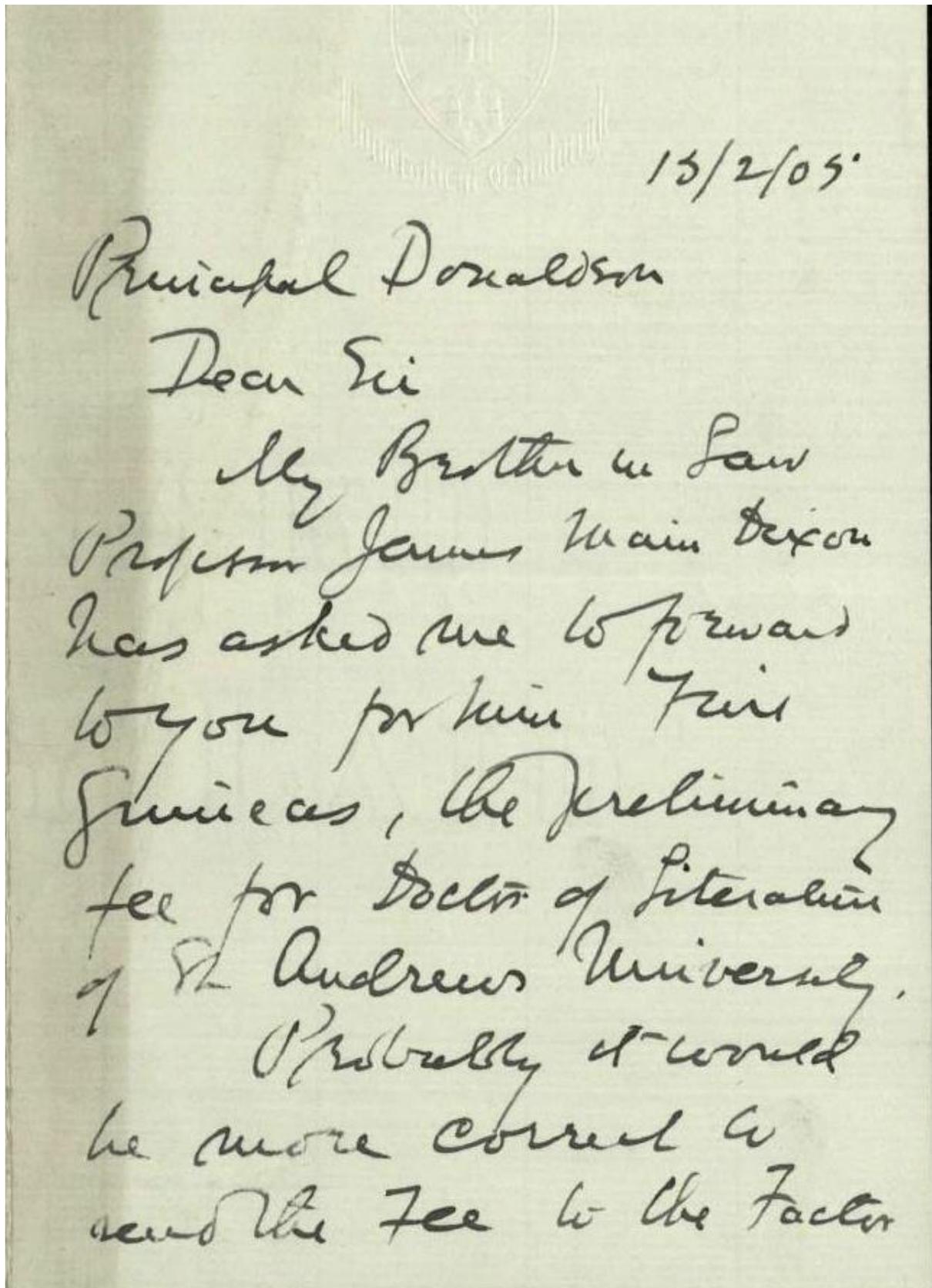
UNIVERSITY OF EDINBURGH

Every Student on FIRST Matriculation at this University must fill up this Form, in so far as applicable to the Case, and after Signature in the Album, hand it to the Registrar along with the Matriculation Fee.

1. Name in full.	<i>James Main Dixon</i>
2. Birthplace.	<i>Paisley</i>
3. Age last Birthday.	<i>16</i>
4. Faculty or Faculties in which the Applicant proposes to Study.	<i>Arts</i>
5. School Education—School or Schools, attended by the Applicant, with the period of attendance at each.	<i>Nelson Institution, Paisley 4 years. Ayr Academy 6 years.</i>
Previous Medical Education,— (a) Medical School or Schools, (b) Number of Years thereat, (c) Licence or Licences.	<i>X None</i>
Previous University Education,— (a) University or Universities, (b) Years thereat, (c) Faculty or Faculties, (d) Degree or Degrees.	<i>X None</i>

付録 4.

ディクソンの義理の兄・東京帝国大学の元教授 Cargill G Knott がセント・アンドリュース大学の学長にディクソンの博士論文について書いて書簡。セント・アンドリュース大学図書館所蔵。



15/2/05

Principal Donaldson

Dear Sir

My Brother in Law
Professor James Main Dixon
has asked me to forward
to you for him Five
Guineas, the preliminary
fee for Doctor of Literature
of St Andrews University.

Probably it would
be more correct to
send the Fee to the Factor

or Secretary or some other
recognized Official; but
it is simpler for me to
do as I have done, &
it comes to the same in
the end.

Yours truly
Carpill & Kuster

付録 5.

ディクソンがセント・アンドリュース大学に提出した博士論文に関する情報。博士論文の題目や審査委員会の結果は記録されている。セント・アンドリュース大学図書館所蔵。

455

16th February 1905. the motion, and the amendment was accordingly declared carried.

Special Meeting. Several matters requiring urgent consideration having emerged.

Urgent business taken up. since last ordinary meeting, the meeting resolved to deal with to be homologated at next there and to request the Senatus to homologate and confirm at ordinary meeting.

next ordinary meeting, the resolutions of this meeting

Thesis of J. M. Dixon. An application by Mr. James Main Dixon, M.A., Berkeley California, who had received the M.A. Degree of this University with First Class Honours in Classics in 1879, for the Degree of D. Litt. was submitted, along with a Thesis on "The Transformation. Idealism of Condillac", and a declaration that the Thesis is his own work, in the terms prescribed by the Ordinance. The meeting resolved to remit the Thesis to a Special Committee consisting of Professors Burnet, Lawson, Bosanquet and Stout, Professor Lawson, Convener. for report, with power to recommend an Additional Examiner to the University Court if they see fit.

Thesis of W. Wallace for D. Sc. Degree remitted to Faculty of Science with power to recommend an Additional Examiner.

There was also submitted an application by Mr. William Wallace, B.Sc., who received the Degree of B.Sc. in March 1900, for the Degree of D.Sc., along with a declaration of his authorship of a Thesis on: "The Ovarian Ova and Follicles in certain Teleostean and Elasmobranch Fishes," and the Thesis itself. It was resolved to remit the Thesis to the Faculty of Science for report, with power to recommend an Additional Examiner to the University Court if they see fit.

Letter from Mr. J. P. Steele, Florence. A letter was read from Mr. J. P. Steele, M.D., L.S.D., Florence to Principal Donaldson in the following terms:-

2 Via Pico della Mirandola,
Florence, Feb. 1st, 1905.

My Dear Principal,

This day brings us within one year of the four hundredth anniversary of George Buchanan's birth, and we may now begin the work of preparing for its due commemoration at the seat of his early studies.

Assuming, as I think we arranged last summer, that the commemoration should be held at the close of the winter

11th March 1905. Lecturer in Conveyancing in University College, Dundee.

Syllabus and Scheme of Courses in Conveyancing courses for Academical Year 1905-1906 submitted by the approved. The Senate approved of the Syllabus and Scheme of Courses in Conveyancing courses for Academical Year 1905-1906 submitted by the approved.

Proposed Advanced Class in Organic Chemistry. It was remitted to the Faculty of Science to report upon proposal by the Lecturer in Organic Chemistry in the United Permit to Faculty of Science College to conduct an Advanced Class in Organic Chemistry.

Zoology Bery Scholarship. It was agreed to postpone till October the Examination for Examination postponed the Bery Scholarship in Zoology.

Report of Committee on Thesis of J. M. Dixon for D. Litt. Degree. The following Report of the Committee appointed to examine the Thesis for the Degree of D. Litt. submitted by Mr. James Main Dixon, M.A., was read by Professor Lawson, Convener of the Committee and unanimously adopted:-

9th March 1905.

Present: Professors Burnet, Bosanquet, Stout & Lawson (Convener)

Degree not recommended. Having considered the Thesis submitted, on "The Transformation Idealism of Condillac", the Committee were unanimously of opinion that it was not in subject or treatment the kind of work which could be recommended for the Degree of D. Litt.

Suggestion as to dates for sending in Theses. They further resolved to express the opinion that the Senate should frame a regulation that all unprinted Theses for Higher Degrees should be submitted at least six months, and printed Theses at least three months before Graduation Day.

(Signed) A. Lawson, Convener

Business postponed. It was resolved to postpone the following matters till next Ordinary Meeting of Senate, viz:-

1. Report of Committee on proposed Lectureship in Education in University College, Dundee.
2. Report of Committee on Minute, as to Training of Teachers, of the Education Committee of the Privy Council.
3. Report of Committee appointed to draw up Statement on Training of Teachers.
4. Report by Dr. Scott on University Extension Lectures Scheme
5. Library Regulations for sending Manuscripts.

付録 6.

夏目漱石が東京帝国大学でディクソンの授業を受けたとき取ったメモ。ここでは、ワーズワースについての記述が見られる。東北大学・漱石文庫より。

William Wordsworth.

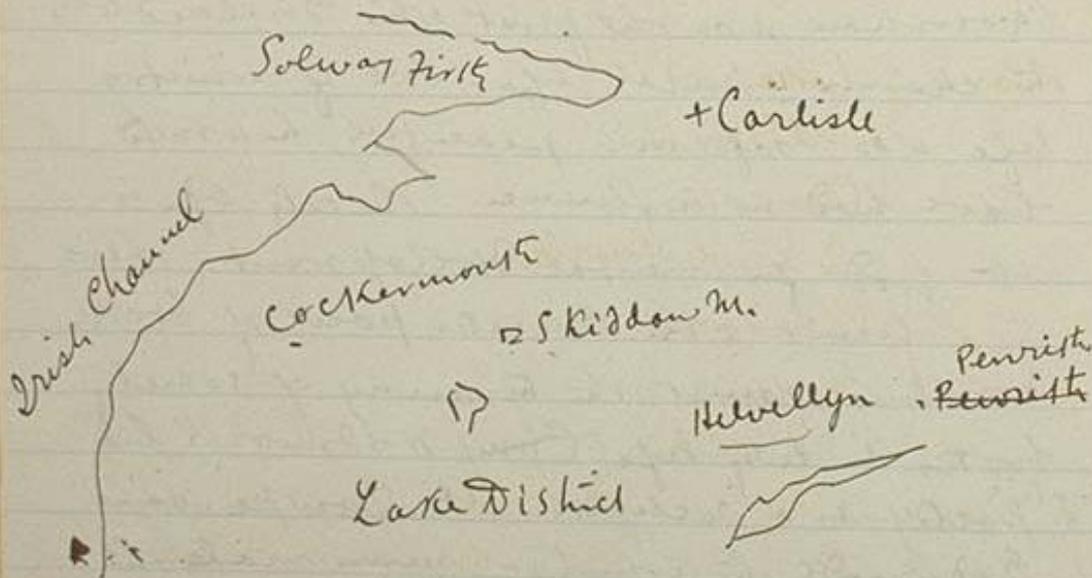
The earlier English poets nearly all of them came from the south or midland. Chaucer, Spenser, Milton, Pope, Gray were Londoners. Shakespeare, Dryden came from midland. Up to the close of the 16th century the north remained quite provincial, too feeble to sustain a keen intellectual life. National poetry can not spring up in a country where some privileges are enjoyed by the inhabitants of a particular place because it concentrates all the intellectual life into one centre.

Rousseau was the first who disclosed the charms of rural life; but if country life was safe and peaceful, he would have had no influence. The city life is not good for mental development; there is a limit to the educated power of books. Revolting against the tyranny of society books & city life, Wordsworth led English poetry as a recluse. As Cowper said, God made the country, man made the town, so thought Wordsworth. Indeed,

15
 Wordsworth is the development of Coleridge
 but we can also find some differences
 between them.

Coleridge	Wordsworth
Orthodox	Heterodox
no enthusiast for a theory	Enthusiast
a poet of plain	a poet of mountain

Carlisle is the only English Castle bearing
 the Celtic name (Caer-lead)



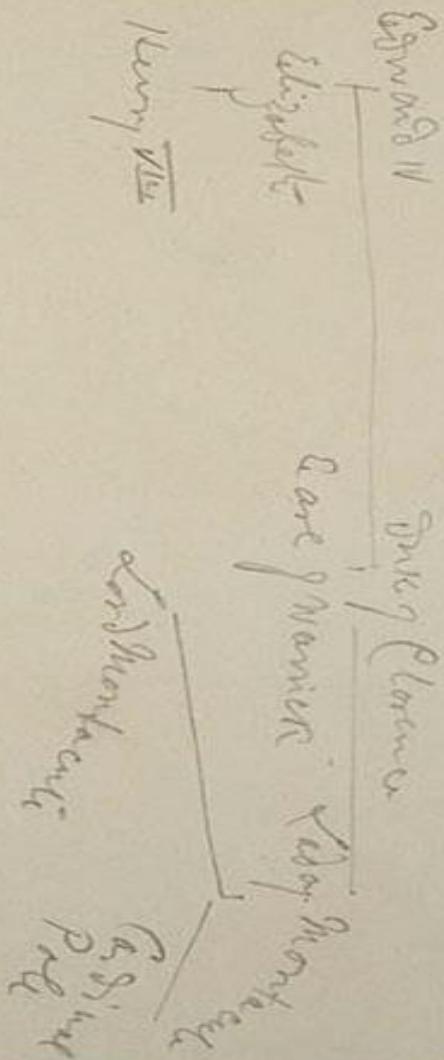
William Rufus first built a castle in Corio.
In the late half of the 18th Cent. Two poets were
born in the district. Wordsworth enjoyed a cultured
home & excellent surroundings. (In Cumberland
free holders are called 'Statesmen') Amongst
them free holders are prevailed a democratic
spirit. Individual life is very strong in
Wordsworth. Both democratic & conservative
his sympathy with the beginning of F. Revolution
was founded upon his regard of personal
freedom and its development but his later
abhorrence to it, by its military despotism
^{disgusts}

names of lakes

{ Ullswater
Coniston
Derwentwater
Windermere
Grasmere
Thirlmere

He received a sound instruction in Hops-
head school. From there, he went to Cambridge.
It was not until a half a century afterwards

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header, which is partially obscured and difficult to read.



Cambridge was not the seat of national life,
John Stuart Mill in his autobiography by a
later work which is very attractive from the same
reason as Wordsworth's prelude, namely from its
extremely intellectual candour, informs us that
his meeting with Wordsworth at a critical time
of his life proved to be a great consolation to him
(also then suffered from severe depression, he
never sympathized with W's philosophy, W's
poems on the appeal to nature, he does not
represent complete pictures of nature or scenery only
as an objective beauty. He connects the outward
world with the inner states of feeling. He is an
exponent of mind & thus it was that Mill found
sympathy with him. W. was a poet of intellect.

Macaulay has no sympathy with W's mind as an
instrument of the evolution of truth. "In the
poems I seem to draw from a well of inward
joy." W teaches us the perennial source of
happiness to a man who is provided with
head-and-walk and health. Mill says: "Wor-
sworth is a poet of unpoetic nature, pos-
sessed of quiet + contemplative taste."

therefore sometimes cold, unstimulating
theoretic. But rises to a height then he becomes
an intellectual delight.

When his poems were first published, he was
much rebuked for downright triviality
& meanness of language. He chose the subject
from common & ordinary life & described
the common people's language as it was
spoken by them. During the 15th century,
a special vocabulary, largely borrowed
from Latin & Greek, for the use of poets,
who were not permitted to call things
by their own names. Nature was
therefore described through a medium

a girl = a nymph

a countryman = swain

the sun = Phoebus

the moon = Diana

the morning = aurora

the evening = Hesper

the matins & vespers

were introduced by a conventional
fashion, which made the landscape

shally unanglish. + muses were in-
voked in a far and way.

ye gentle muses, live your crystal
spring, let nymphs, sylvas
cypres & garland's bring.

(Pierian spring, a little learning is
a dangerous thing
Drink deep or touch not
the Pierian Spring.)

This was hateful beyond words. Pre-
vious poets preferred subject of low
life than that of ^{the} extraordinary. Primary
element of our human nature was but
subject + rural life was preferable
city life as the field of study, children
preferable to grown up people. The re-
jected personification. They seldom con-
templated the subject which they described. Their
poetry has no value of copies not of
originals. Epitaph has come to a con-
vulsion & though there no meaning upon
the subject discussed. We plan
to get rid of personification, &

use epithet with proper meaning. +
used to run for situations specially
political

Brothers: —

St. Bell Mead

Irish Channel

Lysons

Imanah Wali

A. Leiza

G. Goble

Wordsworth rejected conventional vocabulary
preferred children to adults, simplicity
to elegance

Personification of abstract idea is a
mechanical way of elevating poetry above
prose. The excessive use is a mark of
the eighteenth century literature. The
real fact is that they did not look
at nature directly which they wanted

to describe. Their rhetoric is only tinsel, who
do not stand test. Only poet worthy
of notice in the case of this figure, is
Gray.

As a critic, Wordsworth was not successful
he picks up a sonnet of Gray, written to
the memory of the his early friend Richard
West (1742)

In vain to me the smiling morning shine
And reddening Phoebus lifts his golden fire:
The birds in vain their amorous descant join,
Or cheerful fields resume their green attire.
These ears also for other notes require;
A different object do these eyes require,
My lonely anguish melts no heart but mine;
And in my breast the imperfect joys expire;
Yet morning smiles the busy race to cheer
And new-born pleasures bring the happier men;
The fields to all their wanted tribute bear
To warm their little loves the birds complain
I fruitless mourn to him that cannot hear
And weep the more because I weep in vain

Wordsworth objects to the use of Phoebus, but he himself uses far more conventional language than this in his poem 'Mutting'.

In the latest book published by the daughter of Wordsworth occurs the following remark.

In Wordsworth external nature is referred to the language in terms of idea: in Tennyson it is the language of sensation. She illustrates the reference to the cuckoo

O cuckoo! shall I call thee bird,
Or but a wandering voice?

This is Wordsworth's reference: that of Tennyson is cuckoo told his name to all the hills.

(The bird in the south of Europe always had a bad name for laziness, selfishness, & hatefulness (Greek & Roman conception)

Satires of Horace Bk. I. 7. 31. (lazy love)

In English literature under Italian influence this idea is reproduced & is especially associated with matrimonial infidelity.

In King Lear, it is used for the selfish use of superior strength. Milton refers

bit worse of his comets; 'rude bird of
hate.' 'owls & cuckoos, asses, apes,
& dogs. Bunyan likens it to a
hypocrite 'yawling bawling cuckoo'.
The coarse allusion to the cuckoo as
~~adulterous~~ adulterous used in English
literature with the refinement of manners
& the beginning of the eighteenth century.
Perhaps the last trace of it is to be found
in Burns' 'Willie brewed a peck o' malt'
'a cuckold loon'. But the word sur-
vives in the Scotch as a 'gowk' = a fool.

On the other hand, the old English
idea was quite friendly. One of the
old English songs set to musical notes
was the song on the bird. (1673¹⁵ cent.)

付録 7. 夏目漱石の「英訳方丈記」に収録されたエッセイ。夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with a Short Essay on It」『漱石全集 第 26 巻』（岩波書店、1996 年、）から引用。

A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It

The literary products of a genius contain everything. They are a mirror in which every one finds his image, reflected with startling exactitude; they are a fountain which quenches the thirst of fiery passion, refreshes a dull, dejected spirit, cools the hot care-worn temples and infuses into all a subtle sense of pleasure all but spiritual; an elixir inspiring all, a tonic elevating all minds. The works of a talented man, on the other hand, contain nothing. There we find fine words, finely linked together and fine sentiments, also finely interposed. But then they are only set up for show. Like a mirage, they strike us for a moment with astonishment, but soon slip out of our mental vision because of their unsubstantiality. We may be amused by them just for an hour or so, then dispense with them forever without incurring any loss to our intellectual storehouse.

Again there is a third class of literary production which stands half-way between the above two and which will perhaps be most clearly defined by the name 'works of enthusiasm.' Books of this class are not meant for all men in all conditions, as are those of a genius, nor are they written from the egotistic object of being read, nor as a pastime of leisure hours, as those of a talent, but they are the outcome of some strong conviction which satiating the author's mind finds its outlet either in the form of a literary composition or in that of natural eloquence. They are not the result of forced labour or of deliberate artifice, but are feats accomplished, so to speak, spontaneously. At their best where the conviction is so profound as to be raised to the level of truth itself, and the passion attains a white heat, they are in no wise separated from the works of genius. Even in their worst, they can not fail to attract some readers whose view of life runs in the same groove as the author's, nor can they cease to be a source of pleasure to those whose temperaments happen, in certain points, to sympathize with his. For whether they be short or long, elaborate or succinct, they are invariably earnest in tone. And earnestness is that quality which carries us along with it, whether we will or not.

Writers of this class are however subject to a certain disadvantage from which the other two are generally free. When their thoughts are too uncommon or too abstruse, they cannot, as a matter of fact, have many readers. The intellectual flames, too fine and subtle to catch the average mind, have no power, in this case, to kindle a spiritual fire in it, the appeal to whose common sense is a decided mark of popularity. In such cases, they are generally superseded by transient luminaries of minor dimensions and doomed to sink into oblivion, hiding that one talent "lodged in them useless."

Still popularity does not make a poet or an author, any more than the average sentiment for the beautiful would make aesthetics. Paradoxical though it may seem, an author's real power is sometimes in inverse ratio with his popularity. For if he fails to appeal to mankind at large, he may still appeal to a select few whose opinion is far more valuable than the applause of the multitude. As in the case of intellect where to recognise a truth is not the lot of every man, though he be endowed with the same faculty of reasoning and the same form of understanding as others, just so in the province of literature, it does not lie within every man's power to appreciate a work of high merit which seems at first sight to be meaningless or even repulsive. We may safely lay down the proposition that no one will deny the simple -truth that two and two make four, but we doubt whether there is one in every ten who will consent to the statement that the world's onward course consists of the gradual unfolding of the Mundane Spirit. Nor would any one except the cultured acknowledge the truth that space and time are not objective realities but only the necessary forms of subjective cognition. This difference between common sense and philosophy, may, to a certain degree, be stated as existing between common sense and literature. For, as M. Taine wisely remarks, under every literature lies a philosophy and a philosophy which is a mere skeleton, becomes a literature when clothed with flesh and blood. Common people who look only at the outward semblance are struck dumb with admiration, where it is shaped with such a skill as in the case of a great artist, and stand gazing on, until they forget to consider what a grim ungainly bony case is concealed

within. But where both flesh and blood are scanty in quantity and are subordinated in treatment to the structure of the skeleton, so that its ugly frame may be seen through the skin, people are generally scared and will soon take to their heels. Only firm and robust minds can resist the momentary shock and find there something attractive; or persons with a peculiar bent of mind who find their likenesses reflected there, can truly sympathize with those seeming apparitions.

An apparition, possibly, the following piece may seem to most of us, inasmuch as only a few can nowadays resist -its angry isolation and sullen estrangement from mankind, still fewer can recognise their own features reflected in it. Philosophical arguments too may be urged against the author's narrow-minded pessimism, his one-sided view of life, his complete renunciation of social and family bonds. With all that, the work recommends itself to some of us for two reasons: first for the grave but not defiant tone with which the author explains the proper way of living, and represents the folly of pursuing shadows for happiness, secondly for his naive admiration of nature as something capable of giving him temporary pleasure, and his due respect for what was noble in his predecessors.

It is an inconsistency that a man who is so decidedly pessimistic in tendency should turn to inanimate nature as the only object of his sympathy. For physical environments, however sublime and beautiful, can never meet our sympathy with sympathy. We can not deny that we are sometimes inspired by her grandeur, —which however is not the case with Chōmei—but the inspiration comes only through some mechanical influence as in the case of an electric shock acting powerfully upon our system, and not through anything like spiritual communication which may exist between man and man. After all, nature is dead. Unless we recognise in her the presence of a spirit, as Wordsworth does, we cannot prefer her to man, nay we cannot bring her on the same level as the latter, as our object of sympathy. Man with all his foibles and shortcomings, has still more or less sympathy for his fellow creatures. Granting that love deepens where sympathy is reciprocal, we find no reason why we should renounce all human ties and sullenly fly to cold, unsympathetic nature as the only friend in the world, who is really harmless. Harmless she may be, but can never be affectionate!

In the second place, Chōmei forsook the world, because, he tells us, all earthly things are precarious in state, fortuitous in nature and therefore not worth while aspiring after. Why then did he look so indulgently upon nature which is not a jot less subject to change? Why did he not renounce her in the same breath with which he renounced life and property? It is still more unaccountable that such a professed misanthrope as Chōmei should find any interest in some particular individuals who had gone before him. Be that as it may, however, we are not concerned merely with his inconsistencies, of which he has many.

In spite of all these drawbacks, the author is always possessed with grave sincerity and has nothing in him, which we may call sportive carelessness. If he can not stand critical analysis, he is at least entitled to no small degree of eulogy for his spotless he led among the hills of Toyama, Unstained from the obnoxious influence of this Mammon worshipping, pleasure hunting ugly world.

Chōmei's view of life which has [been] implicitly mentioned above, may well be illustrated by a quotation from Shakespeare:

“The cloud-capp'd towers, the gorgeous palaces,
The solemn temples, the great globe itself,
Yea, all which it inherit, shall dissolve,
And like this insubstantial pageant faded,
Leave not a rack behind. We are such stuff
As dreams are made on and our little life
Is rounded with a sleep.”

Considering the particular social circumstances under which he lived, his peculiar turn of mind much hardened by his personal experiences as well as the strong influence which Buddhistic theology exerted upon his thought, it is not surprising he was irresistibly driven into an ethereal region where eternal mind calmly sits by itself, emancipated from all objects of ephemeral nature. Thus to him, to be up and doing, still achieving, still pursuing, seemed the greatest folly of all follies. Rather like 'the hermit of the dale' he might invite others:

“Then, pilgrim, turn, thy cares forego;

All earth-born cares are wrong:

Man wants but little here below,

Nor wants that little long.”

Deeply impressed by the insecurity of life and property, he fled to nature. There among flowers and rocks, he quietly breathed his last. Let a Bellamy laugh at this poor recluse from his Utopian region of material triumph; let a Wordsworth pity him who looked at nature merely as objective and could not find in it a motion and a spirit, rolling through all things; let all those whose virtue consists of sallying out and seeking his adversary, turn upon him as an object of ridicule: for all that he would never have wavered from his conviction.

Of Chōmei's life a few sentences suffice to tell you all. He lived in the latter half of the twelfth century, and was the son of the rector of the Kamo temple in Yamashiro. His solicitations to succeed to his father's position being refused, he shaved his head in vexation and retired to the sequestered village of Ōhara. At the invitation by Sanetomo, he went to Kamakura and was a guest of that prince for a time. He spent in seclusion the remainder of his life in Toyama.

He was well acquainted with the art of composing Japanese verse. Many pieces of his are found in a collection called *Choku-sen* (Imperial selection). Besides the *Hojio-ki*, he wrote the *Kei-gioku-shū*, the *Mumyo-shō*, *Hosshin-shū*, *Shiki-monogatari* and others.

In rendering this little piece into English, I have taken some pains to preserve the Japanese construction as far as possible. But owing to the radical difference both of the nature of language and the mode of expression, I was obliged, now and then, to take liberties and to make slight omissions and insertions. Some annotations have also been inserted where it seemed necessary. If they be of the slightest use in the way of clearing up the difficulties of the text, my object is gained. After all, my claim as regards this translation is fully vindicated, if it proves itself readable. For its literary finish and elegance, I leave it to others to satisfy you.

5th December, 1891

K. NATSUME

ディキンズによる *The Athenaeum* に掲載された *Sunrise Stories—A Glance at the Literature of Japan* の書評。イギリスの雑誌 *New Statesman* が 1931 年に買収した後、*The Athenaeum* は廃刊された。現在この資料は City, University of London に所蔵されている。ここでは手書きのディキンズの名称が見られる。

man Richardson, whom he charges with the incredibly silly exploit of "spurring his horse in a spirit of bravado [though accompanied by a lady] into the ranks of a [Daimio's] procession" numbering some thousands of retainers. The absolute groundlessness of this accusation is sufficiently shown in the despatches of the period, and more recently in the 'Life of Sir Harry Parkes.' The authors, who see in Japan a country that comes as near as possible in this imperfect world to the ideal condition of altruism, regard its literature as one of form without much substance. Korea, China, and Formosa may have something to say to the former assertion: with the latter we agree, but the form is "common form." Of Lieut. Dickens's translation of the 'Takatori Monogatari' we have not heard. We have seen one by Mr. Dickens, who translated the 'Chiushingura.' The versions given of some of the curious prefaces to the 'Fugaku Hyakkei' ('Hundred Views of Fuji') seem to have been taken from the translation of Hokusai's celebrated work published some years ago, with some alterations, but no acknowledgment—a proceeding not out of keeping with the American origin of the book before us.

BOOKS FOR THE YOUNG.

Flix and Flox, by Mrs. Heathcote Statham (Blackie & Son), is a pretty tale of a tiny brother and sister who, in their beautiful Cornish home, learned to think for others and to do what they could for the little children pent up in the slums of great cities. 'Flix and Flox' is a very small book, but it is all good, and, moreover, it is attractive.—Miss E. Everett-Green in *Squib and his Friends* (Nelson & Sons) furnishes a delightful glimpse into child life. Squib, "the odd one" in his family, is not an ordinary lad. He is one who thinks and has the power of expressing his thoughts. He is a brave and engaging little fellow, and attracts to him friends worth having, and the story of his doings with his friends is worth reading.

When readers hear that *Every Inch a Sailor* (Nelson & Sons) is from the pen of Dr. Gordon Stables, they will know what to expect. Frederick

Merry Girls of England, by the same author (Cassell & Co.), is of quite a different type. The girl heroines—who, by the way, are not particularly merry—being bereft of their parents and guardians, seek in divers ways to maintain themselves. The best of them take to farming, but the least interesting goes to London to write for a livelihood. We hear a good deal more of her than of her country sisters, and what we hear we do not much like. There is a good deal of mysterious and involved family history in 'Merry Girls of England'; the mystery has nothing to do with the literary Barbara and her farm sisters. Altogether the story does not hang together too perfectly, and we much prefer the tale of the stolen children with all its cares and sorrows.

Every Girl's Book, edited by Mrs. M. Whitley (Routledge), is a most useful and attractive volume, containing information and advice from writers altogether competent to instruct and advise on "all matters connected with girlish sports, occupations, and pastimes." There are articles on gardening, on golf, on cycling—the last from the pen of Miss Lillias Campbell Davidson, the President of the Ladies' Cycling Association—and on all the other outdoor occupations and amusements which are dear to girls. Lady John Hay, who writes from practical experience, gives many excellent hints as to poultry rearing and dairy farming—two delightful occupations, which can be developed into paying professions. Home studies and many forms of indoor occupation and amusement occupy due space. Mrs. Conyers Morrell, an acknowledged authority on needlework, has revised and enlarged the section devoted to that all-important subject. The Duchess of Teck gives a most interesting account of "The Needlework Guild," of which she is president; and Lady Jeune, who knows more than most of us of the modern training of girls, and has, moreover, the gift of bright and clear exposition, contributes some valuable articles on home studies, on the duties of girls in the way of district visiting, teaching poor children, and helping to bring brightness into the lives of others less happily situated than themselves. 'Every Girl's Book' in its present form ought

single-hearted Calvinist saint, who, if any one combines the love of man with the slavish dread of God. Beyond and beneath his superficial eccentricities—his unexhausted appetite for books, his indifference and absence of mind about domestic trifles, his indiscriminate charity, his habit of turning his back to the wind for the convenience of taking snuff, and then pursuing the direction in which he finishes his face—there is suggested a spiritual conflict, which the pure soul and attenuated frame of a Rabbi are the proper theatre. It is characteristic of our author's graver mood. The ways of Presbytery and its clerk; the deft formalism with which they minimize the presentment of John Carmichael for heresy which has caused a Rabbi so many a pang, and indirectly costs him his life; the admirable description of the "ordination," or ministration of the sacrament; the humours of beadles and the housekeepers, bachelor ministers—all these are the fruit of considerable observation, and in suitable instances abound in quiet humour. Excellent, too, is an account—founded, as the present writer remembers, on sad fact—of the Glasgow Bazaar convulsion, a catastrophe foreseen by Dr. Davidson's beadle, horrified at the notion that Providence has gone "fey." ("The best o' s temp Doctor tries to rin aifter his dog, jidgment can be far off.") Many readers will still much appreciate the description of Perth station, August, and of the commanding tactician who brings order out of the confusion of the train. We know not whether the author is aware of the functionary's wrath on one of such occasions when a malicious traveller got the train stopped as it was quitting the platform, only to inquire sweetly, "Is this Joppie?"—a comparison of deadly insolence. For one of his good things the absolution of the claret "after the several appearances," Dr. Watson should have acknowledged his obligation to Dean Ramsay. We have left ourselves no space to deal with the story; but, indeed, it is of the slightest. Note in Janet and Donald an aptitude for the appreciation of Highland character not very common in Scotch novelists, and, on the whole, can honestly welcome a many-sided, if rather